

関東学院大学キリスト教と文化研究所所報 2009 年度

# キリスト教と文化

第 8 号

4 大特集：横浜開港 150 周年と関東学院創立 125 周年記念

\*：「横浜開港 150 周年記念と関東学院創立 125 周年記念」特集（特別報告）

A：「依存症と日本の精神風土」特集

B：「バプテストと坂田祐」特集

C：「いのちと奉仕」特集



2010年3月



関東学院大学キリスト教と文化研究所

# キリスト教と文化

第8号

関東学院大学キリスト教と文化研究所所報 2009年度所報

## 目 次

卷頭言 :	村椿真理	iii
編集前記 :	安田八十五	iv
横浜開港150周年と関東学院創立125周年記念特集		
一本号（2009年度所報・第8号）の編集方針と特集のねらい—		
4大特集：横浜開港150周年と関東学院創立125周年記念		
＊：「横浜開港150周年記念と関東学院創立125周年記念」特集（特別報告）		
A : 「依存症と日本の精神風土」特集		
B : 「バプテストと坂田祐」特集		
C : 「いのちと奉仕」特集		
特別報告 :		
A1 横浜・内からの文明開化をめざして：依存症社会からの離陸	安田八十五	1
—横浜開港150周年記念と関東学院創立125周年記念の社会的意義と課題—		
B1 坂田祐論文第二部（第3章～第4章）出版に際して	加納政弘・帆苅猛	32
B2 「預言者エレミヤ」（東京帝国大学卒業論文）第3章～第4章	坂田祐	33
B3 バプテストの伝統を持つ教育機関の現代的教育使命：		
バプテスト400年と関東学院建学の精神		
—バプテスト400年祭、記念シンポジウム報告—	村椿真理	53
B4 捜真女学校と坂田祐	小玉敏子	61
B5 関東学院と有吉忠一：有吉忠一の青年時代		
—プロテstantの側面から—	松本洋幸	65
研究論文 :		
A2 神の存在及び三位一体説の数学的証明	安田八十五	67
—神、宇宙と人類の存在及び関係に関する科学的分析序論（1）—		
A3 若松賤子「忘れ形見」論—子供の役割の発見—	岡西愛濃	89
B6 太平洋戦争下の四谷教会—阿部行蔵牧師就任から教会堂焼失まで—	古谷圭一	99
研究ノート :		
A4 依存性から見た大学生の「ひきこもり」に関する一考察	小林弥生	111
—学生相談室事例を通して—		
A5 キリスト教から見たestの問題点	神谷光信	117
B7 「坂田祐日記」解読（1930年～1931年）	坂田創	123
C1 タイ・ビルマ国境山岳地帯におけるキリスト教受容の一事例	勘田義治	139
—山岳少数民族における水環境を中心に—		

C2 タイ北部山岳少数民族の自発的発展に関する一考察	菊地 昌弥・ 勘田 義治・佐藤 敦信	147
—日本向け加工野菜の原料生産を想定して—		
<b>調査報告：</b>		
A6 チベット紀行—青蔵高原の宗教文化に触れて—	三井 純人	161
B8 アジア・バプテスト女性連合大会の報告	原 真由美	175
<b>研究プロジェクト報告：</b>		
「バプテスト」研究プロジェクト	村椿 真理	181
「坂田祐」研究プロジェクト	帆苅 猛	185
「国際理解とボランティア」研究プロジェクト	森島 牧人	187
「依存症とキリスト教」研究プロジェクト	安田 八十五	191
<b>研究グループ報告：</b>		
「キリスト教と日本の精神風土」研究グループ	富岡 幸一郎	196
「いのちを考える」研究グループ	松田 和憲	197
「奉仕・ボランティア教育」研究グループ	所澤 保孝	199
<b>委員会報告：</b>		
資料委員会	村椿 真理	202
広報委員会	武田 俊哉	203
所報編集委員会	安田 八十五	204
所報に関する規定		207
2009年度キリスト教と文化研究所活動報告		208
2009年度キリスト教と文化研究所構成員		210
2009年度キリスト教と文化研究所研究プロジェクト等のメンバーリスト		212
<b>編集後記：</b>		
『所報』のさらなる発展を願って	帆苅 猛	214
執筆者紹介		215
英文目次		216

## 卷頭言

所長 村椿 真理

Foreword —2009 Academic Year End Review

Director Makoto MURATSUBAKI

2009年4月より前任者松田和憲教授に替わり、キリスト教と文化研究所長の職を努めさせていただいている。

本研究所は2001年10月に、関東学院大学の第7番目の研究所として、唯一5学部を横断する形をとって設立され、早や10年目を迎えるとしている。これまで研究所には文化研究部門、倫理研究部門、教育研究部門、歴史研究部門の4つの部門が設けられ、その中で3つの研究グループと4研究プロジェクトが活動し、学外客員研究員を含めると総勢62名の研究者を擁するまでに成長した。

建学の精神の内実化を目指し、「キリスト教と文化」に関する総合的な研究所として真価が問われてきた研究所であるが、これまでの歩みの中で、本研究所は関東学院大学旧「日本プロテスタント史研究所」(1957年開設、1973年休止)の遺産を引き継ぎ、見事によみがえったと言える。再建後の研究成果は所報『キリスト教と文化』第1号から本8号まで、並びにニュースレターNo.1~24号の他、2冊の研究叢書に報告されている。

研究所は2009年7月にフォーサイト21の7階に移転され、小会議室の他、事務スペース、所長室、応接スペース、湿度管理可能な専用資料室も合わせ持つ施設へと改善されたが、今後一層の学際的研究に取り組み、本学ならではの研究成果の発信をしていきたい。

さて例年どおり本号には、進行中または終了した研究プロジェクトの成果を収めることができた。本号は、「横浜開港150周年と関

東学院創立125周年」を記念特集としており、安田八十五教授を代表者とする「依存症とキリスト教」プロジェクトからの特別報告、「横浜・内からの文明開化をめざして：依存症社会からの離陸」が掲載されている他、帆苅猛教授を代表者とする「坂田祐研究」プロジェクトによる報告、坂田祐、東京帝国大学提出卒業論文『預言者エレミヤ』の第3章から第4章が記載報告されている。同論文の第1・2章は前年度掲載されたが、解説編集作業は6章まですでに全章完了しており、今後全体の刊行も検討されている。また本学の伝統教派である「バプテスト研究」プロジェクトからは、バプテスト400年祭・記念シンポジウム特別報告として「バプテストの伝統を持つ教育機関の現代的教育使命：バプテスト400年と関東学院建学の精神」(村椿真理)が掲載されている。

その他、各研究部門から3本の研究論文、5本の研究ノート、また2本の調査報告が掲載されている。またいつものように各研究会報告や委員会諸報告もご覧いただきたい。資料委員会は今年度も希少資料の収集に成果をあげ、委員会訳旧約分冊聖書を全巻発掘済みであるという。「バプテスト研究」プロジェクトはキリスト教史学会理事長、出村彰氏を編者に迎え、学内外の研究者と『バプテスト史』を次年度刊行する。完成すれば日本初の学的歴史書の完成となる。次号におけるこれらの成果の発表に期待を寄せている。

## 編集前記

# 横浜開港 150 周年と関東学院創立 125 周年記念特集 一本号（2009 年度所報・第 8 号）の編集方針と特集のねらい—

所報編集委員長  
安田 八十五

### Editorial Forward:

Special Issue: In Commemoration of the 150th Anniversary of the Opening of the Port of Yokohama and the 125th Anniversary of the Founding of Kanto Gakuin

Yasoi YASUDA

### 4 大特集：横浜開港 150 周年と関東学院創立 125 周年記念特集：

\*：「横浜開港 150 周年記念と関東学院創立 125 周年記念」特集（特別報告）

A：「依存症と日本の精神風土」特集

B：「バプテストと坂田祐」特集

C：「いのちと奉仕」特集

### 特別報告：

A1 横浜・内からの文明開化をめざして：依存症社会からの離陸 ..... 安田八十五

—横浜開港 150 周年記念と関東学院創立 125 周年記念の社会的意義と課題—

B1 坂田祐論文第二部（第 3 章～第 4 章）出版に関して ..... 加納 政弘・帆苅 猛

B2 「預言者エレミヤ」（東京帝国大学卒業論文）第 3 章～第 4 章 ..... 坂田 祐

B3 バプテストの伝統を持つ教育機関の現代的教育使命：

バプテスト 400 年と関東学院建学の精神

—バプテスト 400 年祭、記念シンポジウム報告— ..... 村椿 真理

B4 捜真女学校と坂田祐 ..... 小玉 敏子

B5 関東学院と有吉忠一：有吉忠一の青年時代

—プロテstant の側面から— ..... 松本 洋幸

2009 年度の所報を発刊するに当たって、  
編集委員長として本号（2009 年度所報・第 8 号）  
の編集方針と特集のねらいについて述べさせて  
いただいく。

まず、4 大特集と特別報告に関する経緯を  
説明しよう。本年度、平成 21 年（西暦 2009  
年）は、横浜開港 150 周年記念と関東学院創  
立 125 周年記念に当たる。横浜市は、今から  
150 年前の安政 6 年（1859 年）に、戸数約 100  
戸の半農半漁の寒村・横浜村（今の関内地区）に、

外国との交易のための港が初めて開かれ、そ  
れが人口 367 万人を超える大都市横浜の出發  
点だったというわけである。また、横浜開港  
から 25 年後、今から 125 年前の明治 17 年（1884  
年 10 月 6 日）に、関東学院の前身の一つにな  
る横浜バプテスト神学校が、横浜山手の丘の  
一角に開校された。

本稿は、この記念すべき年に当たり、まず、  
筆者自身が、横浜開港 150 周年と関東学院創  
立 125 周年の社会的意義および今後の課題に

関して、ことに「横浜とは何か？」に焦点を当てて、振り返ってみる。『外からの文明開化』から『内からの文明開化』への文化革命ともいべき転換を提唱する。

本学では、関東学院創立125周年を記念してさまざまな記念行事が行われている。本研究所では、数年前から進めてきた関東学院の創設者の1人である故・坂田祐博士（元院長・元学長）が約85年前の大正3年（西暦1914年）に東京帝国大学に提出した卒業論文を公刊することを企画した。それは、旧約聖書の「預言者エレミヤ」を論じた研究であり、紙数の制約のため、前号（第7号）には第1章と第2章のみを掲載した。本号（第8号）には、第3章と第4章とを掲載する。今後残りの章も順次掲載する予定である。なお、坂田祐博士の卒業論文公刊にあたっての経緯などは、加納政弘・帆苅猛両氏による解説を参照されたい。坂田祐関連としては、さらにつぎの2論文を掲載する。小玉敏子「搜真女学校と坂田祐」及び松本洋幸「関東学院と有吉忠一：有吉忠一の青年時代—プロテstantの側面から—」。

「搜真女学校と坂田祐」は、搜真学院理事長の小玉敏子が、「1932年12月、高垣校長が辞任し、当時、財団法人関東学院の高等部長兼中等部長であった坂田祐が搜真女学校の校長を兼務した」ので、坂田祐と搜真女学校との関係を振り返ったものである。横浜開港資料館の松本洋幸は、中学関東学院が三春台に設置されるにあたって支援した元神奈川県知事・元横浜市長の有吉忠一と関東学院及び坂田祐との深い関係から有吉忠一の青年時代を紹介したものである。

次の特別報告としては、村椿真理所長による「バプテストの伝統を持つ教育機関の現代的教育使命：バプテスト400年と関東学院建学の精神—バプテスト400年祭、記念シンポジウム報告—」を掲載する。これは、2009年10月17日（土）にバプテスト400年祭を記念して本学で開催された公開シンポジウム

の記録を報告したものである。

次に、研究論文と研究ノートについて説明しよう。キリスト教と文化研究所・所報「キリスト教と文化」は、さまざまな論稿から構成されているが、メインは、研究論文と研究ノートである。学術雑誌としては当然のことであるが、学術研究からみてレベルの高い研究論文を掲載することが本誌にも求められている。2005年度から、レフリー（査読）制度を厳格化し、研究論文と研究ノートは、2名以上の匿名の査読者によるレフリーに合格した原稿を掲載することにした。本号第8号には、研究論文が3編、研究ノートが5編、計8編の査読にパスした原稿を掲載することが出来た。これらの論文を整理してみると、研究プロジェクト及び研究グループ活動から生み出された論文がほとんどである。昨年度と同様に、A「依存症と日本の精神風土」特集に関する論文、B「バプテストと坂田祐」特集に関する論文、C「いのちと奉仕」特集に関する論文、の3つの特集という形に再整理することが出来た。

第1特集（A印）は、「依存症と日本の精神風土」に関する研究論文であり、安田・岡西・小林・神谷による4編が掲載されている。これらは、2007年度に新しく発足した「依存症とキリスト教」研究プロジェクト及び2002年度からスタートしている「キリスト教と日本の精神風土」研究グループの研究活動の中で生み出されてきた研究論文である。ことに安田八十五による「神の存在及び三位一体説の数学的証明—神、宇宙と人類の存在及び関係に関する科学的分析序論（1）」は、筆者が約40年前から温めてきた、神の存在に関する数学的アプローチを用いて挑戦した試みである。多くの御批判とコメントを是非期待したい。

第2特集（B印）は、「バプテストと坂田祐」に関する研究論文であり、古谷・坂田の2編が掲載されている。2004年度に発足した2本の研究プロジェクトが、『坂田祐研究

プロジェクト』および『バプテスト研究プロジェクト』である。これらの研究プロジェクトは、研究プロジェクト報告に示されているように順調に研究が進んで来た。さらに、『バプテスト研究プロジェクト』の成果は、関東学院大学出版会から本研究所叢書第1号として2008年3月に発刊されており、現在、第2号も準備中である。

第3特集(C印)は、「いのちと奉仕」に関する研究論文であり、勘田及び菊地・勘田・佐藤共著による2編が掲載されている。2005年度に発足した「国際理解とボランティア研究プロジェクト」の研究成果である。これは、森島牧人前所長等が以前から行っていた、タイにおける国際協力・奉仕活動を発展させた研究プロジェクトである。2002年度から既に発足していた「奉仕・ボランティア教育」と「いのちを考える」研究グループの研究成果も活動報告に掲載されている。

2007年度から所報の体裁の大幅な変更を行った。ことに、表紙に関東学院教会の写真を入れ、紙質も変えた。そのため、目次は、中の方に入れた。手にとって関心を持っていただき、読みやすくしたつもりである。ただし、論文の研究水準は高く保っているはずである。是非、皆様の御批判・御感想を期待している。

# 横浜・内からの文明開化をめざして ：依存症社会からの離陸

## —横浜開港 150 周年記念と関東学院創立 125 周年記念 の社会的意義と課題—

安 田 八十五

Towards the Civilization from the Inside the Yokohama :Taking off the Dependent Society — The Social Implications and Issues on the 150 Anniversary of the City of Yokohama and the 125 Anniversary of the Kanto-gakuin University—

Dr. Yasoi YASUDA , Marco

### 要 旨

本年、平成 21 年（西暦 2009 年）は、横浜開港 150 周年記念と関東学院創立 125 周年記念に当たる。横浜市は、今から 150 年前の安政 6 年（1859 年）に、戸数約 100 戸の半農半漁の寒村・横浜村（今の閑内地区）に、外国との交易のための港が、初めて開かれ、それが人口 367 万人を超える大都市横浜の出発点だったというわけである。また、横浜開港から 25 年後の今から 125 年前の明治 17 年（1884 年 10 月 6 日）に、関東学院の前身の一つになる横浜バプテスト神学校が、横浜山手の丘の一角に開校された。本稿は、この記念すべき年に当たり、横浜開港 150 周年と関東学院創立 125 周年の社会的意義および今後の課題に関して、ことに「横浜とは何か？」に焦点を当てて、振り返ってみる。『外からの文明開化』から『内からの文明開化』への文化革命ともいべき転換を提唱する。

### キーワード：

①横浜開港 150 周年②関東学院創立 125 周年

- ③内からの文明開化 ④依存症社会
- ⑤開港博覧会 Y150 ⑥横浜論 ⑦横浜学
- ⑧横山市 ⑨都市の自立性 ⑩みなとみらい

### 目 次：

1. 序論：横浜開港 150 周年記念と関東学院創立 125 周年記念 の意義
2. 依存症社会からの離陸—「外からの文明開化」から「内からの文明開化」へ—
3. ミナト横浜の原風景—私と横浜—
4. 港とミナト—都市とミナト
5. 市民のためのミナトをめざして—都市の自立性が低い横浜市の課題と展望—
6. 『みなとみらい 21』開発計画の目的と課題—MM21 は、なぜ失敗したのか？—
7. 大都市としていびつな構造を有する現代の横浜市の都市特性
8. 新しい都心空間の代替案の提案—横浜らしい都心地域の創造—
9. 市民参画によるミナトづくり—ミナトといいうまちづくりの思想—
10. 新しい原風景をつくろう！—“内からの

- 文明開化”への出発—
11. 関東学院創立125周年記念の意義と横浜との関係
- 追記：
- 参考文献：
- 参考ホームページ：

## 1. 序論：横浜開港150周年記念と 関東学院創立125周年記念の意義

今年、平成21年（西暦2009年）は、横浜開港150周年記念と関東学院創立125周年記念に当たる御目出度い年だそうである。

横浜は2009年（平成21年）に開港150周年を迎えた。安政6年（西暦1859年）にわずか100戸余りの半農半漁の寒村『横浜村』（現在の関内地区の一部地域）が、江戸徳川幕府によって開港地とされ、約150年間で人口約367万人の東京に次ぐ、日本第2位の巨大都市になった。横浜の都市イメージは外部にはかなり良く、都市の好感度調査ではいつも上位にランクされている。しかしながら、都市機能を分析すると、中枢管理機能（業務機能）は、極めて弱く、また、商業なども東京への流出が多く、横浜市は、都市の自立性が低く、人口のみが巨大な、『いびつな巨大都市』という側面がある。この横浜の有する虚像と実像を冷静に分析し、横浜の政策課題を整理し、将来のあるべき姿を考えることが本論文の主たる目的である。

また、関東学院大学メインキャンパスのある金沢八景は、鎌倉時代に『六浦（むつら）の湊』として開かれ、約800年以上の歴史を有する地域である。ことに、近くの野島には自然海岸線が約500m残されており、平潟湾を含めて横浜の原風景を留めている。『池子の森』には、絶滅危惧Ⅱ種の猛禽類オオタカ及び絶滅危惧Ⅰ種のダンダンゴケという苔類の植物も観測されており、「自然の博物館」（ナチュラルミュージアム）と呼ばれる大都市では貴重な自然空間が残されている。今、この『池

子の森』に米軍住宅追加建設が日米両政府から2003年夏に発表され、1994年11月に調印された、「今後米軍住宅は建設せず、池子の森をそのまま保全する」という、いわゆる『三者合意』が破られようとしている。

横浜開港から25年後の今から125年前の明治17年（1884年10月6日）に、関東学院の前身の一つになる横浜バプテスト神学校が、横浜山手の丘の一角に開校された。

本稿は、この記念すべき年に当たり、横浜開港150周年と関東学院創立125周年の社会的意義および今後の課題に関して、ここに「横浜とは何か？」に焦点を当てて、振り返ってみることにする。

筆者は、横浜4代目の生糸の“浜っ子”であり、縁があって、2002年に筑波大学から関東学院大学経済学部に招聘され、直ぐキリスト教と文化研究所の所員の任命を受けた。また、筆者は都市問題・環境問題の政策科学的研究を専門としており、横浜の都市問題に関する若い頃から調査研究を続けてきた。さらに、2003年度からは、経済学部において、総合講座【横浜論】という講義を毎年、計7年間続けてきた。学外向けの公開講座においても、2005年度春学期に、横浜論をテーマに関東学院大学関内メディアセンターで開催している。なお、一部の論者は、『横浜学』という用語を使用している。しかしながら、『横浜学』という以上は、学問の体系が確立している必要がある。横浜の問題は、未だ、『横浜学』と呼べる学問体系は確立できていないと筆者は考えている。そこで、筆者は当分の間、『横浜論』という用語を使用する予定である。

キリスト教に関しては、筆者は新参者である。筆者は、24歳の時、昭和44年（1969年）関東学院「霞ヶ丘教会」で佐々木敏郎牧師（当時は関東学院大学神学部助教授・元法学部教授・現在は客員研究員）による司式でキリスト教バプテスト方式による結婚式を挙げていた。しかし、残念ながら、その後はキリ

スト教とは縁がなく、40才を過ぎてからキリスト教と再会し、平成12年（2000年）の復活祭の時に55歳で、カトリック磯子教会で鈴木勁介神父（現在はカトリック藤沢教会主任司祭）より洗礼を授かった（洗礼名は、マルコ）。洗礼に約10年以上かかったが、その過程で多くの方々から様々なご教示を頂いた。さらに、平成14年（2002年）4月に筑波大学から関東学院大学経済学部に着任し、チャプレン高野進先生のお薦めもあり、キリスト教と文化研究所員の任命を受け、研究活動に参加させて頂いた。その意味では、キリスト教徒としての経験は浅く、キリスト教に関する素養や研究は深くないと言える。

しかしながら、このような『横浜論の研究』とキリスト教と文化研究所員として『キリスト教と社会との関わりの研究』の両方を研究している筆者が、『横浜開港150周年記念と関東学院創立125周年記念の意義』を論ずるのも何かの縁だと思い、敢えて筆を執った次第である。

## 2. 依存症社会からの離陸—「外からの文明開化」から「内からの文明開化」へ—

現代日本では、子供の時から、多くの父親が仕事人間（ワーカーホリック）のため、家庭においては母親との関係が深くなりすぎ、父性機能の存在しない「機能不全家庭」(Dysfunctional Family) が少なくなく、「依存症人間」(Dependent Person) が極めて多い。そして、このような多くの依存症人間で形成される日本の社会は、甘えやもたれあいが当然の「依存症社会」(Dependent Society) を形成してしまっている。最近の政治家・高級官僚・知事・市長等の中央官庁と地方自治体及び大企業等で発生している政治献金疑惑・贈収賄・談合等の不祥事は、依存症社会の行き着く先を示している。

最近極めて大きな社会的問題となっている

地球環境問題等の現代社会の病理が、なぜ発生してしまったかというと、基本的には市場経済、つまり資本主義経済の使い方が間違っていたからである。特に、精神的な面で言うと、「自己中心主義」が、基本的な原因である。自分の幸福、特に自分の物質的・経済的豊かさを獲得することが最大の目標になってしまった。昨年、平成21年（2008年）秋に発生したリーマンブラザーズ等のアメリカ経済の破綻は、「新自由主義経済」という、いわば、「強欲資本主義」、言い換れば、「神無き資本主義」経済がもたらしたものと言える。地球環境等の他のものはすべて犠牲にしていいという自己中心主義的価値観になってしまったわけである。地球温暖化等の地球環境問題は、「依存症」の文脈で言えば、「地球依存症」もしくは「環境依存症」が引き起こしたと言える。

筆者は、約15年前の1995年頃から「依存症」及び「依存症社会」の研究を行って来ている。ことに、本学「キリスト教と文化研究所」の中に、「依存症とキリスト教」という研究プロジェクトを立ち上げて頂き、日本社会さらには現代世界の「依存症」及び「依存症社会」の構造と問題点及びその解決策を研究し続けている。その詳細は、本誌に発表した、安田八十五（2007）、（2008）、（2009）等の「依存症社会論」に関する論考を参照されたい。

翻って、幕末の横浜開港を思い起こすと、当時も抱えていた日本社会の依存症体质が、『外からの文明開化』にずっと引っ張られ続けたと言っても言い過ぎではない。今まさに、『内からの文明開化』が求められていると言えよう。横浜、さらには、関東学院から「内からの文明開化」(The Civilization from the Inside the Yokohama and the Kanto-gakuin) に挑戦して行きたいと考えている。「横浜開港150周年記念と関東学院創立125周年記念」を契機に、「依存症社会からの離陸」(Taking off the Dependent Society) という本当の意味の「文化革命」(The Civil Revolution) を提起

したいと思う。

### 3. ミナト横浜の原風景—私と横浜—

筆者は、横浜4代目の生粋の“浜っ子”である。曾祖父母は、横浜が開港された時に、長崎と富山から横浜に出てきたと聞いている。私が生まれたのは、敗戦(昭和20年8月15日)ちょうど1年前の昭和19年(1944年)8月15日である。生まれ育ったのは、ミナト横浜の典型的な下町地域である。横浜市中区富士見町で生まれたが、昭和20年5月29日の横浜大空襲で生家は焼かれ、その後米軍に接収された。そのため、敗戦後、南区白妙町に移り、そこで大人になるまで育った。横浜橋通り商店街のすぐ近くである。横浜橋は、今はもうない。埋め立てられ「大通り公園」に変わってしまったからである。今の大通り公園は、開港当時、(新)吉田川とよばれる江戸時代に開削された運河である。吉田川は厳密には、江戸時代に吉田勘兵衛によって埋め立てられた吉田新田の中央に残された内湾(洲干湾(しゅうかんわん)という)の水路部分である。吉田川は、今ではJR関内駅前の高速道路に変わってしまった派大岡川を通じてミナト(横浜港)につながっていた。

吉田川には、多くの橋がかけられており、私にとっては、イセザキ(伊勢佐木町通り商店街)や中学校(横浜市立吉田中学校)などへ行く時、必ずお世話になった橋が横浜橋なのである。横浜の発展の歴史は、埋め立ての歴史であり、埋め立てによって多くの運河が造られ、そこに多くの橋がかけられていた。運河と橋は開港以来、横浜市民にはなくてはならないものであったのである(注:横浜の橋の歴史については、小寺篤「横浜の橋」という名著がある)。横浜橋の近くには、真金町・永楽町の遊郭地区があり、いつも夜遅くまでにぎやかであった。大鷲(おおとり)神社のお酉(とり)様の日には、身動きができないほどの人が出た。

横浜橋を反対方向の山手方面に行くと三吉

橋に出る。三吉橋は中村川にかかる橋で、角に横浜で唯一の常設の大衆演芸場である「三吉演芸場」が、ノボリをヒラヒラさせながら佇んでいる。

中村川の下流は堀川とよばれているが、この川は、安政6年(1859年)の開港の翌年、万永元年(1860年)に、江戸徳川幕府の横浜村(関内地区)出島化政策により開削(さく)された運河である。今の元町商店街の裏を流れている川である。

図1(次頁)に、開港直前の横浜の地図を示すが、その時には堀川は無いことに注意されたい。開削後は、中村川と繋がりその下流となっている。図2(次頁)には、明治時代になってからの横浜の地図を示す。

下町商店街・運河・橋・遊郭・イセザキ・大衆演芸場、それに横浜港での朝釣りなどが私のミナト横浜の原風景である。

この原風景とともに思い出されるのが外見は汚いが逞(たくま)しい子供時代の遊び仲間であり、そそかしいところがあるが義理人情に厚い下町の大人たちである。

ひょんなことから都市問題・環境問題を研究する学者になってしまった私は、ミナト横浜の原風景は、私が生まれ育ったこの下町地域にあったのではないかと30代前半に気がついた。つまり、この下町地域こそミナト横浜の縮図だったのでないかと思うようになったのである。

### 4. 港とミナト・都市とミナト

私は漢字で書く「港」という言葉はあまり好きではない。とくに「港湾」と書くと、もう私にとってはミナトで無くなってしまう。港湾という言葉は、冷たい機械を連想してしまうからである。「ミナト」もしくは「みなと」には温かい人間味が感じられる。つまり港とミナト(みなと)とは、イコールではないのである。港には施設としての港湾が必要ではあろうが、それはミナトにとって本質的なこ

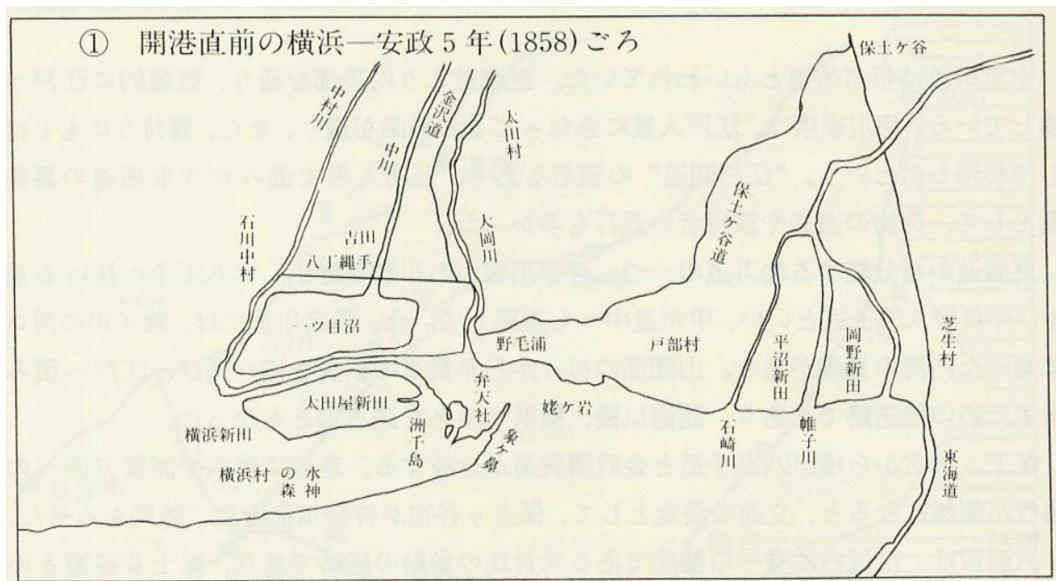


図1. 開港直前の横浜—安政5年（1858年）頃：出典＝横浜開港資料館

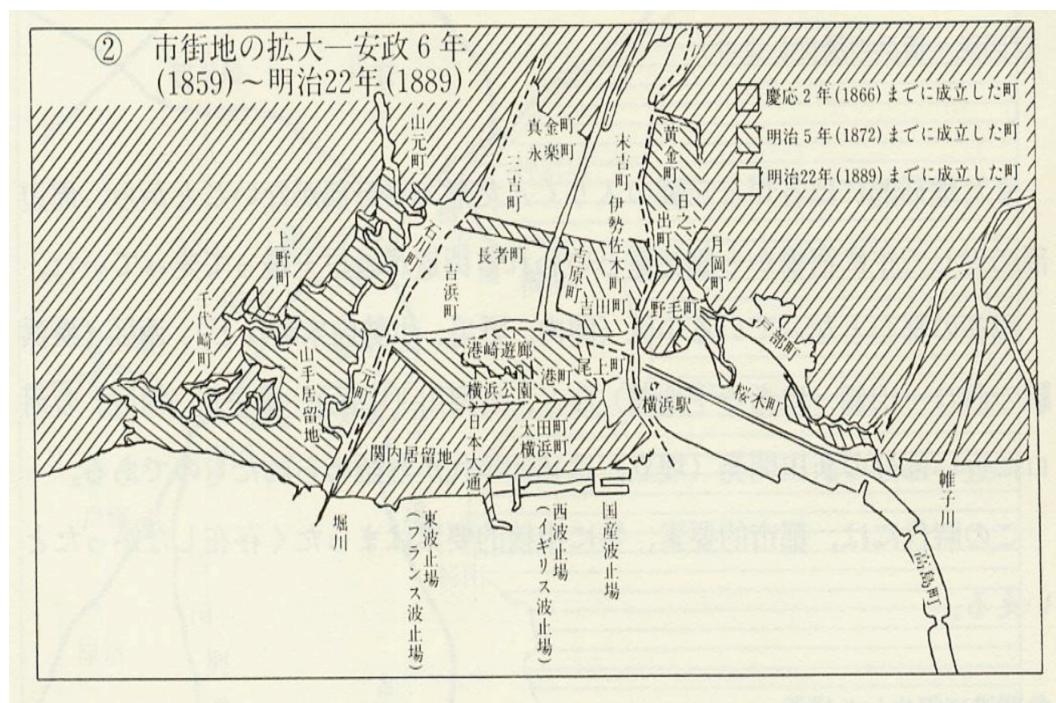


図2. 横浜市街地の拡大：安政6年（1859年）～明治22年：出典＝横浜開港資料館

とではない。

ミナトとは人が集まり、コミュニケーションを行うところなのである。商いをし、おしゃべりをし、恋をするところこそミナトなのである。つまり、ミナトというのは都市そのものなのである。

横浜港という海の港は、ミナトという出会いの場を提供してきたにすぎない。開港以来の横浜港は、ミナト横浜という都市にミナトという場をつくり出してきた。しかし、最近はその影が薄れてきた。これも近代化という時代の波なのであろうか。私はそう思わない。港が都市から離れていき「ミナト」的要素が少なくなったのは、産業や輸送の合理性という狭い意味の近代化のみを追求してきたからである。

「港」は、市民の生活の中に溶け込み、都市全体の中で位置づけられ、はじめて「ミナト」になりうるのである。港が単なる物流基地になってしまっては、もはや「ミナト」と呼ぶことはできない。まさに港湾になってしまふのである。港と都市とのかかわりあいを、根本から見つめ直すことによってしか横浜港のあるべき姿を見い出すことはできない。

## 5. 市民のためのミナトをめざして— 都市の自立性が低い横浜市の課題と展望—

都市としての横浜の一番の問題点は何であろうか。一言でいうと、都市として自律性(または、自立性)が極めて低いということである。人口は365万人を超え、人間の体に例えると団体だけは大きくなつたが、頭脳は小さく、さらに心(ハート)に欠陥があるのである。つまり、横浜という都市を人間に例えれば、自分で自分のことを律することができない非自律性という特質を有している。東京都23区を含む政令指定都市をさまざまなデータから比較してみると、横浜市は、都市の自律性(自立性)が極めて低い大都市なのである。表1に、今から約25年前の、昭和60年(1985年)時点の国政調査データに基づく、都市の自立性を示す各種指標を示す。都市の自立性を示す重要な指標と言われる昼夜間人口比で見ると、横浜市は、89.6%であり、川崎市の92.8%よりも低い値になっている。

都市の自律性を高めることが、横浜の都市政策の基本理念にならなければならない。自律性の低い原因は基本的には2つある。外部的要因と内部的要因である。

総 人 口(人)	2,990,133	全国シェア	2.5	11大都市の順位	2位
昼 間 人 口(人)	2,680,333				
昼 夜 間 人 口 比	89.6				
流 出 人 口(人)	618,801	内通勤者	535,604	流出超	
流 入 人 口(人)	310,675	内通勤者	226,863		
流 出 率	37.0				
年齢3区分比年少	21.5	全国	21.5		
生 産 年 齢	71.3		68.2		
老 齢	7.1		10.3		

表1. 横浜市の人口構造(昭和60年度)：出所=小沢恵一(1991)

外部的要因というのは、主に東京の関係である。東京という巨大都市に引きずられっぱなしのところに問題がある。たしかに、横浜の問題を考える時に、しばしば東京との関係をあまりにもネガティブに考え過ぎることも多い。今後は、東京との関係をもっとポジティブに評価して、取り組むべきである。東京と近いということは、デメリットのみではなく、メリットの方が多いのである。

デメリットの典型例として中枢管理機能の弱さがあげられる。本社機能は東京に集中してしまい、横浜には支店というよりも営業所、出張所しか立地しなくなってしまった。企業の合理的行動から、横浜に立地せず東京に集まってしまうことにはやむを得ないところがある。問題なのは、横浜の地域特性に見合って横浜で発生し、成長した企業が横浜から出て東京へ行くケースである。

横浜の魅力がそれだけ薄れてきたのであり、都市の環境作りに適切な対応が行われなかつたことが原因である。ここに最大の問題がある。まさに内部の努力が欠けているのである。外部環境の変動に能動的に適応していく内部の力、つまり『能動的適応力』(Active Adaptation) が弱くなった時こそ、都市にとっては「本当の危機」なのである。

最近、横浜が発祥の地である日産自動車が本社を東京銀座から横浜みなとみらい地区に移すといううれしい動きがあった。日産が本社機能を横浜に移動したことが、マイナスにならないことを祈りたい。

首都・東京に近いことのメリットは、横浜の発展をふりかえれば明らかである。そもそも横浜港が開港されたのは、東京（江戸）に近いという理由からだったのである。しかしながら、横浜港が、主要街道の東海道筋の神奈川宿の近くではなく、東海道から離れた横浜村に開港されたことは、後の横浜市の都市構造を形成するのに様々な困難を生み出したと言える。横浜市の交通体系が弱体なことの基本的原因となっている。

また、最近の人口増に伴う都市の成長も東京に近いからこそ起きてきたのである。

今後は、東京との関係のデメリットを最小化し、メリットを最大化して個性ある大都市を作り上げるように内部で努力しなければならない。

地方都市が“ミニ東京化”するなかで、横浜は近いがゆえにかえって東京とは全く異なる魅力的な大都市を作ることが可能になる。

ミナト横浜は今、変革期を迎えている。高度経済成長時代の東京からの人口流入は、ほぼ横ばいである。今後の人口増加は、主に自然増にもとづくものであり、もっとゆっくりしたものとなる。また、高度成長から低成長への移行に伴う産業構造の変革への要請は、横浜にも現れてきている。

『悲しむべき（横浜市）人口増加』の次に来るのは、横浜で生まれ育った大量の“浜っ子”の創出である。流入世代のなかには横浜を単なる「寝ぐら」としか感じられない気の毒な人もいることは否定できない。しかし世の中の落ち着きとともに、働き蜂（ばち）から自分の身の回りの生活に眼を向ける人々が増えていることも事実である。横浜に流入してきた人々は、経済的、文化的にとても質の高い人々であり、この質の高い人間が約 367 万人以上もいるということは、横浜の一番の資源であり、資産である。

新住民に横浜の都市の素晴らしさを理解してもらうためには、旧住民である“浜っ子”ががんばらなければならない。浜っ子は新住民に積極的に働きかける必要がある。ミナト横浜の良さを PR し、さまざまな活動に入つてもらうように声をかけることである。みんなが一緒に横浜の良さを認識し、横浜の将来を語り合う場をつくり出すべきである。出会いの場「つどいあうまち」としてのミナトが都市の中に続々と生まれてきた時こそ、ミナト横浜は活性化し、本当の意味で再生するであろう。

次の浜っ子世代には、私が体験した原風景

と同じような浜っ子経験をぜひ用意したいと思う。大人になって、「ああ、よかった！」といえる都市空間をつくり出したいものである。単一機能追求型の高速道路網や立ち入り禁止のコンビナート地帯だけしか記憶に残らないようでは寂しい。子供たちが、のびのびと遊び、学ぶことのできる空間を意識的に構築することである。このような都市空間を「浜っ子空間」とよぶことにしよう。

次に産業面について考えてみよう。横浜は、生産面はほとんど東京に頼っている、というよりも、とられており、とくに管理機能の弱さはひどすぎる。さいわい日本経済が産業構造の変革期を迎えてるので、横浜にとっても地域産業構造を再編成し、それに伴う都市改造を実行する好機である。

臨海部立地型の重化学工業中心の産業構造から、いわゆる脱工業化・知識集約型への転換が期待されている。

都市の頭脳であり、顔である都心部を都心らしく整備するには、三菱重工横浜造船所の跡地を中心とする、いわゆる都心臨海部の再開発がポイントとなり、現在では、『みなとみらい地区』が既に開発されている。

## 6. 『みなとみらい21』開発計画の目的と課題—MM21は、なぜ失敗したのか？—

『みなとみらい21』開発計画は、元々、飛鳥田一雄市長時代（1963年—1978年）の6大事業の一環として構想されたものである。6大事業の詳細は、当時横浜市企画調整局長として担当していた田村明（法政大学名誉教授）の『都市ヨコハマをつくる—実践的まちづくり手法—』等を参照されたい。

横浜市の最大事業として取り組まれて来た『みなとみらい21（MM21）』は、もともと6大事業の1つの都心部強化事業として計画されたものである。90%を切っている昼夜間人口比を100%にするためには、38万人の雇用人口を生み出す必要があり、その半分の19万人の雇用人口を都心部のMM21地区に呼びこもうという計画である。MM21の雇用人口目標である19万人がこのような算術からはじき出されたことを知っている人は意外と少ないのでなかろうか？

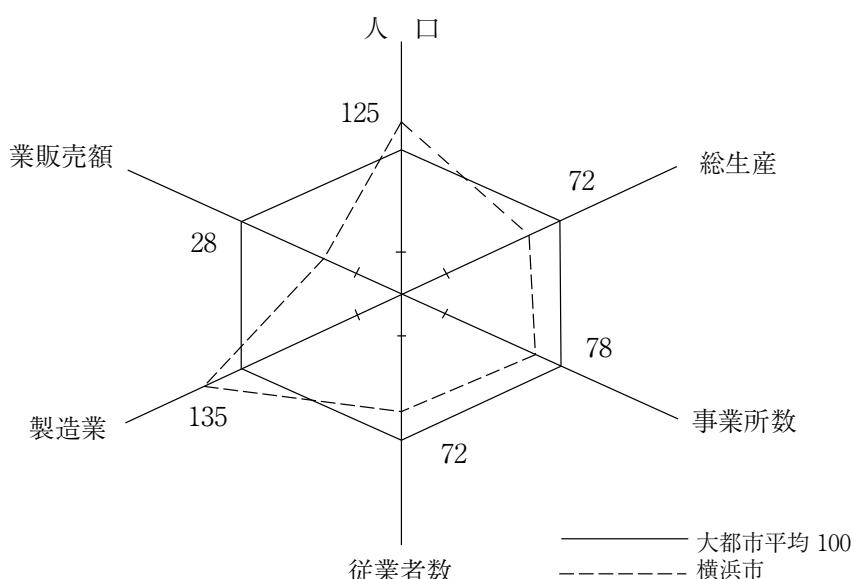


図3. 各種都市指標による横浜市と11大都市との比較：出所＝小沢恵一（1991）

図3（前頁）は、11大都市（仙台市を除く10の政令都市及び東京都区部の11の大都市：北からは、札幌市、東京都区部、川崎市、横浜市、名古屋市、京都市、大阪市、神戸市、広島市、北九州市、福岡市）の平均と比較した昭和60年（1985年）時点における横浜の都市機能を示しているが、この図から横浜がいかにいびつな都市特性を有しているかが一目瞭然である。

昭和60年（1985年）という年は、筆者が当時勤務していた筑波大学がある筑波研究学園都市で科学万博が開催された年である。筆者が高校1年生で経験した昭和35年（1960年）の日米安保闘争、その後の1960年代の高度経済成長、昭和48年（1973年）の石油ショックとその後の低成長経済、昭和55年（1980年）に始まった東京再集中とバブル経済、バブル経済の崩壊と「失われた10年」（1990年代）、平成20年（2008年）秋のリーマンショックによる世界同時不況等を経て、現在に至っているわけである。

昭和60年前後の思い出として強く残っていることは、昭和58年（1983年）5月にNHK教育テレビで二晩にわたって放送された「四全総」（第四次全国総合開発計画）に出演したことである。筆者は、NHKに依頼され、このテレビ番組の企画段階から参加し、メインゲストかつレポーターとして二回とも出演した。昭和55年（1980年）に始まった東京再集中と地方の斜陽化が大きな社会的問題となつており、「東京再集中」と「地方再生の道」のタイトルで放送された。

当時熊本県知事の細川護熙氏にゲスト出演していただき知遇を得た。その後、細川さんはまもなく三選出馬せず知事を止め、東京に来られて日本新党を作られ、ほどなく総理大臣になってしまった。最近（2010年1月現在）、日本経済新聞の「私の履歴書」欄に細川さんが毎日書かれているので思い出し紹介してみた。

昭和60年（1985年）のデータで見ると、人口は300万人を超え、東京に次いで11大都

市中、第2位の巨大都市になっているのに、都市の経済的自立性を計る指標である昼夜間人口比では、89.6%と90%を割っており、決して大都市と呼べない低い値である。ちなみに11大都市で100%を割っているのは、川崎（92.8%）と横浜（89.6%）の2都市のみである。この90%を切っている昼夜間人口比こそ、就業の場が少なく、東京のベッドタウン化していることを意味している。

筆者は、この東京のベッドタウン的側面を、横浜市における「横山市」の機能と名付けている。横浜市におけるもう1つの機能は、港湾や臨海部の本来の横浜が有する機能であり、「横浜市」の機能とネーミングしている。つまり、横浜市は、「横浜市」及び「横山市」の主に2つの機能から形成されていると言える。筆者の横浜論の本質は、この「横浜横山論」と言える。

このようないびつな都市構造を、当時「みなとみらい21計画」を担当していた横浜市都市計画局長の小沢恵一は次の10の構造的问题（『生きている都市、つくる都市』118頁—119頁）として整理しているが、筆者も大体同感である。

- ①人口は巨大である。
- ②しかし、昼夜間人口比（89.6%）、人口の流出率（37.0%）、市民の市内就業率（62.4%）等で端的に示されるように、人口構造、就業構造に大都市らしからぬ歪みをもつてゐる（ただし、年齢構成上では人口増、特に社会増があるため比較的に若く、サラリーマン層が多い）。
- ③生産構造からみれば、市内総生産額が市民総生産額の78.3%，市民所得構成では雇用所得が75.0%のシェアを占めているのに対し、企業所得は15.5%と少ない。また市民総支出では市外要素所得が21.7%を占め、経済的にも歪みを示している。
- ④これらは、人口に対して市内の産業、就業の場が少ないこと、あるいは東京のベッドタウンの性格を示すものである。
- ⑤市内の産業構造の上では、第三次産業が

- 68.8%のシェアで、11大都市中では11位であり、第二次産業の持つ比は相当重く、工業都市的性格の強さを示している。
- ⑥工業は、横浜市が港湾都市であることと深くかかわっており、その港湾は、性格としては自動車、機器にウェイトをもった輸出港である。
- ⑦人口の巨大さに対して第三次産業のウェイトは小さい。消費人口を多量にかかえながら、商業が全体として経済を支え、また市民の就業の場に相応する力を有していない。
- 小売業では11大都市中4位であるが、しかし人口1人当たりの年間販売額では80.9万円と、全国の84.0万円すら下回る状況にある。
- ⑧文化的なストックが少ない（特に歴史的蓄積がない）。ちなみに国宝は2つあるが、固定的な建造物はない（東京都は220、建造物0、京都市は201、建造物38、重要文化財になると横浜市52、建造物12、東京都1,965、建造物38、京都市1,632、建造物83である。—「昭和60年末、大都市比較統計」による）。
- ⑨都市基盤整備が遅れている。特に、市域の各地域をつなぐネットワークが弱く、東京指向型の体系が強い。ちなみに道路率でみると、面積当たりの延長では18%で、東京都の16%、名古屋市の17%と同レベルにあるが、道路面積では10.4%で、東京都の14.5%、名古屋市の15.0%、大阪市の17.5%に比して相當に劣り、かつ東名高速道などの通過目的の道路を差し引くと、さらに小さくなると考えられる。実感として、狭く、山あり谷ありのうねった道路網である。
- ⑩全域が市街地化しており、かつ、スプロール状の市街地が形成されている。

この昭和60年（1985年）における横浜市のいびつな都市構造特性が、約25年後の現在どのように改革されたであろうか？

現在時点に最も近い国勢調査結果によれば、約20年間を経た平成17年（2005年）時点の横浜市の昼夜間人口比は、約90.4%であり、昭和60年（1985年）時点の昼夜間人口比、約89.6%と比較するとこの20年間で約0.8%微増している。しかしながら、平成12年（2000年）の昼夜間人口比、約90.5%と比較するとこの5年間で約0.1%の微減だがほぼ横ばいと言える。

ところが、みなとみらい地区で増加した雇用人口は、約5万人に過ぎず、当初計画雇用人口約19万人の4分の1、約25%に過ぎない。この意味で、みなとみらい21計画は失敗であったと結論づけることが出来る。

MM21失敗のマイナス面は大きく言って、2つの面に現れている。それらは、過大な海面埋め立て及び過剰かつ無駄な社会資本投資の2つである。第一は、雇用人口約19万人と夜間人口1万人の合計20万人規模という過大な開発規模を計画したため、海面が過大に埋め立てられてしまった。過大な埋め立ては、桜木町駅や野毛地区等の旧市街地から海辺への距離を歩けないほど遠くしてしまった。結論的に言うと、埋め立ては、現在の半分以下の規模で済んだはずである。第2は、過剰かつ無駄な社会資本投資であり、道路・上下水道・情報インフラ施設等の公共投資が過大に行われ、高秀秀信市政末期（2002年3月）には、市民1人あたり数百万円の借金を横浜市が抱えることになった大きな原因である。もしも仮に、みなとみらい21計画が、半分の規模で計画されていたら、このような失敗を回避することが可能であったと言える。

なぜ、みなとみらい21計画は失敗したのであろうか？主たる原因を分析してみよう。

昼夜間人口比を、横浜全体で18区ある行政区別に見てみよう。最も高いのは、西区の約198.8%、次が中区の約182.9%であり、この2区以外の残りの16区は、すべて100%を切っている。

西区及び中区の2区のみが、横浜市の都心

区域と言えるのであり、事務所・事業所等が集中しているので、昼間人口が夜間人口の約2倍になっている。中区は、閑内地区及びイセザキ等の閑外地区という横浜開港以来の業務・商業地区であるのに、西区より昼夜間人口比率が、約5.9%も低いと言うことは、中区が西区よりも斜陽化していることを意味している。西区は、みなとみらい21計画のお陰で昼間人口が増えたのに、中区はめぼしい開発計画及び再開発計画が無かったため、取り残されてしまったと言える。

他方、昼夜間人口比率が最も低い区を見ると、栄区及び泉区が約73.5%と最も低く、次いで青葉区の約75.1%，港南区の約75%と郊外区が続いている。ことに、青葉区は、東急電鉄田園都市線沿線であり、東京に通勤する、いわゆる「横浜都民」(安田の横浜論では、「横山市民」)が多いためと考えられる。

横浜市の場合、横浜市全体が東京大都市圏内にあり、その一部地域となっているので、昼夜間人口比率で都市の自立性を測定することは適切ではない。というよりも、間違っていると言っても言い過ぎではない。

## 7. 大都市としていびつな構造を有する現代の横浜市の都市特性

前章の「みなとみらい21失敗の分析」では、主に、平成3年に安田八十五(1991)によって書かれた「大都市としてのいびつな構造を持つ横浜」、及び小沢恵一(1991)による「横浜市の10の構造的問題」のデータ(1991年度)と最新データ(2005年度)の比較分析を踏まえておこなったものである。現在の横浜も依然としていびつな都市構造を有しているのか、確認の意味も込めて今回さらに、データの比較調査を行ってみた。

13大都市(当時の11大都市に新たに仙台市と千葉市が政令指定都市として追加された)の比較データとしては、最新のものとなる平成14年度(2002年)の「大都市比較統計年表」を参考に

しながら、13大都市の経済・産業比較のデータを示し、横浜市の経済・産業構造の特性について考えていくこととする。

「大都市比較統計年表」は、計12の政令指定都市および東京都特別区(23区)の13大都市に関する、人口、事業所、農業、工業、商業、サービス業、貿易、金融、教育および文化、財政など多くの都市情報がデータ化されているものである。1991年の調査では、横浜市は、人口と製造業は11大都市の平均を上回っていたが、それ以外の総生産、事業所数、従業員数、商業販売額は平均を下回っていた。第3次産業は68%のシェアしかなく、11大都市中、最下位の11位であった。一方で第2次産業の比率は高く、横浜は「工業都市」の色彩が極めて濃い都市であったといえる。1991年の横浜は300万人以上の人口を有する東京に次ぐ日本第2位の巨大都市であるにもかかわらず、就業の場が少なく「東京の巨大なベットタウン」と化している、いびつで奇妙な構造となっていた。それから11年が経った2002年の横浜はどのような都市構造になっているのか?そこで今回最新のデータを整理し、改めて横浜と13大都市を比べていくこととする。またそれを踏まえ、今後の横浜市の都市政策のあり方についても考えていくことにしたい。

以下のデータは、平成14年度(2002年度)の13大都市(東京都23区と全国の政令指定都市)の人口・総生産・事業所数・従業員数・商業販売額を比較したものである。出典は、『大都市比較統計年表 平成14年度』、大都市統計協議会発行である。

表2(次頁)は13大都市の人口・総生産・事業所数・従業員数・販売出荷額・商業販売額を一覧にしてまとめたものである。

次に、このデータをもとにそれぞれの項目ごとに平均値をもとめ、平均値と各都市の差を割り出したところ、表3(次頁)のようになった。また、表2のデータを都市ごとにグラフにしてみて、分析して見た(注:紙数の

制約のため、そのグラフの掲載は省略する)。それを見るとすべての項目において東京23区の数値が他の大都市を圧倒していることがわかる。事業所数や従業員数など、産業面では東京は他の都市を大きく引き離している。

人口と総生産についてみていくと、13大都市で平均を上回っている都市は横浜市、名古屋市、大阪市の3都市のみである。

事業所数、従業員数では名古屋市、大阪市の2都市のみが平均を上回っている。

一方、製造品出荷額は川崎市、横浜市、名古屋市、大阪市、神戸市の5都市が平均を上回っている。

東京23区、名古屋市、大阪市は経済・産

業面で巨大な経済力を有する都市となっていることが明らかになった。

また、商業より工業の方が川崎市、横浜市、神戸市という「ベットタウン」的色彩の強い都市では大きくなっていることが分かる。すなわち、東京や大阪という大都市の周辺にある海辺や港湾沿いの「ベットタウン」では、第2次産業が盛んであり、第3次産業のウエイトは、人口の巨大さに比べて小さいことがわかる。川崎市と横浜市は東京、神戸市は大阪の、それぞれの港湾工業都市として開発され、同時に住宅都市としても開発されたのである。

現状では、経済面でも産業面でも東京一極

表2：13大都市の「人口・総生産・事務所数・従業員数・製造出荷額・商業販売額」の状況

(『大都市比較統計年表 平成14年度』大都市統計協議会発行から安田・笹木が作成)

	札幌市	仙台市	千葉市	東京23区	川崎市	横浜市	名古屋市	京都市	大阪市	神戸市	広島市	北九州市	福岡市
人口(人)	1846035	1019124	904629	8283735	1281706	3496927	2186075	1466978	2619335	1510468	1134648	1006458	1368450
総生産	891400	511700	466200	4598600	683600	1786500	1154900	723000	1328200	700200	586000	475900	694900
事業所数	76083	47537	29290	577545	42023	114563	139155	85347	230806	74140	54147	51052	73723
従業員数	785123	503914	350984	6711510	464655	1246714	1362514	794453	2311160	677304	526736	433748	761226
製造出荷額	587709	771211	826943	5532016	3550479	4025197	3382176	2023212	4314746	2478771	1643216	1560533	635858
商業販売額	10242935	8471472	3663044	168967756	2827678	9677363	29047089	5569791	48619094	5718282	8683406	3092196	1400163

表3：13大都市の「人口・総生産・事務所数・従業員数・製造出荷額・商業販売額」の平均とその差

(『大都市比較統計年表 平成14年度』大都市統計協議会発行から安田・笹木が作成)

	札幌市	仙台市	千葉市	東京23区	川崎市	横浜市	名古屋市	京都市	大阪市	神戸市	広島市	北九州市	福岡市	平均
人口(人)	-317393.3	-1144304	-1258799	6120306.7	-881722.3	1333498.7	22646.692	-696450.3	455906.69	-652960.3	-1028780	-1156970	-794978.3	2163428
総生産	-231761.5	-611461.5	-656961.5	3475438.5	-439561.5	663338.46	31738.462	-400161.5	205038.46	-422961.5	-537161.5	-647261.5	-428261.5	1123162
事業所数	-46640.92	-75186.92	-93433.92	454821.08	-80700.92	-8160.923	16431.077	-37376.92	108082.08	-48583.92	-68576.92	-71671.92	-49000.92	122723.3
従業員数	-510264.8	-791473.8	-944403.8	5416122.2	-830732.8	-48673.77	67126.231	-500934.8	1015772.2	-618083.8	-768651.8	-861639.8	-534161.8	1295388
製造出荷額	-1822450	-1638948	-1583216	3121857	1140320	1615038	972017	-386947	1904587	68612	-766943	-849626	-1774301	2410159
商業販売額	-14263353	-16034816	-20843244	144461468	-21678610	-14828925	4540801	-18936497	24112806	-18788006	-15822882	-21414092	-10504650	24506288

集中が強化された状態である。横浜市は、人口全国第2位であるが、商業面ではそれに相応しいものを備えているとは言いがたい。巨大マーケットである東京に行けば生活に必要な大部分のことは足りてしまう。横浜は東京のサブエリアであり、独自の「横浜大都市圏」が形成されているとはいえない。就業の面や生活面において、東京という巨大マーケットに依存すれば横浜市民は生活に不自由しないのである。

この状況を改善させ、自立した横浜を目指した飛鳥田市政時代に構想された6大事業政策は、横浜市の抱えていたいびつな都市構造を直し、自立性を生み出すことを目指した都市政策であったといえる。しかし、現在の都市比較データを見ても、当初目的とした改善がなされたとは言いがたい。

残念ながら1991年度のデータと最新2002年度のものを比べても、「横浜市の有するいびつな都市構造」がこの10年間で改善されたとはとても言えないことが明らかである。「現代の横浜市は、いびつな都市構造を残す大都市」という結論になる。

## 8. 新しい都心空間の代替案の提案— 横浜らしい都心地域の創造—

昼夜間人口比から、雇用創出を図るという当時の横浜市役所の発想は理解できなくなるが、もっと都心のあるべき姿を、徹底的に市民を巻きこんで議論し、あるべき姿から都市政策・公共政策を引き出す必要があった。都心地域は単なるオフィス街ではない。横浜の都心空間に丸の内や新宿型のオフィスセンターを作り出すことは極めて難しいし、余り意味のあることではない。もっと横浜らしい都心地域をつくり出すべきである。横浜らしい都市像はミナトから出発しなければならない。

まず都市空間としてミナトの原風景をつくりあげることである。第一にこの地域のもつ

臨海性をフルに生かさなければならない。海と都市とが一体となった都市空間をつくることが景観的には必須である。筆者が、欧米の港湾諸都市を調査した経験では、アメリカ・メリーランド州（神奈川県の姉妹州）にあるバルティモア市がそのモデル都市になる。バルティモア市には、古い港湾地区を再開発したインナーハーバー地区があり、ミナトと市民が一体となったまちづくりに成功している。横浜市もこのバルティモア市の経験から学ぶべきである。

しかしながら、ハードよりソフトの方が大切である。ミナトは本来人のつどいあう場所である。市民がつどいあえる場としてさまざまな市民的施設が設置され、たえずさまざまな活動が展開できるようにすべきである（都心は「コミュニケーションセンター」である）。

次に、情報が集まり、情報が交換され、そこから新しい情報が出て行く場でなければならない（都心は、「情報センター」である）。

とくに、ミナト横浜の開港以来の特徴である国際性を十分發揮できる場として、新しい都心を考えなければならない。つまり都心地域にはインタナショナルスクエアが中心的役割を果たすことになる（都心は、「インタナショナル・センター」である）。最近、国際会議参加者数に関して、横浜が東京を抜いたと言うデータが発表されたが、それは、みなとみらい地区に誘致した国立国際会議場等の効果が現れてきた結果であろう。ただし、それが横浜の国際化に本当に寄与しているかどうかは別途検討する必要がある。

これからの都心地域は単一機能のオフィス街で夜間無人地帯であってはならない。良質な住宅が用意され、たえず人々が活動している複合機能をもった総合的都市空間として開発されなければならない（都心は、「生活センター」である）。

また、新住民の多い郊外地域と都心地域が有機的に統合されなければならない。そのためには、交通網が整備されるだけではなく、

結びつきのソフトウェアがたえず供給されなければならない。もちろん、その一つが雇用の場である。このほか郊外の市民にも、学習やショッピングや遊びをヒューマンに展開できる場を都心地域は提供する必要がある。

つまり、都心臨海部は、大都市横浜がコンパクトに写像された縮図として、明るく、にぎやかでいつも開放的な横浜らしい空間として建設されることが期待されよう。つまり、『みなとみらい21』地区は、横浜の『コンパクト・シティ』（縮図都市）として構築すべきであったのである。ここに、『みなとみらい21』計画失敗の最大の原因が潜んでいる。

表4に、『みなとみらい21』計画に関する横浜市役所案と安田八十五案との比較を示す。横浜市役所案がなぜ失敗したのかが一目瞭然であろう。

## 9. 市民参画によるミナトづくり—ミナトというまちづくりの思想—

開港以来、ミナト横浜は、さまざま人々をうけ入れてきた。外国人、商人、労働者などが他の地域から横浜に入って来た。この人たちの活動が横浜を発展させてきた。開港の経緯としては江戸幕府主導型であったとい

ような不幸はあったかもしれないが、現在のミナト横浜は、我々の祖先であり、先輩である横浜市民が日々と築きあげてきたものである。その意味で、横浜は東京とは違うのである。わが国の地方自治は、官治型の自治から最近やっと市民型の自治へ転換しつつある。最近の自民党から民主党への政権交代もその契機となることが期待される。横浜の都市づくりは、市民が中心となり市民自治をめざして実践される素地がある。「市民のための市民によるミナトづくり・都市づくり」こそ、ミナト横浜の都市政策の基本理念とならなければならない。

横浜は市民参加に関しても最近積極的にとり入れ実績を積み重ねているが、まだまだ不十分である。行政主導型ではなく市民主導型の本当の意味での、単なる市民参加ではない「市民参画」によるミナト横浜づくりが展開されなければならない。

“浜っ子”である私も及ばずながら、「横浜都市問題研究会」（1977年創設・筑波大学勤務時代）、「横浜論研究会」（2002年創設・関東学院大学着任年）、「ヨコハマ市民環境会議」（2003年創設・共同代表）、「池子の森を守る会」（2004年創設）及び「金沢水の日」（2002年に参加、2007年から会長）等という市民中心の都市問題・

代替案 比較項目	横浜市案	安田案
基本理念	副都心型大規模開発	コンパクト・ヨコハマ（横浜の縮図空間）の再生
基本目標	雇用・経済	文化・環境
中心機能	中枢管理機能	市民文化・コミュニケーション機能
都市のイメージ	丸の内・新宿のオフィス街	バルティモアのインナーハーバー地区
水面埋立	大規模埋立（76ha）	原則なし（埋立は最小限）
開発手法	大規模埋立による新規開発型	区画整理による再生・修景型
市民のかかわり	形式的市民参加（審議会中心）	積極的市民参加（市民集会中心）
経済原理	独占理論	競争原理
社会的純便益	負（？）	生（？）
総合評価	Worst（？）	Better（？）

表4. みなとみらい21 計画に関する横浜市案と安田案との比較：安田八十五が作成  
：出典＝安田八十五（1985）、「港湾都市の再生と活性化—小樽と横浜からの教訓—」

環境問題等の研究団体・市民活動団体を仲間と結成し活動し続けてきた。今後も、研究者かつ横浜市民の一人として都市づくり・ミナトづくりに積極的にかかわって行く決意である。

## 10. 新しい原風景をつくろう！—“内からの文明開化”への出発—

高度経済成長時代に、ミナト横浜の原風景はズタズタに切りさかれ、瀕死の重傷を負ってしまったのではないであろうか？このスピードの激しい時代に「昔は良かった！」というような懐古趣味に陥る余裕はないし、私はそのような趣味はもち合わせていない。しかしながら「これが私の横浜だ！」という都市の原風景を積極的につくり出していかなければならぬ。その基本的な考え方は、人間を中心とした原風景を破壊するのではなく、原風景に溶け込むような新しい要素をつけ加えていくことである。

横浜の発展の歴史は、埋め立ての歴史であるが、高度経済成長期の埋め立ては原風景に似合わない。根岸湾のコンビナート地帯をみればわかるように、そこはまちとのつながりはまったくなく、またそこでは人間が中心ではなく、生き生きとしているのである。

都心臨海部は、夜間無人地帯の丸の内のようなオフィス街にしてはならない。昼も夜も、人が働き、いこい、休み、本当の意味で生きているまちにしなければならない。都心臨海部は、都心業務商業機能を中心にも、「これがヨコハマだ！」、「こここそヨコハマなのだ！」といえるような、ミナト横浜のシンボル空間を作り上げなければならない。

しかし、都心臨海部の新規開発よりも大切なことは、閑内やモトマチ、イセザキ、野毛などの旧市街地に人のたくさん集まる公共施設を優先的に整備したり、さまざまなイベントを行ったりして、『にぎやかなまち』に再生させることである。ミナト横浜の新しい原

風景をつくりあげることによって“内からの文明開化”に出発しよう！

## 11. 関東学院創立 125 周年記念 の意義と横浜との関係

関東学院は、今年（2009年）創立 125 周年を迎える、横浜開港 150 周年記念関連の開港博覧会 Y150 などと並び、様々な行事やイベント及び記念出版などが行われている。開国博 Y150 の方は、予定入場者数が全然達成せず、大赤字で、閉幕した今も対応に追われている。2009 年 8 月に突然辞任した中田宏前横浜市長の責任も追求されている。横浜開港 150 周年記念事業は、残念ながら失敗という評価を下さざるを得ない。

一方、関東学院創立 125 周年記念の方の評価はどうであろうか？筆者も内部の人間なので、評価を行う立場には無いと言える。しかしながら、出版に関しては、研究者の一人として言及せざるを得ない。

関東学院大学キリスト教と文化研究所員かつ編集委員長としては、所報「キリスト教と文化」第 7 号（2008 年度所報）にまず言及したい。下記に、目次的一部分を掲載してあるが、特筆すべきは、関東学院の創設者の一人である坂田祐の東京帝国大学卒業論文「預言者エレミヤ」の公刊をあげることが出来る。大学紛争時に廃部された神学部の影響で停滞していたキリスト教の体系的研究は、平成 3 年（2001 年）秋に「キリスト教と文化研究所」が創設され、活性化した。研究所の中に、「坂田祐」研究プロジェクトが設置され、関東学院の創設者の一人である坂田祐に関する調査研究が精力的に進められてきた。坂田祐日記の解説が、客員研究員であるご子息・坂田創氏によって献身的に進められ、本所報に掲載してきた。もう一つが、坂田祐が東京帝国大学に大正 4 年（1915 年）に提出した卒業論文の現代語訳とその出版であった。第 7 号には、その一部、第 1 章と第 2 章のみが初めて掲載され

た。本号（第8号）には、第3章と第4章を掲載する予定である。いずれ、本として公刊されることを期待したい。

一所報第7号(2008年度所報)の目次の一部—

## キリスト教と文化

第7号

### 関東学院大学キリスト教と文化研究所所報

2008年度所報

#### 目 次

巻頭言：坂田祐の大学卒業論文「預言者エレミヤ」を読む……………松田 和憲

—関東学院 創立125周年にあたり—

編集前記：関東学院創設125周年記念特集：キリスト教主義の歴史を振り返る……………

……………安田 八十五

—『本号(2008年度所報・第7号)の編集方針と特集』—

4大特集：関東学院創立125周年記念特集

\*：関東学院創設者・坂田祐博士の卒業論文  
「預言者エレミヤ」の公刊

A：「依存症と日本の精神風土」特集原稿

B：「バプテストと坂田祐」特集原稿

C：「いのちと奉仕」特集原稿

特別報告：

B1 関東学院創設者・坂田祐博士の卒業論

文公刊にあたって…加納 政弘・帆苅 猛

B2 「預言者エレミヤ」(東京帝国大学卒業論文) 第1章～第2章……………坂田 祐

—————ここまで—————

関東学院は、横浜山手の丘に「横浜バプテスト神学校」が創設されてから今年(2009年)創立125周年を迎えている。「人になれ、奉仕せよ」を校訓に、キリスト教主義に基づいて教育・研究・奉仕などの活動をこれまで展開してきた。関東学院には、三つの源流があると言われている。

その第一の源流が、関東学院の前身の一つになる「横浜バプテスト神学校」であり、明治17年(1884年10月6日)に宣教師ベンネット

トによって開設された。横浜山手の丘の一角に、次の顕彰記念板文が建立されている。

『1884年10月6日、ここ山手でA.A.ベンネットが横浜バプテスト神学校を設立した。関東学院キリスト教教育の源流はここに発する。』

関東学院の第二の源流が、「東京中学院」であり、1895年(明治28年)9月10日に東京築地居留地内に宣教師クレメント等によって設立された。築地の源流記念碑文には、次のように記載されている。

『1895年9月10日、ここ築地居留地四二、四三番地で米国バプテスト伝道教会が東京中学院を設立した。関東学院教育の源流はここに発する。』

関東学院の第三の源流が、「私立中学関東学院」であり、1919年(大正8年)1月27日に横浜三春台の丘に宣教師テンナー及び坂田祐などによって設立された。関東学院三春台校舎敷地内にある源流記念碑文には、次のように記載されている。

『1919年1月27日、ここに私立中学関東学院が開設した。設立者はC.B.テンナー、院長は坂田祐。四月九日、第一回入学式における坂田祐の告辞「人になれ、奉仕せよ」は、関東学院の校訓として受け継がれている。』

関東学院の創立の経緯や源流の詳細に関しては、『関東学院の源流を探る』及び『関東学院一二五年史』等を参照されたい。

「私立中学関東学院」の設立記念式典が、大正8年(1919年)1月27日に横浜開港記念会館で開催された。その時には、当時神奈川県知事の有吉忠一が出席し、祝辞を述べたことが、「坂田祐日記」には記載されている。有吉忠一は、大正12年(1923年)9月1日に発生した関東大震災の後、横浜市長に就任し、横浜の復興に力を注ぎ、名市長として有名な人物である。有吉忠一は、内務省の高級官僚であったが、クリスチャンであり、東京学院の近くに住んでいたこともあり、テンネーや坂田祐とはかなり親しかったようである。有

吉忠一と関東学院との関係は、本誌に掲載の松本洋幸（2010）にも言及されている。

有吉忠一が、神奈川県知事から兵庫県知事に転勤になった時には、坂田祐は、当時の横浜駅（現在の桜木町駅）にまで見送りに行つたと、「坂田祐日記」には書かれている。なお、「坂田祐日記」の現代語訳は、御子息・坂田創が、本誌の第3号から毎号紹介しているので、是非ご参照ください。この「坂田祐日記」もいづれ本にまとめ出版されることが期待される。

筆者は、坂田祐先生が、日露戦争の後、軍人を辞め、教育者をめざしたことを神の導きとはいえ、極めて素晴らしい決断であったと高く評価している。東京中学院に編入学し、その後、旧制第一高等学校・東京帝国大学に進み、通常より約10年以上遅れ、38歳を過ぎて卒業したことに敬服する。軍国主義氾濫の時代に、なかなか出来ない発想と実践であったと言える。

明治時代に、横浜山手の丘に「横浜バプテスト神学校」が創設され、大正時代に、「私立中学関東学院」が横浜三春台の丘に設立され、その後、戦後は、金沢八景キャンパス、さらには、金沢文庫キャンパスが、横浜市内に設置されたように、関東学院は、横浜で出発し、主に横浜市内で発展してきた。学生・生徒も横浜出身者が多く、卒業生も横浜市内で活躍している人が多い。そのような意味で、関東学院は、横浜さらには神奈川県とは切っても切れない関係にあるといえる。なお、小田原キャンパスには、大学法学部が設置されている。今後も、関東学院は、「横浜の関東学院」として、「内からの文明開化をめざして」、発展していくことが学院としての使命であろう。

## 追記：

本稿は、平成21年（2009年）が、横浜開港150周年記念と関東学院創立125周年記念の年に当たり、これまで筆者が考えて来たり、公表してきた論文等をまとめ、言わば安田横浜論の中間段階の集大成をめざした論稿である。横浜市と関東学院は、それぞれ各種の記念行事等を行ってきた。横浜市の開港博覧会Y150は、当初予定の有料入場者数に全然達せず、大幅な赤字になり、失敗したと言える。また、この記念行事の責任者の中田宏市長が8月末に突如辞職し、逃げ出したというよりも失脚したと言える。先日、市民運動や弁護士の方々が中田宏前市長に損害賠償請求をしたいと言う計画を聞く機会があった。尤もな話である。筆者は、横浜市による記念イベントをクールに見ており、本稿で述べたように「内からの文明開化をめざした」もっと違った記念行事を行うべきと考えていた。お祭り騒ぎに終わり、それが失敗したことを残念に思っている。もっと、「内からの文明開化をめざす」文化革命を目指すべきだったと改めて感じている。

関東学院創立125周年記念に関しては、内部の人間なので、評価を行うことは差し控えたい。付録に掲載した、2010年2月25日（木）午後開催予定の、関東学院創立125周年記念事業・公開シンポジウム「混沌の時代」の人間と経済社会のあり方を考える一は、これから社会のあり方を考える契機にしたいと考えている。関東学院から、横浜、さらには、日本から地球の将来のあり方を考える機会に出来れば幸いである。

横浜市に関する問題としては、筆者は、ごみリサイクル問題を始めとする環境問題・都市問題を研究者として出発した24歳の時（1969年）から進めてきた。また、関東学院大学に着任した平成14年度（2002年）からは地元横浜の大学に勤務する研究者として、「池子の森」への米軍住宅追加建設問題及び「金沢水の日」などの地元金沢区周辺の環境問題

等の重要な社会問題にも取り組んできた。これらとの問題に関しては、別の機会に論じることにしたい。

平成15年度(2003年度)に開始し、毎年約7年間続けて来た、関東学院大学経済学部における総合講座[横浜論]の講義ノート・講義資料も大分たまつて来たので、筆者の横浜論に関する著書として、近々公刊することを計画したい。仮の題名としては、下記を考えている。

安田八十五編著(2010),「横浜・内からの文明開化をめざして—ミナト横浜の課題と展望—」,出版社(未定)

本稿を執筆するまでに多くの方々から様々なご指導・助言・協力・援助等を頂いてきた。あまりにも多くの方々に学恩があるので、一人一人のお名前を出すことは今回は差し控えさせて頂く。

## 【参考文献】

- I. 安田八十五の「横浜論」に関する既発表文献①  
(1977年—1991年:筑波大学在職中1期)(分野別順)
  - 1) 安田八十五(1991),「スーパー・アメニティ都市“横浜”の虚像と実像」,地域開発ニュース, 第233号, 東京電力発行, 平成3年9月
  - 2) 亀岡誠・安田八十五(対談)(1988),「横浜のアイデンティティー」,タウン誌「浜っ子」, 昭和63年6月号
  - 3) 安田八十五(1977),「悲しむべき(横浜市の)人口の増加」,神奈川新聞, 昭和52年9月16日
  - 4) 安田八十五・大堀太一(1985),「横浜の都市機能の現況と特徴—10大都市の比較調査分析よりー」,筑波大学社会工学系安田研究室研究報告シリーズ, No.1985-3, 昭和63年3月
  - 5) 安田八十五(1987),「首都圏の将来ビジョンと横浜の課題」,新しい横浜, 創刊号, 昭和62年3月,(財)横浜市政調査会(現在は解散)
  - 6) 安田八十五編著(1979),「ミナトを市民に—横浜港に関する市民意識調査から探る」,横浜都市問題研究会調査研究報告書, No.1979-07, 昭和54年7月
  - 7) 安田八十五(1981),「ミナトからの出発—ミナト横浜の将来像—」,市民グラフ横浜, 第36号, 昭和56年6月, 横浜市市民局広報課発行
  - 8) 安田八十五(メインゲスト)・細川護熙(当時熊本県知事・後に総理大臣)他(1983),「四全総:国土開発への視点—①東京再集中②地方再生の道」,NHK教育テレビ, ETV8特集, 昭和58年5月18日(月)昭和58年5月19日(火)20:00-20:45放送
  - 9) 安田八十五(1985),「港湾都市の再生と活性化—小樽と横浜からの教訓—」,日本港湾経済学会年報, 第23号, PP29-36, 昭和60年10月
  - 10) 古池嘉和・安田八十五(1984),「環みなど商店街のイメージ—横浜環みなど商店街のイメージ調査報告書—」,横浜都市問題研究会報告シリーズ, No.1984-03, 昭和59年3月(古池嘉和氏は、筑波大学大学院安田八十五ゼミ出身、現在は名古屋学院大学教授)
  - 11) 佐藤正人・安田八十五(1981),「都市における対話性の回復—横浜下町空間からの発想—」,IFURS(都市・地域政策研究会連合)第1回全国大会アブストラクト集, 昭和56年5月
  - 12) 安田八十五編著(1982),「コミュニケーション・パターンからみた都市の地域特性とコミュニティ形成に関する研究—下町と団地の比較研究

- 一」、住宅・土地問題論文集、第1号、昭和57年4月、(財)住宅・土地総合研究センター発行
- 13) 安田八十五(1987)、「みなとみらい21への疑問と提案」、横浜コレクション、昭和62年10月号、(横浜)土日社発行(現在は解散)
- 14) 安田八十五(1987)、「MM21新線は京急が効果的」、神奈川新聞、昭和62年9月26日
- 15) 安田八十五他(1985)、「未来型情報ネットワーク都市横浜をめざして—ふれあいルネッサンス—第3分科会報告」、横浜青年会議所経済人会議報告書、昭和60年7月
- 16) 安田八十五(1988)、「新しい国際化時代の到来と横浜の将来ビジョン」、新しい横浜 第3号、昭和63年10月、(財)横浜市政調査会
- 17) 安田八十五(1981)、「市民からの出発—横浜都市問題研究会活動報告ー」、IFURS(都市・地域政策研究会連合)第1回全国大会アブストラクト集、昭和56年5月
- 18) 長洲一二(神奈川県知事)・安田八十五(1980)、「ミナト横浜の将来を語る」、昭和55年3月6日TVK(テレビ神奈川)放映、横浜都市問題研究会報告シリーズ No.1980-03-06に収録
- 19) 佐藤昌之(横浜みなとみらい21副社長・元横浜市役員)・安田八十五他(1990)、「21世紀の横浜を考える—“みなとみらい21”成功の条件ー」、ベストパートナー、平成2年1月、(株)浜銀総合研究所発行
- 20) 原範行(ホテルニューグランド社長)・安田八十五(1990)、「21世紀に向け再生するヨコハマ」、「安田八十五のトップシート対談(第1回)」、タウン誌「浜っ子」、平成2年1月号
- 21) 柴田庸市(氷川丸マリンタワー社長)・安田八十五(1990)、「ヨコハマの観光拠点は氷川丸から出発」、「安田八十五のトップシート対談(第2回)」、タウン誌「浜っ子」、平成2年2月号
- 22) 尾馬好次郎(相模鉄道社長)・安田八十五(1990)、「横浜西口の再開発は街の地上化と川の利用」、「安田八十五のトップシート対談(第3回)」、タウン誌「浜っ子」、平成2年3月号
- 23) 岩崎ともみ(岩崎学園理事長)・安田八十五(1990)、「横浜のファッショントリニティは街並み」、「安田八十五のトップシート対談(第4回)」、タウン誌「浜っ子」、平成2年4月号
- 24) ハンスパウリ(ブラウンジャパン社長)・安田八十五(1990)、「私のオフィスは横浜一の眺望」、「安田八十五のトップシート対談(第5回)」、タウン誌「浜っ子」、平成2年5月号
- 25) 岡田吉朗(横浜岡田屋社長)・安田八十五(1990)、「時代のニーズをつかむのが商売のコツ」、「安田八十五のトップシート対談(第6回)」、タウン誌「浜っ子」、平成2年6月号
- 26) 金子善一郎(サカタのタネ社長)・安田八十五(1990)、「八重咲ペチュニアが各国進出のきっかけ」、「安田八十五のトップシート対談(第7回)」、タウン誌「浜っ子」、平成2年7月号
- 27) 吉村恭二(横浜YMCA総主事)・安田八十五(1990)、「隣人の幸せを願う事が福祉の第一歩です」、「安田八十五のトップシート対談(第8回)」、タウン誌「浜っ子」、平成2年8月号
- 28) 牛島俊郎(三菱地所副社長)・安田八十五(1990)、「ランドマークタワーはMM21の象徴です」、「安田八十五のトップシート対談(第9回)」、タウン誌「浜っ子」、平成2年9月号
- 29) 根本紀一(トヨコ社長)・安田八十五(1990)、「ビジネスは冒険、守勢では伸びません」、「安田八十五のトップシート対談(第10回)」、タウン誌「浜っ子」、平成2年10月号
- 30) 松信泰輔(有隣堂社長)・安田八十五(1990)、「エコロジカル・シティ横浜への提案」、「安田八十五のトップシート対談(第11回)」、タウン誌「浜っ子」、平成2年11月号

注: 安田と横浜各界のトップリーダーとの対談は、1990年1月から11月までの計11回実施され、当時40代の筆者もとても勉強になった。何人かの方は既に鬼籍に入った方もおられる。しかしながら、掲載誌のタウン誌「浜っ子」の閉刊によって急遽中止された。そのまま、出版社は倒産してしまった。その他、(財)横浜市政調査会及び(横浜)土日社等も現在は解散して今はもう無い。横浜に、地域雑誌・コミュニティマガジン等が生き延びることは難しいようである。横浜の文化的風土の大きな問題点と言える。

## II. 安田八十五の「横浜論」に関する既発表文献 (1991年—2001年:筑波大学在職中2期)(発表順)

- 1) 安田八十五(1991)、「(横浜市)ごみ分別収集で大きな節約効果—筑波大助教授が分析ー」、東京新聞(横浜版)、平成3年10月27日(廃棄物学会第2回研究発表会講演論文集の予告記事)
- 2) 安田八十五(1991)、「廃棄物分別収集による資源リサイクル政策の社会的便益費用分析」、『廃棄物学会第2回研究発表会講演論文集8-3』、pp. 169-172、平成3年10月28日~30日
- 3) 安田八十五(1992)、「生活者主体の都市づくりの考え方—都市の質を考えるー」、『総研ジャー

- ナル』, 第49卷, 平成4年9月, pp12-20, 神奈川県自治総合研究センター発行
- 4) 安田八十五 (1992), 「TOKYO ゴミ戦争」, 週刊宝石, 平成4年12月号, 光文社発行
5. 安田八十五 (1993), 「缶公害< Canned Troubles : Recycling Beverage Containers >」(原文は英文), 朝日イブニングニュース, 平成5年3月14日, 朝日新聞社発行
- 6) 安田八十五 (1993), 『やさしい街づくりを考える—まちづくりを女性の視点から考え直す—』, 横浜市女性センター
- 7) 安田八十五・野村浩司 (1995), 「清掃工場の余熱利用に関する社会的便益費用分析による評価」, 第6回廃棄物学会研究発表会講演論文集1995, 平成7年10月, pp20-23
- 8) 安田八十五 (1996), 「東京湾臨海部の開発と環境保全—東京湾総合調査会の設置を再提案する—」, 『環境と公害』, Vol.26, No.1, pp15-18, 公害研究会編集, 岩波書店発行
- 9) 安田八十五 (1997), 『第4回東京湾イベント・どうする東京湾! タンカー事故緊急シンポジウム』, 平成9年9月13日(土), 東京湾海洋研究会
- 10) 安田八十五 (1998), 「首都圏の変容とその深層構造および政策課題—くらしやすい東京圏をどう作るか—」, 『運輸と経済』, 第58巻, 第6号(通巻612号), (財)運輸調査局発行, 平成10年6月号, pp.25-30
- 11) 安田八十五 (1998-1999), 『ごみから社会を見つめ直す』, 公明新聞連載(毎週1回合計50回); 平成10年7月17日-平成11年3月30日, ことに, <第4回>紙皿お断り: 横浜MM21は反循環型都市?—, 平成10年8月7日
- 12) 安田八十五 (1998), 『第5回東京湾イベント・シンポジウム』, 「海をきれいに: 東京湾と下水道」, 平成10年9月26日(土), 東京湾海洋研究会
- 13) 安田八十五 (1998), 「環境にやさしいごみゼロ資源循環型社会をめざして—容器包装リサイクル問題と公共政策の課題—」, 『自治展望』, 第32号, pp.6-15, (財)神奈川県市町村振興協会発行, 平成10年10月
- 14) 安田八十五 (1999), 「大都市のごみ問題: 横浜市のリサイクル: 混合収集方式に問題点」, 平成11年8月10日, 公明新聞連載 <第45回>
- 15) 安田八十五 (1999), 「大都市のごみ問題: 横浜市: リサイクル政策転換への提言」, 平成11年8月17日, 公明新聞連載 <第46回>
- 16) 安田八十五 (1999), 「レジ袋を有料化すれば, 人々は買い物袋を持参するようになる—環境にやさしい生活様式(エコライフ)及び循環型社会システムの構築と実践—」, 『環境にやさしいくらし』モデル事業実施報告書, pp.1-8, 神奈川県消費生活課発行, 平成11年11月
- 17) 安田八十五 (1999), 「レジ袋はもらいません」, 神奈川県消費生活課主催講演, <平成10年度環境にやさしいくらし県民運動推進事業> モデル事業実施結果概要報告書, 平成11年3月19日(金) 14:00~16:30, 会場: フォーラムよこはま・セミナールーム1
- 18) 安田八十五 (2000), 「科学を超える何かとの出会いを求めて—キリスト教的環境科学の構築をめざして—」, 『磯子』, 第79号, pp.22-24, 平成12年6月, カトリック磯子教会発行
- 19) 安田八十五・佐々木美智子 (2000), 「どうする? どうなる? 環境教育—本当の豊かさと環境の両立を—社会人のための環境経済学: 関東学院大学大学院安田ゼミ」, 月刊『リサイクルデザイン』, 第72号, 平成12年9月号, pp.5, 横浜市資源リサイクル事業協同組合発行
- 20) 安田八十五 (2000), 「大都市自治体におけるごみリサイクル政策大改革の提言—ごみゼロ資源循環型都市の構築をめざせ—」, 『技術と経済』, 通巻405号, 平成12年11月号, pp.30-37, (社)「科学技術と経済の会」発行
- 21) 安田八十五 他 (2000), 「自然を「貨幣換算」—第3空港反対グループ: 値値に客觀性—住民にアンケート: 主張の裏づけ—」, 神奈川新聞, 平成12年12月5日(火)
- 22) 安田八十五 他 (2000), 「木更津の「盤洲干渴」: お値段はいくら?—地元市民にアンケート調査: 環境を「金額」で算定—, 「都会の貴重な自然」どのような評価: 関係者も結果に注目」, 産経新聞, 平成12年12月3日(日)
- 23) 安田八十五 他 (2001), 「木更津の盤洲干渴: 経済価値は1671億円—市民87%が保全賛成—」, 千葉日報, 平成13年7月14日(土)
- 24) 安田八十五・神津十月 (2001), 「気がつけば, 東京湾は母胎のようであった」, TC (TODA CORPORATION), No.74, pp.1-7, 平成13年7月, 戸田建設株式会社広報部発行
- 25) 安田八十五・岡本久美子 他 (2001), 「首都圏第3空港が東京湾内金田湾地区に立地した場合の価値評価」, 筑波大学社会工学系安田研究室研究報告シリーズNo.2001-10, 平成13年10月

### III. 安田八十五の「横浜論」に関する既発表文献

- (2002年—2005年：関東学院大学1期) (発表順)
- 1) 安田八十五 (2002), 「横浜市のごみリサイクル政策構造改革への評価と政策分析—大都市における廃棄物分別収集政策およびリサイクル政策の評価—」, 関東学院大学経済学部新任教員研究発表会, 平成14年6月26日(水)
  - 2) 佐藤謙一郎(衆議院議員)・安田八十五 (2002) (特別対談) <公共事業をめぐる諸問題と解決策>(概要), マクロエンジニアリング学会通信(マクロ学会便り), Vol.13 No.140, 平成14年6月号
  - 3) 安田八十五 (2002), 「環境問題から日本の経済システムを問い直す—使い捨てワンウェイ型社会からごみゼロ資源循環型社会システムへの転換の構図と政策提言—」, 関東学院大学大学院経済学研究科金蘭会第8回研究交流会, 平成14年7月6日(土)
  - 4) 安田八十五・薄井高志 (2003), 「大都市自治体のごみリサイクル政策に関する分析と評価—北九州市・名古屋市および横浜市における事例研究—」, 関東学院大学経済経営研究所年報, 第25集, pp.50-83, 平成15年3月
  - 5) 安田八十五 (2003), 「まちづくり学の理論と実践(仮題)—横浜から横浜への手紙—」安田八十五横浜論集, 関東学院大学経済学部安田研究室特別研究報告書No.2003-03, 平成15年3月
  - 6) 安田八十五・松田愛礼 (2003), 「自治体における飲料容器のリサイクル費用に関する容器間比較」, 『経済系』, 第216集, pp.29-45, 平成15年7月, 関東学院大学経済学会発行
  - 7) 安田八十五宛 (2003), 「中田宏横浜市長から安田八十五への手紙—内容はごみ問題: 安田・薄井論文へのコメント—」, 平成15年7月24日
  - 8) 安田八十五 (2003), 「安田八十五から中田宏横浜市長への返信」, 平成15年9月2日(火)
  - 9) 安田八十五他(2003), 「横須賀港に市民の声を一計画改定でシンポジウム」, 每日新聞, 平成15年12月2日(火)
  - 10) 安田八十五他 (2003), 「市全体の基地返還問題にらみ: 金沢区民の苦悩濃く…: 池子住宅で政府陳情」, 神奈川新聞, 平成15年12月5日(金)
  - 11) 安田八十五他(2003), 「格好よくゴミ拾いパレード: 街の美化: 身近に感じて」, 産経新聞, 平成15年12月16日(火) (ヨコハマスカベンジ大作戦の関連記事: 安田八十五が実行委員長)
  - 12) 安田八十五他 (2003), 「クリスマスは美しい街で: 協力の証し, 参加者募集」, 神奈川新聞,

平成15年12月18日(木)

- 13) 安田八十五他 (2003), 「拾ってごみハマを美しく: きょう催し, 参加者募集」, 読売新聞, 平成15年12月20日(土)
- 14) 安田八十五他 (2003), 「横浜駅からMM:300人がゴミ拾い」, 朝日新聞, 平成15年12月21日(日)
- 15) 安田八十五他 (2003), 「スカベンジ大作戦: 楽しみ収集ごみ140キロ」, 神奈川新聞, 平成15年12月21日(日)
- 16) 安田八十五他 (2003), 「皆と美しく来る年迎えよう: 300人がゴミ拾い行進」, 産経新聞, 平成15年12月21日(日)
- 17) 安田八十五他 (2003), 「繁華街からごみ減らせ: 横浜・学生, 家族連れなどがパレード」, 毎日新聞, 平成15年12月21日(日)
- 18) 安田八十五 (2004), 『「ごみ拾いは楽しい!」そして「ごみ拾いは空しい!」』『煙草の吸殻が, なんと約3,000本』, 『ヨコハマ・スカベンジ大作戦2003: 安田八十五実行委員長からの結果報告』, 平成16年元旦
- 19) 安田八十五他 (2004), 『「NPOサポートを」: 横浜で集い: 市大の役割で提言』, 神奈川新聞, 平成16年2月23日(月)
- 20) 安田八十五他 (2004), 『「ごみ問題」政策提言を: 29日 横浜でシンポ』, 神奈川新聞, 平成16年2月25日(水)
- 21) 安田八十五他 (2004), 「米軍住宅の増設問題: 追加建設反対で要望書: 横浜市に, 平和団体など」神奈川新聞, 平成16年2月25日(水)
- 22) 安田八十五他 (2004), 「池子の住宅増設: 市に反対意見書: 環境団体や労組」, 朝日新聞, 平成16年2月25日(水)
- 23) 安田八十五他 (2004), 「横浜市のごみリサイクル政策に関する評価と政策提言」, 「横浜市のごみ問題シンポジウム: ヨコハマスカベンジ大作戦2003の結果報告も兼ねて」基調講演, 主催: 横浜環境ネットワーク(準備会)・ヨコハマスカベンジ大作戦実行委員会, 会場: 横浜市開港記念会館, 平成16年2月29日13:15~16:45
- 24) 安田八十五他 (2004), 「米軍住宅増設にノー: 横浜, 池子問題で市民らシンポ: 森を守る会発足」, 神奈川新聞, 平成16年3月8日(月)
- 25) 安田八十五他 (2004), 『「池子の森を守る会』発足: 金沢区側の住民『貴重な自然守る』』, 東京新聞, 平成16年3月8日(月)
- 26) 安田八十五他 (2004), 「池子米軍住宅に反対する会発足: 自然観察会など計画」, 読売新聞,

平成16年3月8日（月）

- 27) 安田八十五他 (2004), 「『池子の森貴重』学者らが守る会：米軍住宅増設に反対」, 朝日新聞, 平成16年3月9日（火）
- 28) 安田八十五・李松林 (2004), 「自治体の容器包装リサイクル政策に関する分析と評価—横浜市等の大都市自治体における事例研究—」, 関東学院大学経済経営研究所年報, 第26集, pp. 66-113, 平成16年3月
- 29) 安田八十五・帆苅猛他 (2004), 「坂田祐と関東学院」, 第2回公開シンポジウム記録, 『キリスト教と文化』, 関東学院大学キリスト教と文化研究所所報, 第2号, PP. 68-120, 平成16年3月, 関東学院大学キリスト教と文化研究所発行
- 30) 安田八十五他 (2004), 「金沢の自然学ぼうー5, 6日に「アドベンチャー」」, 神奈川新聞, 平成16年6月2日（水）
- 31) 安田八十五 (2004), 「ごみゼロ循環型社会をめざして」, 横浜市立大学一般教育総合講義:『都市自然と市民文化の将来』, 金沢八景キャンパスビデオホール, 平成16年6月8日（火）
- 32) 川村久幸・安田八十五 (2004), 「東京湾の盤洲干潟に関する環境経済価値の測定と評価」, 『経済系』, 第220集, pp.1-25, 平成16年7月, 関東学院大学経済学会発行
- 33) 安田八十五他 (2004), 「池子米軍住宅問題: 横浜市に「守る会」要望書—基地の無条件全面返還求め」, 神奈川新聞, 平成16年7月3日（土）
- 34) 安田八十五他 (2004), 「池子米軍住宅に反対を: 池子の森を守る会 市に要望書を提出」, 東京新聞, 平成16年7月3日（土）
- 35) 安田八十五他 (2004), 「米軍住宅増設の反対求める要望: 市民団体, 市に」, 朝日新聞, 平成16年7月3日（土）
- 36) 安田八十五他 (2004), 「池子米軍住宅追加建設は『契約違反』—沢元逗子市長が主張: 31日, 横浜でシンポ出席」, 神奈川新聞, 平成16年7月27日（火）
- 37) 安田八十五他 (2004), 「『追加建設は契約違反』: 池子米軍住宅シンポ: 沢元逗子市長が参加へ」, 東京新聞, 平成16年7月27日（火）
- 38) 安田八十五他 (2004), 「『合意と違う』元逗子市長ら批判: 米軍池子住宅増設構想: 市民団体, 市立大でシンポ」, 朝日新聞, 平成16年8月1日（日）
- 39) 安田八十五他 (2004), 「契約違反で提訴を」沢元逗子市長沢さん: 追加建設構想に意見」, 神奈川新聞, 平成16年8月1日（日）
- 40) 安田八十五他 (2004), 「池子米軍住宅『追加建設は契約違反』—沢元逗子市長ら出席しシンポ」, 産経新聞, 平成16年8月1日（日）
- 41) 安田八十五他 (2004), 「米軍池子住宅横浜増設問題でシンポ—沢元逗子市長も参加: 池子の森を守る会—」, 毎日新聞, 平成16年8月1日（日）
- 42) 安田八十五他 (2004), 「“共闘”消え戸惑い『条件付き』評価二分: 『池子住宅』横浜市方針で市民:『仲介役果たしたい』板ばさみの県」, 神奈川新聞, 平成16年8月5日（木）
- 43) 安田八十五 (2004), 「盤州干潟保全へ新税を: 大学教授ら木更津市長に提言」, 東京新聞, 平成16年8月8日（日）
- 44) 安田八十五他 (2004), 「全面返還市に要望: 池子の森を守る会」, 神奈川新聞, 平成16年8月13日（金）
- 45) 安田八十五他 (2004), 「池子増設中止提案に明記を: 市に市民団体要望」, 朝日新聞, 平成16年8月13日（金）
- 46) 安田八十五他 (2004), 「全面返還の堅持: 横浜市に要望書: 池子問題で市民団体」, 每日新聞, 平成16年8月13日（金）
- 47) 安田八十五他 (2004), 「池子の森を守る会: 建設反対明確に: 横浜市長に要望」, 東京新聞, 平成16年8月13日（金）
- 48) 安田八十五他 (2004), 「米軍池子住宅問題横浜市新提案に表現は正を要望: 守る会」, 産経新聞, 平成16年8月13日（金）
- 49) 安田八十五 (2004), 「干潟の保全へ環境税: 大学教授 木更津市長に提言」, 産経新聞, 平成16年8月15日（日）
- 50) 安田八十五他 (2004), 「エコマネ一体験を:『ごみ探検』実験イベント あす関東学院大」, 神奈川新聞, 平成16年8月21日（土）
- 51) 安田八十五他 (2004), 「IKEGO FOREST THREATENED: Zusi residents up in arms over more U.S.military housing」(英文), The Japan Times, 平成16年8月22日（日）
- 52) 安田八十五他 (2004), 「評価と批判思い交錯: 米軍施設の追加返還日米合意: 小柴など追加返還: 池子追加建設も100戸削減」, 神奈川新聞, 平成16年9月3日（金）
- 53) 安田八十五他 (2004), 「池子問題で市民ら住宅増設反対全面返還求め横浜市と県に要望書」, 神奈川新聞, 平成16年9月14日（火）
- 54) 安田八十五他 (2004), 「米軍池子住宅増設建設反対要望書: 市民団体横浜市長, 知事に」, 每日新聞, 平成16年9月14日（火）

- 55) 安田八十五他 (2004), 「住民から直接意見を：米軍池子住宅追加建設問題：市民団体が市長に」東京新聞, 平成 16 年 9 月 14 日 (火)
- 56) 安田八十五他 (2004), 「池子問題めぐり横浜市に要望書：市民団体」, 産経新聞, 平成 16 年 9 月 14 日 (火)
- 57) 安田八十五他 (2004), 「米軍住宅増設受け『池子は一体』強調：横浜でセミナー 元逗子市長認識示す」, 神奈川新聞, 平成 16 年 9 月 28 日 (火)
- 58) 安田八十五 (2004), 「『依存症社会』からどう脱出すべきか？－巻頭言：地方自治に思う－」, 『地方議会人』, 第 35 卷, 第 5 号, pp.6-7, 平成 16 年 10 月, 中央文化社発行
- 59) 安田八十五 (2004), 「ごみ：ごみ問題から現代の日本社会を見つめ直す－現代の課題 6：今、キリスト者に与えられた問いとして－」, 『信徒の友』, 通巻 697 号, pp.70-75, 平成 16 年 11 月, 日本キリスト教団出版局発行
- 60) 安田八十五・李松林 (2004), 「横浜市における飲料容器リサイクル政策の分析と評価」, 第 15 回廃棄物学会研究発表会講演論文集, pp.223-225, 平成 16 年 11 月, 廃棄物学会発行
- 61) 安田八十五 (2004), 「池子の森への米軍住宅の増設受け入れを撤回すべき」, 月刊『日本の進路』, 147 号, pp.8-9, 平成 16 年 11 月, 「広範な国民連合」発行
- 62) 安田八十五他 (2004), 「沢元逗子市長も参加－池子問題でシンポ 11 日に横浜－」, 神奈川新聞, 平成 16 年 12 月 7 日 (火)
- 63) 安田八十五 (2004), 「池子の森を守るシンポ」, 朝日新聞, 横浜告知板, 平成 16 年 12 月 11 日 (土)
- 64) 安田八十五 (2004), 「『池子の森』を守ることの地球的意義」, 池子塾：「池子の森」を守る連続セミナー・総括シンポジウム・基調講演, 平成 16 年 12 月 11 日, 関東学院大学横浜関内メディアセンター
- 65) 安田八十五他 (2004), 「『国は三者合意順守を』：横浜池子の森保護ヘンシンポ」, 神奈川新聞, 平成 16 年 12 月 12 日 (日)
- 66) 安田八十五他 (2005), 「池子の森の貴重さ知つて：家族住宅増設めぐり現地調査 横浜市住民も参加」, 神奈川新聞, 平成 17 年 1 月 16 日 (日)
- 67) 安田八十五 (2005), 「『池子の森』を守ることの地球的意義－池子の森への米軍住宅追加建設問題に関する住民アンケート調査結果の集計と分析をふまえて－」, ヨコハマ市民環境会議第 3 回総会・シンポジウム・講演, 横浜市教育会館, 平成 17 年 3 月 5 日
- 68) 安田八十五他 (2005), 「池子住宅増設反対：沢氏ら招き 21 日懇談会『守る会』」, 神奈川新聞, 平成 17 年 3 月 19 日 (土)
- 69) 安田八十五他 (2005), 「沢元逗子市長ら講演：池子増設反対：市民団体が総会」, 神奈川新聞, 平成 17 年 3 月 22 日 (火)
- 70) 安田八十五他 (2005), 「発足から 1 年『緑守る』確認：池子の市民団体」, 朝日新聞, 平成 17 年 3 月 22 日 (火)
- 71) 安田八十五 (2005), 「『池子の森』を守ることの地球的意義－池子の森への米軍住宅追加建設問題に関する住民アンケート調査結果の集計と分析をふまえて－」, 関東学院大学経済経営研究所年報, 第 27 集, pp.131～162, 平成 17 年 3 月発行
- 72) 安田八十五編著 (2005), 「容器包装の分別収集・処理に係る拡大生産者責任の制度化に関する研究・平成 16 年度研究報告書」, 平成 17 年 3 月, 環境省廃棄物処理等科学研究費補助金重点研究
- 73) 安田八十五 (2005), 「編集後記：キリスト教主義の関東学院大学から与えられた恵み」, 『キリスト教と文化』, 関東学院大学キリスト教と文化研究所所報, 第 3 号, p.165, 平成 17 年 3 月発行
- 74) 安田八十五他 (2005), 「G30 プラン：目標達成へ課題探る：横浜市の市民団体, 9 日に検証シンポ」, 神奈川新聞, 平成 17 年 4 月 7 日 (木)
- 75) 安田八十五他 (2005), 「分別拡大：先行 6 区で『効果』－検証シンポ：生産者責任問う声も－」, 神奈川新聞, 平成 17 年 4 月 10 日 (日)
- 76) 安田八十五他 (2005), 「『横浜論』で将来像探る－関東学院大が講座 21 日から－」, 神奈川新聞, 平成 17 年 5 月 16 日
- 77) 安田八十五他 (2005), 「今揺れ動く横浜の政策課題と将来展望－横浜論講座をふまえて－」, 関東学院大学公開講座, 「今揺れ動く横浜の課題と将来を考える－横浜論の新展開－」講演会, 会場：関東学院大学関内メディアセンター, 平成 17 年 5 月 21 日 (土), 13:30～15:30
- 78) 安田八十五他 (2005), 「『池子の森を守れ』：横浜市で市民団体がシンポ」, 神奈川新聞, 平成 17 年 5 月 23 日 (月)
- 79) 安田八十五他 (2005), 「赤門坂地下室マンション, 開発業者に賠償命令：差し止め棄却・原告住民『厳しい』：『脱法行為を断罪』高い評価：学識者『環境価値を客観的に』」, タウンニュース, 港北区版, No.332, 平成 17 年 6 月 9 日 (木)
- 80) 安田八十五他 (2005), 「横浜の未来と一緒に探

- ろう—中区で7月2日 関東学院大がシンボー」、神奈川新聞、平成17年6月25日（土）
- 81) 安田八十五他 (2005), 「横浜開港の歴史を振り返り、第3ミレニアムの横浜を見据える—今搖れ動く横浜の政策課題と将来を考える—」、関東学院大学公開講座シポジウム基調講演、関東学院大学横浜閑内メディアセンター、平成17年7月2日（土）、13：30～16：30
- 82) 安田八十五他 (2005), 「『横浜』『横山』どう融和—関東学院大シンポ開催：理想の都市検証—」、神奈川新聞、平成17年7月3日（日）
- 83) 安田八十五 (2005), 「自治体の容器包装リサイクル費用の容積ベースでの測定・評価と日本におけるEPRの導入可能性評価」、第11回飲料容器リサイクル研究会講演、（社）日本アルミニウム協会、平成17年7月25日（月）
- 84) 安田八十五 (2005), 「池子の森を守る世界的意義」、『池子の森を守るシンポジウム』基調講演、主催=ヨコハマ市民環境会議、平成17年7月30日（土）、神奈川県婦人会館
- 85) 安田八十五・笹木昌太郎 (2005) 「いびつな巨大都市『横浜市』の虚像と実像—13大都市の構造比較から見た横浜の特性分析—」、関東学院大学経済学部安田八十五研究室特別研究報告シリーズ、NO.2005-08、平成17年8月
- 86) 安田八十五他 (2005), 「“共闘”消え戸惑い:『条件付』評価二分:『池子住宅』横浜市方針で市民」、神奈川新聞、平成17年8月5日（木）
- 87) 安田八十五他 (2005), 「盤州干渴保全へ新税を一大学教授ら木更津市長に提言」、東京新聞、平成17年8月8日（日）
- 88) 安田八十五他 (2005), 「池子の小学校建設：配慮は不十分：「守る会」が再意見書」、神奈川新聞、平成17年8月16日（火）
- 89) 安田八十五他 (2005), 「現場に出かけ、五感で理解する—ゼミ訪問12：関東学院大学経済学部安田ゼミー」、月刊『アース・ガーディアン』、No.389、平成17年9月号、pp.64-65、日報アイ・ビー発行
- 90) 安田八十五・中田宏横浜市長他 (2005), 「横浜市南本牧新廃棄物最終処分場事業に関する要望書および回答書」、『横浜市の最終処分場問題を考える会』、平成17年9月2日、平成17年10月6日
- 91) 安田八十五他 (2005), 「『水』テーマにイベント：4日エコチケット配布も金沢区」、神奈川新聞、平成17年9月2日（金）
- 92) 安田八十五他 (2005), 「金沢水の日2005：展示－関東学院大学経済学部安田八十五研究室の紹介－」、第12回金沢水の日、横浜市野島青少年研修センター、平成17年9月4日（日）
- 93) 安田八十五他 (2005), 「横浜市G30プランに関する要望書」、『横浜市のごみリサイクル政策の見直しを考える会』、平成17年9月14日
- 94) 安田八十五 (2005), 「池子の森を守ることの地球的意義—池子の森への米軍住宅追加建設問題に関する住民アンケート調査結果の集計と分析をふまえて—」、カトリック「正義と平和」全国集会横浜大会、平成17年9月23日（金）～25日（日）、会場：横浜雙葉学園
- 95) 安田八十五他 (2005), 「『容器包装リサイクルと拡大生産者責任』シンポジウム—日本へのEPRの導入は、諸外国に比べなぜ遅れているのか?—」基調講演、主催=容器包装リサイクル研究会、平成17年10月7日（金）、関東学院大学閑内メディアセンター
- 96) 安田八十五 (2005), 「横浜市の新処分場は本当に必要か？—横浜市南本牧新廃棄物最終処分場事業への疑問シンポジウム—」、主催：『横浜市の最終処分場問題を考える会』・関東学院大学経済経営研究所環境・地域政策研究プロジェクト、会場：関東学院大学閑内メディアセンター、平成17年10月14日（金）14：00～17：00
- 97) 李松林・安田八十五・矢野一也 (2005), 「自治体の容器包装リサイクル費用におけるEPRの導入可能性評価」、第16回廃棄物学会研究発表会講演論文集、PP.209-211、平成17年10月31日
- 98) 安田八十五他 (2005), 「中田・横浜市政を検証—19日にシンポ政策課題と展望考える—」、神奈川新聞、平成17年11月15日（火）
- 99) 安田八十五他 (2005), 「『横浜中田市政の問題点を徹底検証する』シンポジウム—横浜の政策課題と将来展望を考える—」基調講演、主催：横浜論研究会（経済研究所横浜論研究プロジェクト）・横浜都市問題研究会、会場：関東学院大学閑内メディアセンター、平成17年11月19日（土）13：00～16：00
- 100) 安田八十五他 (2005), 「横浜市政検証シンポ『中田市長は辞職を』—関東学院大安田教授ら対抗馬擁立で一致—」、神奈川新聞、平成17年11月20日（日）

#### IV. 安田八十五の「横浜論」に関する既発表文献 B (2006年—2009年：関東学院大学2期) (発表順)

- 1) 安田八十五・中田宏他 (2006), 「横浜市G30

- プランに関する要望についての回答書」、横浜市長・中田宏、平成 18 年 5 月 15 日
- 2) 谷口源太郎・片岡伸行・安田八十五 (2006), 「2016 年五輪招致・独断専行する行政の本音は大型再開発：オリンピックもいいけれど：どうする？首都直下地震の瓦礫の山」、『週刊金曜日』、2006, No.617, 第 14 卷, 第 30 号, 通巻 613 号, PP.21 – 23, 平成 18 年 8 月 4 日発行
- 3) 安田八十五・深津学治 (2006), 「ペットボトルリサイクルシステムにおける再商品化用途開発の評価—ペットボトルは、ペットボトルにリサイクルされているのか？—」、関東学院大学『経済系』、第 228 集, pp.11-22, 関東学院大学経済学会発行、平成 18 年 7 月
- 4) 李松林・安田八十五 (2006) 「自治体の容器包装リサイクル費用における拡大生産者責任制度の導入可能性」、環境経済・政策学会研究発表会、平成 18 年 7 月
- 5) 李松林・安田八十五 (2006) 「自治体における容器包装リサイクル費用の測定と EPR 導入可能性評価」、第 17 回廃棄物学会研究発表会講演論文集, pp.144-146, 平成 18 年 11 月
- 6) 李松林・安田八十五 (2007) 「容器包装リサイクル費用の測定と評価に関する自治体での実証分析と EPR 適用可能性」、『経済系』、第 230 集, 13-31, 関東学院大学経済学会発行、平成 19 年 1 月
- 7) 安田八十五・山本美香 (2007), 「生ごみのコンボスト化政策に関する評価と政策分析」、『自然・人間・社会』(関東学院大学経済学部総合学術論叢), 第 42 号, p.37-90, 平成 19 年 1 月, 関東学院大学経済学部教養学会 発行
- 8) 安田八十五 (2007), 「レジ袋はごみ問題のシンボル・有料化が決め手！—『レジ袋』の環境経済政策』を暮らしに活かす—」、『日本の花束』, pp.1 – 2, 平成 19 年 2 月号, 生活クラブ生協, ゆうエージェンシー, 特集:「あなたはどうしていますか？ レジ袋」
- 9) 安田八十五 (2007), 「依存と自立：依存症社会論序説（1）—依存症からの回復のための 12 ステップ方式自助グループの有効性—」、『キリスト教と文化』、関東学院大学キリスト教と文化研究所 2006 年度所報、第 5 号, pp.3-21, 平成 19 年 3 月発行
- 10) 安田八十五・丸茂信行 (2007), 「『池子の森』における住民意識の構造から見た環境の経済的価値に関する測定と評価—『池子の森』の環境価値評価に関する 2006 年度 CVM アンケート調査速報による分析と政策提言—」、関東学院大学経済経営研究所年報、第 29 集, pp.201 – 220, 平成 19 年 3 月発行
- 11) 李 松林 (2007), 「博士学位論文－論文内容の要旨及び論文審査結果の要旨－」、第 32 号, 平成 18 年度、関東学院大学、平成 19 年 3 月発行 (安田八十五 執筆)
- 12) 安田八十五・丸茂信行 (2007), 「『池子の森』における環境の経済的価値に関する測定と総合評価－『池子の森』の環境価値評価に関する 2006 年度 CVM アンケート調査結果による分析と検証－」、『経済系』、第 232 集, pp.1 – 26, 平成 19 年 7 月、関東学院大学経済学会発行
- 13) 安田八十五 (2007), 「アジア各国におけるごみリサイクル問題がアジアの資源循環に与える影響と課題」、「アジア各国におけるごみリサイクル問題とアジアの資源循環」公開シンポジウム・基調講演、主催・日本マクロエンジニアリング学会循環型社会研究会：2007 年 7 月 20 日 (金), 会場：関東学院大学関内メディアセンター
- 14) 安田八十五 (2007), 「瀬上沢開発を考える」シンポジウム—『横浜の自然・緑と市民運動を考える—』、基調講演兼コーディネーター兼パネリスト、主催・「瀬上沢開発を考える」シンポジウム実行委員会、平成 19 年 9 月 15 日 (土) 13 : 30 – 16 : 30, 横浜市栄区公会堂
- 15) 安田八十五・光野哲也 (2007), 「海岸漂着ごみの実態観測調査による測定と評価—東京湾「横浜市野島海岸」における事例研究—」、『第五回横浜海の森つくりフォーラム要旨集』, pp. 1-4, 平成 19 年 11 月 7 日 (水) – 8 日 (木), 会場・横浜市立大学
- 16) 安田八十五 (2007), 「地球環境問題から横浜の緑を考える」シンポジウム—横浜の緑を考えるネットワーク(準備会)公開研究会 —」、コーディネーター、主催：横浜の緑を考えるネットワーク(準備会)・シンポジウム実行委員会、平成 19 年 12 月 1 日 (土) 午後 13:30 – 16 : 30, 場 所：関東学院大学金沢八景キャンパス
- 17) 李松林・安田八十五 (2008), 「自治体における容器包装リサイクル費用の測定と評価」、『廃棄物学会論文誌』、第 19 卷・第 1 号, pp.26-34, 平成 20 年 1 月、廃棄物学会発行
- 18) 安田八十五 (2008), 「キリスト教から見た高野進先生と関東学院－高野進先生との出会いと 6 年間の想い出－」、『経済系』、高野進教授退職記念号、第 234 集, pp.175 – 178, 平成 20 年 1 月、関東学院大学経済学会発行

- 19) 安田八十五・菊地直人 (2008), 「廃棄物固化燃料化政策を導入する広域的一般廃棄物処理システムに関する公共政策の評価」, 『自然・人間・社会』(関東学院大学経済学部総合学術論叢), 第44号, pp.21-36, 平成20年1月, 関東学院大学経済学部教養学会発行
- 20) 安田八十五 (2008), 「五木寛之「自力と他力」と安田八十五「依存と自立」との関係の比較研究—「依存と自立」と「他力と自力」: 依存症社会論序説(2)ー」, 主催: 関東学院大学キリスト教と文化研究所「依存症とキリスト教」研究プロジェクト公開研究会講演, 平成20年2月8日(金)午後18:00-20:00, 会場: 関東学院大学閑内メディアセンター
- 21) 安田八十五 (2008), 「編集前記: キリスト教と文化に関する3大特集: 今, キリスト教が注目されている!」, 『キリスト教と文化』, 第6号, pp.3-4, 関東学院大学キリスト教と文化研究所2007年度所報, 平成20年3月発行
- 22) 安田八十五 (2008), 「依存症とキリスト教研究プロジェクト報告」, 『キリスト教と文化』, 第6号, pp.217-219, 関東学院大学キリスト教と文化研究所2007年度所報, 平成20年3月発行
- 23) 安田八十五 (2008), 「五木寛之「自力と他力」と安田八十五「依存と自立」との関係の比較研究—「依存と自立」と「他力と自力」: 依存症社会論序説(2)ー」, 『キリスト教と文化』, 第6号, PP.5-24, 関東学院大学キリスト教と文化研究所2007年度所報, 平成20年3月発行
- 24) 安田八十五・丸茂信行 (2008), 「レジ袋有料化店舗における消費者の買い物袋持参行動の測定と評価—生活協同組合コープかながわ横浜市金沢区六浦店における買い物袋持参行動の実態観測調査結果ー」, 『関東学院大学経済経営研究所年報』, 第30集, PP.112-132, 平成20年3月発行
- 25) 安田八十五編著 (2008), 『第14回「金沢水の日」報告書』, 平成20年3月, 金沢水の日実行委員会発行
- 26) 安田八十五 (2008), 「都市自治体のごみリサイクル政策に関する課題と評価—海野氏へのコメントー」, 『東北文化研究室紀要』, 通巻 第49集, pp.57-60, 平成20年3月, 東北大大学院文学研究科『東北文化研究室』発行
- 27) 安田 八十五 (2008), 「『循環型社会の今後』未来の子供たちに残したいこと—講演会・シンポジウム」, 基調講演・座長, 2008年4月23日(水)13:00~, 主催: アンカーネットワークサービス・日本マクロエンジニアリング学会・循環型社会研究会, 会場: 総評会館
- 28) 安田 八十五 (2008), 「地球温暖化防止—横浜からの取組み・シンポジウムー」, 基調講演, 2008年5月17日(土)13:30~16:30, 主催: ヨコハマ市民環境会議, 会場: 横浜市いせやま会館
- 29) 安田 八十五 (2008), 「地球環境から見た廃棄物市場のグローバル化と日中における環境政策の構造変化が地域環境に及ぼす影響の分析と評価: 関東学院大学社会連携プロジェクト報告2008-1」, 社会連携研究推進事業・2008年度研究集会, 2008年6月28日(土)午前10時~午後4時, 場所: 関東学院大学閑内メディアセンター
- 30) 安田 八十五・李 松林 (2008), 「中国における廃棄物処理とリサイクル政策の現状と課題: 関東学院大学社会連携プロジェクト報告2008-2」, 関東学院大学社会連携プロジェクト報告会, 2008年6月28日(土), 会場: 関東学院大学閑内メディアセンター
- 31) 安田 八十五・李 超 (2008), 「中国における自動車リサイクルシステムの現状と課題: 関東学院大学社会連携プロジェクト報告2008-3」, 関東学院大学社会連携プロジェクト報告会, 2008年6月28日(土), 会場: 関東学院大学閑内メディアセンター
- 32) 安田 八十五・李 超 (2008), 「中国内モンゴル自治区における砂漠化問題の現状と課題: 関東学院大学社会連携プロジェクト報告2008-3」, 関東学院大学社会連携プロジェクト報告会, 2008年6月28日(土), 会場: 関東学院大学閑内メディアセンター
- 33) 安田 八十五・藤井 洋次 (2008), 「中国内モンゴルの砂漠化問題への植林ボランティアを活用した吸収源CDMの可能性: 関東学院大学社会連携プロジェクト報告2008-4」, 関東学院大学社会連携プロジェクト報告会, 2008年6月28日(土), 会場: 関東学院大学閑内メディアセンター
- 34) 安田 八十五・呼 し勤 (2008), 「中国「内モンゴル草原」の環境価値評価に関するアンケート調査—中国現地実態調査に基づく調査研究報告ー: 関東学院大学社会連携プロジェクト報告2008-5」, 関東学院大学社会連携プロジェクト報告会, 2008年6月28日(土), 会場: 関東学院大学閑内メディアセンター
- 35) 安田 八十五 (2008), 「地球環境にやさしいごみゼロ資源循環型社会をめざして—地球温暖

- 化問題の意味すること—」、横浜ユネスコ協会  
主催定例講演会・基調講演、平成 20 年 7 月 28  
日（月）12：00—14：00、会場：メルパルク横浜
- 36) 安田 八十五（2008）、「地球規模環境問題を身  
近なごみ問題から見つめ直す—環境問題の考え方と基本的文献の紹介—」、月刊磯子ニュース  
2008 年 8 月号、「推薦図書」コーナー、2008 年  
8 月 1 日、カトリック磯子教会 発行
- 37) 安田八十五（2008）「神と人間の存在と関係に  
関する数学的証明—依存症社会システム論序説  
(3) —」、「依存症とキリスト教」研究プロ  
ジェクト第 1 回合宿研究会（リトリートセミ  
ナー）、2008 年 10 月 17 日（金）—10 月 18 日（土）  
(1 泊 2 日)、主催：関東学院大学キリスト教と  
文化研究所・「依存症とキリスト教」研究プロ  
ジェクト、場所：関東学院大学葉山セミナーハ  
ウス
- 38) 安田 八十五・劉 庭秀（2008）、「第 1 回ア  
ジア自動車環境フォーラム」分科会・発表討論者、  
2008 年 10 月 29 日より 10 月 31 日までの 3 日間、  
会場：韓国ソウル市・ラマダホテル
- 39) 安田八十五他（2009）、「地球環境をごみリサイ  
クル問題から考え直す—環境にやさしいごみゼ  
ロ資源循環型社会をめざして—」、新宿区 ご  
み減量シンポジウム、会場：新宿文化センター・  
小ホール、平成 21 年 2 月 8 日（日）14：00—  
16：00
- 40) 安田八十五・(2009)、「地球環境をごみリサイ  
クル問題から見つめ直す—環境にやさしいごみ  
ゼロ資源循環型社会をめざして—」、日本バプ  
テスト同盟関東部会・社会委員会、会場：横浜  
バプテスト教会、平成 21 年 2 月 11 日（水・祝  
日）10：00—12：00
- 41) 安田八十五・(2009)、「横浜みどりアップ計画  
説明会」及び「緑を守った市民運動に学ぶシン  
ポジウム」、基調講演・座長、主催：池子の森  
を守る会、2009 年 2 月 14 日（土）、会場：横  
浜市六浦地域ケアプラザ多目的ホール
- 42) 安田八十五他（2009）、「池子の森をどう守る—  
横浜・市民団体がシンポ：自治体間の連携訴  
えー」、神奈川新聞、2009 年 2 月 15 日（日）
- 43) 安田八十五（2009）「神、人間と宇宙の存在及  
び関係に関する科学的分析」、「依存症とキリスト  
教」研究プロジェクト第 2 回合宿研究会（リ  
トリートセミナー）、2009 年 2 月 16 日（月）—  
2 月 17 日（火）(1 泊 2 日)、主催：関東学院  
大学キリスト教と文化研究所・「依存症とキリスト  
教」研究プロジェクト、場所：関東学院大  
学葉山セミナーハウス
- 44) 丸茂 信行・安田 八十五（2009）、「『横浜の森』  
における市民意識の構造から見た環境の経済的  
価値に関する測定と評価」、関東学院大学経済  
経営研究所年報、第 31 集、pp.95-pp.126、平成  
21 年 3 月発行
- 45) 安田八十五（2009）、「編集前記：関東学院創設  
125 周年記念特集：キリスト教主義の歴史を振り  
返る—『本号（2008 年度所報・第 7 号）の  
編集方針と特集』—」、『キリスト教と文化』、  
第 7 号、pp.v- pp.vi、関東学院大学キリスト教  
と文化研究所・2008 年度所報、平成 21 年 3 月
- 46) 三井純人・安田八十五（2009）、「日本における依  
存症研究の出発と到達点—斎藤学「精神科医か  
ら見た依存症の本質と対策」講演記録の概  
要—」、『キリスト教と文化』、第 7 号、Ppp.21—  
pp.27、関東学院大学キリスト教と文化研究所・  
2008 年度所報、平成 21 年 3 月
- 47) 安田八十五（2009）、「地球環境問題をごみ問題か  
ら考え直す—環境問題の考え方と基本的文献  
の展望—」、『キリスト教と文化』、第 7 号 pp.29—  
pp.34、関東学院大学キリスト教と文化研究所・  
2008 年度所報、平成 21 年 3 月
- 48) 安田 八十五・丸茂 信行他（2009）、「『地球  
環境問題』の環境価値評価に関するアンケー  
ト調査研究報告書」、関東学院大学経済学部安  
田八十五研究室調査研究報告書 2009-03、平  
成 21 年 3 月
- 49) 安田 八十五・青木 俊博（2009）、「リターナ  
ブルびんの規格統一化・軽量化による環境負荷  
低減効果の社会的費用便益分析—びん再使用  
ネットワークと生活クラブ生協における事例研  
究—」、『経済系』、第 239 集、pp.46- pp.65、平  
成 21 年 4 月、関東学院大学経済学会発行
- 50) 安田 八十五他（2009）、「“横浜はなぜ魅力的？  
地域のブランド力が日本経済を動かす—Topic・  
今ドキ気になるキーワード：今月のキーワード  
Y150【意】横浜開港 150 周年記念テーマイベン  
ト】、プレシャス（Precious），平成 21 年 4 月号，  
388 頁、小学館発行

V. 横浜開港 150 周年記念に関係する文献(順不同・  
本文で引用した文献を中心)に)

- 1) 小浜雅人・川野輪真彦編（2009）、「これでいい  
のか横浜市」、マイクロマガジン社、平成 21 年  
1 月
- 2) 高村直助（2006）、「都市横浜の半世紀—震災復  
興から高度成長まで—」、有隣堂、平成 18 年

- 3) 西川武臣(2009), 「講義題目：ペリー来航と横浜開港—日本の国際化と横浜の人々ー」, 講義日=平成21年12月22日(火), 総合講座[横浜論], 関東学院大学経済学部
- 4) 西川武臣(2008), 『亞墨理駕船渡来日記』, 神奈川新聞社, 平成20年8月
- 5) 横浜市ふるさと歴史財団編(2009), 『横浜歴史と文化—開港150周年記念ー』, 有隣堂, 平成21年6月
- 6) 西川武臣・伊藤泉美(2002), 『開国日本と横浜中華街』, 大修館書店, 平成14年10月
- 7) 横浜学連絡会議編(2003), 「横浜の魅力を生かす」, 平成15年3月
- 8) 小沢恵一(1991)(当時の横浜市都市計画局長), 『生きている都市, つくる都市—ヨコハマからの実践的都市論ー』, ぎょうせい, 平成3年5月(都市計画学会賞受賞)
- 9) 田村明(1983)(当時・法政大学教授, 元横浜市企画調整局長)『都市ヨコハマをつくる—実践的まちづくり手法ー』, 中央公論社, 昭和58年1月
- 10) 宮本敏也(2010), 「講義題目：『ジャーナリストから見た横浜論』—中田前市長の市政投げ出しと林横浜市政の課題ー」, 講義日=平成22年1月12日(火), 総合講座[横浜論], 関東学院大学経済学部

## VI. 関東学院創立125周年記念に関する文献

(順不同)

- 1) 関東学院 学院史編纂委員会編集・高野進著(2009), 『関東学院の源流を探る』, 関東学院大学出版会, 平成21年10月
- 2) 関東学院 学院史編纂委員会編(2009), 『関東学院一二五年史』, 関東学院大学出版会, 平成21年10月
- 3) 小林照夫・澤喜司郎・帆苅猛 編著(2009), 『港都横浜の文化論』, 関東学院大学出版会, 平成21年10月
- 4) 横浜プロテスチャント史研究会編(2008), 「横浜開港と宣教師たち—伝道とミッション・スクールー」, 有隣堂, 平成20年9月
- 5) 大島良雄(2009), 「バプテストの東京地区伝道1874-1940」, ダビデ社, 平成21年10月
- 6) 大島良雄(2007), 「バプテストの横浜地区伝道1873-1941」, ダビデ社, 平成19年8月
- 7) バプテスト研究プロジェクト編(2007), 「バプテストの歴史的貢献」, 関東学院大学出版会, 平成19年10月

- 8) 柳生直行編集(1984), 「関東学院百年史」, 学校法人関東学院, 昭和59年10月

## 付録(別紙)

1. 図1. 開港直前の横浜—安政5年(1858年)頃  
出典=横浜開港資料館
2. 図2. 横浜の市街地の拡大:安政6年(1859年)~明治22年(1889年)
3. 図3. 横浜市と11大都市との比較(昭和60年)  
出典=小澤恵一(1991)
4. 表1. 横浜市の現状と11大都市との比較(昭和60年):出典=小澤恵一(1991)
5. 表2. 13大都市の「人口・総生産・事務所数・従業員数・製造出荷額・商業販売額」の状況  
(出典=『大都市比較統計年表 平成14年度』大都市統計協議会発行)
6. 表3. 13大都市の「人口・総生産・事務所数・従業員数・製造出荷額・商業販売額」の平均とその差(出典=『大都市比較統計年表 平成14年度』大都市統計協議会発行)
7. 表4. みなとみらい21計画に関する横浜市案と安田案との比較:安田八十五が作成
8. 関東学院創立125周年記念事業・公開シンポジウム「混迷の時代」の人間と経済社会のあり方を考える企画書(案)
9. 同上のポスター:



関東学院創立 125 周年記念事業・公開シンポジウム

## 「混迷の時代」の人間と経済社会のあり方を考える

### 企画書（案）

2008 年秋のアメリカ金融業界大手資本の破綻により、世界経済は、100 年に 1 度と言われる世界同時不況に見舞われている。日本でも、多くの大企業が大幅損失を計上し、非正規社員の大量解雇等によって、未曾有の「混迷の時代」に突入してしまった。他方、温暖化問題等の地球規模環境問題は待ったなしの状況であり、米国オバマ大統領は、グリーン・ニューデール政策などを打ち出している。日本では、民主党政権が誕生し、自民党政権に代わる新しい政策を打ち出しつつある。しかしながら、「混迷の時代」を正確に認識し、ビジョンを構想し、解決のためにはどのような政策を打ち出す必要があるのであろうか？

横浜では、開港 150 周年を迎えて、さまざまな記念イベントが行われているが、今こそ「内からの文明開化」が求められている。関東学院は、横浜山手の丘に「横浜バプテスト神学校」が創設されてから今年（2009 年）創立 125 周年を迎えている。「人になれ、奉仕せよ」を校訓に、キリスト教主義に基づいて教育・研究・奉仕などの活動をこれまで展開してきたが、今何が問われているのであろうか？

この「混迷の時代」を迎えて、早くから警鐘を鳴らし、問題点を指摘し、実践してきた識者をお迎えし、様々な視点から人間と経済社会のあり方を考えてみたい。下記のように公開講演会を開催しますので、ぜひご参加をお願いします。

#### 記：

1. 日時：2010 年 2 月 25 日（木）13：30—16：30（午後 13 時開場）
2. 会場：関東学院大学金沢八景キャンパス・ベンネットホール（定員 700 名）
3. 交通（京急電鉄金沢八景駅から徒歩約 15 分・関東学院循環バスで約 5 分）  
交通アクセスは、下記ホームページを参照されたい。  
<http://univ.kanto-gakuin.ac.jp/modules/about1/index.php?pid=6>
4. 講師と演題（予定）：  
佐高 信（評論家）：「いま、日本を読む：そのタブーと権力構造」  
金子 勝（慶應義塾大学経済学部教授）「新自由主義経済の失敗と経済社会のあり方」  
五十嵐 敬喜（法政大学法学部教授）「無駄な公共事業をどう止めるか」  
コーディネーター：安田 八十五（関東学院大学経済学部教授・工学博士）
5. 主催：関東学院創立 125 周年記念事業 学術・講演行事専門部会  
共催：関東学院大学経済学部・関東学院大学キリスト教と文化研究所
6. 問い合わせ・連絡先：

関東学院大学経済学部庶務課  
〒236-8501 横浜市金沢区六浦東 1-50-1  
TEL : 045-786-7056 FAX: 045-786-1233  
Email : [keizai@kanto-gakuin.ac.jp](mailto:keizai@kanto-gakuin.ac.jp)  
HP: <http://univ.kanto-gakuin.ac.jp/>

**講師プロフィール：**

佐高 信（さたか まこと）：

評論家。1945年山形県酒田市生まれ。慶應義塾大学法学部卒業後、高校教師、経済雑誌の編集者を経て評論家に。「社畜」という言葉で日本の企業社会の病理を露わにし、会社・経営者批評で一つの分野を築く。経済評論にとどまらず、憲法、教育など現代日本のについて辛口の評論活動を続ける。近著に『抨啓藤沢周平様』（田中優子さんとの共著、イーストプレス）、『抵抗人名録』（金曜日）など多数。

金子 勝（かねこ まさる）

慶應義塾大学経済学部教授。1952年東京都生まれ、東京大学経済学部卒業、東京大学大学院経済学研究科応用経済学専攻博士課程修了、東京大学社会科学研究所助手・法政大学経済学部助教授等を経て、2000年慶應義塾大学経済学部教授。専攻：財政学、制度経済学、地方財政論。主な著書：「戦後の終わり」筑摩書房、「メディア危機」日本放送出版協会、「財政赤字の力学」税務経理協会、「粉飾国家」講談社、「経済大転換」筑摩書房、など多数。

五十嵐 敬喜（いがらし たかよし）

法政大学法学部教授。1944年 山形県生まれ。1966年 早稲田大学法学部法律学科卒業。同大4年在学中に司法試験に合格し、1968年弁護士登録。1996年から法政大学法学部教授。専攻：都市政策論、公共事業論、立法学。不当な建築や都市計画による被害者の弁護活動に携わる一方、これまでの公共事業のあり方を批判した。これまでに公共事業のチェック機構や都市計画の専門家として数多くの研究があり、近年は「市民の憲法研究会」を主宰して、国民主権の原理に立つ憲法の新たなあり方を提唱している。著書：『道路をどうするか』岩波新書、『建築紛争』岩波書店、『憲法改正論』日本経済評論社、『「都市再生」を問う—建築無制限時代の到来』岩

波書店、『市民事業—ポスト公共事業社会への挑戦』中央公論新社、『公共事業は止まるか』岩波書店など多数。

**コーディネーターの紹介：**

安田 八十五（やすだ やさい）

関東学院大学経済学部教授・大学院経済学研究科教授・キリスト教と文化研究所員（編集委員長）。1944年8月15日横浜市中区生まれ、東京工業大学数学科卒業、工学博士（北海道大学大学院工学研究科）、東京工業大学・神戸商科大学（現在・兵庫県立大学）・米国ペンシルベニア大学・筑波大学等で教鞭をとり、2002年4月から関東学院大学経済学部教授。専攻：環境政策学・都市政策学・政策科学・循環型社会システム論・依存症社会システム論・横浜論。著書：ごみが日本を滅ぼす（仮題）（日報、2010、近刊）、大規模プロジェクトの評価と実際（仮題）（関東学院大学出版会、2010、近刊）、ごみゼロ社会をめざして—循環型社会システムの構築と実践—（日報、1993・2001）、アメリカン・リサイクル（日報、1994・2000）、こうすれば東京は暮らしやすくなる（太陽企画出版、1988）、都市解析論（地方自治情報センター、1974）など多数。

**「混迷の時代」の人間と経済社会のあり方を考える**

関東学院創立125周年記念事業  
公開シンポジウム

■演題・講師

いま、日本を読む  
佐蒿 喜 評論家

新自由主義経済の失敗と  
経済社会のあり方  
かねこ 孝 勝 慶應義塾大学経済学部教授

無駄な公共事業を  
どう止めるか  
五十嵐 敬喜 法政大学法学部教授

■コーディネーター  
安田 八十五 関東学院大学経済学部教授・工学博士

アメリカ金融業界大手資本の破綻に端を発した世界同時不況――。  
日本でも多くの大企業が大幅損失を計上し、非正規社員の大量解雇等、未曾有の「混迷の時代」に入っている今、  
様々な視点から人間と経済社会のあり方を考え、警笛を鳴らしてきた論者が活発な討論を展開する。

2010年2月25日(木) 13:30-16:30 (開場13:00)  
関東学院大学 金沢八景キャンパス  
ベンネットホール(SCC館4F)

■参加申込………裏面に必要事項をご記入の上、FAXまたはEメールでお申し込みください。  
■申込締切日………2010年2月18日(木)  
■受付時間………平日9:00-16:00、土曜日9:00-12:00  
■申込・問合せ先………関東学院大学経済学部庶務課 〒236-8501 横浜市金沢区六浦東1-50-1  
TEL 045-786-7056 FAX 045-786-1233  
E-mail:keizai@kanto-gakuin.ac.jp HP http://univ.kanto-gakuin.ac.jp

主催:関東学院創立125周年記念事業 学術・講演行事専門部会  
共催:関東学院大学経済学部・関東学院大学キリスト教と文化研究所

関東学院大学

京浜急行線金沢八景駅から徒歩15分・関東学院循環バスで約5分

## 坂田祐論文 第二部（第3章～第4章）出版に際して

加納政弘  
帆苅猛

前回公刊された坂田祐先生の卒業論文「預言者エレミヤ」は第一章緒論、第二章エレミヤの時代、であった。今回は全体六章から成るちょうど真中の部分であって、第三章エレミヤの伝、第四章エレミヤ書、となっている。とくに第三章第一節の冒頭において著者は手書きのヘブライ文字でエレミヤ名を記しその意味を解説することから始めている。第二節はエレミヤの出生地アナトト及び家系について述べ、第三節預言者の任命、ではエレミヤ書の冒頭の第一章に基づいて40年に亘るエレミヤの預言活動出発点となった神からの召命の出来事を解説する。第四節エレミヤの宗教改革要求、第五節同郷人の迫害、第六節神殿前の説教及びその結果、第七節預言の記録、においてはとくにエレミヤ書第三十六章が書物として公けに読まれたことの重要性を説く。第八節ゼデキヤの治世において受けたエレミヤの迫害、を詳述し、第九節ではエレミヤの悲劇的運命、を語り孤独のうちに苦悩しつつ神から示されたみ言葉を語り続ける。このエレミヤは、後の時代に記された有名なイザヤ書第五十三章の「苦難の僕」に疑いもなく反映されていると論じている。

第十節エレミヤの性格及び使命、ではこれまで述べてきたエレミヤの内的、外的苦悩と活動をまとめている。以上が本論文の中心部とも言うべきものである。

最後の第四章エレミヤ書、はこの一冊の文学作品を各章、あるいはまとまった何章かに分けてその内容を解説、それぞれの部分がどのようにして現在の一冊の書物を成すに至ったかを文学批評的に詳述した労作である。以上が今回の概要である。

今回の卒業論文の第三章及び第四章の部分は既に述べたように全体の中心部分を成すものであり、坂田先生が一番力を込めて論述した力作であると言えよう。とくに国家存亡の危機に臨んで神から示されたメッセージを時代の人々に理解されず、嘲笑と迫害を受けつつも語り続けた預言者エレミヤの“不撓不屈の精神”が繰り返し強調されているのに気付く。思うにこのエレミヤの精神こそ坂田祐先生が関東学院の教育の最高責任者として“人になれ 奉仕せよ”との校訓を掲げて生き抜かれた精神の中に生き続けておられたと確信する者である。一人でも多くの方々にこの論文を読んでもらいたいものである。

## 預言者エレミヤ

大正元年入学 哲学科 宗教学  
坂 田 祐

Prophet Jeremiah

Tasuku SAKATA

### 第三章 エレミヤ (Jeremiah) の伝

#### 第一節 エレミヤの名

ヘブライ語の原名は 'רָמִיָּה' (イルミヤー) なり。エレミヤ書においては省略したる形 'רְמֵם' (イルミヤー) は稀に用いられる (cf. 27:1)。この名称は意義明瞭ならず従いて異説多し。セセニウスの推測に従えば, 'Appointed of Jehovah', ヘングステンベルグに従えば, 'Jehovah throws', シモニスによれば 'Exalted of the Lord' の意味なりといい, またディートリッヒに従えば 'Jehovah founds' と云う意にして恰もシリア語の 'רָמָה' (ラーマー) の如し。'רָמָה' (ヤーラー) 'to found' より固有名詞は來りしならんギリシャ語訳 LXX には Ιερεμίας ラテン語訳, ウルガタには Jeremias と記さる。この名称はイスラエルにおいては稀なる名称にあらず。歴代上 12:13, 列王下 23:31 (エレ 35:3 参照) 及びその他にあり。

#### 第二節 エレミヤの出生地及び家系

エレミヤはベニヤミン山脈中の一村落アナトトに生まれる (エレ 1:1)。多分 650B.C. ならんや。ベニヤミン族の所領地はヨルダン川の細長き低地を除く外, エフライムの境界よりシオン山の南麓に延長せる山地なり。高原地方において人民の居住に適する部分は主として平坦なる頂上に限られ, または水利のある部分なり。広潤豊穣なる谷なく, 枯渇せざる水流なし。この山地の一の特徴は高窮たる

丘陵が恰も堡壘の側面の如く, あるいは礼拝所たる高地の如き觀を呈し, 所々に突起して一連の小山脈を形成せり。丘陵の多くは檻壁をめぐらしたる如き村邑の形をなせり。ベニヤミンの地は決して豊作地にあらず。食物耕作の地としてよりはむしろ敵を防衛する柵を建設する場所として適當せり。一方にはかく見ゆるもこの土地は古より全く不毛にして荒蕪に遭棄したる土地にてはあらざりしなり。そは古の村邑が密接に存在したる形跡より見てこれを考へるも, 常時少なくともベニヤミン族を支えるに足る丈の食料を産出したることは知り得らるるなり (Stewart, Land of Israel p.158)。

アナトトはこの高原にあり。エルサレムの北方をオリーブの山を越えて行くこと三哩にして達す。高原に隆起せる一小村落にしてエフライムの丘とヨルダンの谷を俯瞰す。この村落についてはヘブライ史上記載すること甚だ少なし。ソロモンの時代にエリの家のアビアタルはアドニヤの陰謀に関連したる廉をもってこの地に隠遁したり。ヨシュア記 21:18 にはこの村はある祭司家族の住所として記さる。エレミヤの預言の冒頭に記されたる記事は彼の父ヒルキヤはアナトトにある祭司の一人なりと述べたり。それゆえにエレミヤの血管にはエリの血が流れた, またダビデ王に従いたる勇敢なるアビアタルの血が流れたるべし。エレミヤの宗教における深き興味を除くほか, 彼の著作においては祭司的立

場よりの観察について殆んど何等の暗示もなし。神殿の奉仕において公然とその干与を禁ぜられたるアビアタルの如き祭司の後裔としてはエレミヤが儀式に無頓着なりしことは最も自然なり。エレ 32 章に記しある彼の叔父に属する田地を買入ることより察せばエレミヤはアナトトにおいては繁栄せる家族に属したりしならん。

死海の方を見下ろせるベニヤミンの高原において閑静素朴なるユダの村落の影響の下に、親しく自然に接して、彼はその少年時代を過ごせしなり。而してアナトトはエルサレムの近郊にありたるをもってエレミヤは少年時代より都会の生活を知り都会の影響を受けたるならん。彼の遺伝、家庭生活、彼の環境は彼をして偉大なる預言者たらしめたるに極めて重要な要素たりしことは明かなり。

### 第三節 預言者任命

而して彼はヨシヤ王及び預言者ゼファニアとは同時に出でたるなり。

エホバの言我にのぞみて云う、われ汝を腹につくらざりし先に汝をしり、汝が胎をいでざりし先に汝を聖め、汝をたて、万国の預言者となせりと（エレ 1:4,5）。

彼が預言者となるべきこの天來の使命を自覚せしは、ゼファニアが有力なる改革説教をなしたる年なるべし（626-5B.C.）。彼は彼の内的生活の驚くべき煩悶を叙せり。この煩悶はやがて彼をして宗教改革者の一人として奮闘せしむるに至りたり。

恐るべきスキタイ人は将に侵入せんとしつつあり。この危機に際して国民に警告し、彼等を悔改せしむるの必要なることは、最も強くエレミヤに感ぜられたるなり。多感なる彼の精神状態においては彼が見る所の凡てが直ちに彼をして特別なる意義を直感せしめたるなり。早春百花に先んじて花咲く所の巴旦杏を見てはエホバの間断なき監視と保護を想像し。沸々として煮立つ所の鍋を見ては将に北より押し寄せんとするスキタイ人を想わざる

を得ざりしなり。

エホバの言また我に臨みていう、エレミヤよ汝何をみるや、我こたえけるは巴旦杏の枝を見る。…汝何を見るや、我こたえけるは沸騰たる鍋を見る、その面は北よりこの方に向かう。エホバ我はいいけるは、災北よりおこりて、この地に住めるすべての者に来たらん（エレ 1:11～14）。

エレミヤは性質内氣遠慮勝ちにして若年なすき自覺は甚だ強かりしなり。

我答へけるは噫主エホバよ視よわれは幼少により語ることを知らず（エレ 1:6）。

四十年以上の彼の活動より推して考るも、彼が初めて世に出でたるは多分二十五歳を越えざりしならん。彼は彼とエホバとの対話の形において、彼の自然の本性と彼がエホバの声として自分の衷心に感ずる所のものとの間に起れる、殆んど耐え難き苦悶の情を表せり。彼は天來の使命を感じて以来彼の衷心の煩悶は暫く続きしならん。然れども彼が終に彼の人民と神とに仕えんがためにその使命に屈したる時はその服従は實に絶対の服従たりしなり。この衷心の苦悶によりエレミヤの内的生活の歴史は一転し、不屈不撓の英雄的性格の發展を見るに至れり。これ彼がエホバに対する盤石の如き信仰の結果にして、臆病なる性質は大胆になり勇敢になり、もってその奉仕の長き間を通して連續せる苦き迫害と危險の前に毅然として相対するを得たるなり。彼は多年の勝利ある活動の後にその過ぎ來し方を顧みたる時に

視よわれ今日この全国とユダの王とその牧伯とその祭司とその地の民の前に、汝を堅き城鉄の柱、銅の垣となせり（エレ 1:18）。の言が実現せられたるを見るならん。

### 第四節 エレミヤの宗教改革要求

エレミヤは天來の声に応じて起りて。初めは躊躇逡巡したりしといえど一度エホバの使命に屈するや、彼の精神は牢乎として巖の如くなれり。乞う彼の使命の第一歩に注意せよ、

その向かうところ果たしていざくぞ。社会は墮落せり。宗教は腐敗せり。彼の攻撃の第一矢はこれにあらずして何ぞや（エレ 2～6）。

エレミヤもまたその活動の初期においてゼファニヤが遭遇せしが如き状態に出会いせり。ユダの不道徳、バアルの崇拜、多くの外国の習慣儀式就中ユダの国民生活の特徴たる、眞の預言者の高尚なる倫理的精神的教訓を侮蔑軽視したる等、これらの罪悪をエレミヤは厳然として非難したり。彼は深き熱情と懇求とをもって、国民の理性に訴えるよりも更に強くその感情に訴えたり。愛国と宗教的熱情をもって最初よりエホバの温かき保護を国民の上に哀願せり。彼は凡てにおいてイスラエルの極悪なる不忠実と忘恩を画けり。彼の演説には軽蔑・議論・嘲罵・懇願等雜然として混同せり。彼はエホバの名において實に外形の改革のみにあらず、眞に人民の觀念理想目的等、その内的生活を根本的に改良せんことを欲し、而して人民はエレミヤ自身の如く古き異教を嫌惡し、これを棄て、エホバに帰服しエホバの子としてただ彼の意をなすに至らんことを希いたり。

エレミヤは初め温情をもって人民を訓戒したり。

背ける諸子よ我に帰れ、われ汝の退違をいやさん…（エレ 3:22）。

然れども彼らはこれを顧みずその罪悪を悔いせずその行為を改めざりし時に、彼はゼファニヤがなせるが如く猛然として彼らに警告の矢を放てり。彼が有力なる語調は、人をしてその想像にスキタイ軍勢が直ちに駆け来て人民を掠奪しこれを亡ぼすの状を写さしむ。

シオンに指示す合図の旗をたてよ、逃げよ留まるなかれ、そは我北より災いと大いなる敗壞を来たらすればなり。獅子はその森よりいで、上り、國々を滅ぼすものは進みきたる、彼汝の国を荒さんとて既にその處よりいでたり、汝の諸邑は滅ぼされて住む者なきに至らん（エレ 46:7）。

邑の人みな騎兵と射者の咄噭のために逃て

森林にいり、また岩の上に升れり、邑はみな棄てられてそ處に住む人なし（エレ 4:29）。

さりながら時としては彼の中にある愛国的精神が勝を制して、彼は愛する国民の上に將に臨まんとする恐るべき運命のために幾度かその胸を痛めしぞ。

嗚呼わが腸よ我腸よ、痛苦心の底におよび、わが心胸とどろく、われ黙しがたし…（エレ 4:19）。

エレミヤに影じたるエホバは公平なる正義の神なると共にまた愛の神なり。彼は国民の上に臨む種々の経験を通して、彼らに感恩と忠実の精神を覺醒し、もって神の恩愛の甚大なることを実驗せしむ。かかるが故にエレミヤの最初の目的は国民を覺醒してその罪悪を自覺せしめもって眞の悲哀を感じ神の赦免を懇求せしむるにありき!!!

## 第五節 同郷人の迫害

エレミヤの説教はヨシヤ王の晩年に始まり。然れどもヨヤキムの治世における罪悪と危険はエレミヤの活動を更新せしめたり。彼はヨシヤの宗教改革が人々の精神を深く捕えこれに根本的覚醒を与えざりしを痛切に嗟嘆せり。地方の神殿と聖所は回復せられ憎むべきバアル礼拝は復活せられたり。人民の行為は更に詰責に値したり。そは彼らは眞の預言者等の熱心なる教訓を侮蔑し、新しき法律書の規定を守らず、十数年以上も固定したる伝説を顧みざりしをもってなり。これをもってエレミヤはユダを風靡せんとしつつある思潮に反抗し、全く不人望に終るをも顧みず、侃々として彼らの罪悪を絶叫したり。人民の彼に対する憎悪はますます大となり、彼の故郷アナトトの人々さえも彼の生命を奪わんとするに至れり。

私は引かれて屠られにゆく羊のごとく、彼らが我をそこなわんとて謀をなすを知ず、彼らいう、いざ我ら樹とその果と共に滅ぼさん、かれを生きる者の地より絶て、その名を人に忘れしむべしと。義し

き裁きをなし、人の心腸を察りたまう万軍のエホバよ、我わが訴を汝にのべたれば、われをして、汝が彼らに仇を報すを見せしめたまえ。これをもってエホバ、アナトトの人々につきてかくいいたまう、彼ら汝の生命を取んと求めて言う、汝エホバの名をもて預言するなかれ、恐らくは汝我らの手に死なんと（エレ 11:19～21）。

エレミヤの痛切なる感情は彼がこの際に臨んで発したる祈祷（エレ 11:20）においてこれを知ることを得るなり。かかる恐るべき時代にエレミヤは屢々彼の血を渴望する同邦人の一揆に取り巻かれたるべし。彼は真に悲劇中の人物なり。与論に対してまた友人と敵の態度に対して、恰も婦人の如く鋭く、然れどもエホバに対する確乎たる信仰においては大胆にして不屈不撓なりき。彼は旧約の預言者中実に優秀なる祈祷預言者なり。彼はただ祈祷においてのみ自ら慰安を得たり。而してこの祈祷こそ多感銳敏にして怯懦なる彼アナトトの一僧をして實に世界的大預言者大英雄たらしめたるゆえんなり。

## 第六節 神殿前の説教及びその結果

ヨヤキム治世におけるエレミヤの大危機は彼の書に詳細に記さる。エルサレム神殿の庭において、門の傍らに立ちて群衆に向いて大説教を試み、上下の階級を通して弥漫せる不義欺瞞背神等の不徳を痛く攻撃したり。人々が神殿を仰ぎ莊厳なる儀式を見たる時に、エレミヤは直ちにこの機会を捕えて、彼らの罪惡のために神殿はシロの如く破壊せんと警告したり。

この故に我シロになせしごとく、我名をもて称えらるるこの室になさん…（エレ 7:14）。

彼は先輩預言者と等しく、彼らの儀式主義は無用にして有害なることを指摘し、眞に彼等を救うは、ただ悔改めと社会的及び個人的正義の実行に存することを告げたり。

神殿説教がエレミヤに与えたる結果について信頼すべき記録はエレミヤ26章なり。こ

れエレミヤ書の伝記的章なり。神殿そのものの神聖にして犯すべからざることは、人民の信仰の根本的教義となれり。それ故に人民におけるエレミヤの言葉の直接の影響は、彼らの恐るべき憎悪を招き、生命をさえ狙わるるに至りたり。彼らはエレミヤが神殿は破壊せらるべきとの宣告をもって、正に神を瀆すものにしてヘブライの律法に従えば死をもつて罰せらるべきものと思考したり。この瀆神の報サリーム（The high officials of the state）に達するや彼らは直ちに王宮より神殿に至りて審問を開きたるなり。裁判はサリームと人民とより組織せらる。古のイスラエルにおいて大罪人を罰するためにかかる裁判を組織せしは、他の記録によりてもこれを知ることを得るなり。人民は単に傍聴者にあらずして、その事件に容喙することを得たるは疑いを容れざる所なり。俗物なる祭司や預言者は直ちに死刑を執行せんことを要求せり。エレミヤ静かに答えて、我は汝らの手にあり。汝ら殺さんと欲せば意の如く我を殺し得るなり。然れども汝らは眞に來たらんとする神の刑罰を免れんと欲せば須らく我が言葉を採用すべし。私は神殿と市に対して汝らが聴きたる凡ての事を預言すべく神より遣わされたり。神の言葉に耳を傾けず、罪なき人を殺して罪の上塗りをなすべからずと警告せり。この沈着大胆なるエレミヤの態度は、興奮せる人々を沈静せしめ、サリームの審問に耳を傾けしめたり。彼らの弁論の方法は恰も近世裁判におけるそれと相似たり。彼らは二個の著明なる判例を引照せり（エレ 26:18～23）。一つはミカの例えなり。彼はエレミヤの如くエルサレムの根本的破壊を公言したりき。而してヒゼキヤ王と彼の人民はミカの言葉に従いたるをもって彼らは危機を脱することを得たりき。他の一つは更に悲痛なる先例なり。即ちウリヤの運命にして彼は同様の預言をなしたりしが、その大胆なる行為に対する報酬として、ヨヤキム王は彼の生命を奪いたり。「我等は預言者の血を多く流せり」とはエレミヤの友

人等の議論にありしならん。この事件は、この時代において、眞の愛国者となりまた眞の預言者となるには、如何なる代償を払わざるべからざりしかを明らかに示すものなり。

牧伯等と凡ての民、即ち祭司と預言者に言ひけるは、この人は死にあたるものにあらず、これは我等の神エホバの名によりて我等に語りしなりと（エレ 26:16）。

この記事の前半によればエレミヤは正に免されたる如く思われる。後半においては彼は自分自身の弁護によりて、専門家ならざる裁判官をして、彼はエホバの眞の預言者なりと確信せしめたるなり。事件この如くなりしが故に、牧伯と人民等はエレミヤがかく語るべき権利と權威を有することを認めざるを得ざりしなり。而して彼等は祭司や預言者等が要求する如く、エレミヤを死刑に処することを恐れたるはこれ自然の勢なり。そは彼の預言が実現せらるることを恐れたるをもってなり。これをもってエレミヤは彼等の毒刃を免れアヒカムの手に救われたり。

時にシャパンの子アヒカム、エレミヤをたすけ、これを民の手にわたして殺さざらしむ（エレ 26:24）。

アヒカムがエレミヤを保護せしことに關しては、吾人はアヒカムはこの預言者を人目に触れざる所に安全に隠匿し、これを保護したることを確信するに難からざるなり。もしエレミヤの居所分明せしならば、エジプトより連れ帰られて死刑に処せられたるウリヤの如く、彼も同様の運命に接したりしならん。如何にしてアヒカムは、エレミヤが死刑の宣告を受けたる後に、彼を救い出せしかば、これを想像するは益なきことなるべし。歴史は無数にかかる例を吾人に提供す。政治上宗教上の迫害を受けたるものが、死刑の宣告を受けたる後、往々虎口を免れたる例乏しからざるなり。エレミヤの逃遁もまたウリヤがエジプトに遁れたることに思い比べれば更に驚くことにあらざるなり。

## 第七節 預言の記録

605—4B.C. におけるエジプト王ネコ敗北の報と、カルデア軍侵入の世評は、疑いもなくエレミヤを刺激してその活動を一層激迅ならしめたるならん。これと同時にこの新しき敵に対する恐怖が宮廷と人民をして國難を預言せることについて痛く激昂せしめたり。エレミヤを苦しめたる公の迫害は今や明かに彼をして安全に公衆の前に語らしめ得ざるに至れり。かかるが故にエレミヤはアモスやその他の預言者の如く口緘したる時はこれを筆に訴えざるを得ざりしなり。エレミヤは實に大預言者の一人にして常に神と共にある自覺を有し、彼に臨める凡ての確信は必ず神の声の喚起によると信じたり。故に彼は神が与えたる事業として、彼が過去二十有余年の間なしたる説教を書き下さんとしたるなり。彼の目的は直接に王侯及び人民の良心に訴えんとしたるなり。疑いもなく彼は彼の従来の預言が国民生活の上に実現せられたるを示し、もって彼自身が眞の預言者たるの權威を彼等の心に印刻せしめんとしたりしなり。

エレミヤの伝記たるエレミヤ書36章は最も大なる価値を有するものなり。そはかかる章句は旧約の記録が存在し、保存せらるるに至れる上に直接なる光を投じたる甚だ稀なるものなればなり。今日なお東洋において書類を認めんとする時に書記を使用するを常とする如く、エレミヤはその説教を彼の忠実なる弟子バルクに口授してこれを筆記せしめたるなり。材料は多分羊皮紙にして墨汁をもって書かれたるべし。最初は一部製作せられたり。アヒカムに助けられてエルサレムかまたはアナトトの静かなる場所において、壯年活気に充てるエレミヤは徐々に過去の豊富なる経験を追想し、嘗て國家の危機に際して述べたる彼の説教を再び陳述し、バルクは彼の前に手に羊皮紙と筆をもって座し、熱心に彼の言葉を書き下したるならん。

かくしてエレミヤの預言が記されて一巻となれり。彼は禁錮の身なるをもって自ら行く

ことを得ず、バルクを遣わして神殿に赴かしめ、国内の諸方より集い來たれる人々の前にこの巻物を読ましめたり（エレ36:5～8）。サリームはこの出来事の通報を受くるや、直ちにバルクを呼んでその巻物を彼等の前に読ましむ。バルクこれを読み終えるや彼等は

…汝いかにこの諸の言葉を彼の口を従いて録ししや我らに告げよ（エレ36:17）。  
と詰問したり。バルク答えて曰く、

彼の口をもってこの諸の言葉を我に述べたれば、われ墨をもってこれを書に録せり（エレ36:18）。

今やサリームはバルクが彼等に読み聞かせたる預言はエレミヤのものなることを知りたり。それはその中に神殿説教を包含せる事實を離れても、その巻物の中には吾人の有する現在のエレミヤ書の如く、疑いもなくエレミヤの神の召命の幻の序説的預言（エレ1:1ff, 25:1ff）を含み、直ちにこれらはエレミヤの言葉なることを示せるなり。若しサリームはエレミヤがその著者たることを知らざりしならば、バルクは18節において單に彼と云わずしてエレミヤの名を述べたりしならん。

バルクによりて朗讀せられたるエレミヤの預言はヨヤキム王の前に暗誦せられたり。是において王はその巻物を取り寄せこれを読ましめたり。王は是を聞くに堪えず、僅かに三、四枚にしてこれを火中に投じたり。もしエレミヤの隠れ家知られたらんには、彼の死刑は夙に執行せられしならん。而して今や彼の在宅を知り得る有力なる導線を与えられたるをもって、王は彼を捕えて直ちに死刑を実行せんとしたり。而してバルクもまたエレミヤと同一の運命に際会すべきは明かに知らるるなり。然れども彼等兩人は巧みにその毒刃を免ることを得たり。

第一の巻物は火中に投ぜられたるをもってエレミヤはまたバルクに口授して第二の巻物にその預言を記るさしめたり（エレ36:27～32）。

## 第八節 ゼデキヤ王の治世において受けたるエレミヤの迫害

597B.C. ヨヤキム王死するや、エレミヤは再び公衆に現るる自由を得、暫くの間迫害を免ることを得たり。さりながらゼデキヤ王の治世の末つ方エルサレムがカルデア軍に包囲せられ居る時に、エレミヤは神の審判が必ず国民に臨むべきことを預言し、もって新たに人民の激怒を招きたり。この時以来彼は更に一層烈しく人民の非難を受け迫害を受くるに至れり。

彼の生命が最も危機に瀕したるは、エルサレム包囲の最初の時にて、エジプト軍の侵入を聞きてカルデア軍は一時その囲いを解きて新たなる敵に向いたる時のことなりき。人民はこの放免を喜んで有頂天になりたり。この時にエレミヤは人民の真中に現れ彼等の不信仰を責め彼等の勝利を罵りたり。エレミヤの正義の念を痛めたる特別の行為は奴隸に関する彼等人民の所業なりき。これらの奴隸は前きに述べたる如く包囲攻撃開始せらるるや、ゼデキヤの命によりて間もなく解放せられたり。常時の習慣に従えば彼等の解放は厳肅なる宗教上の法規によりて義認せらるるなり。然るに包囲が解かるるや彼等は一旦解放したる奴隸を再び捕え来たりてその自由を奪いたり（エレ34:8～11）。エレミヤはこの行為をもって極悪無道となし、これに対し責任を有する政府と人民に向いて彼等は今カルデア軍が退却せる目前の勝利を有すると雖、極端にして避けがたき滅亡の來らんことを預言せり。

たとい汝ら、おのれを攻めて戦うところのカルデア人の軍勢を、悉く撃ちやぶりて、その中に負傷人のみを遺すとも、彼等はおののおのその幕屋に起ちあがり、火をもってこの邑を焚かん（エレ37:10）。

サリームの眼においては疑いもなくこの攻撃は人民を煽動するものと見えたるなり。それ故に間もなくエレミヤが故郷アナトに向いてエルサレムを出発せんとするに当たり、

カルデア人に降るものなりとの口実の下に、ベニヤミンの門において捕えられ、審問の形式もなく鞭打たれてヨナタンの家にある獄に投ぜられたり。彼はこの獄舎なる土穴に多くの憂き日を送りたり。もし王がエレミヤの乞いを容れて、獄の庭に彼を移らしむるにあらざりせば、彼は正に獄死せしならん（エレ37:11～21）。

エレミヤは獄庭の囚人として少しの自由を楽しむことを得たり。彼は外部のある人々と交際することを許されたり。然れどもこの自由たるや間もなく彼の生命を更に危険にしたり。カルデア軍は再びエルサレムを囲みたり。これゼデキヤ王がエレミヤを土牢より引き出して窓に会見したる原因たりしなり。これにおいてエレミヤは新たに預言すべく喚起せられたり。過去における彼の凡ての経験にもかかわらず、彼は沈黙を守ることを得ざりしなり。彼は国民が神の審判を受けその刑罰に服せざるべからざるを宣言し、かつ戦闘に従事し居る人々に向いて、彼等が首府を防御する企画は全く望みなく、首府はカルデア人の手に滅び、人々はその中において刃においてかあるいは飢饉においてまたは疫病において死に失せん。ただカルデア人に降服する人々のみが免ることを得べしと猛烈に警告したり。

サリームの中にこの言葉を聞いたるものはエレミヤの言葉をもって叛逆の行為なりとし、彼を殺さんとして汚泥深き井の中に投ぜり。この危機において彼は確かに滅び失せしならん。されどもエチオピア人工ベド・メレクはゼデキヤ王の許しを得て非常の困難をもってエレミヤを救い上げたり。エレミヤはかくして必死の境遇を脱することを得たり。然れども彼は自由を与えられざりき。エルサレム陥落まで獄庭に禁錮せられたり（エレ38:1～13, 28a）。

### 第九節 エレミヤの悲劇的運命

後世の伝説によればエレミヤはエジプトの

地において同邦人の手にかかり殉教の死を遂げたりと。その真偽は茲に断言することを得ざるも、彼が母国において遭遇したる悲劇的運命は、たとえ彼はエジプトに死せずとも、捕囚において遭遇したるならん。ユダの運命の変化する毎に、全く自己を忘れて大胆に不屈不撓、間断なく王侯牧伯と人民に天啓の忠告を与える。もし彼等が彼の言葉を採用したらんには、危機存亡の秋においてもなお能く脱出することを得たりしならん。然れども悲しいかな彼等はエレミヤの言葉に耳を傾けざるのみならず、彼の献身的な凡ての努力に報ゆる所のものはただ嘲罵と迫害ありしのみ。妻なく子なく家庭の快楽を全く犠牲にして、同胞国民のために召したる四十有余年の長き悲哀の生涯は、彼の悲劇をますます大ならしめ彼の献身を一層莊厳ならしむ。エレミヤの公衆一般の是認と友人の愛と社会生活の歓喜とに対する強き愛着を発見することなしに、誰かよく彼の熱烈なる預言を読むことを得んや。彼は日光燐爛たる喜悦と平和の天地を熱心に要求したり。就中古代のピューリタンたる彼エレミヤは、最も多く真理と正義を愛したり。青年として彼の衷心に明らかに強く響く所の天來の声に責任を感じたる彼は、一瞬間と雖も沈黙と和解によりて得たる平和を楽しむことを得ざりき。多年の間孤立独歩しあらゆる危険と嘲笑によりますます近く永久不変の愛に接近するに至れり。かの不朽なるイザヤ第五十三章の著者は疑いもなくエレミヤの経験より多くの暗示を得、もってエホバの理想的僕を画きたるなり。

エレミヤはこの時代の最も偉大なる愛国者にして、同時にまた最大の預言者なりとの確信に来るこなくして、彼の時代の歴史を研究することを得ざるなり。殆んど五十年の間彼の人格はユダの主なる王、祭司及び預言者の人格を覆いたり。この時代の歴史は大部分はエレミヤの生涯と教訓の記録なり。彼は時代の人々によりて嘲られ、彼の忠告は殆んど拒絶せられたりと雖も、凡てこれらの危急の

時期を通して真のエホバの観念と最高なる宗教の理想を保持し、而して不知不識の間にバビロン捕囚の間に来るところの最上の危機に對して準備をなしたり。

同時代の人々によりて、排斥せられたる所のものは、後の人々によりて十分に義認せられ自由に採用せられたり。バビロンに捕われたる人々はエレミヤの事業と教訓の偉大なることを明かに顕彰せり。捕囚後においては何人も彼より偉大に見えざるなり。エレミヤ以前の預言者は何人もより偉大なる敬虔と熱心とをもって引説せられざるなり。捕囚後のユダ史は次の言葉をもってその序を開けり。

ペルシャ王クロスの元年にあたりエホバさきにエレミヤの口によりて伝えたまいしその聖言を成さんとして…（エズラ1:1）。

イスラエルの精神的運命に関するエレミヤの幻は、イザヤ40-55において見出さるる不朽の預言をものしたる大詩人的預言者によりて発達したり。而して彼の精神と教訓は詩編記者の最も荘厳なる詩において再び現るるに至れり。

## 第十節 エレミヤの性格及び使命

エレミヤの性格の特徴は厳格にして誠実、忠誠にして溫柔、而して勇敢何ものにも屈せずと雖も、一面には悲哀の情緒纏綿たるものありたり。熱狂せる集会にまた騒擾なる市場にあるいは王宮の庭前に、エレミヤがその莊重なる体躯を現せる時に、一つの沈黙が満場を制したり。歓樂の声、喜悦の叫び、新郎新婦の私語の上に審判の大警告を与え、鋭き音調をもって來たらんとする災禍の覺悟を喚起したり。同胞の墮落背神その極に達しほんど救済の希望なく、滅亡の避け得ざるを見て悲嘆やるせなく、

嗚呼わが腸よ我腸よ痛苦心の底におよびわが心胸とどろく…（エレ4:19）。

と言いて嘆けり。断腸の思いとは實にこの事をや云うべし。吾人彼の預言を通読する時に、嚴肅なる叱責と改悔の警告は全巻に渡りて幾

度も繰返さるるを見るなり。この嚴肅たるや彼の熱心なる思想と真理に対する不撓の尊敬より来れるなり。改悔の警告は同胞を憐み祖国を愛するの至情より出でたるなり。

エホバの大天使としてエレミヤはこの世の権力は何ものをも恐れざりき。王侯牧伯、預言者、祭司と雖も彼を恐れしむるに足らざりき。また彼は彼の説教が祖国のために戦いつある軍人の士気を沮喪せしめたるや否やについては顧慮せざりき。然れども彼の精神上の勇氣は彼の肉体上の勇氣とは常に伴わざりき。彼の過敏なる性質は實際の苦痛より畏縮せられ、時としては逃走してこの苦痛より脱出せんと試みしこともありしならん。然れどもエホバの声彼に降るや常に彼は血肉をもってこれに答えずその結果の如何を顧みず直ちにその声に応じて大胆にその使命を宣言したり。

吾人は彼が煩悶と苦難に際会しても不屈不撓よくその使命を遂行したるを見て、神は常に彼と共にありとの彼の不变の信頼を見ざるを得ざるなり。

聖別の章として知らるる彼の預言の第一章において、エホバが彼をしてその使命に赴かしめたるものなるが、これらは単にその効果を生ずべきことを推測したる言にあらざるなり。言々句々彼が預言的使命を遂行するにおいて耐えざるべからざる最も苦き苦痛を反照せる所のものなり。

かの有名なる神殿説教が引起したる反対と迫害の嵐を追憶せよ。この説教においてエレミヤは「エルサレム、神殿は神聖にして犯すべからず」と言う人々の信仰を罵り、而して神は人々の献ぐる犠牲や供物には注意を払わず、ただ従順なる心と道徳的生活を嘉みし給う。然るに人民は神に背き不道徳的生活をなすをもって、神は神殿を破壊し国民を散乱せしむべしと宣言したり。

万軍のエホバ イスラエルの神かくいいいたまふ、汝らの途と汝等の行を改めよ、さらばわれ汝等をこの地に住しめん。汝ら此れはエホバの殿なり…と云う偽りの言をたの

む勿れ。汝等もし全くその途と行を改め、人と人との間を正しく裁き、異邦人と孤児と寡婦を虐げず、無辜者の血をこの處に流さず、他の神に従いて害をまねかば、我汝等を我汝等の先祖にあたえしこの地に、永遠より永遠にいたるまで住ましむべし。みよ汝等は益なき偽の言を頼む。汝等は盗み殺し姦淫し妄りて誓い、バアルに香を焚き、汝等が知らざる他の神にしたがうなれど、我名をもて称へらるこの室にきたりて、我前にたち、我等はこれらの憎むべきことを行うとも救わるるなりというは何にぞや。わが名をもて称へらるるこの室は汝らの目には盗賊の巣と見ゆるや、我もこれをみたりとエホバいたまふ（エレ7:3～11）。

…汝らの犠牲に燔祭の物をあわせて肉をくらえ。そはわれ汝等の先祖をエジプトより導きいだしし日に、燔祭と犠牲とについて語りしことなく、また命ぜしことなし。唯われこの事を彼等に命じ、汝等我声を聴ば、われ汝らの神となり汝ら我民とならん。且わが汝らに命ぜしすべての道を行ひて福祉を得べしといえり（エレ7:21～23）。

これ等の言は吾人今日これを考えうるも実に宗教の奥義を言い表せるものにあらずや。宗教の真髓は形式にあらず、ただ人間の心と人間の日常生活に存するなり。この言たるやエレミヤの同時代の人々は勿論後代の人々にさえも実に神を瀆す所の言なりと見えたるなり。されば全國民挙げて反対したるも宜なるかな。彼は瀆神の故をもって死刑の宣告を受け辛うじて虎口を免れたり。人々の憎悪如何に甚だしかりしか、神殿説教のために如何に嘲弄を忍ばざるべからざりしかはエレミヤ書15章10、15～21節に表われたる彼の告白を見て知らるるなり。

嗚呼われは禍なるかな、我母よ汝なに故に我を生しや、全国の人我と争い我を攻む、我人に貸さず人また我に貸さず皆我を詛ふなり（エレ15:10）。

この迫害は増えその度を高め晩年に至るに

従いて一層甚だしくなりたり。されど如何に迫害は烈しくともエレミヤを屈すること能ざりき。

エホバかくいいたまふ智慧あるものはその智慧に誇る勿れ、力あるものはその力に誇るなかれ、富者はその富に誇ること勿れ。誇る者はこれをもて誇るべし、即ち明哲して我を識る事と、わがエホバにして地に仁恵と公道と公義とを行う者なるを知る事はなり…

（エレ9:23,24）。

この言はエレミヤの教えの根本的精神を表し、彼の使命の中心は茲に存したり。然るに愛を説き正義を説き公正を説きたる彼は鞭打たれ獄に投ぜられ、あらゆる種類の屈辱と迫害を受けたり。肉体的苦痛は彼エレミヤにとりては小なるものなりき。彼はその告白において（エレ4:19）彼は如何なる迫害も如何なる肉体的苦痛もこれに及ばざる恐ろしき苦痛を語れり。審判は国民の頭上に加わらんとしつつあることは須臾もエレミヤの念頭を離れず、これがため彼は骨を碎かるるが如き苦痛を感じたるなり。嗚呼如何に貴うとき代価をエレミヤはその使命に向けて払いしか。然れども彼は絶えずかかる精神的苦痛に遭遇せしも、神彼と共にありとの確信によりて向上せられたり。凡ての試練は苦痛は神に信頼の度を益々高め、神彼と共にありとの自覚を増々強められ、茲にエレミヤの精神力の秘訣は存し彼の使命遂行の原動力となりしなり。物質的繁栄は人間の幸福を作るものにあらず、精神の平和と力のみが真にこれを作るものなり。而してそれはただ神によりてのみ得らるるなりとはエレミヤの主張する所にしてこれ實に永久不变の真理を語るものなり。

エレミヤは神の啓示によりて最も多く支配されたる預言者の一人なり。而して Divine Call の自覚を最も多く有し、この点においては如何なる他の預言者よりも熱心なりしなり。最も多くエレミヤを動かしたるは人類の精神的復活なりき。彼等国民は滅亡の悲劇を

超えて遙かに将来の幸福、即ち彼等は初めは亡ぼされざるべからずと雖も、将来の日において神に悔改せんとして来る時に彼等は再び栄えんと信じたり。されば彼の使命は国民の堕落腐敗を指摘攻撃して真神なるエホバに帰らしめ、暫くの苦痛を従順に忍びて、永久の幸福を得せしむるにありき。

## 第四章 エレミヤ書

### (The Book of Jeremiah)

#### 第一節 最初の巻物

吾人の有するエレミヤ書がバルクによりて巻物に記されたる如何なる材料を包含するかは、何処にも明かに述べられざるをもって、吾人これを知るに由なし。然れどもこの巻物が現在のエレミヤ書の核を構成し居ることは信ずるに難からざるなり。この巻物が一日の中に三回読まれ、而してその内容はシャファンの子ミカヤによりて彼の仲間に詳細に再述せられたる事実より考えれば、この巻物は短きものにてありしことを知らるるなり（エレ36章）。

この巻物は過去二十二年の間なしたる説教を記せるが故にこれ等の説教は逐語的に巻物に記されざりしは当然なり。エレミヤは彼の先輩預言者の多くと等しく、その説教を書き下ろす時に、終始反復思考して、彼の心に堅く印刻したる重要な語句や慣用語は更に多く再生したるならん。而してその秀麗なる詩調は幾部分はかく屢々反復せる結果なるべし。

ヨヤキムの反動的治世と、北方よりカルデア軍の侵来は、エレミヤがヨシヤ王の治世に北來の敵に対する前兆を叫んで、魁の改革説教をなしたる状態と甚だ似たり。これ等以前の説教よりの抜粋は第二章及至第六章において見出さる。而してエレミヤのヨヤキム治世の初めの頃の説教は第七章乃至第九章にあ

り。多分彼の預言の最初の輯を構成したるならん。後世の編纂者は多くの点においてこれを補足せしなるべし。

#### 第二節 第二回の巻物

エレミヤの預言の第一の巻物が人民、牧伯、王等に読み聞かせをしたることは伝記的に記さる。エレミヤと同時にヨシヤの宗教改革に干与したる貴族等は、エレミヤの預言の力を強く感じ、而してそれがヨヤキム王自身にさえ感化を及ぼさんことを希いたるなり。さり乍ら彼等はエレミヤとバルクに危害の及ばんことを恐れ兩人に忠告して身を隠さしめたり。この巻物がヨヤキム王の前に読まるるや、果せるかな王は嘲弄と軽侮とをもってこれに対し、未だ読み終わらざる前にこれを取り切り裂きて火中に投じたり。

幸いなるかなエレミヤはこれをもって挫かれざりき。彼の預言の事業を遂行せしめたる不屈不撓の精神は、彼をして再び第二の巻物に取りかからせめたり。この第二の巻物には尚多くの同様なる語を附加せることは明かに述べられたり（エレ36：32）。当時彼が受けつつありし嘲罵と迫害は疑いもなく彼に影響し、彼は第二の巻物において實に明瞭に悲劇的に彼自身の経験と感情を記したる章句を加えたるなり。それ故にエレミヤ書の第一章は彼に対するエホバの召命を示し、且つ二十二年の間受けたる試練を反照するものなるが故に、これ恐らくはかくして加えられたるものなるべし。

相似たる附加物は11：18～12：5、15：15～21、17：14～18において見ることを得るなり。この第二の巻物にはまた13～17章の本来の章句において見出さる同時代の説教が編入せられたるべし。今21～24章に保存せられある、國家の統治者に宛てたる短き説教のあるものは、確かにこの第二の巻物に記されたるべし。これ等の章においては殆んど凡てが直接法にして、その文体の特徴と内容はエレミヤがその著者たることを示す

に充分なり。エレミヤ書においては彼エレミヤ自身がその後更に彼の説教を輯録したる何等の証跡なし。彼は奉仕の残年を通してその使命を人々の口伝に託し、彼の説教と預言の記録を後の弟子または伝説に委したるが如し。

### 第三節 エレミヤ書の歴史

エレミヤ書の背景には非常に長くして複雑なる歴史が存在することは明かなり。最後の完成に至る迄にはこれに貢献したる編輯者は殆んど二十人以上もあらん。彼等の活動はエレミヤの人格と感化の偉大なることを示す重要な彰徳表たるなり。これ旧約全書の大部分が漸次に発達成長したる好適例なり。エレミヤは彼の時代の要求と問題に自分自身を全く獻げたるなり。記録せる預言は、彼の生涯における更に大なる範囲にその使命を有効ならしむるために、唯一の良方法なり。彼の後の説教の保存については彼の意に介する所にあらざりしが如し。

バビロン捕囚の間においてエレミヤの使命たる、かの恐るべき神の審判の預言はその真実なることを証し、もって彼の言に人を制御する権威を与えた。彼の同時代の人々は嘲笑と迫害をもって迎え、而して軽率にも打忘れたるエレミヤの熱心なる説教は、終に国民に対する神の眞の使命として賞讃せらるるに至れり。爾來あらゆる努力をもってエレミヤの言と行為とを追憶したるも時既に遅かりき。種々の異なる伝説は注意周到に集録せられたり。ある場合における人気ある想像は疑いもなく欠乏せる資料を詳細に補足したるなり。数個の場合においては7:1～8:3における神殿説教の如く、本来の説教と人口に膾炙せる伝説と両ながら保存せられ、それがためにエレミヤ自身の記録と後の伝説の記録と比較することを得るに至れり。不幸にもエレミヤの説教の大部分に関してはただ通俗なる伝説のみ残存せり。これ等の多くは、甚だ詳細を極め且つ当時の時勢の状態と能く一致

するをもってエレミヤの同僚にしてまた僕たる書記バルクに帰せらるるは故なきにあらざるなり。蓋し彼はヨヤキムとゼデキヤの困難なる時代のみならずエジプト迄もエレミヤに隨従せりと信ぜらるるなり（エレミヤがエジプトに行きたることの確証なきも）。

第一章乃至第十七章はユダの罪悪を指摘し接近しつつある審判を警告する宗教改革の説教なり。これ等はエレミヤの個人的祈祷と、彼の使命が拒絶せられたる不平と、彼が同邦人より受けたる迫害の物語と共に混入せられたるなり。

第十八章以下の章は多く循環形式をもって始まれり。例えば18:1, 21:1, 25:1, 26:1, 27:1, 30:1, 32:1, 34:1, 34:8, 35:1, 36:1, 37:6, 40:1, 44:1, 45:1。またある章においては例えば第二十七章乃至第二十九章の如くエレミヤ、エコンヤ、ゼデキヤ、ネブカドネツアル等の固有名詞の綴りは他の章におけると異なれり。かかる事実と年代順に並べざることと屢々重複されることより考えればエレミヤ書の第二の部分は断片を輯録せしものなるべし。ヘブライ語版と七十人訳との間に大なる相違あるより見れば紀元前第二世紀頃には、異なる校訂本がありしことを察せらるるなり。多くの場合において簡潔にして明瞭なるギリシャ語本文は明かに現今存在のヘブライ語本文よりも更に古く更に根本的のものなることを表わすなり。

後世多くの附加せる部分はエレミヤ書全体を通して散在するを見るなり。バビロン捕囚の終り頃までにエレミヤ書にある演説及び記事の大部分は殆ど現在の形になりしならん。さり乍らこの大著作を編輯し校訂することはエレミヤの死後三、四世紀は正に継続せしるべし。

### 第四節 エレミヤ書の内容及び批評

（本節は主として Driver's Introduction to the Literature of the Old Testament により傍ら W.H.Bennett's Biblical Introduction を参照せり。）

1章は626B.C.ヨシヤ王の第十三年に預言者として召命の幻。エレミヤ未だ若かりし時(6節)預言者となるべく聖別せられたり。單にユダのみならず、他国民の安寧禍難を預言するは彼の使命なりしなり。然れども彼は特に同胞ユダ民族の禍難を報ずるの責任を有し(11～16節)、而してその使命を実行することにおいて大なる反抗に遭遇するは予期せざるべからざりき。然れどもその反抗に打勝たんがために天より力を与えられたるなり。

2～6章はヨヤキム王の第五年に記録として現れたる如く確かにエレミヤの最初の預言的談論を構成す。この説話は四の部分よりなる。各題目は即ち国民の罪惡にして明瞭なる観察の下に記されたり。(I)2:(II)3:1～5(3:19～4:2はこれに接続す);(III)3:6～18:(IV)4:3～6:30の四の部分に分かる。

2章の主なる問題はユダの偶像崇拜なり。この預言は国民の理想時代における清浄無垢を指摘するをもって始まる(2:2～3)。4～13節は国民がエホバの恩恵を忘却しエホバに背けることを記し、而して14～17節はその結果として来る所の刑罰を記せり。次に人民は交番にエジプト及びアッシャリアに依りこれが助けを受くること、及び必要の時に臨んで何等の助けを与え得ざる神々に信頼することの不可なることを述べ(18～28節)、終りに29～37節は彼等の自負心と賢明なる勧告を頑強に拒絶することを非難せり。

3:1～5 題目は尚ユダの偶像崇拜なり。彼等が悔改してその行為を矯正せんことを約せしはただ空言のみ。彼等はそれがために旱魃をもって罰せられたり。

3:6～18は偶像崇拜をもって滅亡の運命に遭遇したるイスラエルを見て、ユダは而も未だ悔ゆることなく他の神偶像に仕ふ。それ故にイスラエルは比較的にユダより罰少なし。然れども悔改せよ、されば罪の赦しと王国の復興は来らん。ただイスラエルの復興により理想のシオンが建設せられ、万国の民が

エホバを拝せんとして集り来る時に、ユダもその罪より脱して滅亡より救われイスラエルと共に祖先の地に住むに至らん。

3:6～18は3:5と3:19との間に何等の連絡なきをもって誤入せられたりとは一般的の定説なり。3:19の“我いへり”なる語は3:18とは何等の対偶なし。3:1～5はユダの不信と悔改の空言に対し、3:19におけるエホバの宣言は自然の対照をなす。イスラエル、ユダ二王国の行為に関する反対の観察はこの節においては奇觀を呈するなり。この節(6～18)はそれ自身に完結せり。そは文句の始めと終りを見て明かなり。この預言はその思想及び形式より考えて同時代のものに属するは疑いなきも何等かの誤りにてこの所に挿入せられたるなり。

3:19～4:2 イスラエルは真に悔改してエホバに帰らばエホバこれを救い給わん。

4:3～6:30 審判は近づきつつあり。ユダの人々よ早く悔改せよ、恐るべき災いと敗壞は北より来らんとす。上下を通して凡ての階級悉く腐敗せり。如何に犠牲をエホバに供うるも益なし。汝等の罪惡に対する刑罰は北方より臨むなり。汝等の唯一の救いは悔改めてエホバに帰ることにあり。

北方よりの敵の記事は一特色を示せり。それにおいて4:3～6:30は2:1～4:2の外に遙かに逸出せり。これをもって4:3～6:30は幾分か後の時代に属するものと考えらるるなり。北方よりの侵入者は殆んど十ヶ所に記されあるいは諷せられあるがその名称は特に記されざるをもって、それは果たして誰なるか議論の存する所なり。この預言はその本来の意向においてはスキタイ人を指せるものなるべし。その記事のあるものは著しく当時の歴史上の事実に適當するなり。後の預言が記録せられ而してヨヤキムの第五年に再録せらるるに至るやエレミヤは爾來ユダの仇敵となりし所のカルデア人に適応せしめしならん。

7～10章(10:1～16を除)は預言の第二

の部分を構成す。第七章に記載されたる光景は実に顕著なるものなり。エレミヤは神殿の門に立ち、礼拝のために出入りする人々に訴えて悔改を促すべく命ぜられたり。彼等は社会の毒害を改め、天后に跪き諸々の神を拝する迷信を棄つるにあらざれば、神殿の聖めも、エホバに供える多くの犠牲も何等の効果なきことを警告せり。蓋し当時の人民はイザヤのシオンの破壊すべからざることの教訓を誤解して、彼等の中央に立てる神殿を即ち安全の女神としてこれに心を向けたるなり。エレミヤは憤然としてこれが誤解を指摘し非行を改めるにあらずんば、エルサレムの神殿もシロにおけるが如く滅びエフライムの運命はまたユダの運命となるべしと叫びたり（7:1～20）。

7:21～8:22 題目は前に等し。即ち預言者の警告に耳を傾けず、偶像崇拜を固守し、滅亡は切迫し来り、敵は既に国内に入り人民は無益に助けを叫ぶ。この預言者は同情の哀哭を禁じ得ざることを叙せり。

9章は8:18～22の哀哭の続きなり。エレミヤは人民の腐敗を嘆く。その腐敗はこの審判の降下をして必然ならしむるなり（9:1～9）。

9:10～26 將に人民の頭上に加わらんとする災害に対しエレミヤは更に痛切なる同情を注げり。

10:1～16 偶像崇拜に対する反対。異教の偶像是その外觀において如何に立派にして偉大なるも崇拜者に何等の助けを与え得ざる所のものなり。これに反してエホバは宇宙の創造者にして活ける眞の神なり。

10:1～16 はたとえエレミヤの著なりとするも誤入せられたるなり。そはこの節の前後と連絡なきをもってなり。一般にエレミヤの晩年の預言にして、597B.C.に捕囚に行きし同胞に宛てたるものなるか、あるいは後の預言者の作にして捕囚の終りにおいてバビロンの偶像の壮大なることが人民の信仰を動搖せしめたる時に書かれたるなるべしと信ぜらる。

る。11節はアラム語なり。多分後に附加せるものならん。

10:17～25 エレミヤは既に彼の靈眼においてエルサレムが敵の包囲する所となれるを見、その住民に告げて捕囚に出発するの用意を命じ、ただ終りにその災難が輕減せられんことをエホバに懇願せり。

10:25はユダは既に荒廃せることを含む故、多分エレミヤ自身が後に加えたるものならん。

11:1～17 ヨシヤ王の第十八年に発見せられたる法律書に対する暗示をもってその後間もなく起りしことを述ぶ。エレミヤ行きてユダの市邑とエルサレムの街々に契約の言を実行せしめんことを命ぜらる。而して人民の契約の言を守らざる罪悪を摘發し、それにに対する刑罰をもって彼等を威嚇せり。

11:18～12:6 エレミヤは彼の故郷アナトの人々が彼を殺さんとする謀略について告げ知らされたることとその迫害に対し彼等アナトの人々に加わる刑罰を述ぶ。而してエレミヤは彼等はかかる罪悪を犯すにも拘わらず榮ゆるは何ぞやとエホバと論議をなし、彼等の上に復讐を要求す。その答えとして彼の忍耐の足らざることを叱せられ、彼の信仰が将来において、より大なる試練に堪えざるべからざるを思わしめらる。

12:7～17 ユダは彼等を捕囚をもって罰せんとする隣人によりて攻略せらる。然れどももし彼等はイスラエルの宗教を信ぜば回復して榮えん。

13章 ユダの廢墟を表象するにユーフラテス河畔に埋められたる麻の帶をもってせり。王、祭司、預言者及びエルサレムに住める凡ての人々は酒壺の如く神の怒りをもって充さる。王、太后及び荒廃せる国土に関する悲嘆。凡ての勧告は空に帰す。“エチオピア人はその皮膚をかえ得るか、豹はその班点をかえ得るか”。18節より察してこの預言は通常ヨヤキムの時代に属するものと推測せらる。

14：1～17：18 旱魃の時にエレミヤは人民は剣により飢饉によりまた疫病により死に失せ、残れるものは捕囚となりて行かんと述べ、旱魃をもってエホバの怒りの結果と見做したり。エレミヤの神の慈悲の懇願が繰り返され、而してそれが繰り返さるるに従いて一層強く拒絶せらる。モーセとサムエルとが我前に立つと雖も我心は人民に傾かずと、何ぞその言の厳かなるや。これをもってエレミヤは凡ての人の憎悪を受けざるべからざる運命を嘆き。エホバこれを慰めて汝の敵が喜んで汝の助けを求むるの時来らんと屢々彼を激励せり。而して遂に彼は彼の成功と幸福は誤信と失望の偽路より脱出するにあることを教える。16：1以下においてエレミヤは来らんとする災禍とその原因と人民の罪悪を一層明かに指摘し、苦難の時における助けの源はただエホバにあることを示し彼自身エホバの救いを得、彼を迫害する敵より脱がれんとする祈祷をもって結べり。

14：1～17：18を通じてエレミヤが表せる感情と、固執及び熱心の度と、刑罰の変改し得ざることを述べたるその強気語勢とが、この預言が危機（即ちヨヤキムの治世の後の部分に属す）が近づきつつありし時代に属するものなりと推測せらる。

17：19～27 安息日に関する諫言。安息日を聖く守れば王国の繁栄と長久とはこれに伴い来らん。

この節はネヘミヤ18：15以下に類似す。安息日と儀性に関する興味はエレミヤにおいては異常なり。さり乍ら文体はエレミヤのものなるか、あるいは彼を模倣したるものなるべし。

18：1～20：18 陶工の教訓。陶工は全能者の標識なり。イスラエルの人民が神の手中にあるは恰も泥土の陶工の手中にあるが如し。罪を罰し正義に酬ゆるはエホバの権能にあるなり。エホバの審判がその民に臨むと雖も、もし国民が悔改めて正義に帰ればその審判は和らげられん。またエホバの約束国民の

上にありと雖も、もし彼等の行い正しからざればその約束は破られん。この預言はエレミヤの口より出でたり。ためにエレミヤを陥れる計策回ぐらされ、エレミヤはその迫害者の処罰をエホバに乞う（18章）。

この預言は14：1～17：18より早きものならん。そは14：1～17：18には如何なる哀求ありともエホバの決心を動かすを得ずとあればなり。

陶工の作りし器が一度破壊せば再びこれを全うすることを得ざる如くユダの滅亡もまた挽回すべからず。エレミヤ再び神殿の庭においてエホバの審判が人民に臨むべきを警告し（19章）、その結果神殿の牢の長パシュフルに捕えられ打たれて獄に投ぜられたり。翌日エレミヤ釈放せらるるや、パシュフルに向いて国民がバビロンに捕われ行かんと断言せり。エレミヤは神彼と共にありとの確信を有すると雖も、痛く自己の運命を嘆き、再び迫害者の処罰を祈り、自己の誕生日を呪いたり（20章）。

20：14～18をヨブ記3：1～10に比較せよ。多分ヨブの記者はエレミヤのこの句を引用せしならん。StadeとDillmannは20：14～18を後に附加せられたるものとせり。

21：1～10 最後の包囲の時（588B.C.）にゼデキヤ使いを遣わしてエルサレムの運命をエレミヤに問う。エレミヤ答えるに市の占領、掠奪、兵焚<sup>火災</sup>の免がるべからざるをもってし、勤むるに唯一の方法としてカルデアに降服すべきを以てせり。

21：11～23：8 重要な種々の預言なり。エレミヤのその時代の王に関する判断。21：11～14は序言なり。22：1～9正義は最も大切なり、王は必ず正義をもって国を支配せざるべからず。これに反せば特別なる刑罰王に臨まん。10～12節は即ちその結果として来る捕囚の預言なり。13～19節はヨヤキムの非行とその恥ずべき最期の預言なり。20～30節はヨヤキムが外国において滅亡することを力説せり。23：1～8はエレミヤの全

預言の頂点なり。1～2節は価値なき牧者即ち預かれる羊群を散乱せしめたる牧者を非難せり。牧者は王を指すなり。3～8節において而かはあれどエホバは終に理想的君主を立て復興せしめんと述ぶ。

21：12 及び 22：3 以下はエレミヤの経歴の早き時代に属する如く見ゆ。そはこの所においてはユダの運命は未だ挽回し難きにあらざるを示せり。

23：9～40 ゼデキヤの治世にエルサレムにおける無能なる預言者（27：14 以下，28：1 以下参照）及びヨヤキンと共に捕囚に行きたるものに（29：8 以下，20 以下参照）向けられ、且つエレミヤの建言に反対の政策を発表し、偽の約束をもって人民の指導を誤りたるものに向けられたり。エレミヤは彼等を不道徳と瀆神の下に猛烈に攻撃し、機能なき預言は人民をもまた己をも利せざるなりと断言せり。

24章 ヨヤキンの捕囚の少し後に書かれたり。捕囚に行きし人々は皆国民の花にして、後に残れるは卑賤のものなり。然るに彼等は一躍して国家枢要の権を与えらるるや、著しく傲慢に陥れり。是を以てエレミヤは捕囚に行きしものを佳き無花果、ユダに残りしものを悪しき無花果に比べて両方の特徴を述べ将来を預言せり。

25章 ヨヤキムの第四年、カルケミシュ戦闘の危機に瀕せる年（605B.C.）に属す。ユダと隣国はネブカドネツァルとカルデヤ人に征服せらるべし。これ預言者の言に耳を傾けざりしためなり。彼等は七十年の間バビロニア王の支配に属せざるべからず。而して然る後にバビロニアまた罰せられ、凡ての国民は神の怒りに触れるべし。

25：11～14,26b はエレミヤの言葉なるかは頗る疑わし。殆んど凡ての近世批評家は一人の記者が全書（v.13 が諷刺する 50～51 章を含む）を彼の前に備え、結局バビロンの上に加わる審判を力説せんがために、本来の預言を此の處に高調したるものなりとの意見に於いて一致せり。

26 章 v.1 にヨヤキム王の治世の初めとある故疑いもなく 25 章より早き時代のものなり。彼等がその道を改めずんばエルサレムがシロの如く滅亡せんと警告を与へ、以て人民をより良き勧告に導かんとしたる計画を再説せり（7 章参照）。エレミヤがこの言葉によりて人々の憤慨を招き漸く虎口を免れたことを記せり。

27～29 章 ゼデキヤ王治世の初めに属す。27 章はエレミヤは近隣のエドム、モアブ、アンモン、ツロ、シドンの五ヶ国がカルデア人に叛する目的を以てゼデキヤを同盟に引入れんとする企図を無効ならしめたり。全地悉くバビロニア王の支配する所となるは神の企図し給う所なり。28 章エレミヤ、ハナニヤに反対せり。ハナニヤは 27 章に諷したる預言者の一人にして、二年の内にエホバの器具は悉く返り、またヨヤキン及び他の捕囚に行きしものが帰されんと約したるを、エレミヤはこれ望むべきことなるも実現せられざることなりとして反駁せり。29 章バビロンにありて偽預言者等に攬き乱されたる人々に、エレミヤ書を送りて、家を建て國を作り結婚育児をなし、以て七十年間の備えをせよと勧む。この書簡はバビロンにある偽預言者等を怒らし、ためにその一人シェマヤはエルサレムに書を送りエレミヤの逮捕を乞いたり。然れどもその計画は画餅に帰し、エレミヤまたこれに答へたり。

30～33 章 イスラエルの復興に関するエルサレムの主なる預言を包容す。この思想は以前には片々に言い表されたりしがこの處においては発展して接続的に述べられたり。30 章 現生の困厄厳酷なりと雖も、国民全体は亡びざるべし。適當の時来れば挽回せられエルサレムは再建せられエホバと人民のために立てるるダビデの裔なる王によりて支配せらるべし。この章において最も注意すべきは v.10～11 なり。名誉の称号“我僕”なる語がイスラエルに与えられたるは茲に初めてなり。これ第二イザヤがエホバの理想的僕な

る大概概念を形成せる土台となりしならん。31章エフライムとユダはシオンにて和らげられ神エホバの恩恵を分たん。エレミヤの想像はラケル（ヨセフの母即ちエフライム）を画きてその子等の惨状を悲しめるを写せり。V.31～34に神は“新約”を立つるとの大預言あり。

その新約によりて復興せられたる社会は支配せられ、その新約は外觀の律法にあらずして心に記されたる律法なり。各人はそれによりて直接に神に教えられ何等人間の教師を要せざるに至るなり。32章 エレミヤ、アナトトに田地を購買せり。これをユダヤ人は捕囚より帰りて彼等の祖先の地を所有するの徵とせり。33章 エレミヤは目下の苦境を超えて遙かに将来を達観し、国民の廓清と復興を新しく画がき、救世主の預言を反復しエホバがダビデとレビ人の家になせる契約を確説せり。

32～33章はエレミヤが獄に拘禁せられたる時にあるを以て、ゼデキヤの十年におけるエルサレム包囲の第二の部分に属し、カルデア人が暫時退却したる時に隙を生ぜしなるべし。30と31章は多分同時期に属するならん。そは30：2の趣意より推せばその内容はある部分はその以前に述べたる如きも32:2の“その時”は彼等がエルサレムの陥落まで多分これを書き下すことを得ざりしを示すが故なり。33:14～26はLXXになし。レビ人に就いての深き興味は他になし。故にこの節は多分後世の附加なりとは現今批評家の大概一致する所なり。

34:1～7 ゼデキヤはエルサレム陥落後にバビロンに捕われゆかん、されど彼の生命は救わるべし。

この預言は多分エルサレム最初の攻囲中のことにして21:1～10の少し後なるべし。

34:8～22 エルサレムの住民は攻囲の圧迫の下に彼等のヘブライ人なる奴隸を解放することを厳格に約したりしも、攻囲一時撤退せらるるやその約束を破りて、一旦解放したる奴隸を再び引き戻してその自由を拘束した

り。これにおいてエレミヤは彼等の不信を責め、自由は剣により疫病により飢饉によりて得られ、カルデア人は市を陥るるにあらざれば引き揚げざるべしと警告せり。

35～36章 ヨヤキムの治世に帰る。35章はヨヤキムの治世の終りに近し。ユダの地は掠奪軍に蹂躪せられ（II Ki.24:2）、レカブ人の遊牧民はエルサレムに逃れたる時なり。エレミヤは彼等がその祖先の教戒を厳守する例を引き、同胞を戒めて神に帰るべきことを忠告せり。36章 ヨヤキムの第四年(605B.C.)エレミヤの預言の巻物は書記バルクによりて記さる。その翌年バルク、エレミヤの命を奉してこれを公衆に読み聞かせたりしが終に王のために焼棄せらる。しかして第二の巻物は再びバルクによりて記さる。

37～38:28a カルデア人がエルサレム攻囲中のエレミヤの伝を記せり。

38:28 b～43章 エルサレム陥落後におけるエレミヤの伝と彼に対するネブカドネツアルの好意と及びエレミヤが己の意志に反しエジプトに連れ行かれしことを詳細に記せり。

43:8～13 エレミヤがタフパンヘスに到着せるユダの亡命者に就いてなせる預言にして、エジプトはネブカドネツアルのために征服せらることを述べたり。

38:28 bは38:1～28aと連絡不完全なり。39:1は包囲の初めに帰る。これLXXにあるにも拘わらず39:1～2はII Ki.25:1,3,4,の根拠より書き入れたるものなるべし。

39:4～13はLXXになし、これ本来の記述なりや疑わし。v.4とv.3との連絡不完全なり。v.4～10はII Ki.25:4～12(エレ52:7～16)を簡略にせしものなり。39:15～18は38章の増補にしてエベドメレクがエレミヤに尽したるに対し報酬を約したるものなり。

44章 エレミヤはエジプトに赴きし同邦亡命者が再び古き偶像崇拜を始めたることを非難せり。彼等は自身を擁護し、エレミヤは

これに対して彼が以前になせる警告を繰り返し、彼等全体の中より極めて少數のもののみがユダに帰り得べきことを告げたり。

45章 36:1～8の増補なり。“これ等の言葉”(v.1)は直ちに36:1～8に述べられたる巻物に記されたるものを指すなり。バルクは彼の生命が救わることを約せらる。しかして多きを望まず、生命の救いを以て満足せよと。

46～51章はイザヤ13～23章とエゼキエル25～32章と同様の場合におけるが如く集りて外国民に関する預言を構成す。これ等の預言は25章(これらに示されたる国民の多くは25:19～26にその名を記るさる)と密接なる関係を有す。しかしてエレミヤの預言の最初の草案においては疑いもなく25章の次に来たりしならん。

LXXにおいてはこれ等の預言は25:13の後に挿入せらる。

46章 エジプトに関する預言にして二つに分かる。一(v.3～12)は604B.C., カルケミシュの戦闘においてファラオ、ネコが撃退せらるること。二(v.14～26)はネブカドネツアルがエジプト侵入に成功する預言なり。

v.27f. イスラエルに宛てたる確言にして30:10fと同一なり。これらは捕囚が始まることを包含せるが如し。而して3:18, 16:15にも拘わらずエレミヤが604B.C.にかく述べたるかは少なくとも疑いの存する所なり。多分後にエレミヤ自身によりて附加せられたるか、あるいは読者または編纂者が附加したものならん。

47章 直接ペリシテ人に、間接にツロとシドンに対して述べられたり。

敵は正しくカルデア人にして時は46章の時と同じ、v.16に述べらる時は不明なり。多分エジプト人がガザを占領するを諷せるならん。然らざれば吾人これを知るに由なし。

48章 モアブに関する一つの長き預言なり。モアブはその市は滅亡すべし。v.47は将来において挽回せらることを述ぶ。

v.5, 29～38は同じ国民に関するイザヤの預言を多く回想せしむ。然れども文体と全体の様子は甚だ異なり。イザヤよりも多く敷衍せられ、熱心の度著しく大なり。

49:1～6 アンモン人に関する預言にしてモアブに関するものと内容相似たり。然れども簡略なり。

49:7～22 エドムに関する預言。その山の防御はカルデア王の攻撃に対して何等効なし。

49:23～27 ダマスコに関する預言。その軍人は危急存亡の秋には周章狼狽して力なく街に斃れん。

49:28～33 ケダルとハツォルの遊牧民族に関する預言。彼らはネブカドネツアルのために安寧を妨げられ、四方に散乱せしめらるべし。

49:34～39 エラムに関する預言(ゼデキヤの治世の初め)。エラムは四方に散乱して滅亡するも終りの日には挽回せられん。

これ等諸国民に関する預言は最後のものを除くほかは多分ヨヤキムの四年に属するならん。しかしてネブカドネツアルのカルケミシュの戦闘における勝利がエレミヤに与えたる深刻なる印象を反射す。このエドムに関する預言とオバデヤのそれとの間に著しき相似の点あり。アンモンとエラムの場合にはモアブに与えられたる預言と同様に再興せらるることを述べて結べり。

46～49章はエレミヤの言葉なるか否かに就いて種々の議論あり。要するにエレミヤは彼の湧き出づる思想を文学的定規を以て整える人にてはあらざりしなり。されば彼が思想を表すに用いたる語句や文体を任意に制限せざる様に注意せざるべからず。

50～51章 バビロンに関する長き痛激なる預言。50:1～51:58の後に短き歴史的叙述(51:59～64a)あり。セラヤ(多分エレミヤの友人の兄弟にしてバルクの助手なりしならん)はゼデキヤの四年に(593B.C.)王に従いてバビロンに赴きし時にエレミヤは彼にバビロン

に関する預言を記せる卷物を携行せしめ、かの地に到着次第それを読ましめ、而して後その卷物をユーフラテス河に沈めんことを命ぜり。これバビロンが同様に沈んで再び浮かび出でざるの徵とせしなり。この預言(50:2ff)はバビロンが近き将来に占領せらるること、カルデア人の勢力の滅亡を宣言したり。イスラエルに加えたる暴虐に対して報いらるべき時は来れり(50:11f, 17~20, 33f, 51:5,24,34f, 44,56)。北方の人民はメディアさえも彼等に対して激發されつつあり(50:3,9,25,41ff, 51:2,11,20~23〔キュロス〕)。この預言者はますます熱心にバビロンに対して動乱を起こす敵を招けり(50:14~16,21,26f, 51:11f, 27f)。同時に彼は捕囚の人々に向けて神の刑罰を宣告せられたる市より遁れ去るべきことを告げ(50:8, 51:6,45f,50)，而して彼はバビロンの将来の運命を明白なる歓喜を以て考えたり(50:2b,13,23f, 35~38,46, 51:13f, 25ff, 30ff, 33ff, 47ff)。

この預言(50:1~51:58)はエレミヤのものにあらざるべし。この結論の根拠はバビロンの勢力の滅亡に就いての預言を含む告示に存せず、これエレミヤが確かに予知せる所なればなり。またエレミヤと多く共通なる語法にも存せざるなり。ただその告示の方法に存す。特に51:59に指示せられたる年にエレミヤが正に取るべき他位と矛盾するをもってなり。

これを要するに51:59~64aの記述即ちエレミヤがセラヤのバビロン行の機会を捕えて、カルデア国滅亡の確信を、表徴的動作をもって記したるは全く信用するに足るなり。これエレミヤの他の場合における方法と一致す(13:1ff, 19:1ff, 27:2ff)。而してv.62にある宣言と同様なる一般の宣言は25:12, 29:10の時におけるエレミヤの態度と全く一致せり。

50:2~51:58の預言はエレミヤの著作をよく知りエレミヤと同様の語句を使用することに馴れたるエレミヤの主義を奉ずるもの

の作にしてバビロン滅亡の久しからざる以前に、イザヤ13:2~14:23及び40~66章の如き一般の立場より之を書きしなり。而して後世この預言はエレミヤの作なりとせられ彼がバビロンに送りたる卷物と同一視せらるるに至れるなり。その本来の形に於いては51:59ffの記述は50:1~51:58に対し何等の闇説を含有せず。ただユーフラテス河に沈められたる卷物に書かれたる言にバビロンに於いて附加せられたるなり。50:1~51:58がエレミヤの預言書に編入せられたる時に60節以下はその卷物の内容と一致せしむる為に附加せられたるなり。

51:64の“彼等は絶えはてん”の句はこの場所には不適当なり之58節の反復なるべし。

52章 カルデア人のエルサレム占領と住民の捕囚に関する歴史的物語なり。

この説話は編纂者が列王記下24:18~25:30(列下25:22~26を除き)より抜粋したものなり。28~30節はLXXにはなし、他の資料より来たれるなり。

## 第五節 ヘブライ語テキストとギリシャ語テキスト

エレミヤ書に於いてはギリシャ語テキストはヘブライ語テキストに比較せば著しく異なれり。他の旧約書中サムエル記、列王記、又はエゼキエル書に於てすらもエレミヤ書に於けるが如く相違甚しからず。LXXに於いてはヘブル語テキストに比し無数の省略あり。時としては単語、時としては特別の句節を略せるあり。又た時々附加せる所あり。ヘブライ語テキストにある語にしてLXXになきものは大約2700あることは一般に認めらるる所なり。されど此等の省略せる語の多くは必要ならざるものなり。エレミヤの預言者たる称号に附せるあり。或いは“エホバ言い給えり”等の挿句なり。然れども亦中には実際必要なものあり。又た時としてはある章の如きはLXXには実際は変化なきも簡単なる

形を以て記さる。27, 28章の如き之れなり。  
最も著しき転換は外国民に関する預言に配当  
せられたる異なる場所に於いてあり(46～51  
章を見よ)。此等の預言の順序も変わりり。  
此等の変化に就いては種々の原因を以て説明  
せらるべし。あるものは之をLXX翻訳者の  
不注意か或いは故意に帰せり。他のものは現  
存のヘブライ語テキストとLXXに翻訳せら  
れたるテキストとがエレミヤ書の二つの異な  
れる校訂を示せる事実に帰せり。此LXXと  
ヘブライ語テキストとをヘブライ語法と事実  
の可能とに照らして注意深く比較せば、両方  
共信実なる要素を含むことを示す。LXXの  
変化は部分は校訂的なり。即ち翻訳者により  
て用いられたるヘブライ語テキストはある点  
に於いては吾人が現に有するテキストよりも  
正鵠を失せりという事実に妥当するなり。然  
れどもある部分は翻訳者が彼等の業務を実行  
するに於いて誤れる方法を取れる事に帰する  
なり。

全体に於いてマソラのテキストは先取に値  
す。然れども何れに於いても無条件にその優  
秀を主張することは不可能なり。LXXの何  
れの読方がヘブライ語テキストのそれより根  
本的のものなるかを決定するは容易の業にあ  
らざるなり。之れ注釈者や批評家が大に議論  
を戦わす所以なり。

## 特別報告

# バプテストの伝統を持つ教育機関の現代的教育使命：バプテスト 400 年と関東学院建学の精神 —バプテスト 400 年祭、記念シンポジウム報告—

関東学院大学キリスト教と文化研究所主催、  
関東学院創立 125 周年記念学術・講演行事専門部会協賛

村 椿 真 理

## はじめに：

このシンポジウムは 2009 年度 10 月 17 日（土）、午後 13 時半～15 時半にかけて、六浦キャンパス、フォーサイト 21 の 2 - 201 号室にて学内外より参加者 32 名を集めて行なわれた。関東学院はキリスト教主義学校といつても、具体的にはバプテスト派の伝統に育まれた学校であった。即ち関東学院固有の伝統と遺産とがあった。しかしこれまで、その原点ともいるべきバプテストの伝統に基づく「学校教育の理念」が、どれだけ議論されてきたであろうか。キリスト教主義学校は日本に他にも数多くあるが、私学として自発的に設立された学校である以上、国内外を問わず自らの独自性を提示する教育理念、関東学院の思想、哲学（神学）が存在するはずであった。そこで学院創立 125 周年というこの記念すべき期に、バプテストの歴史と遺産を振り返り、これからの日本社会、現代世界に貢献する関東学院のキリスト教主義学校としての使命と教育理念を論じ合うこととなった。こうした趣旨の下 3 人のパネリストが選ばれ、入念な準備を重ねて開催に至った。

パネラーには、本学の近代バプテスト派の研究者として高野 進名誉教授が選ばれた他、学外からは米国の高等教育史に詳しい西南学院大学准教授、金丸英子氏が選ばれ、本研究所からはバプテスト研究プロジェクト責

任者の村椿が担当することとなった。当日は白熱した議論が交わされ、フロアとも積極的な質疑応答の時をもつことができた。参集者からは今後もこうした学びの時を持ち、さらに議論を深めて欲しい等の要望も頂いたが、以下に今回のパネリストの発題内容を報告し、記録として残すこととする。以下の報告は今回のシンポジウムで発題したあらましを、紙数制限の下、パネラーに再度まとめて頂いたものである。報告の順番は当日の発題順とした。

## 発題 1. 「バプテストの信仰の特質における新生論その神学的、教育的理念」

村椿 真理

1. バプテスト派は 14 世紀から始まる大陸における「教会と教義」の改革運動の中から、16 世紀大陸宗教改革を父に、17 世紀イギリス「分離派」を母に歴史の舞台に登場した。その受け継いだ「遺伝子」は宗教改革三大原理であったが、①自覚的信仰告白による礼典の執行と②牧師職を信徒の Office ともする The Ministry of Laity を目指す会衆主義の徹底化、③また自覚的契約締結を基本とする Believer's Church Covenant による新生者教会（Regenerate church）の再建にその独創性を見せた。

2. バプテスト派はジェネラル・パティキュラー二派の潮流を持ったが、どちらもその教会論の根底に「聖徒の共同体」(gathered community of saints) の再建 (reconstruction) を掲げており、信仰者浸礼 (believer's baptism) も信者契約締結も、地上にある個別教会を「Invisible true church」に近づけるための手段であると考えていた。新生者教会の理念はジェネラル・バプテストでは1611年の告白から見られるが、1678年の『正統信条』(第26条、28条) に、パティキュラー・バプテストでは1677年の『第二ロンドン信仰告白』(第10条、13条) に明確に見られ、後のアメリカの信仰告白にも継承された。

では一体バプテストはどこから新生論を学んできたのだろうか。答えは大陸の再洗礼派の影響の可否問題に至る。しかしジェネラル・バプテスト派は少なくとも1608～1610年まで、アムステルダムでメノナイトウォーターランド派との交流を持った経緯があり、接触が深かった。「影響を受けた可能性はあるが、影響を受けたと確証する資料にも欠ける」とされる。問題は複雑で、チューリヒの改革派とジュネーヴの改革派より、イス系の再洗礼派の方が新生論を早くから主張していた点にそれは由来する。カルヴァンは1559年の『キリスト教綱要』の第3編第3章に *regeneratio* を「悔い改め論」として展開し、伝統的な教義学における「*ordo salutis*」の初めに新生を掲げていた。即ち、新生、義認、和解、聖化との順序であり、「信仰から悔い改めが生ずるのであり、逆ではない」ということであった。ところが再洗礼派のフープマイア (Balthasar Hubmaier) などは1525年の『信仰者のキリスト教的洗礼について』、『ツヴィングリの洗礼論を駁す』で「聖靈による生まれ変わりなくして、洗礼を授けるべきではない」との議論を始めていた。メノー・シモンズの1537年の著書『新生』もカルヴァンの主張よりはるか以前の主張であった。ところが、新生論の内容は、例えば

ウォーターランド派では「新生とは、神の像の回復であり」と告白されており、新生による「聖化の前進」を説くカルヴァンの新生論とは隔たりがあった。そしてバプテスト派の信仰告白と比較するならば、バプテストはカルヴァンの立場にほとんど合致していたことが分かる。

バプテスト派は自派の創設の初めから、独自の教会契約の使用を通じ、新生により回心した信徒の強化、涵養、訓練として契約遵守による聖化の実践を目指した。それは「神の像」回復者による教会形成といった徹底的 (Radical) な新生主義ではなく、Spiritual-growth に信頼し暫定的目標を掲げて高い志に歩もうとする愛に満ちた支え合う教会形成の実践であったが、これが第三の「教会のしるし」であった。

3. バプテスト派は新生児洗礼を否定したところから、子弟教育に他のどの自由諸教会よりも熱心だった。ベンジャミン・キーチの子ども向けのcatechism (Benjamin Keach's Catechism, 1677) の35問にも「聖靈による意思の一新」(renewing our wills) と、聖靈による人間の新生の確信を教え、『天路歴程』の主人公のように積極的なチャレンジへと子弟を向かわせた。新生とは、「聖靈による最初の人間の変革」を意味し、「心の生まれ変わり」を意味した。〈You can be born again!〉これはバプテスト派が常に大切にしてきた教育スローガンであった。聖靈による「生の変革」(revolution)，内なる人の reformation が重視されたのであり、それは知識、情報 (information) による教育ではなかった。

非国教派としてのエトス、教派的差別をしない信教の自由の精神、寛容の精神、万人祭司主義の徹底から生まれた federal democracy の展開、新生主義と教会契約による訓練の中で目指された「約束に生きる」「新しい人間」形成など、バプテスト派の Principle に基づ

く何らかの教育理念をバプテスト派の高等教育機関はこれまで確かに保持してきたことが伺える。これらのバプテスト派が保持した諸教育理念は過去の遺物となったわけではなく、キリスト教信仰なくして近代化を果たした現代日本においてなお意義を持つことが認識されるべきである。1764年に創設されたロードアイランド・カレッジのクラシカルな教育理念などに、立ち返るべきバプテスト高等教育機関の原点を見いだせるのではないか。また寛容の精神は、自己の伝統の喪失を必然的に招くものではないと言わねばならないと考える。

4. 本学の校訓は、前段の「人になれ」が極めて重要である。新生者の奉仕がめざさるべきであった。本学の校訓の前段は、いみじくもバプテストの固有な創造的教育理念そのものであったと言えるのではないか。坂田とバプテスト主義の関係を明らかにする学的研究が待たれる。森東吾の校訓理解（奉仕することにより人間となれ）の弊害がなかったか。人になれと、奉仕せよは単なる「強調点の相違」なのか？

人間の業（奉仕）が、新生をもたらすのではない。新生は天からの恵みの賦与であって、リベラル・アーツを積み、教育課題の遂行により達成される類いの事柄ではない。従って、人格を教育により磨くことによってもたらされるようなものではない。また新生は、生まれながらの人間が持つ潜在力（可能性）を引き出すような事柄でもない。我々は、園児、児童、生徒、学生を神から委託された存在と受けとめ、彼らが神の恵みの中に招かれていることを（共なる礼拝を通して）証しつつ、何よりも「新生の真理」を伝えつつ、諦めず（積極的に）人生の諸課題にチャレンジしていくことを教えるものでありたい。

新生に関するキリスト教教育における領域があることを確認したい。共に仕える業を体験する中でこそ、新生体験への道筋が明らか

にされる必要がある。

一般に、奉仕実践に生徒、学生を参加させることにより、キリスト教の精神に触れることを期待し、体験を通して新生（成長）へと捉えられてきた。確かに方法論として妥当するが、人間の業が人間を新生させるのではないことを再認識すべきであろう。

## 発題2、「カルヴァン＝ケアリー＝関東学院 の教育」

高野 進

(1) 今年（2009年）は、カルヴァン（1509－1564）の生誕500年にあたる。カルヴァンはルター（1483－1564）の提起した宗教改革の基本原理（*sola gratia*[恵みのみ], *sola fide*[信仰のみ], *sola scriptura*[聖書のみ]、全キリスト者祭司性）を組織的に祖述し、ジュネーブにおいてこれを具体化しようとした。特に『キリスト教綱要』Ⅲ 6-10「キリスト者生活」の項目の記述は、キリスト者のあり方にとつて重要な意味を持っていた。これがやがて、英米のピューリタン、とくにバプテストに大きな影響を与えた。

カルヴァンによれば、地上のよきものを神からの賜物として享受してよいという。「神はこれらをわれわれの幸いのために造りたもうた」（Ⅲ, 10, 2）。ただし次のことにも心がけなければならない。1. この世のものを用いる者は用いないかのように心がける（*1コリント 7:31*）。それに溺れるがないように戒めなければならない。2. 貧しさにも耐え、豊かさにも控えめに身を処する。3. 神は、愛と結びつかないような仕方で、地上のよきものを使用することを何一つゆるされない。

このところで、カルヴァンは「召命」（*vocatio*）を取り上げる。「どんなにいやがられる・いやしい仕事であっても、（あなたがそこであなたの『召命』に従いさえすれば）神の前で輝き、最も尊いものとならぬものはないのである」（Ⅲ, 10, 6）自分の日常の職

業を大事にし、勤勉でなければ、神の救いを受けるにふさわしい生き方とはならないという。

(2) このような生き方を実践したピューリタンたちの中に、英國バプテストの人たちがいた。

「教会の歴史を見ますと、『予定論』を報じているグループの方が、予定論を拒否するグループよりも、伝道に熱心であったという事例を発見することができます。例えば18世紀のイギリスで・・・パティキュラー・バプテストの方が伝道に遙かに熱心であった。」(渡辺信夫『カルヴァンの《キリスト教綱要》を読む』)

ここで英國バプテストのウィリアム・ケアリー(1761 – 1834)を紹介したい。ケアリーの父は英國教会の教区庶務係兼学校教師であった。ケアリーは14歳で靴屋の徒弟に入った。彼はそこで仲間から初めてキリストの福音を聞いた。そして1779年に18歳のときにキリスト者となる回心をした。22歳で信徒説教者になり、1787年にレスターのバプテスト教会牧師となった。1792年にケアリーは『異教徒の回心のために手段を用いるべきキリスト者の義務の研究』を発表した。宣教の義務は神の救いのご計画に基づき、今も果たすべきものであるとする。ここで指摘された「手段」(means)とは、キリスト者に託された資産・賜物すべてを意味した。また人々は商売のためには地の果てまで出かけるのに、キリスト者は犠牲を払っても、地の果てまで出かけることをしない、と指摘した。これは中庸カルヴァン主義の立場からなされた最初の宣教の神学声明だったと言われる。さらにイザヤ54章2, 3節にある「あなたの天幕の場所を広くし」を引用して、外国宣教の働きの重要性と緊急性を訴えた。1793年彼自身がインドに向かった。彼は今日のバンガラデシュの北部にあったインド藍農園工場で支配人として働き、民衆の間でインド言語の習得に努めた。1798年、ベンガル語に

聖書部分訳を完成、印刷配布。さらに学校を設立、読み書きを教えた。後にデンマーク領セランポールに拠点を移し、1819年にはインド諸言語の研究者としてフォート・ウィリアム・カレッジの設立に貢献した。ケアリー、マーシュマン、ウォードのセランポール・トリオはそれぞれの賜物を出し合って大きな働きをした。彼らは1800年にForm of Agreement(「宣教合意書」)という宣教のために指針を確認した。その主要項目は今も重要な意味を持っている。

1. 人間の魂に無限の価値を認める。
2. 民衆の心を捉えている習慣・文化・宗教を研究する。
3. 民衆に役立つことを行う。
4. 十字架につけられたキリストを伝える。
5. 自分たちと同等に民衆に接する。
6. 現地インド人こそ同国人をキリストに導くことができる。彼らの賜物を宣教の働きに活かす。
7. 聖書の翻訳を継続する。

彼らは現地の人々を尊重し、現地の言語・文化・習慣・宗教を研究し、聖書の翻訳につとめた。そのために印刷所の開設し、学校教育事業の推進し、さらに社会的因習の改革と廃止にも貢献した。1818年には、彼らはセランポール大学を設立した。インドの宣教はヨーロッパ人によっては決して達成し得ないこと、それはインド人自身によって推進されなければならないことを確信していたからである。この大学では、英語ではなく、主にベンガル語によって教育された。カリキュラムにはキリスト教だけでなく、西洋の諸科学、東洋諸言語の研究と教育が行われた。大学にはヒンズー教徒や、イスラム教徒も入学を許可された。広がりある学生集団がキリスト教徒学生にとっても有益な経験になると判断されたからである。この方針はわれわれも継承しているものである。「ビルマの使徒」といわれるアドナイラム・ジャドソン(1788 – 1850)はこのケアリーにインドで会い、彼か

ら大きな感化を受けた。日本におけるバプテストの先駆者、ネイサン・ブラウン（1807 – 1886）は、若き日にミャンマー（ビルマ）においてジャドソンのもとで宣教活動に従事した。アルバート・アーノルド・ベンネット（1849 – 1909）はブラウン大学学生寮ではジャドソンの使っていた部屋を居室としていた。関東学院はこのような精神を受け継いでいる。それをこの後も継承していかなければならない。

教育の課題としては、次のことが挙げられる。これらはバプテストの先駆者たちが追求したものであった。関東学院がこれを忘れてはならないものである。

1. すべての人々の魂と人権を重んじ、配慮していく教育を推進すること。
2. 研究と教育が人類及び社会的な課題の解決に貢献するものであること。
3. 民主主義の確立と具体化にたえず努めること。

### 発題3、「バプテストの伝統を持つ教育機関の現代的教育使命：バプテスト400年と関東学院建学の精神」

金丸 英子

ここでは、米国テキサス州のベーラー大学（バプテスト派）の大学改革をケースとして取り上げ、キリスト教主義の教育機関における「世俗化」について自分なりの考えを述べる。最後に筆者の勤務する西南学院大学の「自校史」の取り組みを紹介し、最後に問題提起をする。

#### 1. ケース：ベーラー大学改革案から

ベーラー大学は、今から10年ほど前、当時の学長が大学改革案を提案し、「ベーラー2012」と名付けられた。これは、2012年までに学問的水準を引き上げ、リサーチユニヴァーシティーを目指し、国内の一流大学の仲間入りを果たすという野心的なものである。提案の背景には、21世紀に向けて、良

質なキリスト教大学としてのベーラーの生き残り問題があった。大学改革が着手された。従来のカリキュラムは見直され、改革案に沿った教育プログラムが立ち上げられ、国内で認知度の高い一流の研究者を他大学からリクルートする人事構想案と新たな教育施設の建築案が打ち出された。加えて、キリスト教による学生の人格と信仰を育むことも必須事項として入れられた。信仰と科学（サイエンス）の共存を目指し、学問的営みと信仰を意識的に結びつけて教育活動や研究活動を行うことを柱としたのである。

創立以来、伝統的に「優れた学者・研究者」よりも「優れた教育者」の輩出に努め、国内の一流大学院に進学する優秀な卒業生を出すことに力を注いできたが、大学改革案では「研究者としての教員と、若き研究者の養成」に重点が移されたため、教員から反発が続出した。キリスト教大学としての伝統や「建学の精神」と、大学教育とアカデミズムの関係も問題とされた。大学側はこれを「信仰と理性」の問題として捉え、知的な営みが神と人とに仕える対話に発展すべきことを述べた上で、教員へは、定期的に礼拝に出席し、ローカルチャーチへの転入会を通して、信仰と学問の積極的な関係性の探究を求めた。

着手から10年、改革は一定の成果を収めたが、改革対案者の学長は5年後に辞任に追い込まれ、改革案が教員側に求める研究内容や信仰生活に関する「要求」に違和感を覚える教員の辞任が続いた。そのような中、大学は2003年に「The Baptist and Christian Character of Baylor」（ベーラーのキリスト教的性格とバプテスト）と題し、主要なバプテスト大学から講話者を招いて大掛かりなシンポジウムを開催し、さらなるステップを模索したようである。

#### 2. アメリカのキリスト教系大学と「建学の精神」：ジレンマ

大学の運営に、創立の精神を前面に出すの

か、それとも時代の波に生き残るために創立の精神を縮小するかというジレンマは、アメリカのキリスト教系大学が最初から抱えていた課題でもあった。1636年創立のハーバード大学を始めとして、アメリカの大学の設立は、キリスト教の伝道活動と高等教育の必要が結びついていた。バプテスト大学設立は1764年に開校されたロードアイランド大学（現ブラウン大学の前身）に始まるが、設立理由は、他教派の後塵を拝して、常に少数派に甘んじていたバプテストが自ら「よい」大学を持ち、そこから「よい」高等教育を受けた牧師や教会員が増えることが、バプテスト派の発展につながると見てとったためである。19世紀の終わりに創立されたシカゴ大学はその頂点と言えよう。アメリカバプテスト教育協会（American Baptist Education Society）がバプテスト派の大富豪ジョン・ロックフェラーの援助を得て誕生したが、教派色を強く打ち出すことはなかった。教会の働き人の輩出を目的として創立されながら、1970年代以降、国内のキリスト教界全体を襲った世俗化の嵐の中で、創立のスピリットの影が薄くなるも、今日に至るまで国トップユニバーシティーの地位は維持している。

アメリカでも、キリスト教精神を教育の中心に据えることに腐心する大学も少なくない。異なる学問分野が学生の知性に刺激を与え、理性を涵養する力を持っていることをよく理解した上で、学生が、いわゆる「よい」人間に育つためにキリスト教教育の必要を意識して、建学の精神を尊重し、それに基づいた教育が行えるように教養教育に重点を置いた小規模大学として立つことを目指しているところもある。このような在り方は、少子化に伴う定員割れに喘ぐ日本の私学には馴染まないかもしれない。在学中にどれだけの「資格」を提供できるか。いわゆる「実学」志向の大学が増加し、教養教育が衰退しているのが現状であろう。キリスト教主義大学も例外ではない。もし、これを「世俗化」と捉える

とすれば、この問題をどう考えるのか。

自身もバプテストであり、最近引退したハーバードの宗教社会学者ハーヴィー・コックスは、世俗社会と宗教の関係を論じた一連の著書（*Religion and the Secular City* [1984], *The Secular City* [1965]など）で、「『世俗化』を『滅ぼすべき敵』として対峙するのではなく、逆に理解し、それと対話することを学ばなければならない。これは必ずしも、『世俗化』に自らを明け渡して擦り寄ることではない。福音の誠実な証し人としての努めに自らが目覚める契機である」というようなことを述べている。これを今回のテーマにひきつけて考えてみると、教育共同体の中で、責任性を具えたマイノリティーとしてキリスト教は他の学問領域や教育理念など、学校の骨格に関係する部分に批判的に関わり、そこで率先して民主的なあり方を模索する先導役を果たす。全体をある形に統一、または統合するのではなく、むしろ、異なる理念や主張の底に流れる共通項を見出だすためのファシリテーターの役割を果たす。そのようなことが、コックスの言う「世俗化・世俗性を理解し、対話し、その中で自らを明け渡さず、福音の証し人としてたつ」事につながるのではないか。そして、そのような中でこそ、カリキュラムに載らない「隠れた（hidden）カリキュラム」としてのチャペルは不可欠であろう。自由出席ながら、「神と人間への誠実さ」を真っ向から突き出す「誠実なチャペル」である。そのようなチャペルには、クレームや文句も出て来よう。しかしそれは、「福音の誠実な証し人としての努めに自らが目覚める契機」となる。

最後に、西南学院の「自校史教育」の取り組みを紹介して責任を終えたい。西南学院の建学の精神は、「西南よ、キリストに忠実であれ」であるが、現院長はこれを西南学院の教育の使命に結び付けて、「学院の教育の基盤であるキリスト教は人類が共有する普遍的な価値を重視し、平和、人類愛、人権、自由

を追求する。行き違いと誤解、断絶と対立に満ちる今日の世界に解決をもたらすために、異なる文化圏の人々と共生し、平和をつくりだしていく知恵と理解を深める教育を施す。政治、経済、文化、教育など、それぞれの分野で地域と力を合わせて社会の発展に貢献できる人物を育成する」と述べた。

その流れの中で、今年度より「西南学院史講義」が開講された。開講に先立ち、他大学から自校史教育担当責任者を講演者に招き、その後、討論を行った。忌憚のない意見が多くなされたが、結果的には、神学部が提供学部となって、臨時開講科目として始まった。オムニバス形式のため開講回数分の教員が必要となる。全学に広く呼び掛けたところ、他学部の教員から複数の申し出があった。出席も当初の予想を大幅に上回り、全学年から毎回 200 名以上の出席があった。まずまずの滑り出しであったが、通常科目になった場合の課題は山積しているように思う。担当教員の固定化をどのようにして防ぐか。他学部・他学科の哲学的理念との整合性はどうするかなど、自校史講義の理念と方針の更なる明確化が必要となるであろう。

今回のシンポジウムは、「バプテストの伝統を持つ教育機関の現代的教育使命：バプテスト 400 年と関東学院建学の精神」というテーマで行われたが、以下のような問題を投げかけて、結びとしたい。  
① 「バプテストの伝統」とは、「*a tradition*」か「*the tradition*」か。  
② キリスト教学校としての関東学院のユニークネスの発見と受肉（カリキュラムの問題）を誰が・どこで・どう捉えるのか。  
③ 「バプテスト 400 年」の解釈の問題  
④ 建学の精神は、誰が・誰と・どこで・どう担うか。

## 搜真女学校と坂田祐

小 玉 敏 子

The Relationship between the Soshin Girls' School and Tasuku Sakata

Satoko Kodama

### 1. 搜真女学校の創立

搜真学院（1988年、法人名を搜真女学校から搜真学院に変更）は、1886年を創立の年としている。しかし、創立者シャーロッテ・ブラウン、すなわちネイサン・ブラウンの夫人は、来日した1973年に町の少女達を集めて教えていた。ところが、病気になったので、1875年11月に来日したクララ・サンズがブラウン夫人の学校を引き継いで発展させ、のちにその学校は聖教学校と呼ばれる。

1886年1月1日、ネイサン・ブラウンが召天、4月にクララ・サンズが一時帰米したので、ブラウン夫人はサンズのもとにいた寄宿女生徒7名を預かることになった。山手67番の住宅の裏にあったネイサン・ブラウンの聖書印刷所が生徒達の教場兼寄宿舎となる。次第に生徒数が増えたので、翌年10月1日、裏門に「英和女学校」と書いた板切れを掲げた。この10月1日がのちに搜真女学校の創立記念日となる。

既に他の教派の女学校は立派な校舎で教育を行っていて、バプテスト派の人々からもそのような要望が聞かれたので、ブラウン夫人はミッション本部に校舎建設の資金と校長となる有能な教師の派遣を要請する。その結果、送られてきた資金で山手34番に校舎・寄宿舎と宣教師館が建設された。教師として派遣されたのはクララ・A・カンヴァースである。

### 2. 山手時代

1886年にクララ・サンズから預かった少女達の教育を始めたブラウン夫人は、翌年5月にアメリカン・ミッション・ホーム（現・横浜共立学園）を卒業するエイミー・コーンズ（のち山田千代と改名）を助手として招いた。1890年1月25日、クララ・カンヴァースが横浜に到着し、さっそく教鞭を執る。その年の9月、ブラウン夫人はアシュモア博士と再婚し、中国伝道に旅立ち、33歳のクララ・カンヴァースは名実ともに英和女学校の校長となり、23歳のエイミー・コーンズが教師、通訳、舍監、会計担当者としてカンヴァースを支える。

山手34番に、1891年9月に宣教師館、12月に校舎と寄宿舎が完成し、英和女学校は移転する。その折に、学校の名称を校舎建設のために最初に寄付を申し出たアメリカのバプテスト婦人ミッション前会長の名前をとって、“Mary L. Colby Home”とえた。のちには一般に“Mary L. Colby School”と呼ばれるようになる。また、日本の女子教育をする学校として日本名の必要を感じたカンヴァースは、“Truth Seeking”（真理を求める）という意味の諺語「搜真」を教員と生徒に誇って、校名を〈搜真女学校〉と決め、翌年4月、正式に公にする。彼女にとって、教育の究極目標は「聖書の真理を捜し求める」ことであつ

た。その年に聖教小学校にいた女子2,30名が34番の搜真女学校に合併された。

新校舎の落成献堂式の4日前、1892年12月14日、文部省は「中学校令改正」を公布し、女子教育を男子教育とは別のものとして公認する。搜真女学校では学則の作成を急ぎ、翌年4月から修業年限12年、初等科4年で初等教育、予科4年で中等教育、本科4年で高等教育の課程を履修するものとした。学校としての体裁も整い、寄宿舎も余裕をもち、教授陣も充実して教育の実績が高く評価されてくると各方面から入学希望者が増加し、1893年には生徒75名、うち寄宿生40名になったという。この年には最初の卒業生2名を送り出した。

1899年の条約改正に際し、8月3日に私立学校令が公布され、山手外国人居留地に創設された搜真女学校は、他のミッション・スクールと同様、神奈川県知事に学校設立を届け出て認可を受けた。同日公布された文部省訓令第12号により、小学校で宗教教育を行うことが禁止されたので、搜真女学校は1900年4月から学則を改め、幼年科廃止、予科2年、普通科4年、高等科2年とする。予科、普通科、高等科で宗教教育を行っていた搜真女学校の学科課程は公立の高等女学校と同等であったが、他のミッション・スクール同様、高等女学校として認められず、各種学校のなかに数えられた。

### 3. 神奈川・中丸への移転

学校は山手で順調に発展していたが、校地の真下に電車のトンネルが掘られることになり、立ち退きを要請されたので、移転先を視察・検討した結果、現在の場所に移転することになった。今日では住宅が軒を連ねているが、移転した1910年頃は畠と林に囲まれ、人家はほとんど見当たらなかったという。

1913年、文部大臣指定校となり、専門学校の受験資格が与えられた。その後も宗教教

育を制限される「高等女学校」にはならず、「指定女学校」にとどまる。1918年に東京女子大学の創立に際し、カンヴァースは山田千代とともに設立委員をつとめ、他のミッション・スクール同様、英文科をいったん廃止するが、保護者達の要望にこたえて、1年後に再開する。

1921年10月賜暇帰米の際にカンヴァース校長はミッション本部に引退を申し出たが、後任が決まらないまま、翌年6月再び横浜に戻り、関東大震災に遭遇する。震災で鉄筋コンクリートの関東学院の校舎が崩壊したにもかかわらず、木造の搜真女学校校舎は修繕すれば使える状態であった。そこで関東学院の生徒の授業は10月から翌年2月まで搜真女学校で行われ、仮校舎落成後三春台に戻ったが、第1回卒業式は搜真で挙行された。

1925年7月、35年間校長をつとめたカンヴァースに代ってアナベル・ポーレーが校長に就任するが、家族の病気のため、短期間に終わり、1929年5月、高垣勤次郎が校長に就任する。その年アメリカに端を発した世界恐慌が始まり、ミッション本部からの援助が減少するとともに、授業料収入も減少した。また、満州事変を契機にミッション本部は日本における宣教方針を変更し、以後農村に主力を置くことにした。1932年の秋に実情視察団が来朝し、帰米したのち、搜真女学校を廃校にするという本部の意見を搜真女学校理事会に伝えた。この悲報を伝え聞いた同窓生は敢然と立ち上がり難局の打開策に奔走した。

1932年12月、高垣校長が辞任し、当時、財團法人関東学院の高等学部長兼中学部長であった坂田祐が搜真女学校の校長を兼務する。これより以前、1921年5月、校長の他、日本人3名、外国人3名からなる搜真女学校理事会が設置され、坂田も理事になる。搜真女学校に保存されていた記録は戦災で焼失したが、坂田記念館に保存されている書類などから推察すると、坂田が初代理事長である。

その後、坂田が校長に就任する段階でグレセット（J. F. Gressitt）が理事長になったが、1942年7月7日に県知事に申請し、翌年3月17日に設立許可された「財団法人搜真女学校」では再び坂田が理事長になっている。

#### 4. 坂田祐校長時代

当時関東学院で重責を担っていた坂田が搜真の校長を兼任することは容易でなかったが、関東大震災で関東学院の鉄筋コンクリートの校舎が倒壊して灰燼に帰し、途方に暮れたときに、カンヴァース校長の親切な申し出によって2部授業が行われたことに対する恩義に報いようとしたのであった。

坂田校長は就任決定後直ちに専門学校設立の計画を取り止め、その資金で老朽校舎を修理改築し、専門科に家政科を設置とともに、生徒の増募を提案して、同窓会の協力を呼びかけた。それが「第一期の計画」で、「第二期の計画」はアメリカ・バプテスト・ミッション本部からの経済的独立であった。そのため必要な基本金募集に同窓会の協力を要請した。その結果、同窓生を主体とし、生徒の保護者、校友、現旧教員中の有志を加えて「搜真女学校後援会 真窓会」が設立され、募金活動が開始された。また、1938年度までにミッションから独立して財団法人とするために基本金として必要な3万円の募金を目指とした「搜真女学校自給計画書」が坂田によって作成された。しかし、5年間で3万円を募金することは容易でなく、「財団法人搜真女学校」設立を県知事に申請したのは1942年7月、設立を許可されたのは1943年3月であった。このようにミッションからの独立に予想以上の時間を要したためか、最初短期間の予定であった坂田の搜真女学校長兼任は14年に及んだ。その間にクララ・カンヴァースの校葬、カンヴァース記念講堂献堂式並創立50周年記念式典、搜真女学校教会設立、校旗と制服の制定などが行われた。ま

た、経済的独立のための定員増は1940年には定員700名になり、目標を達成した。

太平洋戦争中の1945年5月29日、米軍の横浜大空襲により搜真女学校の校舎は全焼した。関東学院も空襲で校舎の大部分を焼失したが、コンクリート校舎が残ったので、ここに搜真的生徒をも収容して2部3部の授業が行われた。1932年に校長に就任し、搜真女学校を危機から救出した坂田も、全校舎を焼失した搜真女学校単独での再興は不可能と思ったのであろうか。搜真女学校と関東学院の財団法人を合併することを提案した。関東学院の理事会はこれを承認したが、搜真的理事会は承認できなかった。搜真的同窓生たちは、合併することによって、「搜真女学校」という名称が消えてしまうことに強く反対した。坂田は「搜真十五年の思い出」（搜真女学校70年記念グラビア）で「これは聖旨であったと思う。合併しなかったことは、結局搜真にも関東にもよかったです」と述べている。

1946年1月、坂田は搜真女学校理事長及び校長辞任を申し出て、関東学院の復興と発展に専念することになり、理事長には青柳茂、校長には千葉勇が就任した。当時、関東学院は六浦の旧海軍航空技術廠工員養成所の土地・施設を使用していたので、搜真女学校は1948年3月まで三春台の校舎の使用を許され、同年4月神奈川区中丸に戻り、焼跡に古材で建てられた校舎で授業を再開した。

#### 【主な参考文献】

- 1)『日本バプテスト史略』上・下（高橋権雄編、1923年、1928年）
- 2)『搜真女学校九十年史』（曾根暁彦著、1977年）
- 3)『搜真学院120年誌』（2007年）
- 4)『SOSHIN 1886-1956』（搜真女学校70年記念グラビア、1956年）
- 5)『搜真女学校同窓会報』（再刊第2号、1933年）

## 関東学院と有吉忠一：有吉忠一の青年時代 —プロテスタントの側面から—

松 本 洋 幸

Younger Days of Cyuichi Ariyoshi

Hiroyuki Matsumoto

関東学院に兵隊山の敷地を斡旋した有吉忠一（当時・神奈川県知事、後に横浜市長）は、青年時代、熱心なプロテスタント信者であった。すなわち第三高等学校時代に京都の洛陽教会に入り、1889（明治22）年2月に発足した第三高等中学校基督教青年同盟会（後に第三高等学校基督教青年会）に参加、我国初の学生YMCA会館の設立に建築委員として尽力した。

続いて帝国大学法科大学に入学すると、東京高等商業学校（現在の一橋大学）専攻部に在学していた弟・明とともに、多くの青年学徒が集う本郷教会で横井時雄の教えを受けた。また在学中、帝国大学基督教青年会のメンバーに名を連ねるとともに、帝大・一高生等で結成された中央学生基督教青年会にも幹事として参加し、神田青年会館での大演説会開催や、中央学生青年会館建築委員として活躍した。本郷教会は横井時雄が1897年4月に同志社に移るとともに一旦解散する。忠一是1896年7月に帝国大学法科大学を卒業し（23歳）、内務省に入省したが、教会解散直前の1897年3月に島根県理事官として赴任し、東京を離れた。一方の弟・明は、9月に海老名彈正を牧師に迎え、自らは会計を担当するなど、本郷教会の再建に尽力した。

有吉の島根県勤務は約半年で終わり、1897

年8月兵庫県に理事官として赴任し、本格的な地方行政に携わった。彼は、神戸教会の原田助と親交を結び、聖書会に参加していた。有吉は、『小学校教育制度』（富山房、1901年）と題する初の著書を纏めるなど、教育政策に力を入れていたが、神戸女学院の高等女学校開学の日に「此地にて相対峙するに足るものはただ此院あるのみといへり」（櫻井鷗村の記事、『女学雑誌』469、1898年8月）という式辞を寄せるなど、この頃からキリスト教教育にも理解を示していた。

約3年8ヶ月を神戸で過ごした後、1901年4月に本省勤務を命じられた（～1908年3月 赴任当時28歳）。在京中は靈南坂教会に入り、赴任後約半年で誕生した長男には、旧約聖書の救世主・ヨシファにちなんで「義弥」（後の日本郵船社長）と命名された（秋田博『海の昭和史』、日本経済新聞社、2004年）。「有吉忠一関係文書」（横浜開港資料館保管）中には、原田助（神戸教会）・石橋為之助（後の神戸市長）・井深花（後にYMCA同盟委員長）等キリスト教関係者からの書簡（ほぼ有吉の本省勤務時代のものと思われる）が数通残されている。いずれも法人出願等に当って有吉にアドバイスを求めるものである。そのうちの1通を紹介する。差出人は、有吉も名誉会員となっていた中央青年会（中央学生基督教青年会）で、同会の法人化に際

してアドバイスを求め、寄附行為草稿の返却を願い出ている。

拝啓 愈御清適奉賀候。然るに何日ぞや本会法人設立の件に関し御忠告被下、諸事も有之候ひしに依り、去ル三十四年十一月十日に吉野作造を拝趨為致寄附行為草稿御覽に入れ候筈。御多忙の御身分なるにも拘らず、色々御考慮被下候事と奉存候。然るに今般役員改選に伴ふ事務引継の事より、右寄附行為草稿必要有之候間、現在御手許に有之候はゞ至急御返附願上度。乍御手数御取計被下度候。且つ又右に關し是れ迄御熟考の結果御教示被下候点も有之ことと奉存候ニ付てハ、何時にも会員を參上せしめ申度候間。是亦乍御手数日と時とを御指定被下度奉願候。右大至急得貴意度候。頓首  
(年代不明 9月 18日)

大正期におけるデモクラシー思想の指導者となる吉野作造は、1900（明治33）年9月東京帝国大学法科大学に入学、帝大基督教青年会の寄宿舎に入寮していた。彼は、有吉兄弟ゆかりの本郷教会に出入りし、海老名彈正の教えを受けながら、中央学生基督教青年会理事として、先輩・有吉のもとを訪ねていたようである。

在京当時、有吉の自宅は牛込にあったが、その目と鼻の先に関東学院の前身・東京学院があった。有吉はある時、友人に講演を頼まれて東京学院を訪れたが、「教育の粗製濫造をしない、少数精選」の校風に感心した、と後に振り返っている（私立中学関東学院設立披露会席上の挨拶、『関東学院百年史』p304）。

### 【参考文献】

- 新島源助等編『中央学生基督教青年会史』（中央学生基督教青年会、1902年）  
有吉忠一「信仰感懷」（朝鮮総督府『朝鮮の統治と基督教』、1921年 1995年に龍溪書舎より復刻）  
『本郷教会創立50年』（日本組合本郷基督教会、1936年）

奈良常五郎『日本YNCA史』（日本YMCA同盟、1959年）

### 謝 辞

なお「信仰感懷」については、富山隆氏のご教示を賜りました。この場を借りて深謝申し上げます。

## 神の存在及び三位一体説の数学的証明

### 一神、宇宙と人類の存在及び関係に関する科学的分析序論（1）—

安 田 八十五

A Mathematical Verification on the Existence  
of the God and the Holy Trinity

—An Introduction of Scientific Analysis on the Existence and the  
Relationship of the God, the Universe and Human Beings (1)—

Dr. Yasoi YASUDA, Marco

#### 要 旨 :

人類は、神が与えてくれたこの素晴らしい地球を温暖化問題等の地球規模環境問題によって生命が存在し得ない「死の惑星」にしてしまうかもしれない。現代文明は、人類がこの地球に発生したわずか約 700 万年間で、人類のみならず、地球上のあらゆる生命すらも消し去ってしまう可能性を有してしまったのである。地球規模環境問題を考えると、神は、なぜ宇宙を創造し、さらに、太陽系の中に地球を与え、そこに、人類を頂点とする生命系を作り出したのかということを考えざるを得ない。このような問題意識から、筆者は、「神、宇宙と人類の存在および関係に関する科学的分析」の研究に取り組んで来た。今回は、ことに、神の存在及び三位一体説についての数学的方法による証明の第一歩を踏み出した序論編である。

#### キーワード :

- ①宇宙創造 ②旧約聖書 ③「創世記」
- ④アッシャー大司教 ⑤神の存在証明
- ⑥トマス・アクヴィナス ⑦神学大全
- ⑧三位一体説 ⑨位相同型 ⑩有限と無限

#### 目 次 :

1. 序論—研究の背景と目的—
  - 1.1. 地球環境問題の意味すること—神の存在と役割—
  - 1.2. 神の存在への数理的接近—筆者とキリスト教及び神との出会い—
2. 旧約聖書の「創世記」における宇宙創造に関する学問的検討
  - 2.1. 旧約聖書の「創世記」における宇宙創造の叙述
  - 2.2. アッシャー大司教による宇宙創成の推理
  - 2.3. 土木工学者・岩松暉による聖書地質学等の研究
3. 神の存在証明に関するトマス・アクヴィナスの 5 つの方法
4. 「トマス・アクヴィナスの第三の道」の科学的説明—『神』の存在の数学的証明—
5. 有限と無限との違い:「神」という無限集合—集合論の基礎—
6. 三位一体説の位相数学による分析と証明
  - 6.1. 三位一体説とは何か?—イエス、神と聖霊の位格の同一性—
  - 6.2. 三位一体説の位相数学による証明—イエス、神と聖霊の位相同型分析—

7. 神、聖霊、イエス・キリスト及び宇宙、  
人間との関係—集合・位相論による定義と  
分析—

## 8. 結論と課題

8.1. 結果の要約

8.2. 今後の課題

追記：

謝辞：

参考文献：

参考ホームページ：

# 1. 序論—研究の背景と目的—

## 1.1. 地球環境問題の意味すること—神の存在と役割—

『この数年の環境問題に対する関心として一番大きいのは、いわゆる地球規模の環境問題というものを挙げることができます。いくつかの問題がございます。このことをまずご説明したいと思います。地球温暖化の大きな原因としては、二酸化炭素の増大があるわけです。18世紀半ばの産業革命以降、二酸化炭素がとても増えています。ワットが蒸気機関を改良・発明した年が1765年です。それまでは地球のCO<sub>2</sub>というのは270ppmから280ppmぐらいと推定されています。しかしながら、産業革命以降、炭酸ガス濃度はどんどん増えてきまして、現在は大体380ppmぐらいと言われています。特に1980年頃から急速に増えております。温暖化のメカニズムは、次のように説明されています。温暖化の原因となる炭酸ガスが増えますと成層圏に二酸化炭素による被膜ができるわけです。そして地球は、物質に関してはクローズドシステム（閉じた世界）ですが、熱・エネルギーに関してはオープンシステム（開かれた世界）なので、熱を宇宙空間に逃がすことによって地球は、定常状態（ホメオヒタシス）を保つことができるわけです。しかしながら、その炭酸ガスによる皮膜のために廃熱が宇宙空間に逃げていけない、または、熱を地球の外に出せな

いと、いわゆる温室効果(Green Effect)ということで、成層圏の内側が極めて暑くなってしまうわけです。温室効果のメカニズムは、図1を参照されたい。

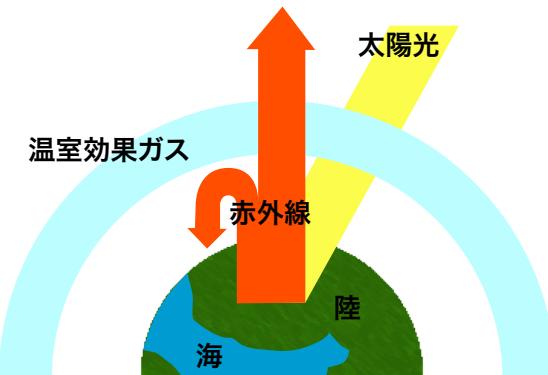


図1 温室効果のメカニズム

地球の温暖化を防ぐには、炭酸ガス濃度を400ppmぐらいまでに押さえなければいけないということが言われるわけですが、これが果たして可能かどうか、近年大きな社会問題になっているわけです。

温暖化問題の場合は、人類全体が加害者であり、人類とその他の生命系が被害者であるという構図になっておりまして、結局人類は自分で自分の首を絞めていることになります。水俣病みたいな問題を、加害者と被害者が分離できる「分離型環境問題」と呼んでいるのに対して、地球温暖化の問題は、基本的には「重なり型環境問題」と呼んでおります。この地球規模の環境問題がもたらすものは、人類自身による活動の結果が地球環境を通じて、人類自身の滅亡、場合によっては人類だけではなく、地球の生命系全部を滅亡させるかも分からぬ。そういうフィードバックの構造に一番大きな問題があります。そして重なり型環境問題のために解決が極めて難しいわけです。

それからもう一つ、私が挙げていますのは、「空き缶から地球が見える」といつも言っているわけです。今、日本では、極めて大きい環境問題として、ごみ問題がございます。こ

れはどういうことかと言いますと、産業廃棄物に関して言いますと、最終処分場、埋立地ですね。このままでは、最終処分場があと2,3年で無くなるだろうと言われています。それから、家庭から出る一般廃棄物の最終処分場があと7,8年で無くなると推測されています。

そこで、ごみ問題がなぜ重要なことですが、これは、地球環境問題と関連しているわけです。ごみ問題というと、古紙とか空き缶とか空き瓶とか「固体の廃棄物」と考えられるわけですが、実は地球環境問題やオゾン層破壊の原因であります炭酸ガスとかフロンガスはすべて「気体の廃棄物」なんです。それが地球環境に出て行き、地球環境の有する浄化能力（自浄作用）を越えて、最悪の場合 600ppm 位まで上昇し、そしてそのため地球環境がコントロールできない可能性があるわけです。言い換えれば、地球環境が元に戻せない「不可逆過程」に入る可能性があります。

さらに、瀬戸内海とか霞ヶ浦の富栄養化現象、これは「液体の廃棄物」が原因なのです。我々の活動から出ている排水・廃液という液体の廃棄物によって、湖や内湾などの閉鎖性水域が死の湖や死の海になるということです。私は最近、この地球環境問題というのは、すべてごみ問題であると言うことを主張しています。気体、液体を含めて人類の排出する廃棄物が環境に出て行き、その環境のスレッショホールド（しきい値）を越えて、とりかえしのつかない不可逆状態をもたらす危険性（リスク）があるわけです。そういう意味では、地球環境問題を考える場合のキーワードとして、最近 Think Globally, Act Locally ということが言われています。日本語で言うと、「地球規模で考えなさい、そして、地域でアクト（行動）しなさい」ということです。ローカリー、つまり地域で具体的に行動しなさい。動名詞では Globally thinking and local action という言い方をしておりますが、まさにこの

地球環境問題を考える場合、我々は身近なごみ問題から取り組む必要があります。』

上記の文章は、今から約 18 年前、平成 4 年（1992 年）秋に、筆者が山口県教育研修所で行った「環境教育を考える—環境生涯学習システムの構想と実践—」というタイトルの講演記録（1993 年 3 月発行）の最初の部分である（一部、加筆修正）。当時は、筑波大学に勤務していたが、環境問題の講演や調査研究で全国いや全世界を飛び回っていた。

筆者は、若手研究者の頃から環境問題に取り組んできたが、温暖化問題等の地球規模環境問題には 1980 年代から着手し、その研究成果は、北野康・田中正之（編）・安田八十五他著（1990），『地球温暖化がわかる本』等に公表してきた。詳細は、参考文献を参照されたい。

最近、温暖化問題は、政治の世界でもやっと取り上げられるようになってきた。日本では、自民党から民主党への約 50 年振りの本格的政権交代に伴い、鳩山由紀夫衆議院議員が 2009 年 9 月、内閣総理大臣に選出された。鳩山首相は元々学者の出身であり、専門は筆者と同じオペレーションズリサーチという数学的方法を用いて社会問題の解決を探求する学問を専攻していた。その鳩山総理が、就任早々、国連総会で温暖化対策として、日本は、2020 年には京都議定書締結基準年の 1990 年に比べて、二酸化炭素 (CO<sub>2</sub>) 25% 削減を目標とするという演説を行ったことに筆者は率直に言って驚いてしまった。筆者は、元々理工科系の出身であり、若い頃から環境問題・都市問題等へのオペレーションズリサーチによる研究を行ってきた。安田八十五（2009）「地球環境問題をごみ問題から考え直す」（本誌第 7 号）で紹介したように、筆者は、1980 年代から温暖化問題等の地球規模環境問題に取り組み、共著ではあるが何冊かの著書も出している。地球規模環境問題の重要性をかなり早い時期から指摘し、解決のための政策科学的研究を実践してきた。詳しくは、綿抜監修・

安田他著(1989)「病める地球をどう救うか」(共立出版)等を参照されたい。

鳩山首相によるCO<sub>2</sub>の25%削減は、現実には極めて難しい目標と言えるが、これまでの首相では決して言えなかった数値目標を国連総会という場で公言したことは評価できる。ただし、今後は、その目標を達成するための具体的な政策手段をどのように策定し、実行していくかが大きな課題である。東京工業大学准教授の蟹江憲文(2010)は、鳩山首相によるCO<sub>2</sub>の25%削減政策を支持し、日本としてその目標を堅持することを主張している。その理由として蟹江は、「対外政策として国内政策としても、25%削減は日本にとって大切な武器となる」をあげている。筆者は、CO<sub>2</sub>の25%削減の実現はかなり難しいと見ているが、蟹江の言うとおり、その旗を引き下げることには絶対反対である。蟹江論文の詳細は、下記を参照されたい。

蟹江憲文(2010),「25%削減の旗を降ろすな—どうするポスト京都の数値目標(上)ー」,日本経済新聞・経済教室欄,平成22年1月11日(月)

人類は、神が与えてくれたこの素晴らしい地球を温暖化問題等の地球規模環境問題によって生命が存在し得ない「死の惑星」になってしまうかもしれない。現代文明は、人類がこの地球に発生したわずか約700万年間で、人類のみならず、地球上のあらゆる生命すらも消し去ってしまう可能性を有してしまったのである。

地球規模環境問題を考えると、「神は、なぜ宇宙を創造し、さらに、太陽系の中に地球を与え、そこに、人類を頂点とする生命系を作り出したのか?」ということを考えざるを得ない。

本稿は、このような問題意識から、「神、宇宙と人類の存在および関係に関する科学的分析」のテーマに取り組んだものである。今回は、ことに、神の存在及び三位一体説についての数学的方法による証明の第一歩を踏み

出した序論編である。

## 1.2. 神の存在への数理的接近—筆者とキリスト教及び神との出会い—

最初から私事で恐縮である。筆者は、昭和44年(1969年)24歳の時、キリスト教会(関東学院・霞ヶ丘教会)における結婚式のため、キリスト教に初めて出会ったと言える。その時は、妻となる女性の強い希望があり、キリスト教式の結婚式を承諾したが、キリスト教に関する知識や素養は全くなく、また、「神とは何か?神は存在するのか?」等を深く考えることは無かった。理工科系の大学を卒業し、「社会工学」の研究者として出発したばかりであり、今思えば、いわゆる「科学技術至上主義者」であり、神や宗教などは、何となく「うさんくさい存在」と考えていた。環境問題や都市問題等の社会問題を、数学や科学技術等の理工科系の学問の方法を適用して解決するという「社会工学」という新しい学問分野を切り開くという情熱に燃えていた。そのため、その後は、キリスト教とは縁がなく、「社会工学」に関する教育・研究及び社会活動等に没頭してきた。

しかしながら、今から約15年前の1995年(平成7年)頃、50歳前後の時に、妻がカトリック教会のミサに行きはじめたので、「オウム真理教事件」もあり妻が変な宗教に騙されてしまふと思いつき、警戒のため自分も付いて行っていた。妻と筆者が通っているカトリック磯子教会に依存症者のグループが来て、援助を求める集会が開かれた。ところが、それがきっかけで、「アルコール依存症」のことを筆者は初めて知り、自分も「アルコール依存症」ではないかという不安に陥った。そこで、「依存症」に関する各種の文献を読みあさり、また、「12ステップ方式によるキリスト者の生き方」の勉強会グループに毎週参加するようになった。しかしながら、たまに禁酒しても長続きせず、「依存症」の完治までに至ったことはない。また、関東学院大学「キリスト

教と文化研究所」においては、「依存症とキリスト教」研究プロジェクトを平成19年度(2007年度)から3年計画で始めさせて頂いた。これらの依存症研究の成果は、参考文献に示してあるが、本論文も実はこの依存症研究がきっかけになっている。

東北大学教授の坪野吉孝(2009)は、朝日新聞に寄稿した「依存症患者の心の癒やし」の中で、多量飲酒者だった自分が約10年前、一種の神秘体験をし、それ以来完全禁酒を実践していると述べている。筆者の場合は、昨年2008年11月の品川駅での階段落下事故で一種の神秘体験をし、約1年間禁酒をどうにか実行してきた。今後も禁酒を実行し続け、「アルコール依存症」から完全に脱出できることを毎日神に祈っている。

2000年(平成12年)の復活祭(イースター)の時に、55歳でカトリック磯子教会において洗礼を受け、キリスト教徒になった。キリスト教と出会ってから受洗まで約30年以上かかってしまった。しかしながら、神の存在やキリスト教をきちんと理解出来ていたかどうかは疑問であった。受洗2年後の2002年4月、筑波大学から関東学院大学経済学部に招聘され、すぐキリスト教と文化研究所の所員の任命を受けた。そこから、キリスト教や神の存在を本格的に、深く考えるようになった。

また、筆者は、主に環境問題を研究しているので、温暖化問題等の地球規模環境問題と真正面から立ち向かうハメになり、1980年代から、地球はどのように出来たのか？宇宙と地球との関係はどうなっているのか？等の地球や宇宙の生成の勉強にも取り組み始めた。

「人類は、いつ発生したのか？」、「地球は、いつ、どのように出来たのか？」、「宇宙は、いつ、どのように出来たのか？」等の疑問と「人類、宇宙と神との関係」とを何としても、解き明かしたいという願望が本研究の契機になった。ことに、人類や宇宙の誕生に、神が

どのような働きをしたのかを解き明かしたいと考え続けて来た。筆者は、最初に述べて来たように理工科系の出身なので、「神、宇宙と人類の存在および関係」を現代の自然科学の方法論を用いて解明できないかと模索し続けて来た。本稿は、その第1歩となる入門編である。

本稿は、当初は、昨年2008年度の本誌第7号に投稿する予定であったが、階段落下事故による入院のため、目次(案)のみを掲載したが、今回もその目次で述べた一部しか執筆することが出来なかった。その基本的理由は、このテーマが極めて難しいとの一語に尽きる。今後、生きている限り、本テーマを追求して行く所存である。

今回は、「旧約聖書の『創世記』における宇宙創造の叙述」及び旧約聖書の『創世記』に対する「アッシャー大司教等による宇宙創成の推理」、さらに、キリスト教における説得力ある神の存在証明に関しては、スコラ哲学の創始者といわれ、当時の最高峰に位置する神学者である、13世紀の聖トマス・アクワイナスが、初めて行ったと言われている文献を取り上げる。トマス・アクワイナスが、大著『スンマ』、日本語では『神学大全』と訳されている聖典の中で記述している「神の存在証明に関するトマス・アクワイナスによる5つの方法」にとくに言及する。「トマス・アクワイナスの第三の道」の筆者自身による科学的説明を行い、『神』の存在の数学的証明に挑戦することにする。

次に、キリスト教において最も重要な概念であり教えである「三位一体説」の数学的証明を、現代数学の一分野である位相幾何学(Topology)を用いて分析を行う。イエス、神と聖霊が、一体であることを「位相同型」の理論を用いて数学的に証明する。

なお、神の存在に関する科学的分析、ことに数学的分析に関しては、同志社大学経済学部の落合仁司が別のアプローチを用いて行い、公表している。筆者は、落合仁司が、

「十字架の数理神学」というテーマで、平成20年（2008年）9月17日に関東学院大学で開催された日本基督教学会での発表にたまたま参加し初めて知った。その時は、三位一体説の安田による位相同型理論に関して質問を行った。落合は、安田の方が早くから神学への数理的アプローチを展開していたのではないかと述べていた。落合の方法論は、主に、現代数学におけるカントールの集合論を用いている所に特徴がある。その詳細は、落合仁司（2009）、「数理神学を学ぶ人のために」、を参照されたい。筆者とは独自に別のアプローチを展開している。

## 2. 旧約聖書の「創世記」における宇宙創造に関する学問的検討

### 2.1. 旧約聖書の「創世記」における宇宙創造の叙述

宇宙の創造に関する最も有名な説明は、旧約聖書の「創世記」における「天地の創造」の最初の部分である。少々長くなるが、新共同訳の「第1章 第1節～第31節」をそのまま引用してみよう。

『初めに、神は天地を創造された。地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の靈が水の面を動いていた。神は言われた。「光あれ。」こうして、光があった。神は光を見て、良しとされた。神は光と闇を分け、光を昼と呼び、闇を夜と呼ばれた。夕べがあり、朝があった。第一の日である。

神は言われた。「水の中に大空あれ。水と水を分けよ。」神は大空を作り、大空の下と大空の上に水を分けさせられた。そのようになった。神は大空を天と呼ばれた。夕べがあり、朝があった。第二の日である。

神は言われた。「天の下の水は一つ所に集まれ。乾いた所が現れよ。」そのようになった。神は乾いた所を地と呼び、水の集まった所を海と呼ばれた。神はこれを見て、良しとされた。神は言われた。「地は草を芽生えさせよ。

種を持つ草と、それぞれの種を持つ実をつける果樹を、地に芽生えさせよ。」そのようになつた。地は草を芽生えさせ、それぞれの種を持つ草と、それぞれの種を持つ実をつける木を芽生えさせた。神はこれを見て、良しとされた。夕べがあり、朝があった。第三の日である。

神は言われた。「天の大空に光る物があつて、昼と夜を分け、季節のしるし、日や年のしるしとなれ。

天の大空に光る物があつて、地を照らせ。」そのようになつた。神は二つの大きな光る物と星を造り、大きな方に昼を治めさせ、小さな方に夜を治めさせられた。神はそれらを天の大空に置いて、地を照らせ、昼と夜を治めさせ、光と闇を分けさせられた。神はこれを見て、良しとされた。夕べがあり、朝があった。第四の日である。

神は言われた。「生き物が水の中に群がれ。鳥は地の上、天の大空の面を飛べ。」神は水に群がるもの、すなわち大きな怪物、うごめく生き物をそれぞれに、また、翼ある鳥をそれぞれに創造された。神はこれを見て、良しとされた。神はそれらのものを祝福して言われた。「産めよ、増えよ、海の水に満ちよ。鳥は地の上に増えよ。」夕べがあり、朝があった。第五の日である。

神は言われた。「地は、それぞれの生き物を産み出せ。家畜、這うもの、地の獸をそれぞれに産み出せ。」そのようになつた。神はそれぞれの地の獸、それぞれの家畜、それぞれの土を這うものを造られた。神はこれを見て、良しとされた。神は言われた。「我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう。そして海の魚、空の鳥、家畜、地の獸、地を這うものすべてを支配させよう。」神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された。神は彼らを祝福して言われた。「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ。」神は

言われた。「見よ、全地に生える、種を持つ草と種を持つ実をつける木を、すべてあなたたちに与えよう。それがあなたたちの食べ物となる。地の獣、空の鳥、地を這うものなど、すべて命あるものにはあらゆる青草を食べさせよう。」そのようになった。神はお造りになつたすべてのものを御覧になつた。見よ、それは極めて良かった。夕べがあり、朝があつた。第六の日である。』

「神による天地創造」という旧約聖書の記述の評価に関しては、大きく3つの見方がある。

まず第1の見方は、キリスト教保守派の人々である。彼らは、大真面目に上記の「神による天地創造」をそのまま信じている。ただし、ペテロは、第2の手紙の中で、「愛する者たちよ。この一言を忘れてはいけない。主にあっては、一日は千年のようであり、千年は一日のようである。」(ペテロ「3：8）と言っているように、当時の時間概念は現代のそれとは全く異なるようである。

第2の見方は、「神による天地創造」という旧約聖書の記述は、全く荒唐無稽のデマであり、非科学的という見解である。

これに対して第3の見方は、当時の科学のレベルから見れば、「神による天地創造」は無理のない見解であり、全く荒唐無稽とは言えず、何らかの根拠があるのではないかと肯定的な見方をする考え方である。次章では、それらの見解をいくつか紹介してみよう。

## 2.2. アッシャー大司教等による宇宙創成の推理

17世紀半ばに、旧約聖書の記録を忠実に遵り、神が天地創造をしたのは、紀元前4004年10月22日だと推定したアイルランドのアッシャー大司教等の見解を紹介しよう。

「1654年、アイルランドのアッシャー大司教は、（旧約）聖書の記録を忠実に遵り、神が天地創造をしたのは、紀元前4004年10月22日だと推定した。

19世紀の終わりに、ハットンは“宇宙と地球の歴史は果てしなく長く、始まりも終わりもない”と考えた。そして地球表層で現在起こる現象は過去もずっと同じように起こってきたとする「齊一説」を提唱した。彼は、イタリアの火山活動を目の当たりにし、1年間におこる地形の変化は小さく、地球の歴史が果てしなく長いことに気づいた。しかし、これは聖書と矛盾していた。ハットンは、“聖書は比喩に過ぎず、創造主の理性は自然界に満ちあふれている”とする理神論の立場をとった。ハットンの考えは、プレイフェアーとライエルへと受け継がれた。ライエルの『地質学原理』は、ダーウィンに多大な影響を与えた。

ケルヴィン 1st Baron Kelvin (本名 William Thomson) 1824-1907 は、イギリスの物理学者であり、熱力学の基礎を作った人物である。彼は、誕生したときに地球は溶融状態であり、徐々に冷却して現在に至ったと考えた。彼は、この問題を熱力学に基づき解析した。物体の冷却速度は、物体の大きさ・比熱・熱伝導率で決まる。その結果、地球の年齢は約2000万年となり、地質学者の見積もりと大きく食い違っていた。

以上は、主に、岐阜大学教育学部理科教育講座地学教室の「理科総合B 生命と地球環境」というホームページから「歴史的経緯」の部分をそのまま、引用してみたものである。

## 2.3. 土木工学者・岩松暉による聖書地質学等の研究

日本では、土木工学者の岩松暉は、土木学会西部支部第4回土砂災害に関するシンポジウム論文集の中で、アッシャー大司教等の説も引用し、次のように述べている。

『わが国では地質学は大学理学部で、土木工学は工学部で教授されており、全く別個の学問と思われている。しかし、実は近代地質学誕生時から両者は密接な関係を持って発展してきたのである。英國地質調査所のホー

ムページには“William Smith – A man who changed the world –”という特別なホームページが誇らしげに掲載されている。また，“The Map that Changed the World”（邦訳『世界を変えた地図—ウイリアム・スミスと地質学の誕生—』）という彼の伝記が出版され、全米のベストセラーになったという。ではスミス(1769-1839)とはどのような人物か。彼は測量士として仕事を始めたが、湿地帯の排水工事や石炭運河の建設に従事し、その過程で特定の化石が特定の地層に産出することなどに気づき、それを根拠に世界で最初の着色地質図を作成した。後に地層同定の法則や地層累重の法則と呼ばれるものである。

当時の地質学は、化石はノアの洪水の証拠と主張されるなどいわゆる聖書地質学の時代である。アッシャー大司教〔Archbishop James Ussher, 1580-1655, アイルランドの宗教家〕は、聖書の記録を忠実に遵り、神が天地創造をしたのは、紀元前4004年10月22日だとした。そのため、当時のカレンダーには今日は天地創造以来何千日目などと印刷されていた。スミスの実証的な研究が科学を聖書の呪縛から解き放つききっかけとなったとして後世再評価され、「世界を変えた男」と呼ばれたのである。しかし、当時の地質学は博物学の域を出ず、地質学会も貴族階級や僧侶の鉱物・化石コレクターの会食クラブだったから、彼のような農民出身の土木技師などは地質学会の入会すら拒否されたという。後年、調査事実や実験に基づく実証的な研究こそ科学であると認識されるような時代になり、晩年になって彼は当時の地質学会から名誉あるウォラストン・メダルを贈呈され、「イギリス地質学の父」と称えられた。墓標にも刻まれている。このように近代地質学は産業革命期に土木建設と密接に関わる実学として誕生し、近代科学に脱皮したのである。なお、時代は下るが、土質力学の父カール・テルツァーギ(1883-1963)もまた地質学に造詣が深く、応用地質学の講義を行い、現場における観察

と観測の重要性を説き続けていた。詳細はリチャード・E・グッドマン著、赤木俊允訳の伝記を参照されたい。』

地質学という自然科学の一分野において、聖書地質学という学問分野が開発されており、旧約聖書の天地創造や、宇宙創成に関して学問的検討が加えられていることは、筆者にとっては新発見であった。

### 3. 神の存在証明に関するトマス・アクヴィナスによる5つの方法

キリスト教における、説得力ある神の存在証明に関しては、スコラ哲学の創始者といわれ、当時最高の神学者であると言われた、13世紀の聖トマス・アクヴィナスが、初めて行った。トマス・アクヴィナスは、彼の大著、『スンマ』、日本語では、『神学大全』と訳されている聖典の中で神の存在証明を記述している。

第1部第2問「神について、神は存在するか」の中で、トマス・アクヴィナスは、神の存在を見事に証明している。5つの方法、を用いて神の存在を説明しており、当時としてはかなりの説得力があったと思われる。

トマス・アクヴィナスによる『神学大全』から、『第三項 神は存在するか』の部分を引用してみよう。

『第三については次のように進められる。神は存在しないと思われる。そのわけは、

1. 反対的に対立する二つのもののうちの一方が無限である場合には、他方は完全に滅ぼされるはずからである。しかるに、「神」というこの名称のもとに理解されるものは、何か無限の善である。ゆえに、もしも神が存在するとすれば、いかなる悪も見出されないはずである。ところが、世界には悪が見出される。したがって、神は存在しない。

2. さらに、あるものがより少数の根源によって成就され得ることは、それよりも多くの根源によってなされるのではない。しかる

に、世界の中に見られるすべてのことは、神が存在しないと仮定しても、それ以外の根源によって成就され得ると思われる。なぜなら、自然的なものは自然という根源に還元され、意図にもとづくものは人間的な理性または意志という根源に還元されるからである。したがって、神が存在すると考えるいかなる必要性も存在しない。

しかし反対に、『出エジプト記』第三章では、「私は、『私は存在する』という者である」という、神自身から出た言葉が語られている。

私は答えて言わなければならない。神が存在するということは五つの道によって証明することができる。

第一の、そして比較的明瞭な道は、運動という側面から導かれるものである。すなわち、この世界において何かが動かされているということは確実なことであり、それは感覚においても明白である。ところで、動いているものはすべて、他者によって動かされている。なぜなら、いかなるものも、それに向かって動かされるところのものに対して可能態にあるのでなければ動かされることはないのに対して、何かを動かすものは、現実態にある限りにおいて動かすのだからである。すなわち、動かすというのは、可能態から現実態へ何かを移行させることにほかならない。ところが、現実態にある何らかのものによって移行させられるのでなければ、いかなるものも、可能態から現実態へ移行させることはできない。たとえば、現実態において熱いものである火は、可能態において熱いものである木材を現実に熱いものにする。火は、そのようにして木材を動かし、変化させるのである。ところで、一つのものが同じ観点について現実態にあると同時に可能態にもある、ということはあり得ない。それがあり得るのは、観点が異なる場合のみである。たとえば、現実態において熱いものは、同時に可能態においても熱いものであるということはあり得ないが、同時に可能態において冷たいものであるとい

のはあり得ることである。したがって、あるものが、同じ観点について同じ方法で動かすものでありかつ動かされるものであるということは、すなわち自分自身を動かすということは、あり得ない。したがって、動かされているすべてのものは他者によって動かされているのでなければならない。したがって、もしも、動かされているものがそれによって動かされているところのものが、それ自身もまた動かされているならば、それもまた他者によって動かされているのでなければならない。その他の者もまた別の他者によって動かされているのでなければならない。しかし、この連鎖が無限に遡行するということはない。なぜなら、もしも無限に遡行するならば、いかなる第一の動者も存在しないことになり、その結果として、その他のいかなる動者も存在しないことになるからである。なぜなら、副次的な動者は、第一の動者によって動かされるのでないならば他者を動かすことがないからである。それはたとえば、杖が、それが手によって動かされるのでないならば他者を動かすことがないのと同様である。したがって、いかなるものによっても動かされていない何らかの第一の動者に到達することは必然である。そして、すべての人々は、これが神であると理解している。

第二の道は、作出因という観点から導かれるものである。すなわち、我々は、可感的な事物の間に作出因の系列が存在することを見出す。しかし、自分が自分の作出因であるというものは見出されず、またそのようなものは存在することができない。なぜなら、もしもそのようなものが存在するならば、それは自分よりも先に自分が存在することになるが、そのようなことはあり得ないからである。ところで、作出因の系列において、それを無限に遡行することはできない。なぜなら、順序づけられたすべての作出因の系列において、第一のものは中間のものの原因であり、中間のものは最後のものの原因だからであ

ることは、中間のものが複数の場合も一つだけの場合も同様である。ところで、原因が取り除かれるならば、結果もまた取り除かれる。したがって、もしも作出因の系列において第一のものが存在しないならば、最後のものも中間のものも存在しないであろう。ところが、もしも作出因の系列において無限に遡行するならば、第一の作出因は存在せず、したがって最後の結果も中間の作出因も存在しないことになるが、これが偽であるということは明らかである。したがって、何らかの第一の作出因が存在することを認めなければならぬ。そして、すべての人々は、それに對して神という名前を与えていた。

第三の道は、可能なものと必然的なものという觀点から導かれるものであり、それは次のような道である。すなわち、我々は、存在することも存在しないことも可能なものを世界の中に見出す。なぜなら、世界の中には、生成し、そして消滅するものが見出され、そしてその結果として、存在することも存在しないことも可能なものが見出されるからである。ところで、存在しているすべてのものがいかなる時点においても存在している、ということはあり得ない。なぜなら、存在しないことの可能なものは、それが存在していない時点もあるからである。したがって、もしもすべてのものが、存在しないことの可能なものであるならば、ある時点ではいかなるものも世界の中に存在していなかった、ということになる。ところで、もしもこれが真ならば、現在もなお、いかなるものも存在していないであろう。なぜなら、存在しないものは、何らかの存在するものが関与しなければ存在を開始しないからである。したがって、もしもいかなる存在者も存在しなかつたならば、何かが存在を開始することはできず、その結果として、現在に至ってもいかなるものも存在していないであろうが、これが偽であるということは明らかである。したがって、すべてのものが可能的な存在者であるということは

なく、世界の中には何らかの必然的な存在者が存在しなければならない。ところで、必然的に存在するすべてのものは、自らの必然性の原因を他の何かから受け取るか、それとも受け取らないかのいずれかである。しかし、自らの必然性の原因を他のものから受け取る必然的なものの系列を無限に遡行することはできない。これは、作出因の系列においてそれができないという、すでに証明されたことと同様である。したがって、それ自体によって必然的に存在する何かを措定することが必要である。それは、他の何かから必然性の原因を受け取るのではなく、他のものにとって必然性の原因となるものである。そして、すべての人々は、それを神と呼んでいる。

第四の道は、世界の中に見出される等級から導かれる。すなわち、世界の中には、善、真、高貴について、より多いものとより少ないものとが見出され、そしてそれは他のものについても同様である。ところで、さまざまなものについて、「より多い」あるいは「より少ない」と言われるが、それは、最高度にそうである何かに向かってどれだけ近づいているかという程度に応じてそのように言われるのである。たとえば、より多く熱いものというものは、最高度に熱いものにより多く近づいているもののことである。したがって、もっとも真である何か、もっとも善である何か、もっとも高貴である何かが存在する。そしてその結果として、最高度に存在するものが存在する。なぜなら、『形而上学』第二巻で言われているように、最高度に真であるものは最高度に存在するものだからである。ところで、ある類において最高度にしかじかであると言われるものは、その類に属するすべてのものの原因であり、たとえば、最高度に熱いものである火は、すべての熱いものの原因である、ということも同じ書物において言われている。したがって、すべての存在者にとって、それらの存在、善、そしてその他のあらゆる完全性の原因である何かが存在する。そ

して我々はこれを神と呼んでいる。

第五の道は、諸事物の統制から導かれる。我々は、認識を欠いているもの、すなわち自然の物体が、目的のために働くのを見る。このことは、それらのものが最善のものを結果として得るために常にあるいは頻繁に同じ方法で働くということから明らかである。したがって、それらのものが偶然によってではなく意図によってその目的を達成しているということは明らかである。ところで、認識を持たないものは、たとえば矢が射手によって方向づけられるように、認識と知性を持つ何かによって方向づけられるのでなければ、目的に向かって進むことができない。したがって、すべての自然の事物を目的に向けて秩序づけている知性的な何かが存在する。そして我々はこれを神と呼んでいる。

したがって、第一のものについては次のように言わなければならない。「神は最高度に善であるから、もしも彼が悪からでさえも善を作り出すほどに全能であり善であるのになかったならば、いかなるものであろうと、何らかの悪が自らの業のうちに存在することを許さなかつたであらう」とアウグスティヌスは『提要』において述べている。』

#### 4. 「トマス・アクヴィナスの第三の道」 の科学的説明 —『神』の存在の數 学的証明—

上記の「トマス・アクヴィナスによる5つの方法」のうち、「トマス・アクヴィナスの第三の道」の『神の存在』を証明している部分を再掲載してみよう。

『すべてのものが可能的な存在者であるということではなく、世界の中には何らかの必然的な存在者が存在しなければならない。ところで、必然的に存在するすべてのものは、自らの必然性の原因を他の何かから受け取るか、それとも受け取らないかのいずれかであ

る。しかし、自らの必然性の原因を他のものから受け取る必然的なものの系列を無限に遡行することはできない。これは、作出因の系列においてそれができないという、すでに証明されたことと同様である。したがって、それ自体によって必然的に存在する何かを措定することが必要である。それは、他の何かから必然性の原因を受け取るのではなく、他のものにとって必然性の原因となるものである。そして、すべての人々は、それを『神』と呼んでいる。』

上記の「トマス・アクヴィナスの第三の道」を数学的に記述してみよう。

具体例を考える方がわかりやすいので、例として親子関係を考えてみることにする。

「可能な存在者」である、ある人間が存在するためには、「存在者を存在せしめた原因者」である、その人の親が存在しなければならない。

$X_i$ : ある人間 (可能な存在者)

$X_{i+1}$ : その人の親（その存在者を存在せしめた原因者）

と定義すると、

$X_i$  と  $X_{i+1}$  との親子関係は、次式で数学的に記述することが出来る。

$$\textcircled{1} \quad X_i + 1 = F_i(X_i)$$

関数  $F_i$  は、 $X_i$  と  $X_{i+1}$  との親子関係を示す関数である。

$i=1$  から始めると、親子の関係は、

X2=F 1( X1)

X3=F 2( X2 )

• • • • •

$$X_{n+1} = F_n(X_n)$$

と、子  $n$  が有限であれば、いくらでも祖先・ $n+1$  に溯ることが出来る。

NHK「地球大進化」プロジェクト編（2004）によれば、人類の祖先に関しては、次のように記述されている。『あなたの身体のなかに

は、地球46億年の大変動が隠されている。突然、そういわれると、何のことかと思う人も多いだろう。じつは私たちの身体は、40億年以上というとんでもなく長い時間をかけてつくりあげられてきたものだ。その証拠に、時間をさかのぼっていくと、ヒトの祖先がじつにさまざまな形をとっていたことがわかる。ネズミ大の小動物だったこともあれば、硬骨魚類と呼ばれる魚の一種だったこともあら。最初は、たった一つの細胞からできた微生物だったにちがいない。』（2頁）

以上は、人類の祖先に関する生物学的な説明であるが、「最初のたった一つの細胞からできた微生物」もさらに何らかの祖先、つまり、「存在の原因者」に溯ることが出来よう。

「トマス・アクワイナスの第三の道」を、この親子関係（祖先の関係）に適用すると次の命題を導くことが出来る。

『子 $n$  が有限である限り、その親 $n+1$  は、有限であり、さらに、そのまた親 $n+2$  もまだ有限のままである。つまり、 $n$  が有限である限り、その原因者である親、つまり自らの必然性の原因を他のものから受け取る必然的なものの系列を無限に溯る（さかのぼる）ことはできない。これは、作出因の系列においてそれができないという、すでに証明されたことと同様である。したがって、それ自体によって必然的に存在する何かを措定することが必要である。それは、他の何かから必然性の原因を受け取るのではなく、他のものにとって必然性の原因となるものである。そして、それを『神』と呼ぶことが出来る。』

つまり、『神』とは、「有限の数列」から急に転回する「無限の原因者の存在」ということが出来る。有限の存在者を存在させる究極の原因者は、有限ではあり得ず、無限の原因者（存在者）ということにならざるを得ない。

あるものの存在の原因者を次々に溯って行くと、いくら有限でも逆行することはできない。有限は幾ら大きくなってもあくまで有限であり、無限になることはあり得ない。極め

て大きな有限の次には、『無限』（Infinity）という概念がどうして必要になる。つまり、極めて大きな有限から一挙に無限に飛ぶことによつてしか、あるものの存在の根源的な原因者を見い出すことは出来ない。「人間の世界」、「生物の世界」等は有限であり、さらにそれを作り出した宇宙も基本的には、有限のシステムである。人類や宇宙を作り出した、根源的な原因者は、無限の存在を考えざるを得ない。この無限の存在の原因者を、『神』（God）と定義することが出来る訳である。

神の存在を引き出す最大の「キーコンセプト」（鍵となる概念）は、「有限と無限」という概念である。人類や宇宙は有限であるが、それらを生み出した根源的なものは、有限ではあり得ず、無限なものにならざるを得ない。この無限の存在を、『神』と名付けることが出来るのである。このことによって、神の存在の科学的分析、数学的証明が出来たといえる。

「有限なもの」は、この世に実在する可能性があるが、「無限なもの」は、宇宙空間にでさえ実在する可能性のないものである。「無限なもの」は、抽象的な世界にしか存在しないものかもしれない。「他の何かから必然性の原因を受け取るのではなく、他のものにとって必然性の原因となるものである。」と、トマス・アクワイナスが説明したものこそ、「無限なもの」であり、それを『神』と呼ぶことが出来るのである。

## 5. 有限と無限との違い：「神」という無限集合—集合論の基礎—

上記の神の存在証明は、理解しやすくするために、かなり直感的に説明したものである。神を厳密に定義するためには、有限と無限という概念の本質的な違いを理解する必要がある。そのためには、19世紀後半の天才的数学学者であるカントールが開発した、現代数学の集合論の基礎知識が必要である。ここ

では、数学の予備知識が無い人にもわかるように簡単に集合論の基礎を説明しよう。なお、集合論の詳細は、たとえば、志賀浩二（2008）または斎藤正彦（2002）などを参照されたい。カントールの原典は、G. CANTOR著・功刀金二郎・村田全 訳・解説（1979）、「カントール 超限集合論」を参照されたい。

1からnまでの自然数の集まり（「集合」N）を考える。（注：ものの集まりのことを、数学では、「集合」という）

$$N = \{ 1, 2, 3, \dots, n-1, n \}$$

nを有限の自然数とすると、Nは有限集合となる。例えば、

$$S = \{ 1, 2, 3, \dots, n-1, \}$$

は、Nの（真）部分集合になるが、Sの個数は、Nの個数よりも小さいことは自明である。Sの個数はn-1であり、Nの個数はnなので、nが自然数ならば、n>n-1となる。

つまり、有限集合の場合は、部分の個数は全体の個数よりも必ず小さくなる。しかしながら、無限集合の場合は、このことが成立しないことがある。

次の無限集合を考えよう。

$$L = \{ 1, 2, 3, \dots, n-1, n, n+1, \dots \}$$

は、自然数全体の集合であり、無限集合である。

無限集合の場合には、集合の個数を、「基数」（Cardinal Number）または濃度と言うが、自然数全体の集合の基数は、「可算無限」（アレフゼロ）となる。

自然数全体の集合Lから、1からnまでの自然数の集合すなわち自然数の有限集合Nを除いた残りの集合、いわば有限集合の他者としての自然数の集合M (=L-N) を考える。

$$M = \{ n+1, n+2, n+3, \dots \}$$

この集合Mは、自然数全体の集合Lの無限部分集合である。

そこで、自然数全体の集合Lからこの他者としての自然数の集合Mへの次の写像（Mapping）を考えてみる。

$$\begin{array}{ccccccc} L = & \{ 1, 2, 3, \dots, n-1, n, n+1, \dots \} \\ & \downarrow \quad \downarrow \quad \downarrow \quad \quad \quad \downarrow \quad \downarrow \quad \downarrow \\ M = & \{ n+1, n+2, n+3, \dots, 2n-1, 2n, 2n+1, \dots \} \end{array}$$

この写像は、自然数全体の集合Lからその無限部分集合である他者としての自然数の集合Mへの「1対1対応」（One to One Correspondence）になっている。自然数全体の集合Lとその無限部分集合である他者としての自然数の集合Mの基数は一致し、共に、「可算無限」（アレフゼロ）となる。自然数の無限集合においては、その全体と部分は一致するのである。ここに、有限集合と無限集合の決定的な違いが存在するのである。有限の世界の論理と無限の世界の論理は全く異なるのである。

直感的に言うと次のようになる。有限集合Nのnを幾ら大きくしても、無限集合Lの大きさには全然及ばないのである。無限の大きさと有限の大きさとは全く次元が異なるのである。

$L = \{ 1, 2, \dots, n-1, n, n+1, \dots \}$  を自然数全体の集合とする。Lの1部分、例えば、偶数全体の集合を

$K = \{ 2, 4, \dots, 2(n-1), 2n, 2(n+1), \dots \}$  と記述すると、Kは、Lの真部分集合になる。

KとLとでは、どちらの方の個数（基数）が多いであろうか？常識的に言うと、Kは

Lの一部分であるから、Lの方がKよりも大きいと考えがちになる。というよりも、有限の世界で考えると、L-Kは奇数の集合になるのだから、偶数の集合Kの個数はLの半分と考えたくなる。しかしながら、先程の集合論の1対1対応という考え方を用いるとLとKの数は一致する、つまり、個数（基数）は同じ「可算無限」（アレフゼロ）であることが簡単に証明できる。やはり、無限集合の場合、偶数全体の集合Kは、部分であるが全体と一致することになる。これが、無限の世界の不思議さ、面白さである。

人間の世界にせよ、地球や太陽系、さらに

は、宇宙も有限の世界なのである。この世に存在しているものは、すべて有限の世界である。無限の世界は、「神」の世界のみなのである。無限の世界である「神」の世界が、有限の世界である宇宙や人類を作り出したのである。

「神」は、無限集合であると言えるが、無限集合にも様々なレベル・タイプがあるので、実際はもっと複雑になる。その詳細は、また別の機会に紹介したい。

実数、例えば、0と1とを結ぶ数直線は、実数になるが、実数の基数は、「連続無限」（アレフワン）となり、自然数の基数である「可算無限」（アレフゼロ）よりはるかに大きい無限になる。

## 6. 三位一体説の位相数学による分析と証明

### 6.1. 三位一体説とは何か？—イエス、神と聖霊の位格の同一性—

筆者は、最初、今から約40年前キリスト教と出会った時、イエス・キリストの存在と役割が全く理解出来なかった。『神』（God）の存在とその役割に関しては、自分をはじめとする人類や宇宙を作ってくれた存在として、直感的かつ理念的に理解出来た。そして、数十年間経って、『神』の存在に関しては、上記のような科学的、数学的な理解をすることが可能になった。

しかしながら、キリスト教の勉強を進めて行き、『三位一体説』という説があることを知った。『三位一体』（Holy Trinity）とは、神は三つの基本的な形で人間とかかわりを持つ、とするキリスト教の教理である。つまり、『三位一体説』とは、神と聖霊及びイエス・キリストは、実は同じものという考え方である。

もう少し詳しく『三位一体説』を説明することにしよう。『三位一体説』は、キリスト教の根本的教理の一つであり、父なる神、子

なるイエス・キリスト、聖霊の三者は、等質で不可分とする説である。

「三位一体（トリニティス）、英語ではトリニティ（Trinity）」は、ローマン・カトリック教会の中心的教義である。

1. 父なる神

2. 子なる神イエス・キリスト

3. 聖霊である神

の三者は、「同質」かつ「不可分」であるとする考え方ことで、同質不可分であるからには、キリストも聖霊も、「父なる神」と全く同じ「神性」を持つ。

これは東方諸教会も採用しており、特にローマ教会独自のものというわけではないが、カトリック教会はことさらにこれを強調する。

「三位一体」の「位」（ペルソナ）とは「人格」を意味するが、相手は神なので人格ではなく「位格」と呼ぶ。この三者は、位格（ペルソナ）は異なっていても、「実体」（スプスタンツィア Substantia：英語では、Substance）としては一つだと考える所以である。

聖霊とは何かと言うと、「三位一体」論で言う「聖霊」とは、イエス復活後の五旬節（聖霊降臨祭）に使徒たちに下された霊のことである。神自身の分身としての人格（位格）を有する。

### 6.2. 三位一体説の位相数学による証明—イエス、神と聖霊の位相同型分析—

三位一体説に関して、筆者は、まず、聖霊（The Holy Spirit）とは何か？を理解しようとした。そして、『聖霊』とは、『神』（God）の働きが表現されたものと理解した。つまり、『聖霊』とは、『神』の機能（Function）として理解することが出来る。数学的に表現すると、次の関数式②で記述することが出来る。

$$② \quad y = G(x)$$

ここに、

$x = \text{神}$

y= 聖霊

言い換えれば、 $x = \text{神}$  を原因（インプット）として、神の働き・機能である函数  $G$  によって作り出される結果（アウトプット）が、 $y = \text{聖霊}$ 、と定義出来る。 $x, y$  が集合の場合は、函数  $G$  は、写像 (Mapping) と言う。

神と聖霊とが一体とは、位相幾何学・位相数学 (Topology) を用いて説明すると次のようになる。

そのために、まず、現代の位相幾何学・位相数学における位相と位相空間の基本的概念を、具体例を用いて、簡単に説明しよう。

一般に、ある集合  $X$  のすべての部分集合の集まり（集合）を『ベキ集合』  $B(X)$  という。ベキ集合  $B(X)$  の部分集合  $T$  がある決められた条件（複雑なのでここでは省略する）を満たす時、 $T$  を「開集合系」または「位相」(Topology) という。 $T$  を備えた集合の対  $(X, T)$  を位相空間 (Topological Space) という。例えば、無限の自然数全体の集合  $L = \{1, 2, \dots, n-1, n, n+1, \dots\}$  とその部分集合の全体であるベキ集合  $B(L)$  からなる、対  $(L, B(L))$  は、位相空間になる。

次に、『位相同型』(Topological Isomorphism) の概念を、具体例を用いて説明しよう。例えば、平面上の、円  $X$  と 横円  $Y$  とが与えられたとする。すると、円  $X$  と 横円  $Y$  とは位相同型になる（複雑なのでここでは証明は省略する）。このように、2つの位相  $X$  と  $Y$  とが『同相』（位相同型）であるということは、この2つは、構造として全く同じものと見なされる。常識の世界（現実の世界）では、円と横円とは全く外見上別のものであるが、位相空間的には、両者は、全く同じ構造ということを意味するわけなのである。

この『位相同型』の理論を用いて「三位一体説」の数学的証明を行うことにしよう。神のおられる位相空間 (Topological Space)  $G$  と聖霊のおられる位相空間  $S$  とは、別の世界（別の位相空間）ではあるが、神の位相空間

$G$  から、聖霊の位相空間  $S$  に位相写像変換 (Topological Mapping Transformation)  $F$  を行うと、神と聖霊が位相的に一致する、ということになる。このことを、位相幾何学では、『位相同型』(Topological Isomorphism) と呼んでいる。つまり、位相数学の言葉で表すと、「神と聖霊とは位相同型である」という命題 (Proposition) になる。これで、聖霊と神が構造的に一致することが数学的に証明されたことになる。

なお、位相数学 (Topology) は、数学の分野においてもかなり難しいが、その基礎及び概要は、例えば、齊藤正彦 (2002) 等を参照されたい。

次に、イエス・キリストと神とが一致することを、位相数学を用いて証明することにしよう。

イエス・キリストは、聖母マリアから処女受胎したと聖書では書かれている。処女受胎に関しては、キリスト教徒の中では信じている人もいることは筆者も知っている。しかしながら、現代の科学のレベルで考えると筆者には処女受胎は理解出来ないが、約二千年も前の時代の人々は、イエスの神秘性・神性を強調したいために選んだ解釈であると推測することが出来る。現代科学から見て非科学的と片付けてしまうことは、賢明とは言えない。

イエスは、「人の子」であるから、本来有限世界である人間社会に存在しているわけである。しかしながら、イエスの行った様々な超人的・神秘的な言動から、当時の人々は、無限空間である「神の世界」にもイエスは属していると理解しようとしたのである。つまり、イエス・キリストは、「人の世界」(Human World) という有限の位相空間  $(H, B(H))$  に属しているが、同時に、「神の世界」(God World) という無限の位相空間  $(G, B(G))$  にも属していることがイエスの言動によって示されたのである。言い換えれば、イエスは、神と同じように聖霊を送る機能・働きを有し実践したのである。つまり、イエス・キリスト

と神とは位相同型であることが示された訳である。

さらに、先程証明した神と聖霊とが位相同型であることを用いると、三段論法により、「神、イエスキリストと聖霊の三者が位相同型である」ことが示されることになる。つまり、神、イエスキリストと聖霊の三位一体説が証明されたことになる。

「イエスは、聖霊と一致する」ことも同様に証明できる。つまり、イエスは、その働きとして、神と同様に、聖霊を与える機能(Function)を有しているわけである。

新約聖書に書かれているイエスが行った様々な奇跡は、上記の位相同型の考え方で解釈すると現代人にも理解しやすくなる。例えば、「ヨハネによる福音書」(ヨハネ2・1-11)の「ガリラヤのカナでの婚礼」でイエスが行った「水をぶどう酒に変えた」ケースが、その典型例であろう。

「新約聖書」のすばらしさは、この三位一体説を、具体例を用いて分かり易く記述していることがある。「新約聖書」を現代の位相数学で解釈すると次の命題が主張できると筆者には考えられる。

「新約聖書」は、「神、イエスキリストと聖霊の三者が位相同型である」ことを記述した、実は現代位相数学のテキスト応用版の、約二千年前の古代版であると言い換えることもできよう。

この三位一体説の科学的説明・位相幾何学的説明を筆者が文章化するのは、今回が初めてであるが、実は、筆者がキリスト教の勉強をはじめた1995年頃、ある研究会で上記の説明を、図を用いて口答発表したことがある(三井純人氏が参加)。昨年(2008年)秋に葉山セミナーハウスで開催された「依存症とキリスト教」プロジェクトの研究会においても、安田作成のレジメに基づいて黒板を使い発表を行ったことがある(三井・田代氏等の客員研究員などが参加)。

筆者は、今から約45年前の学生時代、東

京工業大学数学科に在籍し、矢野健太郎・大槻富之助・遠山啓・国澤清典・志賀浩二教授等の一流の數学者から位相幾何学・微分幾何学等を学んだが、卒業後は、環境問題・都市問題等の社会工学的研究に転身したため、この分野の数学はほとんど忘れていた。しかしながら、学生時代に学んだ位相幾何学等が三位一体説の科学的・数学的証明に適用出来ることは、夢にも思っていなかった。神の導きに對して、改めて感謝したい。

## 7. 神、聖霊、イエス・キリスト及び宇宙、人類との関係の構造—集合・位相論による定義と分析—

この世、つまり、人類が居住し生きている地球さらには太陽系、もっと行くと宇宙は、約150億年前にビッグバンで出来たと現代の宇宙科学では言われている。最近の宇宙科学は進歩が早くかつその理解は難しいが、その詳細は、ホーキング(1990)、磯部秀三(1991)、松井孝典(2003)及び川合光(2005)等を参照されたい。

しかしながら、宇宙は幾ら大きくなろうとも有限の世界である。この有限集合の世界である宇宙(=自然)Nを作り出したのが無限集合である『神』(God)の世界Gである。つまり、宇宙(=自然)は、無限集合である「神」の世界の有限部分集合となる。我々人類が住む地球がある宇宙(=自然)Nは、無限集合である「神」の世界Gの有限部分集合であり、神の世界に属しているわけである。

無限集合である『神』の世界Gから、有限部分集合である宇宙(=自然)Nを取り除いた集合K(=G - N)は、無限部分集合になるが、これは、宇宙(=自然)を含まない「狭義の神の世界」と呼べる。集合論の特質(=定理)によって、「狭義の神の世界」Kは、実は、元の無限集合である『神』の世界Gと一致する。つまり、宇宙Nがいくら広いと

いっても無限である『神』の世界 G にははあるかに及ばないのである。図 2 にこの「神の世界」(無限集合)と宇宙(有限部分集合)との関係を示す。

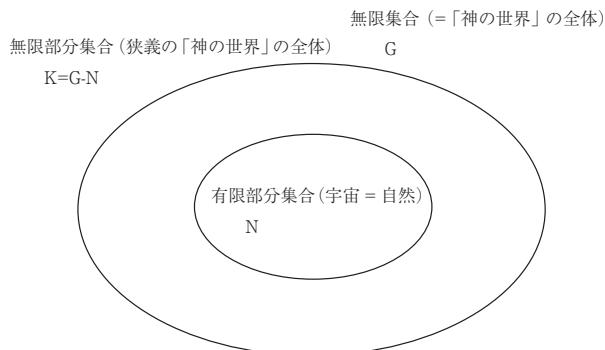


図2. 神の世界（無限集合）と宇宙（有限部分集合）との関係

次に、三位一体説をこの図で説明してみよう。聖霊とは、無限集合である『神』の世界 G と位相同型である無限部分集合 H であると言える。聖霊の世界 H は『神』 G の無限部分集合であり、有限部分集合である宇宙 (= 自然) N を含んでおり、宇宙の部分集合である地球上で人類に聖霊を与えてくれるのである。イエス・キリストは、「人の子」であり宇宙 (= 自然) N に属していたが、神から聖霊を受けて、神化(かみか)したのである。人間の神化は、イエス・キリストによって実現されたのであり、イエスは、聖霊をこの世に送ることによって新約聖書に書かれている様々な奇跡を実行したわけである。

このように、宇宙や人類は、『神』によって創造されたのであり、聖霊とイエス・キリストは、神との位格が同じであり、神の働きをしてくれるのである。これが、三位一体説の現代数学による説明と解釈になる。

キリスト教でいう「天地創造」や「神の受肉」は、以上の安田理論を用いると次のように説明できる。

無限集合である『神』 G は、その働き

(Function) として、『神』 G と位相同型である無限部分集合 H という聖霊を送り、宇宙(=自然) N という有限部分集合をお造りになった。

旧約聖書で述べている天地創造は、現代数学で解釈すると以上のようにになり、その基本的構造は正しいといえる。当時の人々は、現代数学の知識が無かったので、当時の知識のレベルで解釈し、記述したのである。

さらに、『神』は、「人の子」であるイエス・キリストに聖霊を送り、イエスを神化(かみか)した。つまり、「イエスに神が宿った」訳である。これが、いわゆる「神の受肉」の現代数学・現代科学に基づく解釈であるといえる。

## 8. 結論と課題

### 8.1. 結果の要約

当初は、「神、宇宙と人類の存在および関係に関する科学的分析」のテーマに大上段からふりかかり、人類の発生から人類文明の発展、温暖化等の地球規模環境問題の原因と対策、宇宙生成に関する宇宙科学等の自然科学的研究の最近の成果、そして、そこから、「神の存在」と、「神は、なぜ宇宙を作り、人類を地球上に発生させたのか?」などを、自然科学的知見を踏まえて、全体的、科学的に展開したいと考えていた。しかしながら、そのテーマは、あまりにも大きなテーマであることに気がついた。そこで、初回の今回は、出来る所から挑戦しようと絞り込んだ。

今回は、「旧約聖書の「創世記」における宇宙創造の叙述」及び旧約聖書の「創世記」に対する「アッシャー大司教等による宇宙創成の推理」、さらに、キリスト教における説得力ある神の存在証明に関しては、スコラ哲学の創始者といわれ、神学者である、13世紀の聖トマス・アクヴィナスが、初めて行ったと言われている文献をまず取り上げた。

トマス・アクヴィナスが大著、『スンマ』、

日本語では、『神学大全』と訳されている、聖典の中で記述している「神の存在証明に関するトマス・アクヴィナスによる5つの方法」にとくに言及した。「トマス・アクヴィナスの第三の道」の筆者自身による科学的説明を行い、『神』の存在の数学的証明を実行した。

次に、キリスト教において最も重要な概念であり教えである「三位一体説」の位相幾何学・位相数学による分析を実行した。イエス、神と聖霊が、一体であることを「位相同型」の理論を用いて分析し、証明した。

「神の存在」及び「三位一体説」の科学的説明、ことに数学的証明を行えたことが、今回の序論研究の最大の成果であると言える。

## 8.2. 今後の課題

今回、「神、宇宙と人類の存在および関係に関する科学的分析」という大きなテーマを付けた割には、出来たことはわずかしかない。序論(1)というタイトルを付けたように、序論編のさらに序論しか出来ていない。また、もしかしたら間違っているかもしれない。しかししながら、約40年前に出会って以来抱いていた神やキリストの存在や関係に関する科学的分析の第1歩を踏み出すことは出来たと信じたい。残された人生は余りないが、死ぬまで、ライフワークの一つとして挑戦してゆくつもりである。神のご加護があることを祈りたい。

神の存在に関する科学的分析、ことに数学的分析に関しては、同志社大学経済学部の落合仁司が別のアプローチを用いて行っていることは既に紹介した。ただし、落合の研究方法は、カントールの集合論を用いる方法論に特徴があるが、あまりにも形式的に集合論を数理神学に適用しているため、「数理神学イコール集合論」という誤解を招く可能性がある。落合の数理神学に関しては、最近出版された下記の著書を参考にされたい。

落合仁司（2009）、「数理神学を学ぶ人のために」、世界思想社、平成21年11月

今後は、落合とも連絡を取り、筆者の方法論との関係及び融合を図り、本テーマをさらに発展させて行く予定である。

また、筆者は、安田八十五（2008）、「五木寛之「自力と他力」と安田八十五「依存と自立」との関係の比較研究—「依存と自立」と「他力と自力」：依存症社会論序説（2）—」、『キリスト教と文化』、第6号、の中で、五木寛之の「他力」（*Tariki*）思想をキリスト教等の「神への依存」（*Depend on the God*）と比較し、両者は一致するという研究成果を提出したことがある。つまり、「他力」という概念は、「神への依存」（*Depend on the God*）という概念と一致するという命題（「他力」イコール（=）「神への依存」）を提示し、言葉を用いて証明した。この命題の数学的証明にも今後挑戦したい。

五木寛之の「他力」思想は、元々、仏教の一派である浄土真宗や「親鸞」に由来している。最近、五木寛之は、ライフワークともいいうべき、中日新聞・東京新聞などの全国各地の地方新聞に連載していた「親鸞」を講談社から単行本上下として平成22年1月に出版した。また、五木寛之（2009）は、「はじました「地獄」をどう生きるか」、新潮45、平成21年3月号、の中で「神の不在」ともいるべき現代社会の特質を鋭くとらえ、「キリスト教やイスラム教といった原理主義的宗教が互いに対立するのではなく、多様な神を認めながら自ら信じる神を選択する「選択的一神教」が存在する、豊かな多神教の時代に入るべきだと思います。」（同誌、24頁）など「一神教と多神教の問題」に関して、重要な問題提起を行っている。筆者は、理論的には、神は唯一、つまり、「一神教」しかあり得ないと考えているが、現実世界の宗教問題を考える場合には、五木の「選択的一神教」という考え方興味深いものがある。「神の存在」の問題の重要課題として「一神教と多神教の問題」を、今後筆者も考えて行きたい。仮に、一神教と多神教とを統一する宗教理論が出来

れば、イスラム教やキリスト教、ユダヤ教等の間で紛争の種になっている様々な問題も解決の糸口を見つけることが出来る可能性がある。

## 追 記：

本論文のテーマは、筆者がキリスト教に関心を持つようになった約40年前から温めて来たテーマであるが、約15年前の1995年頃から研究論文作成の準備に取りかかった。2008年10月中旬、葉山セミナーハウスで開催された「依存症とキリスト教」研究プロジェクト葉山合宿セミナーで本格的な研究報告を初めて行った（三井純人・田代泰成客員研究員も参加）。神の存在に関する科学的・数学的証明の分析、という極めて難しいテーマなので、十分時間をかける必要がある。なお、昨年度の所報第7号に掲載した上記論文の当初の目次（案）を下記に示す。今回は、その一部、序論編の序論しか出来ていない。

「神、人間と宇宙の存在と関係に関する科学的分析」（仮）の目次（案）：

1. 序論—研究の背景と目的
2. 人間（人類）発生の理由と目的
  - －人類はなぜ、どのようにして生まれたのか？－
    - 2-1. 地球環境と人類の発生
    - 2-2. 地球環境と地球生命系との循環構造
3. 神、人間と宇宙の創成への理解に関する歴史
  - 3-1. 神の存在と宇宙創造の神話的説明
    - 3-1-1 旧約聖書の「創世記」における宇宙創造の神話的説明
    - 3-1-2 アッシャー大司教による宇宙創成の推理
    - 3-1-3 神の存在証明に関するトマス・アクワイナスの5つの方法
  - 3-2. 最新宇宙論による宇宙創生の説明
  - 3-3. なぜ、宇宙創生の目的の解明は難しいのか？

4. 神はなぜ、宇宙や人類を作ったのか？
  - 4-1. 科学の進歩は永遠かつ無限か？
  - 4-2. 人類・宇宙は神に依存せざるを得ない！ The Universe Depends on the God!
5. 神の存在と役割に関する科学的分析
  - 5-1. 三位一体説の位相幾何学（Topology）による分析
  - 5-2. 十字架の数理神学の可能性－神の存在と活動に関する数学的分析－
  - 5-3. 落合仁司の研究との関連－
6. 結論と課題

## 謝 辞：

筆者が本論文を執筆しようという動機を抱いたのは、2002年（平成14年）4月、筑波大学から関東学院大学経済学部に着任し、すぐキリスト教と文化研究所の所員の任命を受けてからである。ことに、編集委員会・坂田祐研究プロジェクトおよび「依存症とキリスト教」研究プロジェクト等で一緒にさせて頂きました。様々な刺激を与えて頂いた帆苅猛教授をはじめとするチャプレンの先生方及び研究所関係者にまず深く感謝する。また、依存症に関する12ステップ研究グループを1996年から一緒に進めて来た三井純人・田代泰成客員研究員等の助言・共同研究等にもとても助けられた。「神の存在と役割の科学的分析」という本研究テーマは、広くかつ深いテーマであり、今後も研究を継続して行く予定なので、ご指導をよろしくお願ひいたします。

**参考文献：**

- A. 筆者（安田八十五）による環境問題に関する文献（本を中心に・発表順）
- 1) 綿抜邦彦監修・安田八十五他著（1989）,『病める地球をどう救うか：第三ミレニアム人類への提言—地球規模環境問題と社会システムの変革—』,共立出版,平成元年10月
  - 2) 北野康・田中正之（編）・安田八十五他著（1990）,『地球温暖化がわかる本』,マクミラン・リサーチ研究所,平成2年
  - 3) 安田八十五他（1991）,『デザイン・ビッグバン！人類と地球・共存の可能性を探る－未来地球システム構築のための5つの提言－』,PHP研究所,平成3年9月
  - 4) 安田八十五（1993）,「環境教育を考える—環境生涯学習システムの構想と実践—」,山口県教育研修所所報, No.53, 平成5年3月, pp.9 – 14
  - 5) 安田八十五他（1993）,「経済政策入門(2)(応用)」,有斐閣,平成5年7月
  - 6) 安田八十五（1993・2001）,『ごみゼロ社会をめざして—循環型社会システムの構築と実践—』,日報,平成5年5月(初版),平成13年5月(8版),385頁
  - 7) 安田八十五（1994・2000）,『アメリカン・リサイクル—環境問題に挑戦する米国の企業と市民—』,日報,平成6年4月(初版),平成12年10月(5版),179頁
  - 8) 安田八十五（1998－1999）,『ごみから社会を見つめ直す』,公明新聞,平成10年7月から平成11年9月まで毎週火（金）曜日連載（計50回）。この連載は近々本にして出版の予定(仮題:『ごみが日本を滅ぼす!』,日報出版の予定)。下記の安田八十五専用ホームページでもご覧になれます。  
<http://www5d.biglobe.ne.jp/~yasuda85/>
  - 9) 安田八十五編著（2010）,『大規模プロジェクトの評価と測定：理論と実際—大規模公共事業と環境保全とは両立するか？東京湾からの政策提言—』(仮題),関東学院大学出版会,平成22年3月(近刊)
- B. 筆者（安田八十五）及び「依存症とキリスト教」プロジェクトメンバー等によるもの（本誌に掲載したものを中心：発表順）
- 1) 安田八十五（2007）,「依存と自立：依存症社会論序説（1）—依存症からの回復のための12ステップ方式自助グループの有効性—」,『キリスト教と文化』,第5号, pp. 3- pp. 21, 関東学院大学キリスト教と文化研究所 2006年度所報, 平成19年3月発行
  - 2) 三井純人（2007）,「12ステップの自助グループと新約聖書—最後の晚餐を中心に—」,『キリスト教と文化』,第5号, pp. 23- pp. 34, 関東学院大学キリスト教と文化研究所 2006年度所報, 平成19年3月発行
  - 3) 田代泰成（2007）,「ニーチェのキリスト教批判の真相—日本人キリスト者はニーチェのキリスト教批判にどう答えるか—」,『キリスト教と文化』,第5号, pp. 35- pp. 51, 関東学院大学キリスト教と文化研究所 2006年度所報, 平成19年3月発行
  - 4) 安田八十五（2008）,「五木寛之「自力と他力」と安田八十五「依存と自立」との関係の比較研究—「依存と自立」と「他力と自力」：依存症社会論序説（2）—」,『キリスト教と文化』,第6号, pp. 5- pp. 24, 関東学院大学キリスト教と文化研究所 2007年度所報, 平成20年3月発行
  - 5) 田代泰成（2008）,「ラインホールト・ニーバーの信仰と成長の12ステップ・プログラム」,『キリスト教と文化』,第6号, pp. 25- pp. 48, 関東学院大学キリスト教と文化研究所 2007年度所報, 平成20年3月発行
  - 6) 三井純人（2007）,「新約聖書における靈性についての比較宗教学的考察」,『キリスト教と文化』,第6号, pp. 49- pp. 60, 関東学院大学キリスト教と文化研究所 2007年度所報, 平成20年3月発行
  - 7) 渡邊一成（2008）,「境界性人格障害について」,『キリスト教と文化』,第6号, pp. 147- pp. 151, 関東学院大学キリスト教と文化研究所 2007年度所報, 平成20年3月発行
  - 8) 三井純人・安田八十五（2009）,「日本における依存症研究の出発と到達点—斎藤学「精神科医から見た依存症の本質と対策」講演記録の概要—」,『キリスト教と文化』,第7号, pp. 21- pp. 27, 関東学院大学キリスト教と文化研究所・2008年度所報, 平成21年3月発行
  - 9) 安田八十五（2009）,「地球環境問題をごみ問題から考え直す—環境問題の考え方と基本的文献の展望—」,『キリスト教と文化』,第7号, pp. 29- pp. 34, 関東学院大学キリスト教と文化研究所・2008年度所報, 平成21年3月発行
  - 10) 田代泰成（2009）,「ラインホールト・ニーバーの「人間の本性」における狙いとコンテキスト」,『キリスト教と文化』,第7号, pp. 35- pp. 54, 関

- 東学院大学キリスト教と文化研究所・2008年度所報、平成21年3月発行
- 11) 三井純人 (2009), 「ユング心理学における自己のイメージ—依存症研究の視点から—」『キリスト教と文化』, 第7号, PP.55-PP.67, 関東学院大学キリスト教と文化研究所・2008年度所報、平成21年3月発行
  - 12) 萩西賢太 (2009), 「文化資源としての語り—相互扶助を越える Alcoholics Anonymous の意義—」『キリスト教と文化』, 第7号, PP.69-PP.78, 関東学院大学キリスト教と文化研究所・2008年度所報、平成21年3月発行
- C. 今回、特に参考にしたその他の文献(本を中心)に(順不同)**
- 1) スティーヴン・W・ホーキング著・佐藤勝彦監訳(1990)「ホーキングの最新宇宙論—ブラックホールからベビーユニバースへ」, 日本放送出版会, 平成2年12月
  - 2) 磯部秀三 (1991), 「宇宙はこうして発見された」, 河出書房新社, 平成3年8月
  - 3) 川合光 (2005), 「はじめての〈超ひも理論〉—宇宙・力・時間の謎を解く—」, 講談社, 平成17年12月
  - 4) 松井孝典 (2003), 「宇宙人としての生き方—アストロバイオロジーへの招待—」, 岩波書店, 平成15年5月
  - 5) 水原舜爾 (1991), 「科学を包む仏教」, 大蔵出版, 平成3年1月
  - 6) 福岡伸一 (2007), 「生物と無生物のあいだ」, 講談社, 平成19年5月
  - 7) 山田晶 (責任編集) (1975), 「世界の名著 14 —トマス・アクワイナス」, 中央公論社, 昭和50年6月(注:「神学大全」の和訳が掲載されている)
  - 8) 落合仁司 (1995), 「地中海の無限者—東西キリスト教の神一人間論」, 効草書房, 平成7年6月
  - 9) 落合仁司 (2008), 「十字架の数理神学」, 日本基督教教会, 平成20年9月17日, 会場=関東学院大学
  - 10) 落合仁司 (2009), 「数理神学を学ぶ人のために」, 世界思想社, 平成21年11月
  - 11) 志賀浩二 (2008), 「無限への飛翔:集合論の誕生—大人のための数学 3巻」, 紀伊國屋書店, 平成20年2月(注:集合論への入門書でとても分かりやすい。筆者は、志賀浩二教授から学生時代に集合論・位相数学を学んだ)
  - 12) 斎藤正彦 (2002), 「数学の基礎:集合・数・位相~基礎数学 14」, 東大出版会, 平成14年8月(注:集合論と位相数学の基本的テキスト)
  - 13) G. CANTOR 著・功刀金二郎・村田全 訳・解説 (1979), 「カントル 超限集合論」, 共立出版, 昭和54年9月
  - 14) 五木寛之 (2000), 「他力」, 講談社, 平成12年11月
  - 15) 五木寛之 (2006), 「自力と他力」, 講談社, 平成18年3月
  - 16) 五木寛之 (2008), 「人間の覚悟」, 新潮社, 平成20年3月
  - 17) 五木寛之 (2009), 「はじまった「地獄」をどう生きるか」, 『新潮 45』, 第28卷第3号(通巻323号), 平成21年3月号, PP.22-29
  - 18) 五木寛之 (2010), 「親鸞(上)」, 講談社, 平成22年1月
  - 19) 五木寛之 (2010), 「親鸞(下)」, 講談社, 平成22年1月
  - 20) 高尾利数 (1996), 「イエスとは誰か」, 日本放送出版協会, 平成8年3月
  - 21) 八木雄二 (2002), 「イエスと親鸞」, 講談社, 平成14年7月
  - 22) 八木誠一・秋月龍, (1989), 「親鸞とパウロ」, 青土社, 平成元年1月
  - 23) 小河陽 (1978), 「イエスの言葉—その編集史的考察—」, 教文館, 昭和53年5月
  - 24) 小河陽 (2005), 「パウロとペテロ」, 講談社, 平成17年5月
  - 25) 山本七平 (2005), 「山本七平の旧約聖書物語(上)(下)」, ビジネス社, 平成17年4月(初版は徳間書房)
  - 26) 共同訳聖書実行委員会 (1987), 「聖書 新共同訳—旧約聖書続編つき」, 日本聖書協会
  - 27) 片山寛 (1995), 「トマス・アクワイナスの三位一体論研究」, 創文社, 平成7年2月
  - 28) 坪野吉孝 (2009), 「依存症患者の心の癒やし」, 朝日新聞(夕刊), 平成21年12月28日(月)
  - 29) 蟹江憲文 (2010), 「25%削減の旗を降ろすな—どうするポスト京都の数値目標(上)ー」, 日本経済新聞・経済教室欄, 平成22年1月11日(月)
  - 30) NHK「地球大進化」プロジェクト編 (2004), 「NHKスペシャル 地球大進化 46億年への旅 1 生命の星 大衝突からの始まり」, 日本放送出版協会, 平成16年4月

参考ホームページ：

- 1) 岐阜大学教育学部理科教育講座地学教室：「理  
科総合B 生命と地球環境」  
[http://chigaku.ed.gifu-u.ac.jp/chigakuhp/rika-b/  
htmls/age\\_of\\_earth/historical.html](http://chigaku.ed.gifu-u.ac.jp/chigakuhp/rika-b/htmls/age_of_earth/historical.html)
- 2) 岩松 晉（2008）、「地質リスクの軽減と地質地  
盤情報」、土木学会西部支部第4回土砂災害に  
関するシンポジウム論文集、45-48、平成20年  
8月  
[http://www.geocities.jp/f\\_iwamatsu/retire/risk.html](http://www.geocities.jp/f_iwamatsu/retire/risk.html)
- 3) 「神学大全」著者——トマス・アクィナス  
(Thomas Aquinas)  
翻訳者——大黒学のホームページ：  
<http://theologia.jp/index.html>
- 4) 旧約聖書 創世記 第1章 第1節～第31節  
[http://www12.ocn.ne.jp/~sokkidou/sokkig\\_01/0101\\_0131.html](http://www12.ocn.ne.jp/~sokkidou/sokkig_01/0101_0131.html)
- 5) 安田八十五専用ホームページ：  
<http://www.yasuda85.com/>
- 6) 安田八十五ビッグローブ個人ホームページ：  
<http://www5d.biglobe.ne.jp/~yasuda85/>

## 若松賤子「忘れ形見」論 ——子供の役割の発見——

岡 西 愛 濃

A Study of Wakamatsu Shizuko's "Wasuregatami" :  
—The Discovery of Child's Role—

Ano Okanishi

### 要 旨

「忘れ形見」は、明治 23 年 1 月 1 日、『女学雑誌』第 194 号の新年附録として掲載された若松賤子の翻案小説である。本稿では、若松賤子が作品の序文に「どうか其心持を」と述べていることに着目して、作品から読み取れる作者の意図を考察した。掲載誌である『女学雑誌』の社説では、母親による教育を国家の事業と結びつけ、「将来の日本人民」を形成するものとして繰り返し論じている。しかし、若松賤子は『女学雑誌』において活躍しながらも、その子供に対する見方は「ホーム」を軸としており、『女学雑誌』の教育観とは隔たりがある。賤子は「ホーム」における子供の役割を、「邪道に陥らうとする父の足をとめ、卑屈に流れ行く母の心に高潔の徳を思ひ起させる」とし、大人を浄化させることと述べている。これを「忘れ形見」に重ねると、「僕」に理想の子供像を見ることができる。「僕」は可愛がってくれた「奥様」が実母であることを知らず、「ホーム」を持たない子供であるが、「奥様」とての「僕」とは自らの罪を認識し続ける存在なのである。「僕」は「奥様」の苦悩について知ることはないが、「奥様」の遺志にかなうよう「是非清い勇ましい人物にならなくつてはならない」と決意する。こうした「僕」と「奥様」のありかたから、若松賤子は、子供の役割を

見出し、「忘れ形見」に示そうとしたのではないかと考えられる。

### キーワード

- ① 若松賤子 ② 子供 ③ 『女学雑誌』
- ④ 「忘れ形見」 ⑤ ホーム

### 目 次

#### 序

1. 『女学雑誌』における教育論
2. 若松賤子の「小説家の本分」と「忘れ形見」
3. 「僕」の役割
4. 「忘れ形見」の理想

#### 結

### 序

若松賤子の翻案小説「忘れ形見」は、明治 23 年 1 月 1 日、『女学雑誌』第 194 号の新年附録として発表された<sup>1)</sup>。内容は、これから船乗りになる数え年 14 歳の少年が、孤児の自分を可愛がってくれた高貴な「奥様」との交流の思い出を語るというものである。物語の聞き手および作品の読者は、作品の亡き「奥様」が実は少年の母親であったことに気付かされる。だが、語り手である少年は、それに気付かないままに作品は閉じられる。少年の届託のない語りを通して、聞き手および読者

は「奥様」の内なる苦悩を見出すことになる。

さて、本作品には、初出から若松賤子による次のような序文が付されてきた。

ミス、プロクトルの “The Sailor Boy” と云ふ詩を読みまして、一形ならず感じました、どうか其心持をと思ふて物語振りに書綴つて見ましたが、固より小説など云ふべきものではありません。

若松賤子は、序文で、この作品が “The Sailor Boy” という詩を物語風に翻案したものであることを記している。しかし、本稿で問題にしたいのは、「一形ならず感じ」たために「どうか其心持を」伝えようとしたとして、原詩の感動を読者に伝える目的があることをわざわざ明らかにした点である。若松賤子が伝えようとした「其心持」の内容は説明されていないため、伝えるべき「其心持」とは、作品の読者の読みに委ねられている。すると、「其心持」とは、作品のどこから読み取れば良いのだろうか。たしかに序文の「一形ならず感じました」という言葉には賤子の訳者の原詩に対する評価がわずかに読み取れる。だが、「忘れ形見」のおよそ三ヵ月前に『女学雑誌』に発表された創作「お向ふの離れ」<sup>2)</sup>の末尾と同様の教訓的な押しつけがましさ<sup>3)</sup>はここにはない。それは、なぜか。さらに、原詩を「物語り振りに書き綴つて」はみたが、「小説など云ふべきもの」ではないという。では、本作品がどのように捉えられることを、この序文は要求しているのだろうか。

こうした疑問を明らかにするために、本稿では、『女学雑誌』に反復された教育についての主張を確認し、若松賤子の同時期の言説を追ってみたい。『女学雑誌』の主張と若松賤子の翻案の目的意識とを合わせて見ることで、本作品に託された意図が見えてくると思われるからである。

## 1. 『女学雑誌』における教育論

「忘れ形見」は、『女学雑誌』の明治23年の新年附録として掲載された。このことは、「忘れ形見」が『女学雑誌』の顔となるのにふさわしい内容であったことを示していると思われる。

「忘れ形見」は、『女学雑誌』という場において、明治中期という時代のどのような言説の中に位置付けられる作品なのだろうか。本節では、「忘れ形見」が、孤児として育った少年である「僕」と、「僕」の実母でありながら明かすことができない「奥様」との母子の物語であることに着目し、まずは、『女学雑誌』の教育論から見える子供観を確認することで、「忘れ形見」における少年の独自性を明らかにしてみたい。

『女学雑誌』の創刊間もない時期である第14号（明治19年2月5日）、第15号（同年同月15日）に掲載された社説「母親の心得。愛育と云ふ事」は、『女学雑誌』の教育論を示した早い時期のものである。ここでは、子供は「教育次第によりて変化すべし」と述べ、「子供の教育は専ら母親の心得に因る」ものであるから、母親は「勉めて之を教ゆるの道を学び置かざる可らず」とする。ナポレオンおよび孟子が賢い母親に育てられた逸話を例に挙げて、「其子を聖人とし英雄となさんと欲するものは亦た彼等の母たる心得あるを要することなり」と説いた。そして、その具体的な方法として、従来の厳罰による教育を否定し、「万事に子供の友となりて心限り之を愛する」という「愛育」の必要を説く。子供はいつも与えられている母親の愛情を失わないように良き行いを心がけるため、母子の愛情は互いに「親切清潔」となり、「家庭の教育十分に行はるべきなり」というのである。

この論では、子供を愛情豊かに育てることで、後世の「聖人」や「英雄」を生み出そうとする志を持つことを母親の各々に求めていく。これは約一年後の社説である「母親の

責任」「乳母の良否」「子守女の論」<sup>4)</sup>にも繰り返される。これらの三つの論では、先の「愛育」の必要性の他、さらに、教育によって日本人の欠点を改めるという目的を述べている。

「母親の責任」における論者は、日本人の気質を次のように述べた。

たゞ保守の念に乏しくして急進の弊に陥りやすく沈思黙考軽しく動かず一び動けば亦た止まざるの勇氣甚だ少うして蠅に怒り蚊に梗概する粗暴軽率の風尤も多し之を以て欧米人の好意或は得べくとも欧米人をして曲げて吾等の主張する所に従はしむるの力なく西洋人をして肅然つゝしむ所あらしむるの行あるを得ず

ここでは、日本人の気質を軽率なものとし、それを「日本移伝の悪習」とした。こうした「悪習」によって、日本が亡国の危機に立たされていることを指摘し、戒める。しかも西洋文化が入って来ることによって、こうした日本人の気質はますます精神を失う傾きがあるとしている。その上で、日本人の弱点を「改造」するのはひとえに婦人である、「賢良の母」によって「英雄豪傑を造出する」ことは難しくはないため、これからの子供に対する母親の教育によって「現今の時弊をやす」のが良い方法だと主張する。

その根拠となっているのが、「世の伝記」である。この後にナポレオン、ワシントン、周公、孟子、歐陽州、ギンギスカン、タメルラン、モルト、バーンス、ジョンソン、ゲーテ、スット、バイロン、ラマルチン、エスレー、アウガステン、グレゴリーと「賢良の母」を持った偉人の例を列挙し、「古來の英雄豪傑は大抵賢良の母を有せり」と説く。

これと同様の言説は、第76号の「母親の感化」(明治20年9月17日)にも繰り返され、第137号(明治21年11月24日)から第141号(同年12月21日)までの五回に分けて連載された社説「将来の日本人民」においても、さらに詳細に論じている。「将来

の日本人民」では、軽率浮薄の社会を批判し、教育によってそれを改革するという可能性を説く。その教育に関わるものとして、「幼稚園」と「家庭の母」の役割に目を向け、最後に「将来の日本人民」に対する女性の影響が多大なものであるとして、その女性を導く女子教育のあり方について論じている。

以上から、『女学雑誌』では子供を将来の日本の明暗を分ける存在として論じ、正しく教育することによって、日本人の気質が改められることを期待する言説を繰り返していることがわかる。教育が多くの「英雄豪傑」を生み出すというばかりではなく、女性達に将来の偉人を育てるという教育者としての使命感を持たせることで、これから母親の責任の重大さを示そうとしたのである。

小児の教育は夫れ如此くに大人の教育よりも効能多きなり、故に亦た将来の日本人民を宜しきに形造るは、今の日本人民を仮初に改むるの效能に優るや明らけし、(中略)諸君(引用者注、「女性中幾多の義人」を指す)が長所は即はち静かに働くに在り、隠れて現はれざるにあり、小児を撫育して遠大的希望を確立するにあり、今の日本人民を見て、而して今の日本の時勢に立てり、諸君が尤も多くの尽力せらるべき時は即はち今日にあらずや

ここでも「将来の日本人民」を「宜しきに形造る」ためには、「小児の教育」に勝る方法はなく、母親が「小児」の一人一人を「宜しきに形造」ることによって、日本人の浅薄な傾向を改めるべきであると説く。そして、こうした「将来の日本人民」の輩出こそが、「亡国の徵甚だ多き」状況にある日本を救うであろうという。

このように見ていくと、『女学雑誌』における「子供」とは、滅亡に瀕する国家の担い手として教育されるべき存在であったといえる。子供は、教育次第でどのようにも育つ可能性をもっているという教育観から、教育のありかたによっては社会の現状を根底から改

め得るとしたのである。こうした子供に対して、その教育を「母親の責任」とし、国家にとって子供の教育がいかに大きな可能性を孕んでいるかを示し、間接的ではあるが女性の役割の影響はこれからの日本に甚大であると主張した。母親には、単に子供の内面を「宜しきに形造る」ことを望んだのではない。すべからく「英雄豪傑」の母にならんとする大志を抱いて、子供の教育に携わるように激励している。ここに、女性であっても国家の事業に携わっていると女性に自覚させようとする『女学雑誌』の意図が見える。

## 2. 若松賤子の「小説家の本分」と「忘れ形見」

若松賤子は、明治22年7月18日、巖本善治と、横浜海岸教会でE・S・ブース司式、中島信行、俊子証人のもとに挙式、結婚した。同年10月21日、7年在職したフェリス女学校を退職し、文筆中心の活動となる。「忘れ形見」は翻案ではあるが、結婚後に手がけた小説としては第二作目の作品であった。しかも、小品ではあるが、『女学雑誌』においてもひときわ注目度の高い新年附録での掲載である。「忘れ形見」は女性の表現を掲載して『女学雑誌』の顔となり、賤子の出世作となった。

若松賤子は、結婚によって一家の妻、後には母親としての役割を果たしつつ、文筆という手段によって社会に働きかけることはやめなかった。こうした仕事に、自ら任じていた使命感を確認することは、「忘れ形見」を読む上で重要である。その点からも先に「閨秀小説家答」という記事に示された若松賤子の小説観を確認しておきたい。「閨秀小説家答」とは、『女学雑誌』が「小説に名ある閨秀」を対象に実施したアンケートであり<sup>5)</sup>、小金井喜美子、木村曙、竹柏園女史（佐々木光子）、若松賤子、田辺花園の五人が返答している。

若松賤子は、「小説に関する机下が理想、

希望、及び持論」の問い合わせに対して、小説の「一  
のミーンスとしての価値」を「子供の弄ぶ  
おもちや」にたとえた。「おもちや」が時に  
子供に対して「書物や教師の及い効用をする」  
のと同様に、小説にも「矯風上、教育上」の「感  
化力」がある点に価値を見出している。その  
ため、「おもちや」も小説も「二ッとも其需  
要のある間は、其物自身に価値のあるないに係  
わらず、是に応じながらなる丈これを利用して、  
社会の進歩を補助せねばなりません」と  
説く。

ここでは、小説が「社会の進歩」を促すものでなければならないとする。賤子にとって、  
小説とは社会の需要に応じて利用されるべき  
ものであり、小説そのものの価値は重視して  
いない。それは、たとえば「普ねく人事を写  
し出す社会の絵又写真の如き小説」において  
「悪人悪行」を描く必要がある場合にも、「善  
人善行に対して其性質其品位を判別し得る已  
ならず、一方を敬慕すると共に又一方を嫌惡  
させる様に注意して書事」を「小説家の本分」  
としたことに明らかである。ここで言われて  
いる「社会の進歩」とは、「善人善行」が中  
心である社会であり、小説家にはその理想を  
人々に教育するという目的をもって小説を書  
くことを求めている。

この文章から、若松賤子の論じる理想的な  
小説とは、読者に向けて善の「感化力」を持  
つものであることは明らかである。それは、  
当時、出回っていた通俗的な小説への批判を  
意図していたと思われる。ここで若松賤子は、  
「小説文学が徒らに人情を描き出すに止る」  
ことを否定し、「少壯の操を破り、社会の空  
気を毒し、其元氣を吸とるものゝ方が遙か多い」現状を批判した。若松賤子にとって、当  
時の小説の大多数は、理想から程遠いもので  
あったのである。したがって、若松賤子は、  
このアンケートにおいて「女流小説家の一人」  
と見做されたことに対して「多少恥しく又聊  
か不満に感じた処も有升た」と述べた。とはいっても、それは小説という手段を否定して

いるわけではなく、「萬づ未熟の身にとつては」、十分に小説を作り得ないと自覚したためとする。

では、「忘れ形見」においては、若松賤子が示した小説の「理想的」な役割をどこに読み取ることができるのだろうか。ここでは、登場人物の人物像に着目したい。先に述べたように、若松賤子が示した小説観によれば、徹底的に善悪を描き分けることが重要になるが、「忘れ形見」における登場人物に着目すると、何が見えてくるのだろうか。

少年を通して、もっとも悪人らしく語られているのは「従四位様」である。「従四位様」は、「徳藏おぢ」が少年を隠しただけでなく、村人たちからも畏怖される人物である。少年はその外見を「厳そうで中々傲然と構へたお方」と語るが、加えて村人の噂や奥様の言葉から内面の冷酷さが明らかとなる。若き未亡人であった「奥様」に懸想し、結婚の間際になって、乳呑み児であったわが子との縁を切るよう強要したという噂は「従四位様」の人物像を示すと共に、「奥様」と少年の関係を結びつける伏線となっている。さらに、「奥様」は「従四位様」について、「さも見下げ果てたといふ様子」で、亡夫である「遠ッぽうに埋められた人」と比べると「まるで下郎を以て行た様」だと語っている。「従四位様」は、少年と直接に話すことなく、詳細は周辺の人々の噂のみによって知ることが出来るが、その内容は冷酷さに占められている。

また、「従四位様」の悪として重要なのが、子を捨てさせたことによって「奥様」にも罪を得させ、苦悩に陥れたことである。「奥様」が少年に語った夢の話からは、その内面の苦悩が浮かび上がる。

一度なんぞは、ある気狂い女が夢中に成て自分の子の生血をとつてお金にし、それから鬼に誘惑されて自分の心を黄金に売払ったといふ、恐敷お話しを聞いて、僕はおつかなくなり、青くなつて震へたのを見て、「矢つぱりそれも夢だつたよ」と仰つて、淋敷

そうにニツコリなすつた事がありましたつけ。

この夢からは、富を得るために子供を捨て、意に染まない結婚をした自らの過去に対する苦い後悔が読み取れる。ここでの「従四位様」は、人ではなく、心を「誘惑」せる「鬼」として形象され、徹底的な惡の存在として認識されている。そして、こうした「従四位様」の惡の最大の根拠は、やはり、「奥様」に子捨ての罪を与えたことにあると思われる。

それに対して、「奥様」が罪を得ているにもかかわらず、終始、善人として描かれているのは少年の視点から語られているためである。

マアどれほど深切で、美敷くつて、好い方だつたか、僕は話せない位ですよ、話せれば あなただつてどんなに好におんなさるか！

この言葉は、少年が自分を可愛がってくれた「奥様」としか見ていないのに比べて、すでに「奥様」の秘密に気付かされている聞き手および読者には単純に受け取れない。しかし、少年も奥様の過去を噂には聞いており、少年が全くの無知であったとは言えない。また「従四位様」との間に生まれた「若殿さま」をろくに愛さないのを見て不思議がつてもいる。だが、だからといって、「奥様」の優しさを否定してはいない。少年は、自分をこの上なく愛してくれたという一点で、「奥様」を「話せない位」の「好い方」であるとする。その少年の言葉には「奥様」の罪を浄化する鍵があるといえそうだが、この点については次節で述べることにする。

では、「奥様」の善と惡については、どのように読み取ることができるだろうか。ここで、少年の視点を介さずに考えてみよう。「奥様」は、富と地位を得るために子を捨てたという過去を重視すれば、かつて自ら惡の立場を選んだ罪を背負っているといえる。しかし、それが「従四位様」の惡と異なるのは、「奥様」は自らの罪に向き合い、惡そのものを徹

底的に憎んでいる点である。そのことは、憂いに満ちた様子ばかりではなく、子供を捨てた自分を「気狂い女」に置き換え、その行為を「自分の子の生血をとつてお金にし」たと捉えていること、臨終の祈りに「下女の罪と苦痛」を告白していることからも明らかである。悪を憎むあまり、奥様は「従四位様」も自らも受け容れることができず、「トント嬉敷かつた昔しを忍ぶ」ことにのみ、歳月を費やすねばならなかったのである。

以上から、「忘れ形見」は、「悪人悪行」と「善人善行」を明確に描き分けなければならぬという若松賤子の小説観におおむね当てはまっていることがわかる。とはいものの、徹底的な「悪人悪行」の存在として描かれた「従四位様」とは異なり、「奥様」の善惡は複雑である。少年の視点を通してみた「奥様」は完璧「善人善行」の存在であることが強調されているが、聞き手および読者は、「奥様」が少年の母親であるとわかっているために、少年とは異なった見方を強いられる。だが、そうは言っても、「奥様」が「悪人悪行」の存在であると理解されることはないはずである。それは、少年の言葉を通して、作品は「奥様」の深い自責の念に貫かれているためである。したがって、罪が奥様の中身まで悪に染めてしまうようなことはなく、「奥様」が過去を忘れて富を貪ることはない。それゆえに、「奥様」は、死の床に至るまで自らの罪に苦しまねばならず、臨終の際の少年との対面を神の許しと捉えるまで、救いを求め続けなければならなかった。少年の言葉は、その「奥様」の苦悩の姿をありありと伝える。このため、聞き手および読者もまた、奥様が「善人善行」の存在であったことに疑いを差し挟むことはできないのである。

### 3. 「僕」の役割

次に、「僕」について考察したい。船乗りになる14歳の少年である「僕」の役割は、

単なる語り手にとどまらない。

「忘れ形見」という題名<sup>6)</sup>は夫が残した遺児である少年を指す言葉であり、「奥様」の視点に立った題である。つまり、題名「奥様」の立場から、少年の存在を焦点化しているといえる。では、「僕」は作中においてどのような役割を担っていたのであろうか。

若松賤子は、「『小公子』の序」<sup>7)</sup>で、子供の役割を次のように述べている。

幼子は世に生れたる其日とは言はず、其前父母がいつ／＼にはと、待設ける時分から、はや自から天職を備へて居りまして、決して不完全な端た物では御座りません。されば私どもが濁世の蓮花<sup>はぢす　ホーム　エンジェル</sup>家庭の天<sup>テン</sup>例とも推すべき彼の幼子の天職は、いとも軽からぬことで御座ります。(中略) 邪道に陥らうとする父の足をとゞめ、卑屈に流れ行く母の心に高潔の徳を思ひ起させるのは、神聖なるミツシヨンを担ひたる可愛の幼子に限るので、是に代つて其任を果すものは他に何も有ません。

ここでは、子供の生来持っている役割を父母の罪悪を押しとどめることとする。それこそが子供の「神聖なるミツシヨン」であり、子供の代わりにその役割を果たすものは何もないと述べる。こうした若松賤子の子供観は、「忘れ形見」の「僕」にどのように重なってくるのだろうか。

ここで、「僕」について検討してみよう。

「僕」は、「あなた」に来歴を問われて、屈託なく応じながら「別段大した悦も苦勞もした事がないんですものを」と答えている。ずっと前から孤児になっていたと伝えられ、「従四位様」の城跡の番をする「徳蔵おぢ」と一緒に暮らしていた。こうした出生を、屈託なく話す「僕」ではあるが、その出生が「僕」に全く影を落としていないわけではない。

僕は小さい内からまぢめで静かだつたもんだから、近處の人があたりまの子供のあどけなく可愛い処がないといひ／＼しましたが、どふしたものか奥さまは僕を可愛やと

おつしらぬ斗りに、しつかり抱べて下すつたことの嬉しさは、忘れられないで、よく夢に見い／＼しました。

「僕」は、「近処の人」から「あたりまいの子供」のような、子供らしさに欠ける子供であると言われる。「あたりまいの子供」との隔たりは、「僕」の孤児であるという認識から来るものであろう。数え年の7歳にしかならない「僕」は、日頃、子供の必要とする愛情を与えられず、すでに子供らしさを失った子供なのである。しかし、そのような「僕」だからこそ、奥様が可愛がってくれたことを強い印象で受け止めている。「僕」は、「奥様」の前では子供らしさを抑制した日常から、解き放たれるのだ。

しかし、「奥様」が自分の実母であることを知らない「僕」は、いかに「奥様」が愛情を注ごうとも、それを母親のものとして受け止めることはできない。熱に苦しむ「僕」は、「奥様」の看病に対して、「アヽ／＼おつかさんのが生て入しやれば好いに子一」と言い、「奥様」が「坊はわたしが床の側についてあて上れは、おんなじじゃないか」と答えて、「だつておつかさんは、そんな立派な光る物なんぞ着てる人じやなかつたんだものを」と否定する。この箇所から、「僕」が「奥様」を慕ってはいても母とは異質な存在と捉えていたことは明らかである。「僕」にとって、「奥様」は記憶にさえない母を想起させ、「僕」の子供らしさを引き出す。しかし、母親の愛情を認識したことのない「僕」は、「奥様」の愛情を母親の愛情と感じること自体が不可能なのである。「奥様」の華やかさのために、「僕」は「奥様」を母になぞらえることができず、そのことが一層「奥様」の罪悪感をえぐり出す。「奥様」は、「僕」に可能な限りの愛情を注ぐが、それは勿論「僕」にとって十分なものではないといえる。

しかし、「奥様」にとって、「僕」は子供としての役割を果たす。先に述べたとおり、若松賤子は、「可愛の幼子」の「神聖なるミッ

ション」を、「邪道に陥らうとする父の足をとゞめ、卑屈に流れ行く母の心に高潔の徳を思ひ起させる」ことにあるとした。つまり子供の使命とは、存在によって、その両親の行いを抑制し、心を浄化させることにある。「僕」に関しても、「僕」自らが認識することはないが、「奥様」にとっては、「僕」の存在そのものが「緩大して、やさ敷て、剛勇」い亡夫を思い起こさせる。そして、「奥様」が子を捨てることによって得た富と地位に罪の意識を持ち続け、悪を拒み続けるために、不可欠な存在であったといえる。その意味で、「僕」は、奥様を罪から救済する存在なのである。

しかし、罪から救済する子供の役割は、本来は家族が引き出すものであった。「『小公子』の序」で、若松賤子は家族の務めを次のように述べている。

初又、ホームの教導者（引用者注、「小供」を指す）を先づ教へ導き、其清素爛漫の容姿を發揮させ、其ミツジョンを完うさせるのは、亦両親始め同胞の務です。即ち世の中の関係は、総て相支へ相扶くる道理に基くので、例へば、私どもが棲息ふて雨風を凌ぐ家は、矢張り私どもの手に成らねばならず、浅瀬を教ふる小供は、是非負ふて行ばならぬと同じ理で御座りましよう。

ここでは、子供を「ホームの教導者」とし、家族に「浅瀬を教ふる」存在とする。つまり、子供は「ホーム」を教え導く存在とともに、子供がその役割を果たすために「雨風を凌ぐ家」を成し、子供を「負ふ」ことが「両親始め同胞」の義務であるとした。

さて、「僕」の役割に話を戻すと、孤児として育てられているため、「僕」は形式的には「ホームの教導者」ではない。そして、「奥様」は「僕」のために「雨風を凌ぐ家」を成すことも、「僕」を「負ふ」で生きることもかなわない。若松賤子が「『小公子』の序」に述べたような、親子としての「相支へ相扶くる」関係は、両者には少なくとも表面上には成立し得ない。

しかしながら、「僕」はその存在によって「奥様」の罪を浄化する「ホームの教導者」となり得ている。それは「奥様」の臨終の祈りの言葉によっても確認できる。

「神よ、オ、神よ、日々年々の此下女の苦痛を、哀れとみそなわし、小児を側らに臨終を遂させ玉ふを謝し奉つる、いと浅からぬ御恵もて、下女の罪と苦痛を除き、此期におよび、慈悲の御使として童を、遣し玉ひし事と、深く信じて疑わず、いと／＼かしこみ謝し奉る」

この臨終の祈りでは、「僕」を「下女の罪と苦痛を除く」「慈悲の御使」と捉えている。かつて子供を捨てて富と地位に走った「罪」とその悔恨による「苦痛」は、臨終の時を少年と共有することによって「除かれ、浄化された。少年は「奥様」が罪を得た日から、「奥様」に罪を認識させる存在となった。少年は、形式的には「ホームの教導者」という役割を担わず、またそのための務めも果たされなかつたが、「奥様」にとっては「教導者」であり、「浅瀬を教ふる」子供の役割を果たしていたと言える。

さらに、「奥様」の死から7年を経て、少年は末尾に自らの決意を語る。

僕は望が叶んだから嬉敷ことは嬉敷けれど、こゝを離れて行となると何だか心残りです、ですが僕はこんなに気楽に見えて、あの様に終りまで心にかけて僕の様なものゝ行末を案じて下すつた奥さまに対して、是非清い勇ましい人物にならなくつてはならないと、始終考へて居るんです。<sup>かなかった</sup>

少年の保護者であった「徳蔵おぢ」は臨終の時に、少年の望みであった船乗りになることを許した。少年は「徳蔵おぢ」の故郷を離れ、自力で人生を歩み出すとき、7年前に亡くなつた「奥様」の言葉を思い出し、「是非清い勇ましい人物にならなくつてはならない」と述べ、その遺志にかなう生き方をすることを決意する。それは「奥様」の最後の言葉にある「ぼうはどふぞ無事に成人して、此後どこ

へ行て、どの様な生涯を送つても、立派に眞の道を守っておくれ」という願いを受けたものなのである。「奥様」は少年に母親であることを明かさず、少年も最後まで気付くことはないが、母親としての願いは最終的には受け止められ、少年は「奥様」の死後も、その願いに添うことを「始終考へて居る」。このように考えると、「奥様」と少年は親子としての「相支へ相扶くる」関係を結ぶことはできなかつたが、「奥様」にとって、「僕」は子供としての役割を果たし、その結果として母親の愛情は少年に届いたといえる。

#### 4. 「忘れ形見」の理想

若松賤子は、先述したアンケートの「机下が小説を著作するに至られたる由縁及び御経験」の問い合わせに対して、文学に携わる女性の「責任」を、「教育、矯風の事業」にあると考えるために、「聊か教育の事に志ある自身」も、「理想的に小説に編んで」みようとしたと答えた。この目的意識が、賤子の創作の根幹をなすものであったと思われる。ここで「忘れ形見」に描かれている理想について、考えてみたい。

「忘れ形見」は、賤子が間もなく翻訳に着手する「小公子」のような「理想的」な世界をそのまま示す小説ではない。というのは、「善人善行」の人として少年によって語られる「奥様」は、「理想的」な母親の姿とは言えないからである。それに対して若松賤子が「忘れ形見」の後に翻訳した「小公子」では、「理想的」な母子の姿が明確である。「忘れ形見」と「小公子」は、父を亡くした子とその母親の物語である点で、共通している。だが、理想的な愛情に満ちた母と子が、結果的に富と地位を得るという結末をもつ「小公子」ほどには、「忘れ形見」の理想は単純ではない。言うまでもないことだが、「奥様」は富と身分を手に入れるが、それは正義によって得たものではない。しかし、そうした罪を持つ母

親であったからこそ、「僕」の「ミッション」は、「奥様」に強く働きかけたと言える。「奥様」は、可能な限り「僕」に愛情を注ぎ、「僕」もそれを受け止め、「奥様」の願いは最終的には「僕」に通じている。罪に妨げられながらも、「奥様」の愛に満ちたメッセージは受け入れられたのであり、「僕」は存在することで「奥様」を救済し続ける。こうした母子の精神的なつながりの深さこそが、「一形ならぬ」感動を呼び起こしたのではないだろうか。それは『女学雑誌』に論じられたような、国家の救済を目的とする教育とは大きく異なったものであった。

「忘れ形見」において、「僕」は、若松賤子の述べるところの子供の役割を果たしていることについてはすでに述べた。少年は孤児として生まれ育ったにもかかわらず、「奥様」と接することで、子供の担っている「神聖なるミッション」を立派に果たしているのである。そこに、「忘れ形見」における「理想的」な子供の姿があるのでないだろうか。

先に取り上げた「『小公子』の序」で、賤子は、「幼子」を「決して不完全な端た物では御座りません」と說いた。大人の目から「幼子」を見ると、「不完全」「端た物」としか映らない。それを「天職」、つまり大人の心の抑制や浄化の役割を「幼子」が担っているとして、それまでの「幼な子」に対する見方を否定した。その意味で、「忘れ形見」における「僕」はまさに期待される子供像として示されているのである。

柄谷行人の『日本近代文学の起源』によると、近代はそれまでに存在しなかった「児童の発見」を促したという<sup>8)</sup>。子供と大人を分割することによって、「児童」を特別なものとして見る制度が生まれ、「児童」を学ぶ存在とすることによって、近代国家が生み出した「人間」をつくりだす一つの教育装置」となったという。国家を成立させるために、新たな「子供」観が生み出され、それを教育する制度が形成されていったのである。

『女学雑誌』は、近代国家の樹立の途上にあった時期に、近代国家の担い手と子供を見なしたという意味で近代国家成立のための先駆的な論を展開したと言える。それに対して、若松賤子は家庭における子供に対する見方を読者に提示していた。「忘れ形見」の「僕」は、亡き「奥様」によって、また「あなた」という聞き手、さらには読者という大人の目によって眼差され、その存在によって周囲を清くする役割を果たす。つまり、賤子の示した子供像は、国家へは行き着かない。それよりも家庭での子供の存在に対して、敬いに似た親愛を示し、それを大人が子供を負うことの根拠としているのである。少年を通して、子供の役割を発見したといえるのではないだろうか。

「忘れ形見」は、従来、かつて子供を捨てた母親の愛をテーマとしたものであると論じられてきた<sup>9)</sup>。しかし、「妹とも見る若手の女子たち」に向けたメッセージとは、少年を通して大人を浄化する役割を子供が担っていると伝えることである。「僕」が「奥様」の罪を浄化し、母親の遺志を継いで大人になっていくという子供像を示すことは「忘れ形見」の最大の目的であった。そして、そのためには「奥様」の母親としては報われない愛情によって強められる。『女学雑誌』では、愛情をもって子供を育てるこの必要性が繰り返し論じているが、その結果として期待される子供像は、過去の偉人伝に頼る他はなかった。若松賤子は、それとは異なった形で「理想的」な子供像を明確に示したことになる。

## 結

以上、若松賤子の翻案小説「忘れ形見」を『女学雑誌』の子供觀と対比し、若松賤子の言説を手がかりとして分析することで、「忘れ形見」の少年に与えられた役割が明らかとなつた。「忘れ形見」の少年は「幼子」の「自から」備えている「天職」を果たしたことには

よって、理想の子供像となり得たのである。それは『女学雑誌』において論じられた国家の担い手としての子供とは明らかに異なっている。賤子は、「忘れ形見」によって家庭における子供の存在そのものの役割を示したのである。「忘れ形見」における少年は、その存在によって母親の罪を浄化し、しかも実母であることを知らないにもかかわらず、臨終に際して与えられた言葉を深く心に刻みつけている。若松賤子は、こうした少年に子供の役割を見出し、子供の理想の姿を託していたと考えられる。

### 【注】

- 1) 『女学雑誌』第194号（明治23年1月1日）新年附録として掲載。「忘れ形見」の他に、「菟道作」（漢詩）他二一首（湘煙女史）、「ふるは」（下田歌子）池水波静他二九首及び今様二首、「芦の一ふし」（花園女史）が掲載されている。田辺花園の小説には、「友人龍子の小説に引して亡き友を懐ふ」と題した巖本善治の序文が付され、そこに田辺花園の亡兄と巖本善治の交友が語られている。「忘れ形見」は後に、『文芸俱楽部』第1巻第12編臨時増刊「闇秀小説」号（明治28年12月10日）に「忘れたたみ」として再録後、遺稿集の桜井鷗村編纂『忘れたたみ』（博文館、明治36年3月1日）に収録された。
- 2) 「お向ふの離れ」『女学雑誌』第182号（明治22年10月5日）
- 3) 末尾には次のようにある。  
皆さんさらばとて石に布団も着せられずです、孝行などを御送葬の時まで御猶予なさりますな。老人を喜ばすのは、大して骨の折れるものではありません。私どもは赤子の中から、はぐ、み育て倦まなかつて、今は衰へた手や、御足をいたはりやすめ、又私どもを何処までも愛して、決して報酬を求めやうとしなかつた其お心を、どうぞ終りまで慰さめ安んじたいでは御座りませんか
- 4) 「母親の責任」『女学雑誌』第52号（明治20年2月19日）、「乳母の良否」第54号（同年3月5日）、「子守女の論」第57号（同年同月26日）
- 5) 「女流小説家の答書」『女学雑誌』第204号（明治23年3月15日）。質問内容は次の通りである。  
一 机下が小説を著作するに至られたる由縁及び御経験

- 二 小説に関する机下が理想、希望、及び持論
- 三 平素愛読さるゝ所の小説
- 四 近時的小説文学に対する御意見何如
- 6) 『女学雑誌』第193号（明治22年12月25日）の新年附録の予告には「昔しがたみ」とあるため、これが原題であったとも考えられる。
- 7) 「『小公子』の序」『女学雑誌』第288号（明治24年10月24日）
- 8) 「児童の発見」『近代日本文学の起源』（講談社、昭和55年8月）
- 9) 鈴木二三雄「若松賤子と『女学雑誌』（二）」『フェリス論叢』昭和39年4月、師岡愛子「若松賤子と英米文学」『若松賤子——不滅の生涯』（共栄社出版、昭和52年3月）、本田和子「若松賤子解説」『日本児童文学大系第二卷 若松賤子 森田思軒 桜井鷗村集』（ほるぶ出版、昭和52年11月）など。

# 太平洋戦争下の四谷教会 —阿部行蔵牧師就任から教会堂焼失まで—

古 谷 圭 一

Yotsuya Church under the Pacific War — From the inauguration of  
Rev. Abe to the Bombardment of the Church Building

Keiichi Furuya

## 要 旨

東京にあった四谷教会の1942年より1945年夏の終戦までの歴史を取り扱う。前任者青柳茂牧師の後任として、戦時交換帰国船により帰国後、就任した阿部行蔵牧師のプロフィルを紹介し、主管者としての阿倍行蔵牧師を中心に死を前にした教員の動きを述べている。言論弾圧、徵兵、動員、疎開、空襲、施設の接収にさらされながら、教会を守り、死を前にした人々の信仰を正しい方向に向けようとした教会の歩みを述べる。

## キーワード

- ①四谷教会 ②阿部行蔵 ③太平洋戦争
- ④第二次世界大戦 ⑤戦時下 ⑥千葉勇五郎

## 目 次

1. はじめに
2. 青年牧師阿倍行蔵
3. 追いつめられた教会
4. 戦争激化の中で
5. 教会堂の焼失
6. 注および参考文献

### 1. はじめに

戦時下の日本の教会の歩みについて書かれ

たものは、一般に、資料散逸、焼失などで広くは公開されず、各個キリスト教会史に短く載せられている以外には、その空気を描いたものはきわめて少ないので現状である。本稿は、既報<sup>1)</sup>の前篇に相当するもので、日本基督教団四谷教会の1942年から1945年の記録を、この間に発行された教会週報、筆者の聞き書き、および調査結果を中心まとめたものである。

四谷教会（創立時は東京第二浸礼教会）は、1890年に創立され、その後、彰栄幼稚園、東京学院、バプテスト女子学寮と密接な関係を持ち、昭和初期には四谷区南寺町48（後に区画改正にて須賀町44に、また、近くの停留所にちなみ左門町とも呼ばれた）に会堂を持ち、100名を越える会員数の、日本バプテスト東部組合の有数な自給教会であった。この四谷教会に関する歩みは、昭和前期までの概略が大島<sup>2)</sup>によって最近公表されているのみで、その他には、わずかに日本キリスト教歴史大事典（教文館版）に「四谷新生教会の前身」との誤った説明がある<sup>3)</sup>のみである。

### 2. 青年牧師阿部行蔵

四谷教会は1947年11月の教会総会決議による青柳茂牧師退任の後、千葉勇五郎を中心

とした執事会が当時帰国したばかりの阿倍行蔵を後任として迎えることにした。

阿部行蔵の印象は清新であったと当時の執事渋谷常三郎が述べたと伝えられている<sup>4)</sup>。阿部行蔵は、1907年に検事正の義彰の次男として広島に生まれた。母千寿<sup>5)</sup>は下瀬加守牧師から受浸しており、その薰陶の下に育った。1926年広島一中卒業後、画家を志して上京、神田三崎町の川端画学校に入った。レンブラントにあこがれ、暗い背景に上方から光が射す画風を試みている。当時、神の国運動を展開していた賀川豊彦の中央バプテスト教会伝道集会において回心。1928年3月30日中島力三郎牧師により受浸し、神学校への進学を志して川端画学校を退学。1929年関東学院神学校に入学した。阿部は、在学中には社会的キリスト教運動に関心をもち関東学院セツルメント活動に参加した。その間、ひそかに日本戦闘的無神論者同盟第2回全国大会に参加したり、紀元節反対や伊勢神宮大麻受領反対の動きに加わった。このため、1933年10月治安維持法違反容疑の手入れを受け、学友とともに2ヶ月間の拘引取調べを受けた<sup>6)</sup>。1934年関東学院神学校卒業後、同志社大学文学部神学科に入学、1937年同志社大学を卒業した。在学中は彼の運動の神学的思想に大きく影響を与えた清水義樹<sup>8)</sup>牧師が主管する京都バプテスト教会に出席し、キリスト教の社会的使命<sup>9)</sup>や日曜学校論<sup>10)</sup>についての論文を『基督教報』に投稿する。

在学中の1935年10月高垣千恵子と結婚、京都バプテスト教会伝道師となる。在学最終年度の西尾幸太郎教授への提出レポートに反戦的内容を書き、卒業後の西尾教授に対する特高警察の1937年の手入れのときに問題となったことが記録されている<sup>11)</sup>。卒業論文テーマは「使徒パウロ年代考—原始基督教史研究序説」であった。

1937-8年、波岡三郎<sup>12)</sup>牧師の姫路バプテスト教会補教師を務め、説教は聖書講解の形でキリスト教の平和主義を説き、国旗不掲揚、

平和主義について憲兵隊に始末書を書かされる。その間に、説教「言は肉と成れり」<sup>13)</sup>、「僕の貌をとりて」<sup>14)</sup>、聖書研究「パウロの手紙」<sup>15)</sup>、「ピレモン書講解」<sup>16)</sup>、「使徒パウロとピリピ教会」<sup>17)</sup>を『基督教報』に発表した。

宣教師ジョン・フート<sup>18)</sup>の世話で昭和15(1940)年8月からバークレー・バプテスト神学校に留学<sup>19)</sup>したが、翌年末の戦争勃発のため抑留され、1942年戦時交換船浅間丸で帰国した。彼は船中では聖日には説教をしていたが、日本でアメリカの良心的徴兵について話せるかと質問した女性を、シンガポールから乗船した海軍軍人が激怒罵倒したこと、その軍人へつらう戦争推進派の男を、阿倍がその後なぐった秘話がある<sup>20)</sup>。なお、下船時の特高調書には、

「昭和8年同志社大学文学部卒業、同15年9月渡米上記バークレー市バプテスト神学校に入学、同17年5月卒業、今回送還帰国せるものなるが、在外帝国官憲により集合所に入れられたるものにして、移民局に収容せられず、航海中毎日曜日礼拝の会を開き、説教し居りたりとの通報もあり、厳重取調べたるも格別容疑の点を認めず。引き続き視察注意を要するものと認む<sup>21)</sup>」

とある。

阿部は帰国に際して外部の人の猜疑をはらすためにできるだけ低姿勢に言動を注意しようとし、また、神学校先輩の青柳茂、菅谷仁などから「アメリカ帰りは決戦期の今だから2,3年遊ぶんだな」と言われ、一般的のアメリカ人と日本人の意識の差を痛切に感じたと筆者に語っている。これに関連して、阿部が渡米直後に訪れたアメリカ教会における戦争と人間に対する国民意識の印象を告げる手紙の一部がある<sup>22)</sup>。また、彼は留守中に合同結成された日本基督教団やその中のバプテスト派牧師たちのあり方にも問題を感じていた。彼はこの間に内村鑑三の非戦論と終末論のつながりに注目し、彼の思想はその絶対平和思想につながった。また、帰国後は、帰国船で

同室だった鶴見俊輔を介して鶴見祐輔の太平洋協会研究員となってアメリカ事情調査として米軍兵士給料構成を調べていた<sup>23)</sup>。

一方、戦後の四谷教会青年会機関紙「荊棘」には、阿部の別の側面を以下のように伝えている。

「啄木を叔父に持った為<sup>24)</sup>か、少なからず油画に興味を感じ、岩手の山奥からのこのこ上京して来ましたが、何を思ったか同志社に入學し、或いは左翼運動に身を投じ、クサイところにブチこまれ<sup>25)</sup>、又もや変心(?)してアメリカ迄勉強しに行って交換船で追ひかへされ、そして姫路、四谷と牧師生活を送りました。たった四十一年の生涯によくもこんなに色々の事をしたと驚かせられます、これはごく大ざっぱなところですから全部を挙げれば更に皆さん驚かれる事でせう。当教会きっての毒舌家でこの方面の大天狗です。目鏡をはずした所は藤田進そっくり(叱られるかな)いつも写真にうつってゐるのはニコニコと大変和やかな顔をしていますが、マジメなのをみたら、おやこれが先生かと思う様な快(怪)男子です。正にしかり、いはばこれが彼の正体と云はねばならないと思うのであります。おやっ、どこかで聞いた文句だな。<sup>26)</sup>」

### 3. 追い詰められた教会

1943年に入ると戦況はますます厳しく、南方前線基地であるガダルカナル島では米軍が前年8月に上陸し、転進(実際は退却)命令が出され、2月にはこれが玉碎と報じられる。また、アリューシャン列島のアツ島での玉碎も報じられた。国内では食糧不足が深刻となり、家庭菜園、空き地菜園が奨励され、学校校庭、東京銀座の昭和通り、国会前庭も畠となつた。隣組では空襲に備え、防火訓練のみでなく、主婦の竹槍訓練も行われた。学徒動員により授業を短縮して工場での兵器生産が行われ、女子挺身隊は男子に代わっての

車掌、運転手をつとめた。文系学生の徵兵猶予も撤廃された。都會では戦火を避けるために地方への疎開が本格化し、場合によると鉄道駅前などの強制疎開が進められた。このため、一部の教会では経済的に成り立たない教会も現れ、牧師は外から何らかの収入を得なければ生活できない者も生じ始めていた。また、市民の口にも戦況悪化が噂となって拡がり、「一死報國」、「一億火の玉」といった標語が張られ、國体の眞義に反する外国依存の反戦思想を持つと印象づけられたキリスト教会やキリスト者の不用意な発言が通報されて、取調べを受けることも多くなる。その中で起つた4月以降の(ホーリネス系)きよめ教会と(ペンテコステ派)日本聖教会の治安維持法による弾圧があった。これとは反対に、日本民族の歴史と伝統に立った日本基督教の主張や仮装(日本基督教団の「日本基督教」は「日本基督教」とも読みうる)が行われた。きよめ教会の信徒たちは、すべてキリストの再臨によるこの戦争の終結を身近なものと主張して自分たちは神の国建設のためには如何なる迫害にあってもそれを待つと検事調書に書かれ、署名させられた。これによる結社禁止命令に対する日本基督教団としての参考意見として、第四部(バプテスト系)主事菅谷仁の警視庁調書では以下のように記されている。

「此の問題に対して私の意見を忌憚なく述べれば此の度の国家としての御处置は實に大英断であつて、其の上血も涙もある實に親心の籠もつた御处置であり、眞に自分乍ら喜んでゐる次第であります。これが外国であつたらどの様な処置を執られたか測り知れないものがあると思って居ます。そこで今回の事件は日本基督教に対しその嚮るべき道を明確に御示し下されたやうな気が致します。尚彼等の熱狂的信仰は我々教団のみでは手の下し様もない位氣違ひじみてゐる為、これを御当局に於て処斷して下さったことは教団にとり幸いであったと思ふ<sup>27)</sup>。」きよめ教会の人々に対する同情の

ニュアンスが感じられる他の発言に比して、この発言はこの措置に迎合して感謝する態度がきわめて明白である。

7月1日から東京都制が実施され、首都としての戦時行政機能の集中化が図られた。これに伴う区画改正で、四谷教会の所在地は東京都四谷区須賀町14-2となった。同時に施行された都市計画法により、教会敷地の一部が外苑通りの拡張予定域にかかることとなった。この道路の建設は2010年の現在いまだに実行されないままである。

四谷教会では、1月31日千葉勇五郎により吉村須美子、佐藤紀子が、3月24日には大野九三子が受浸した。また、この日の教会総会では正式に阿部行蔵牧師を招聘することが決定された。この直後、千葉はこれでこの教会は栄えるか、滅びるかのどちらかだと言ったと伝えられる<sup>28)</sup>。教会附属平和幼稚園長には千葉が就任した。3月29日、これまで教会青年の中心として活動し、讃美歌による奉仕をもって一生を捧げたいとしていた木村辰夫が急逝した。残された家族は、健康の衰えを感じていた母てうと妻春江、それに、小学3年生になる寸前の長女恵美子を頭に2女2男であった。

5月に36歳の阿部行蔵牧師が赴任したが、赴任の際に阿佐ヶ谷の牧師館の鍵が青柳牧師から渡されず、米原弘が目黒の青柳宅を行ったが、それでも返却されず、後ほど小野清八<sup>29)</sup>執事を通して郵送返却された。また、就任式には歓迎の辞を述べる予定の小野の欠席が伝えられている。これとともに、仙台から駒井いよが上京し、補教師に選任された。(1944年4月辞任)

教会には、5月第2週から翌年5月の会堂焼失までのザラ紙ガリ版刷り週報と1冊の訪問・通信用教会員名簿が残されている。

「礼拝には特高が出席するので、親戚に憲兵大佐(大尉?)が居る米原弘があらかじめ阿部牧師に連絡することとなっていた」と木村春江が語っている。このころ、バプテス

ト女子学寮長の諫山いねが四谷教会に転入した。

当時の教員数は78名、男28名、女50名で、この間の転出者は青柳茂、ハル、誠、伊勢戸守子、斎藤綾子、津島キミ、土田勢子、松本昌子、三井堯夫で、召天者4名、会員中出征者は坂田愛、雨宮洋三、山崎正、大島義次、旅行会員は峯村信一を含む7名、求道者が11名であった。

当時の礼拝順序は、礼拝前に国民儀礼として宮城遙拝と祈念が行われる。ついで、礼拝式に入り、前奏、開会の聖書朗読、讃詠、開会祈祷、詩篇交説、聖書奉説、使徒信經、祈禱、聖歌合唱、説教、祈禱、讃美歌、奉獻感謝、頌、祝禱、後奏で終了する。なお、聖餐式は、千葉牧師が司式し、教会の約束を唱え、聖書拝讀後、聖餐となる。これを見ると、日本基督教団の形としての使徒信經を加え、バプテスト伝統の「教会の約束」を聖餐式に残して折衷化を図っている。なお、「教会の約束」は、四谷教会独自のものか、『バプテスト教員必携』によるものか具体的なものは残されていない。

阿部牧師のザラ紙A5版の週報には、その日の聖句が掲げられ、集会案内の次に、「牧師室より」として訪問者に開放されている牧師執務時間と午後は家庭訪問と予定を述べ、つぎに、「聖日礼拝のために」として礼拝の神学的意義が述べられている。その中には、礼拝の恩恵性と使命性が人間の罪に対する救いと贖いに関連して触れられており、これは礼拝にあずかる人すべてに対して述べられたこの教会で恐らく初めのケースであろう。聖日夕刻には青年男女のためにピリピ書(秋には使徒信經)についての聖書研究会が杉並の結城宅で行われている。また、夏には、礼拝前に千葉牧師による聖書研究(山上の垂訓)が女子青年会を中心に始められている。その他、家庭会、家庭祈祷会、青年会などがほぼ月例で持たれている。その中には「出席者は一人宛米一合持参のこと」、出征壮行会、戦地か

らの短信、教団女子挺身隊募集などがある。特徴的なことは、これら信徒宅での集会は、杉並、世田谷などで既に四谷という地域性が薄くなっていることが注目される。

7月までに赤字整理のための特別献金がすでに210円(5名)に達しており、新しい牧師を迎えての一新した空気を伝えている。

7月4日の週報には、出征中の榎原謹一からの短歌が載っている。

「はなれきて今更のごと思ふかな 我友垣  
のたのしかりしを。公のために死すてふ幸  
を 此の国に来て 吾はさとりぬ。聖言の  
真理さとりて うち笑みぬ 銃を握りてた  
だ一人立哨つ。」

この日の夕刻には、木村辰夫氏記念レコード名曲鑑賞会が青年共励会主催で開かれ、記念品のための募金が集められた。

このころ、教会を離れている教員とのコミュニケーションのため、ガリ版刷り「須賀町だより」第1号が発行され、牧師の説教と教会の近況を伝えている。当時の教会からの出征者は、米原弘、永田稔、室谷正雄、坂田愛、榎原謹一で、(翌年にかけてはさらに結城建六郎、山崎正、栗山茂、木村恒夫)、いずれも青年会の中心的なメンバーで、坂田は結婚したばかり、米原は出征直前に結婚、室谷も1941年出征直前に結婚していた。

12月第1週の週報には、「ルーテルが『死に至るまで祖国的、死に至るまで福音的』と叫んだ精神を、決戦下の私共の精神と致したいと思ひます。この二つの何れにあっても、純粹に徹底して、ひたむきに前進いたしませう。」とある。一見愛國的表現であるが、神への純粹な信仰への呼びかけがなされている。

1943年度の教団への統計報告を見ると、現住信徒数、男14、女44、求道者、男3、女15、受浸者、女3名、転出者、7名であり、男性信徒の9人が戦場に駆り出されていることになる。会計決算は、総収入予算額1,958円に対し実収入2,678円で、そのうち月次献

金額は1,172円で特別献金886円に達していた。総支出は2,575円で繰越額103円となり、牧師謝礼は890円であった。集会出席者平均数は、聖日礼拝50名、祈祷会36名、特別集会82名、日曜学校は教師5名に生徒登録数109名、平均出席数は89名と報告されており、12月28日の歳末感謝礼拝の週報には、

「本年は四谷教会も多事多難でありましたが、常に天父の御守護のうちに今日に至りましたことは大なる感謝であります。教会会計が更生一新されましたことは、その感謝の一つです。教会より多数の青年達が勇躍壮途に上られ一抹の寂漠を感じる反面、そこここに四谷教会の伝道基地を与へられた如く思はれますことも感謝の一つです。」とある。

#### 4. 戦争激化の中で

1944年に入ると、既にタラワ、マキン島での守備隊玉碎が報じられ、戦況の劣勢が人々の目にも明らかとなり、食糧の配給が途絶えがちのため代用食が普通となって、市中では指定された雑炊食堂に切符をもった人たちが行列をつくるようになった。そのため、食糧増産はますます叫ばれ、2月からは学童も動員されるようになった。

6月18、19日にはマリアナ海戦、7月8日、サイパン島玉碎、10月20日、レイテ沖海戦と戦線は日本に近づき、都市での空襲被害を避けるために人々は地方に疎開を始め、都内の駅前などの強制疎開は7月にはほぼ完了した。6月半ばには北九州に初めての本土空襲があり、いよいよ戦争の緊迫感が国民を包むようになった。夏になると国民学校の第1次学童集団疎開も始まった。11月末頃からサイパン島からのB29による大規模爆撃が行われるようになる。東京初空襲は11月24日であった。すでに人々はガラス窓には飛散を防ぐ障子紙を張り、夜間には電燈の笠に覆いをかけ、窓や廊下にカーテンを閉め、室内の

光が外に漏れないようにして過ごすようになった。

四谷教会では、牧師の聖書研究でロマ書とヨハネ第一書、使徒行伝、ヤコブ書を取り上げている。阿部はすでにバルトの「ロマ書講解」を読んでおり、2月20日に千葉牧師の司式により阿部行蔵の挨拶禮が行われ、正式の教団主管牧師となった。3月5日には空襲による警戒警報発令時の礼拝中止の予告がなされている。3月19日、大橋左知子、野口千枝、土田勢子が始めて阿部牧師の司式で受浸した。また、女子学寮生14名の卒業を祝っているが、そのうち、出身が台湾2名、満州1名、朝鮮2名の名がある。

3月23日、前年夏以来病床にあった木村てうが召天し、30日に告別式が行われた。令息辰夫の死の丁度1年後であった。辞世として

「エス様に導かれつつ行く死出の旅 心安かれいざさらば(6/29)、子や孫のなさけはそれと知りながら 神の召しにはいさぎよく行く(7/30)」が紹介された。

4月、幼稚園には39名の新入園児が加わったが、区長名で6月1日以降平和幼稚園の閉鎖が命じられ、実際には7月20日に休園した。阿部牧師は、4月から東京女子神学校講師としての職を得、「教義学」と「新約注解」を担当することになった。同月19日、阿部牧師は日本バプテスト教会記念館設置を新生会に提案している。これは、史学研究者としての発言として極めて適切で、ことに空襲による貴重資料の焼失や散逸に対して問題提起をしたもので、実際には具体化されなかった。

9日、小室寛子受浸(平和幼稚園主任保母、太平洋協会勤務)、この月補助伝道師駒井いよいが辞任して仙台に戻った。

4月15日、初めての空襲警戒警報発令のため礼拝が中止となり、6月末には

「来るべき事態に対して冷静に対し、如何なるときにも、主に在りて平安ならんことを」と週報に書かれてある。東京都民は、

いよいよ来るべきものが来たと感じ、覚悟をきめた。

7月20日より四谷区からの命令で会堂1階の休園中、幼稚園の部屋を東京高等鍼灸医学校に貸与することとなった。これは南方派遣のための鍼灸医を3部制で養成するためのものであった。

8月の週報より会員の戦地からの消息が消えた。フィリピンに派遣されていた米原弘負傷のニュースとそれによる宛先変更を報じたのが最後である。おそらく、軍事機密に触れる可能性を注意されたためであろう。また、阿部牧師は、戦死した日本兵士の遺骨を加工して記念品としたアメリカ兵士のニュースに対して朝日新聞8月19日号に、「再認識を要す一生活を通してみた敵米の野獸性」<sup>30)</sup>と題



図1 青年教会员の出征壮行会

するアメリカ人のもつ人道性と野獸性の両面についての論説を書いている。肩書きは太平洋協会アメリカ研究室員として、これが当時どのような意図で書かれたか、また、戦後のアメリカ一辺倒の風潮の中でアメリカの対日政策の矛盾に抵抗した姿勢との関連性を持つについてはさらに検討が必要であろう。

この年あたりに発行された「須賀町だより 第二信」では、既に神風特攻隊のために訓練している予科練にいる会員からの手紙の中の「死が怖くなくなった」という文を紹介しながら、

「大君の御為に身命を捨てるといふことをさも大事件のやうに考へてゐる趣がありま

す。我孰が拭い去られて居りません・・・。自分が担っている任務の方が自分の生命などよりは比べものにならぬほど重い。」と述べている。戦後、阿部牧師は、制約された表現の中で「無駄死にをするな、するな」と語りかけるのに一生懸命であったと筆者に語っている。また、銃後の女性に向かっては不安と恐怖に対する信仰的配慮が週報の短い文から伝わってくる。

8月末の礼拝から式順序が変わった。これまであった使徒信経がなくなり、代わりに懺悔・赦罪・主祷を唱えるようになった。「礼拝の精神は清き心を以って神を崇め、神の言に接して新しい生活へ出発するところにあります。お互に清い礼拝を守り得る様に努力したいと思ひます」と述べている。10月からは女子学寮において木曜会が持たれるようになり、牧師の「基督教入門」が開かれる。これは、1. 基督教が他の宗教にまさっている理由、2. 日本人になぜ基督教は必要であるか、3. 神の和解、4. 日本と基督教、5. 救いとキリスト、6. 神と人との和解のように福音の本質についてのものであるが、具体的な内容についての資料がないが、これらからも阿部の特徴がうかがえる。すなわち、神による和解と救いがはっきりと中心に据えられ、異教的風土の中の日本という視座に固執する点である。これは戦後の著である『愛は怒りをこめて』における「信仰者の道をともに歩む求道者の道」<sup>31)</sup>である。これは、当時もてはやされた「日本の基督教」<sup>32)</sup>を拒絶する立場であった。

12月に入ると日増しに増える空襲の下で、単なる愛国者としての死より、大切な他人の悪徳を消し、その人を潔めんが為わが身を捨てた方(イエス・キリスト)の生き方に学ぶべきとの言葉が繰り返し述べられる。クリスマスも從来の感傷的なものではない十字架のイエスを思うものであった。この中で、浅海(榎原)妙子と台湾からの周春桃の浸礼式が行われた。歳末の週報には、室谷正雄の連絡先に

鹿屋航空隊の名がある。事実、室谷は特攻隊の一人として帰ってこなかった。

1946年のクリスマス礼拝説教「回顧と展望」において、阿部牧師は以下のような戦時の教会を語っている<sup>33)</sup>。

「太平洋戦争中、四谷教会も他の諸教会と同様に、茨路を歩んできた。キリスト教は米英の宗教であり、日本精神に反するという国民の偏見と白眼視の下におかれ、敗戦の暗い影が日に日に濃くなるにつれて多くの人々が教会から脱落し続けた。戦時下の多忙な隣組の仕事と、日ごとに激化していく空襲下の生活とは、最後まで信仰を堅く保ってきた人々が教会の集会に集う事をすら時間的に許さなくなってしまった。この様な教会の痛みを共に悩みながら、一方において特高と憲兵との監視から教会と教会員を守り抜こうとし、他面、自己の理想を実現せんがために、生活の糧を得んとして都塵にまみれていたあの頃の自分を考えるとき、牧師として果たさなかつた数々の責任の前に自責の念を拭い得ない。事実、遠く前線に征く青年を送り、戦災のために家を失った兄弟姉妹を焼跡に見舞い、教会より遠のいてゆく人々を訪ねるためには、身体が二つあっても足りぬ有様であった。」

## 5. 教会堂<sup>34)</sup>の焼失

昭和20年1月28日9時半からの礼拝の最中、空襲警戒警報が発令になり、礼拝を中止した。このころの礼拝出席者は、疎開せずにそのまま居残った数家族と女子学寮からの諫山、岡と寮生だけとなりつつあったが、殆んど連日の空襲のため、誰もが死を意識せざるを得なくなりつつあり、説教も、絶望を超えて神に直面し、神に対する応答の必要性が述べられ、人間の苦悩よりも更に深い神の懲りと苦悩をイエスを通して知ることが話される。2月25日にはふたたび空襲により礼拝が中止され、3月10日の東京下町大空襲翌

朝の11日の礼拝も中止となった。3月31日、女子学寮事業中止が命令され、航空機部品作業所として接収されたため、残された舍監居宅には諫山、岡の他に3、4名の舍生が残り、建物は空襲罹災者の食事や宿泊をさせたと岡ちとせは述べている。

4月1日の復活節には、牧師は週報の中で「今は断じて敗戦の時ではない。今は明らかに日本の靈魂の創建のときである。過去における日本の精神的欠陥に鑑み、今こそ基礎あり生命ある新しき日本を創建せねばならない。正しき信仰と堅き道徳とを根底とする新しき日本を立てねばならない。同胞よ！家を焼かれ、財産を奪はれることを寧ろ恩恵に思へ。而してそれを悲しむにも勝つて、眞の神の前に我らの靈魂を碎かしめよ。碎けたる靈魂を以って神に立ち返らしめよ！」と声を上げている。「堅き道徳」とは、敗戦直後の道徳復興運動のスローガンとなったそれと同じではないことに注意しなければならない。それは権威にある者の説く人間の正義、道徳ではないすべてを超越した神の正義に立つものであった。

5月24日夜半に空襲があり、続いて25日の夜も空襲は激しく、ついに須賀町の会堂も焼失した。

「レンガ造りの教会堂を守っていた方は、阿佐ヶ谷の牧師館にやっとたどりつき、玄関の式台に手をついて『爆弾がばらばらと落ちてきて、あちらと思えば、今度はこちらと、火の手が上がり、走り回って消しましたが、とうとう焼けてしましました。すみません。』と号泣されました。息もきれぎれの、その声は今でも残っています。杉並区阿佐ヶ谷の牧師館も、気象台の近くにあり、危険な有様でしたから、牧師はとりあえず、そのご家族が教会堂の焼け跡に住むことを承知し、その後も黙認していました。無数の被災者が、焼け跡の防空壕で頑張っていました。・・・爆破された教会堂のレンガは、ようやく何台ものトラック

で運ばれていったと聞き、胸迫る思いでした。<sup>35)</sup>」と牧師夫人千恵子が記している。大本営発表によると

「25日22時30分ごろより約2時間半にわたり主として帝都市街地に対し焼夷弾による無差別爆撃を実施せり。右により宮城内表宮殿その他並びに大宮御所炎上せり。都内各所に相当の被害を生じたるも火災は払暁までにおおむね鎮火せり。我制空部隊の邀撃戦果中判明せるもの、擊墜47機の外相当機数に損害を与えた。」<sup>36)</sup>また、新聞発表では、

「25日夜の空襲により被害状況左の如し。秩父宮邸、三笠宮御殿、閑院宮御殿、伏見宮御殿、梨本宮御殿、李鍵公邸いずれも全焼。被害区域、麹町、渋谷、小石川、中野、牛込、芝、赤坂各区に相当の被害あり。麻布、目黒、京橋、世田谷、荒川の各一部に被害あり。その他区域全域にわたり若干の被害」<sup>37)</sup>とあって、四谷区については触れていない。しかし、実際は、四谷駅東の麹町から新宿通りに沿って被弾消失被害があり、教会は焼失地帯南のはずれにあり、会堂に並ぶ寺町通りの隣寺や近くの須賀神社は罹災していなかった。四谷区は信濃町駅付近のみが焼失をまぬかれ、外苑通り東にほぼ等距離にある信濃町教会は罹災しないまま戦後まで残った。

千恵子の記述は続く。

「教会の信徒の家も焼失し、出征した教会の青年たちの悲報がつづきました。出征の前日、教会員から結婚式をと熱心に頼まれ、牧師が司式しましたが、まもなく戦死の報が届きました。ながく夫の帰りを待っていた方にも、戦死の報がきました。戦死された青年達は、教会の中心となっていましたから、牧師は悲痛の祈りをささげていました。ある教会員からの最後の葉書を原文のまま記します。『・・・キリスト者としても自己の命を惜しみなく捨てる心の準備は出来ました。皆様も信仰の上に堅く立って

ください。我々は何処にあっても一つです。我が第二の故郷が教会ゆえ、いつも、その無事なるを心に留めて祈っています。どうぞ神様の御業にのみご健闘下さい。さようなら 昭和18年7月29日 松島海軍航空基地隊』<sup>38)</sup>」。阿部牧師本人の文章でも、「昭和20年5月25日の未明に、戦火は教会堂を奪った。この頃より疎開のために多くの人々が地方へ旅立って行った。何時再び手を握りあう時がくるか全く予期することも出来ぬ教員との別離が、日曜日毎につづいた。教会は実質的には益々落寞たるものと化した。而して遂に牧師も亦、青年たちの後を追って応召した。その後四谷教会の集会は、数名の兄弟と姉妹とによって、牧師館に於いて死守されてきた。我々は此の人々の労苦を決して忘れてはならぬと思う。<sup>39)</sup>」と書いている。

現在、被害とその後の状況を9月以降に報告した太平洋協会原稿用紙に書かれた阿倍牧師の未完メモが残っている。

「I. 5/23, 24 空襲により教会堂焼失 (a) 被害 人員殺傷なし。教会施設、幼稚園を消失。緊急措置として(1) 大瀧夫妻に見舞金100.00円を与え、その立退先に就き奔走したが、教会焼跡に居住したき希望故、承諾す。(2) 区役所に届出。集会は阿佐ヶ谷に変更の旨了解を得る。(特高より注意があつたが問題とせず) (3) 教会集会は牧師館にて5日より継続す。(b) 教会重要品 (1) 祭具(棺かけ)、バプテスマ用品、結婚式用具(2) 記録、名簿、(3) 其の他、集会用備品、食器、湯のみ etc (4) 伴氏よりあづかれる遺骨一、以上は牧師館に疎開中なりしため難を避けたり。(謄写版、紙、Bible、等を焼失したるは残念であった)。(e) 7月7日牧師応召、9月初旬復員、その間、駒井、阪田、浅海姉らの協力によって山北牧師を中心に集会を継続す。(月1回) (f) 9月より再び牧師を中心に集会を継続、礼拝10:30- 11:00、聖書研究 11:00-12:00, II. 教会員動静戦

災者 1. 室谷直子(荒木町), 2. 倉本久利子(大泉町), 3. 定住さと(南品川), 4. 渋谷芳子, 5. 大島さく(左門町), 6. 永田稔(同), 7. 峯村喜生(麹町), 8. 伊藤静子(東陽町), 9. 柳原松雄(谷町), 10. 山崎正(伝馬町), 不明 荒井綾子、神野常代、高城久子、武久つる、疎開者 1, 2. 千葉夫妻(御殿場), 3, 4. 木村春江(秩父), 5. 金田豊子(成城), 6. 神野常代, 7. 武久つる(菊名), 8. 岡ちとせ(仙台), 9. 駒井いよ(同), 10. 柳田いく, 11. 横井繁子(西宮), 12, 13. 結城建太郎(静岡), 14. 伴喜代子(沼津), 15. 阪田 愛(辻堂) 戦災者 10名、疎開者 16名、在京者 13名、阿部(2)、渋谷、小野、飯田、諫山、浅海(2)、浅田、榎原、小室、阪田(2)、松田(3)、軍人、4人、室谷正雄、米原 弘(昭和20.6.30.戦死)、榎原謹一(復員)、永田 稔、栗山 茂(スマトラ)、地方会員 25人(氏名省略) III. 教会再建施針 (I)新集会場 牧師館(Asagaya 伝道所)として認可をうける。SS開校(I) (2)四谷教会(?) (a)敷地 都市計画によつて前途不明 (b)<sup>40)</sup>」

これからわかるように、その後の礼拝は阿佐ヶ谷の牧師館二階の日本間3畳間と6畳間の襖を取り外して礼拝が行われたが、7月7日、牧師に召集令状が来て入隊することとなり、留守中は三崎町教会(以前の中央会堂)の山北多喜彦牧師を中心とした合同集会を依頼して礼拝を続けた。これまででは宗教教師に対する動員は抑えられていたが、ここまでに戦況が押し迫っていた。

この論文は、前報までを含めて現在筆者が調査執筆中である『四谷教会史粗稿』の一部をまとめたもので、今後引き続き、これ以前時代についても発表する予定である。

## 謝 辞

本論文の執筆に当たっては、日本バプテスマ学校松岡正樹教務主任に助言、資料の提供など多大のご協力を頂いた。ここに厚く感

謝の意を表する次第である。

### 【注と参考文献】

- 1) 古谷圭一, 「第二次世界大戦後の四谷教会(1) 戦争責任への問い合わせ」, 本誌, 第6号, 2008年, 79-91頁。「第二次世界大戦後の四谷教会(2) 阿倍牧師辞任提案から解散まで」, 本誌, 第7号, 2009年, 91-100頁。同一内容が, バプテスト研究プロジェクト編, 『バプテスト宣教と社会的貢献』, 第4章, 2009年, 関東学院出版会にある。
- 2) 大島良雄, 『バプテストの東京地区伝道 1874-1940年』, 2009年, ダビデ社。
- 3) 四谷新生教会の項目(片小沢千代松筆), 『日本キリスト教大歴史事典』, 教文館, 1988年, 21, 866, 1455, 1544頁。ここでは四谷教会は四谷新生教会のことと誤記されている。
- 4) 木村春江よりの古谷聞き書きメモ。
- 5) 『バプテスト』, 第51号, 1934年8月15日。
- 6) 野海政一, 『中居先生』, 2003年, 21-45頁, 中居京記念会。当事者の記録であるが, フィクションとして書かれている。検挙は10月, 留置は2週間とある。
- 7) 笠原芳光, 「個人キリスト者の抵抗」, 『戦時下抵抗の研究II』, 1969年, 75頁, 同志社人文科学研究所編, みすず書房。著者の阿倍からの聞き書きで検挙は10月, 留置は20日間とある。
- 8) 清水義樹, 1909年生, YMCA夏季学校事件に觸り, 弁証法からマルクス主義史観への展開を志向した。組織神学, 関東学院大学神学部長, 関西キリスト者平和の会を結成した。
- 9) 阿倍行蔵, 「『基督教の社会的使命』に関する論文を読みて」, 『基督教報』, 第1046号, 1935年3月5日。この指摘は, 日本社会にキリスト教が受け入れられないキリスト教徒の独善性を正しく突いている。ことにインプリーディング化が激しい現代において意識しなければならない。
- 10) 阿部行蔵, 「卒業するS.S.生徒に対して」, 『バプテスト』, 第83号, 1937年4月12日。
- 11) 和田洋一, 「抵抗の問題」, 『戦時下抵抗の研究I』, 1968年, 30頁, 同志社人文科学研究所編, みすず書房。
- 12) 浪岡三郎(1897-1970), 東京学院神学部卒, ロチエスター神学院卒, 遠野, 姫路バプテスト教会牧師, 日の本女学校校長, 1944年言論出版等臨時取締令により検挙, 収監, 戦後復職した。
- 13) 阿部行蔵, 「言は肉と成れり」, 『基督教報』, 第1112号, 1937年12月17日。
- 14) 阿倍行蔵, 「僕の貌をとりて」, 『基督教報』, 第1148号, 1939年12月1日。
- 15) 阿倍行蔵, 「パウロの手紙」, 『基督教報』, 第1131号, 1938年10月7日。
- 16) 阿部行蔵, 「ピレモン書講解」, 『基督教報』, 第1138号, 1939年4月21日。「ピレモン書講解2」, 『基督教報』, 第1139号, 1939年4月21日。
- 17) 阿部行蔵, 「使徒パウロとビリビ教会—ビリビ書講解—」, 『基督教報』, 第1147号, 1939年11月1日。「僕の貌をとりて—ビリビ書講解二」, 『基督教報』, 第1148号, 1934年12月1日。
- 18) Hoot, John 奈良, 大阪地区を開拓伝道したバプテスト宣教師。
- 19) 時田信夫, 『千葉勇五郎先生追憶集 自由への憧れ』, 1966年, 64頁, 千葉勇五郎先生追憶集刊行会。
- 20) 鶴見俊輔, 他, 『日米交換船』, 2006年, 102-4頁, 新潮社。
- 21) 『内務省警察局編 外事警察概況8 昭和17年』, 1980年, 49頁, 龍溪書房。
- 22) 阿部行蔵, 「教会は斯く私を迎えた」, 『日本バプテスト教報』, 第1168号, 1941年2月20日。一個人も人間として扱われる印象を述べている。
- 23) 阿部行蔵よりの古谷聞き書きメモ。
- 24) 実際には, 啄木は行蔵の祖父工藤常政の妹カツの子である。阿部行蔵, 「啄木追想」, 『文芸春秋』, 1950年4月号, 第28巻, 第4号。
- 25) 勾留は同志社大学入学以前の関東学院時代(1933年)であり, 記述は誤りである。
- 26) 四谷教会青年会機関紙, 1948年12月, 第3号, 11頁。検挙の時期が誤り。
- 27) 特高月報, 昭和18年5月号記事, 『戦時下のキリスト教運動3』, 1973年, 144頁, 同志社大学人文科学研究所キリスト教社会問題研究会編, 新教出版社。
- 28) 筆者の木村春江からの聞き書き。
- 29) 小野清八, 東京学院卒。当時, 中野組合病院産婦人科医師で, 教会執事, 日曜学校校長であった。
- 30) 阿部行蔵, 「再認識を要す 生活を通してみた敵米の野獣性」, 朝日新聞8月19日第4面, 朝日新聞縮刷版, 1944年, 7-9月合冊, 90頁。この年の新聞ニュース報道について日本天主教統理土井辰雄, 賀川豊彦も同様な意見を発表していることを特高が記しており, 「之等は必ずしも戦争完遂の熱意, 米英撃滅の敵愾心に基け

- るものとは認め難く・・・専ら基督教を擁護せむとの立場」としている。同志社大学人文科学研究所編、『特高資料による戦時下のキリスト教運動』、3巻、2003年、217頁、新教出版社。
- 31) 阿部行蔵、「愛は怒りをこめて」、1951年、2頁、三笠書房。
  - 32) 国家総動員令したに目指された肇国の理想実現を目指す日本精神にもとづくキリスト教。阿原謙蔵、「日本基督教団の使命」、『教団時報』、1942年10月15日、第222号など。
  - 33) 阿部行蔵、「回顧と展望」、『いばら』第20号、1951年5月13日。
  - 34) この教会堂は、アントニン・レーモンドの初期設計作品として知られていたが、戦後は建築学史上、幻の建物とされていた。
  - 35) 阿部千恵子、「旧四谷教会院へ」、『この愛を生きて』、2000年、30頁、阿部行蔵先生追悼集刊行編集委員会。
  - 36) 大本営発表、1945年5月26日16時30分。
  - 37) 共同新聞、1945年5月27日、これは、新聞各社が罹災したため共同で発行したもの。
  - 38) 注34と同じ。
  - 39) 阿部行蔵、四谷教会保存文書。
  - 40) 阿部行蔵、四谷教会保存文書。

## 依存性から見た大学生の「ひきこもり」に関する一考察 —学生相談事例を通して—

小林 弥生

A Study on the Social Withdrawal from the Viewpoint of the Dependency in Student Counseling

Yayoi Kobayashi

### 要 旨

現代の大学生は社会人と同様に多様なストレスを抱えている。中には些細なストレスの蓄積から不登校となり、中途退学へ至る例もある。また自室にひきこもりながら飲酒や喫煙、拒食・過食の傾向が強まり、オンラインゲーム依存やインターネット依存など、嗜癖（addiction）いわゆる依存症の状態に陥る大学生もいる。特に一人暮らしの場合、深刻化するまで発見に至らない場合も多い。ひきこもりの背景にはさまざまな精神病理が関係している場合があるが、これらの症状を呈さないまでも、自尊感情が乏しく依存性(dependency)が高い場合、適応困難な状態に陥りやすい。さらに大学生のうつは、「軽症うつ」と称される「新しいタイプのうつ」が多く、中にはひきこもりや嗜癖を併発する例もある。筆者が担当した複数の相談事例によると、ひきこもりやうつと依存性の問題が絡むケースは症状が長期化しやすい傾向がみられる。治癒に向けてはカウンセリングだけでなく学生をとりまく周囲の適切な環境調整が不可欠である。

### キーワード

- ①大学生のひきこもり ②大学生のうつ
- ③中途退学 ④社会不安障害 ⑤自傷行為
- ⑥嗜癖（依存症） ⑦オンラインゲーム依存
- ⑧インターネット依存

### 目 次

1. 序章
2. 大学生のひきこもりとその背景
3. 大学生とうつ
4. 事例検討
5. 結論

### 1. 序 章

現代はストレス社会と言われ、大学生もまた多様なストレスを抱えている。中には些細なストレスの蓄積により不登校となり、ひきこもりを続けた後に中途退学してしまう例もある。そして筆者がカウンセリング場面で出会う大学生たちは年々、精神的に幼く依存的になっていると感じる。客観的に見ればさほど深刻ではなさそうな恵まれた環境下においても、比較的短期間のうちに心身の症状が悪化する例が少なくない。例えば教員から与えられた課題に真面目に取り組んでいる学生の場合、その課題が終わるまでの間は余計なこ

とを考えずにひたすら没頭するが、課題を提出し終わると極端に元気がなくなり、抜け殻のようになってしまう。それだけ集中力があるという捉え方もできるが、余計なことを考える余裕がない分、気づかぬうちに自分自身で過度な無理を強いてしまう。その結果、自室にひきこもりながら一日の大半を寝て過ごす学生もいれば、飲酒や喫煙、拒食・過食の傾向が強まる学生、オンラインゲームやチャットなどインターネット上の対人関係から抜け出せなくなる学生もいる。個人差はあるものの、ストレス耐性(tolerance)の低さや、気分転換を苦手とする生真面目な性格傾向が主な原因と考えられる。

本稿では、筆者が1998年より関東学院大学カウンセラーとして対応した約2000名の事例の中から、ひきこもりやうつ症状を呈した学生たちの相談事例について、依存性(dependency)<sup>1)</sup>の観点から考察する。

## 2. 大学生のひきこもりとその背景

### 2.1 「ひきこもり」の定義

不登校・ひきこもり状態の学生には長期的に関わるケースが多い。外出が困難なため、カウンセリングにはご両親のみが来談し、本人には会うことができないケースもある。

「ひきこもり」とは、狭義には「さまざまな要因によって社会的な参加の場面がせばまり、自宅以外での生活の場が長期にわたって失われている状態」、広義には「目標を失い主要な社会生活の領域から選択的に逃避している状態」と定義される<sup>2)</sup>。また、ひきこもりはあくまでも行動上の状態の特徴であり、一つの疾患を指す診断名ではない。大学生のひきこもりでは、自宅周辺のコンビニエンスストアや書店など特定の場所には外出可能なケースが多い。

### 2.2 ひきこもりの行動特徴と病理

ひきこもりは、①外傷体験・挫折体験があ

る、②ほとんど外出しない、③対人恐怖がある、④不登校から始まり長期化している、⑤子ども返りのような行動がある、⑥親を召使のように使う、⑦親の対応を責めたり、親との接触を避ける、⑧昼夜逆転の生活、⑨家庭内暴力がある、といった行動特徴をもつ<sup>2)</sup>。特に大学生のひきこもりは、対人恐怖と昼夜逆転の状態に陥るケースが多い。

ひきこもりの背景には、社会不安障害(Social Anxiety Disorder; SAD)<sup>3)</sup>、回避性パーソナリティ障害(Avoidant Personality Disorder)<sup>4)</sup>、統合失調症(Schizophrenia)<sup>5)</sup>、うつ病や抑うつ状態、いわゆる不眠症などの睡眠障害、强迫性障害(Obsessive-Compulsive Disorder; OCD)<sup>6)</sup>、喘息やアトピー性皮膚炎などのアレルギー性疾患、高機能広汎性発達障害(High Functioning Pervasive Developmental Disorder; HF-PDD)<sup>7)</sup>などが関係している場合もある。さらに嗜癖(addiction)<sup>8)</sup>の問題を併発するケースも少なくない。

### 2.3 ひきこもりと嗜癖問題

嗜癖は物質依存(アルコール、タバコ、薬物など)、過程(プロセス)依存(ギャンブル、インターネット、買い物など)、人間関係依存(恋愛、共依存、インターネットにおけるチャットなど)の3類型に大別される。大学生のひきこもりに多くみられるのは、インターネット依存とオンラインゲーム依存である。また故意に自身の手首を切るリストカットや処方薬を全部飲んでしまう大量服薬(Overdose; OD)などの自傷行為(self-abuse)、拒食や過食が止められない状態も大学生に多くみられるが、これらもまた嗜癖の一種と考えられる。

嗜癖は、人間の本能的な甘え、依存性を満たし、安心感・居場所を求める行動と共通するものがある。大学生のひきこもりにも、赤ちゃん返り(母子密着)の状態が見られるケースがある。また不安定な自己イメージと劣等感から生じる自己愛性と誇大性、自己の卑小

感などが起因となって、自己の存在感を確認するため、自傷行為を含めた嗜癖が行動化されると考えられる。これらの症状を呈さないまでも、自尊感情が乏しく依存性が高い場合は、精神的に不安定で適応困難な状態に陥りやすい。

### 3. 大学生とうつ

#### 3.1 大学生にみられるうつ

大学生のうつは、留年や就職活動の失敗などをきっかけに発症する場合もあれば、やりたいことがみつかないといった漠然とした不安からも発症する。つまり明確なきっかけがなくても、意欲減退や活動性低下、疲れやすさから外出の機会が減り、徐々に課題への取り組みも困難となる。また注意力の低下、自己卑下的妄想などにより他者と関わることが億劫になり、自室にひきこもるようになる。特に一人暮らしの学生ではひきこもりや嗜癖の問題が深刻化するまで発見に至らない場合も多い。一方、自宅生の場合は家族関係の問題、特に家庭内暴力などの深刻なトラブルを起こしている場合もある。

#### 3.2 新しいタイプのうつ

近年、うつの状態が多様化し、これに伴いうつの概念も拡大したと言われている。「従来型のうつ」は、几帳面で責任感が強く仕事熱心な中高年層に比較的多く見られる。抑うつ気分、興味や喜びの減退、自責の念による希死念慮などが症状の特徴だが、通院と投薬などの適切な対応により快放に向かう事例が多い。一方、「新しいタイプのうつ」は20～40歳代の若い年齢層に多く、症状にも従来型のうつとは異なる傾向が見られる。従来型のうつの軽症化と捉えられることもあれば、環境要因や性格要因が強く影響していると考えられることから、適応障害<sup>9)</sup>、パーソナリティ障害との識別が困難な例も多い。新しいタイプのうつについては、近年、日本の

研究者たちから多様な病型の報告がなされている。(広瀬<sup>10)11)</sup>は成績優秀なエリート社員に多く、仕事の負荷や会社の人間関係が原因となり、抑うつに逃避する。連休後や月曜日に休みがちとなり、会社に近づくと不安が強くなり、引き返すことがある。抑うつ気分や希死念慮は目立たないが、億劫、だるさなどの抑制、倦怠感、易疲労性により、朝起きることができない。週末は朝早く起き、活発に動くことができるので、詐病(いわゆる仮病)と間違えられやすい。性格的には他者からの評価に過敏で、良い評価が得られないと極端に意欲が低下する傾向を持つ。うつからの回復時に一見葛藤なくひきこもり状態になるよう見受けられる。「未熟型うつ病」(阿部<sup>12)</sup>)は20代後半～40代の男女、末子に多い傾向で、家族からかわいがられ、20歳過ぎまでは葛藤もなく過ごす。仕事や家庭生活などの挫折を機に発症し、不安や焦燥感が強い。周囲に対して依存と攻撃性を示し、ストレス状況が棚上げされると軽躁状態<sup>13)</sup>になりやすい。病前性格は依存的で自己中心的、顯示的で人付き合いは悪くないが自らの能力を過大評価しやすく先の見通しが甘い。「ディスクミア親和型うつ病」(樽見<sup>14)</sup>)は若年層に多く、自ら抑うつ気分、やる気のなさ、不全感、心的疲労感を訴える。仕事や学業に前向きに取り組むことが少ないので怠学の状態が続く。比較的よく話し、会話のテンポが早い。衝動的な自傷、自殺企図が見受けられるが、抗うつ薬に対する反応が良くないため長期化しやすい。

このように、几帳面で責任感の強い従来型のうつとは対照的に、新しいタイプのうつは自己中心的でわがままな傾向が強い。学生相談の現場においても対応に困る例が多く、背景に依存の問題を抱えている事例も少なくないと考えられる。

### 4. 事例検討

注) 以下に紹介する3事例はいずれも筆者が

実際に対応した複数の事例から本人を特定できないよう再構成した架空事例である。

#### 4.1 A君の事例

＜事例の概要＞理系学部に所属する男子学生。自宅より通学。  
＜来談経路＞不登校による単位未修得のため、教授からの紹介で来室。  
＜入学以前＞小学校～高校までは大変真面目で、遅刻や欠席もなく、皆勤賞だった。  
＜大学生活＞入学直後から、大学の雰囲気になじめず、徐々に教室に入ることもできなくなる。授業を休み、自宅で昼夜逆転の生活を過ごしながら、オンラインゲームにはまる。  
＜家族＞父親は放任主義。母親はA君に服従的で、A君も家族の中では母親とのみ会話ができる。妹は大変活発で社交的な性格。  
＜対応＞対人恐怖と緊張感が強く、大学生活への適応が困難な状態だったため、投薬治療が有効と判断し、医療機関を紹介。社会不安障害と診断される。  
＜予後＞通院治療により対人恐怖は軽減され、大学の授業も少しずつ出席できるようになったが、オンラインゲームはやめることができなかつた。主治医、母親との話し合いの結果、休学を続けながら、好きなパソコンを生かせる資格を取るための勉強を始めた。

#### 4.2 Bさんの事例

＜事例の概要＞文系学部に所属する女子学生。親元を離れ、大学付近に一人暮らし。  
＜来談経路＞友人が対応に困り果てて来室。後からBさんを連れて来室する。  
＜入学以前＞高校の頃からリストカットや大量服薬などの自傷行為を繰り返す。  
＜大学生活＞精神不安定になると自宅に引きこもり、深夜、友人に電話をかけて自殺予告を繰り返す。Bさんの相手をする友人は

どんどん減り、孤独感から授業も休みがちになる。淋しさを紛らわすため、インターネット上で知り合った複数の年上男性と交際する。

＜家族＞両親共に、Bさんの状態が手に負えず、関与にはかなり消極的。  
＜対応＞数回のカウンセリング後、嗜癖の状態が長期化する恐れがあると判断。ご両親と何度も話し合った結果、専門の医療機関を紹介。うつ傾向および人格障害と診断される。  
＜予後＞主治医の勧めにより大学を中途退学し、治療に専念する。

#### 4.3 C君の事例

＜事例の概要＞文系学部に所属する男子学生。親元を離れ、大学付近に一人暮らし。  
＜来談経路＞学業や対人関係などさまざまな主訴により自主来談。  
＜大学生活＞父親の強い勧めにより大学に進学したが、入学直後から怠惰な生活でアパートにひきこもる。学業成績は悪く、友人は少数いるものの、学内よりもオンラインゲームで知り合った学外の友人とパソコン上で交流するのが主。普段は無口だが、ゲームの話になると多弁になる。  
＜家族＞父親は厳格でC君を長男として厳しく育てた。母親は控えめで大人しい。妹は優等生で、両親から溺愛されている。  
＜対応＞不眠不休でゲームに没頭しアパートにひきこもっている状態のため、カウンセリングは不定期に継続。初回来談時すでに母親の勧めにより精神科へ通院中で、うつの診断を受けていた。  
＜予後＞通院を面倒がり、治療は何度も中断する。受診しても処方薬の大量服薬やリストカットなどの自傷行為を繰り返す。治療を2年継続したが症状に大きな改善が見られず、大学を中途退学する。

#### 4.4 事例の分析と考察

A君は投薬とカウンセリングによって社会不安障害の軽減には成功したもの、オンラインゲームの世界からは縁を切ることができなかった。不安が軽減し授業へ出席できるようになると、次の課題である現実の人間関係の困難さと直面することとなり、その結果、オンラインゲームの世界に居場所を求めるようになったのではないかと考えられる。またA君の柔軟性の低さと精神的な幼さ、依存性の高さなどの性格傾向が、自由度の高い大学生活への適応を妨げたとも推測される。

Bさんは自傷行為や人間関係への依存などの嗜癖とアクティングアウト（acting out）<sup>15)</sup>が激しいことから、学業よりも専門機関での治療を優先した。高校生の頃から問題行動を呈していたにもかかわらず単身上京していることなどからも、家族の問題が大きく関係しているといえる。Bさんの場合、依存性が高く、他者を巻き込むタイプの境界性パーソナリティ障害であると考えられるため、ひきこもりが長期化することはなく、むしろそれを利用して他者を取り込もうとする傾向が強く見られた。

C君はもともと怠惰な性格で、勉強が好きではなかったことから、一人暮らしがオンラインゲームへの依存を強化してしまったようである。また家族要因として、厳格な父親に対する反発や、優等生の妹への嫉妬もあったものと考えられる。その結果、適切な自尊感情を持つことができず、衝動的な自傷行為を繰り返していた。抗うつ薬の効果もほとんど見られなかつたことから、新しいタイプのうつに該当する事例と考えられる。

### 5. 結論と課題

大学生のひきこもりと依存性の問題はこれらの居場所を仮想社会に求める現代の若者たちにとって大変身近な問題である。ひきこもりは依存性の問題と絡むと長期化しやすく、

検討事例のように嗜癖の状態にあると予後もなかなか回復に至らない場合が多い。したがって主たる対応は嗜癖を専門とする医療機関に委ねるのが望ましいが、大学への適応をどのように支援していくべきか、今後さらに検討すべき研究課題であると考える。

また「新しいタイプのうつ」は若い世代に多く見られ、大学生にも該当する者が多い。しかし実際にはうつであるとは気づかれず、相談機関や医療機関にからないまま放置されているケースが多数あると思われる。それの中には依存性の問題を抱える者も少なくないが、うつもまた依存性の問題と絡むと長期化しやすく、嗜癖の状態にある場合は状況がさらに複雑化する。うつは早期発見が重要であるのは言うまでもないが、新しいタイプのうつは投薬と休養だけでは回復に至らない場合が多い。学生相談では、大学の卒業を契機に相談が終結となるが、このようなケースではなかなか卒業（終結）に至らず、長期にわたる支援が必要となる。したがって治癒に向けてはカウンセリングや周囲の環境調整等、あらゆる方面からの適応援助が不可欠であると言える。

### 謝 辞

本稿は関東学院大学キリスト教と文化研究所「依存症とキリスト教」研究プロジェクト2007年度第3回研究会（2007年11月8日）および同プロジェクト2009年度第2回研究会（2009年9月25日）における筆者の発表内容をまとめたものである。ご指導いただいた安田八十五教授をはじめ、研究会にご参加くださった皆様方に心より感謝する。

### 【注と引用文献】

- 1) 他者に依存する未熟な傾向、いわゆる甘えの状態をさす。シアーズ（Sears, Robert Richardson）らは、依存性は乳児が授乳を通して二次的に獲得するものであると主張した（「心理学辞典」（1999），有斐閣）。また依存性パーソナリティ

- 障害（dependent personality disorder）は、世話をされたいという過剰な欲求があり、従属的でしがみつく行動をとり、分離に対する不安を強く感じる特徴をもつ人格障害をさす（アメリカ精神医学会「DSM-, TV-TR（精神疾患の診断・統計マニュアル 新訂版）」における分類）。
- 2) 岡本裕子・宮下一博（2003）、「ひきこもる青少年の心」、北大路書房（第1章「ひきこもり」の定義・メカニズムと発達臨床心理学的な意味参照）
  - 3) 社交場面や人前で行動する場面において、よく思われていないのではないか、恥をかくのでは、と過剰に心配するあまり、緊張して声の震え、手の震え、動悸、下痢、発汗、赤面など様々な身体症状が出るために、学校や会社に行けないなど社会生活に支障の出る状態をさす。社会恐怖（social phobia）と同義。アメリカ精神医学会「DSM-, -TR」における分類。
  - 4) 拒否されることに対して極度に敏感で傷つきやすく、嫌われることを恐れて対人場面や社会生活を回避しがちとなるため、自分自身が苦痛を感じたり、あるいは周囲の人がその人の対応に困り果てている状態をさす。アメリカ精神医学会「DSM-, -TR」における分類。
  - 5) 大学生の時期に多く発病する傾向のある重篤な心の病。知覚や思考に問題が生じ、被害的内容の幻聴や被害妄想などから不可解な言動を示す。日本精神神経学会が2002年、「精神分裂病」から「統合失調症」に名称を変更。
  - 6) 不合理であるとわかつていながら、ドアの鍵を開めたかどうかが気になって頭から離れなくなるなどの「強迫観念」や、必要ないとわかつていながら鍵の確認に何度も戻ってしまうような「強迫行為」が止められず、悩む状態をさす。
  - 7) 知的な遅れがないにもかかわらず、言語的あるいは非言語的なコミュニケーションの障害、社会性の障害、想像性の欠如のため特定の狭い領域への関心やパターンへの固執、といった障害を先天的にもっている状態をさす。高機能自閉症（High Functioning Autism ;HFA）、アスペルガー症候群（Asperger's Syndrome ; AS）など。
  - 8) ある習慣への耽溺。本稿では「依存性<sup>1)</sup>」とは区別して用いている。
  - 9) 社会環境においてうまく適応することができず、精神的、肉体的に症状があらわれて日常の社会生活に支障をきたす、不適応の状態をさす。
  - 10) 広瀬徹也（2006）、「逃避型抑うつ」、精神療法32(3),PP.277-283
  - 11) 広瀬徹也（2008）、「逃避型抑うつとディスチニア親和型うつ病」、臨床精神医学37(9),PP.1179-1182
  - 12) 阿部隆明（2006）、「未熟型うつ病」、精神療法32(3),PP.293-299
  - 13) 躁状態に特徴的な症状を呈するが、躁状態ほど重篤ではないものをさす。躁状態とは、気分がその人のおかれた状況にそぐわないほど高揚し、愉快で陽気な気分からほとんど制御できない興奮に至るまで、さまざまに変化する。活動性は増大するが、注意力と集中力が障害されるため、安定して仕事をしたり、くつろいで心身を休めることができなくなる。
  - 14) 樽味伸（2005）、「現代社会が生む“ディスチニア親和型”」、臨床精神医学34(5),PP.687-694
  - 15) 精神科における治療やカウンセリングなど、心理治療中に生じる患者の心的葛藤や抵抗が、主に治療場面以外の言動に表れること。行動化。フロイト（Freud,S.1940）が精神分析治療の文脈の中でこの語を用いた。

### 【主な参考文献】

- ① 内田千代子（2009）、「大学生のうつ病」、こころの科学146,PP.59-65
- ② 斎藤学（2004）、「引きこもり依存症 —システムズ・アプローチに基づく対応法」、アディクションと家族21(1),PP.33-53
- ③ 斎藤環 編（2001）、「特集 ひきこもる思春期」こころの臨床 a la carte Vol.20 No.2,星和書店, PP.162-242
- ④ 竹澤みどり・小玉正博（2004）、「青年期後期における依存性の適応的観点からの検討」、教育心理学研究 第52卷 第3号,PP.310-319
- ⑤ 多田幸司（2009）、「新しいタイプのうつ病概説」、こころの科学146,PP.25-31
- ⑥ 中垣内正和（2004）、「ひきこもりを生む社会」、アディクションと家族21(1),PP.17-26
- ⑦ 林直樹（2006）、「性格的な問題とうつ」、こころの科学125,PP.33-38
- ⑧ 福田真也（2007）、「大学生のこころのケア・ガイドブック」、金剛出版
- ⑨ 平井大祐・葛西真記子（2006）、「オンラインゲームへの依存傾向が引き起こす心理的課題」、心理臨床学研究 Vol.24 No.4,PP.430-441

## キリスト教から見た est の問題点

神 谷 光 信

The Problems of est from Christian Perspective

Mitsunobu Kamiya

### キーワード

- ①ワーナー・エアハード ②エスト
- ③ヒューマン・ポテンシャル・ムーヴメント
- ④ニューエイジ ⑤ソース ⑥ゴッド
- ⑦禅仏教 ⑧キリスト教神秘主義

### 目 次

1. ニューエイジ・ムーヴメントのなかのヒューマン・ポテンシャル・トレーニング
2. エスト・スタンダード・トレーニングの内容
3. キリスト教伝道師によるエスト批判
4. エストに参加したキリスト教牧師の証言
5. キリスト教から見たエストの真の問題点  
註

### 1. ニューエイジ・ムーヴメントのなかのヒューマン・ポテンシャル・トレーニング

カトリック教会は、近年、ニューエイジ・ムーヴメントを警戒している<sup>1)</sup>。その理由は、これが西洋の秘境的伝統の現代版であり、正統的キリスト教に対抗する受容不可能な靈性復興運動という側面を持っているとカトリック教会が理解しているからだと考えられる。ニューエイジ・ムーヴメントが内包するものは、仏教など異教への強い関心から、いわゆるオカルティズム、チャネリング、各種心理療法までと多岐にわたる。ニューエイジ・ムーヴメントは、1960年代のカウンター・カ

ルチャー（対抗文化）を受けて、アメリカ西海岸を中心に、1970年代から80年代にかけて広がっていき、現在では日本を含む世界中へと拡大しているといってよい。マーク・ミュリスは、1980年代から日本の書店でエドガー・ケイシー、ルドルフ・シュタイナー、クルシナムルティ、グルジェフ、バグワン・シェリ・ラジニーシ、カルロス・カスタネダなどの翻訳が数多く並べられていることを紹介している<sup>2)</sup>。

ニューエイジ文化の発火点の一つとして名高いのが、カリフォルニアにあるエサレン研究所である。ここはヒューマン・ポテンシャル・ムーヴメント（人間可能性開発運動）の中心として、人間性心理学のカール・ロジャース、自己実現理論のアブラハム・マズローらを中心には、さまざまな心理療法やセミナーが開催され、多方面に影響を与えてきた<sup>3)</sup>。

ニューエイジ・ムーヴメントのなかには、ラージ・グループ・アウェアネス・トレーニング・プログラム (LGAT), あるいはヒューマン・ポテンシャル・セミナー、また単にトレーニング・セミナーと呼ばれるものがある（わが国では「自己開発セミナー」と呼ばれるが、この語の英訳であるセルフ・ディヴェロップメント・セミナーという言葉は、管見の限りでは、英語文献で目にしたことがない。）

こうしたセミナーの代表格が、ワーナー・エアハードが創始したエスト（エアハード・セミナーズ・トレーニング）である。彼もまた、

エサレン研究所で各種セミナーに参加している。ワーナーは、ナポレオン・ヒルの成功哲学、マックスウェル・マルツ、デール・カーネギー・コース、禅仏教、ロン・ハワードのサイエントロジー、アレクサンダー・エヴァレットのマインド・ダイナミックスなど、多くの思想的遍歴を経て、独自の商業的教育プログラムを開発した<sup>4)</sup>。

エストは1971年に始まり、1984年に終了した。1985年からは、フォーラム（The Forum）という後続のプログラムがスタートしている。ワーナー自身は1991年にリタイアしたが、その年にワーナー・エアハード・アンド・アソシエイツから著作権を引き継いだランドマーク・エデュケーションが、現在も日本を含む世界各地でランドマークフォーラム（Landmark Forum）という名称でこのプログラムを実施している。

グレン・ルペートは、多く存在するこの種のトレーニング・セミナーのさきがけとして、エストとライフスプリング（Lifespring 1974開始）を挙げている<sup>5)</sup>。後者の創始者ジョン・ハンレーもまた、マインド・ダイナミックスと関係が深いが、エストとライフスプリング・セミナーの内容はかなり異なっている。わが国では、ライフスプリングの創立に関与したロバート・ホワイトが、アーク・ワールドワイズを1977年に設立し、ライフダイナミックス・セミナー（Life Dynamics seminar）を開始したのを嚆矢とする。1990年前後には、このセミナーの影響を受けた多くのセミナーが数多く存在した<sup>6)</sup>。なお、エストは、フォーラムに改編された1985年に日本に上陸した。

カトリック、プロテstantoを問わず、キリスト教的観点から見て、エストのどこが問題なのだろうか。それを浮き彫りにするためには、エスト・トレーニングがどのような内容のものなのかを具体的に検討してみなければならない<sup>7)</sup>。

## 2. エスト・スタンダード・トレーニングの内容

エストは、2週末と1晩、全体で約60時間のプログラムである。最後の1晩はゲスト・イベント（参加者から招待されたゲストがサインナップする機会）となっているため、実質的には4日間である。会場はホテルの大会場などが用いられ、参加者は200～250人程度である。中央前面に低いプラットフォームがあり、トレーナー用の高い椅子が1脚。左右には黒板。参加者はシアター・スタイルで着席する。セッションは朝9時頃からスタートし、終了はしばしば深夜に及ぶ。トレーナーは1人。第1週末と第2週末では別人である場合もある。数時間ごとに短い休憩時間があり、夕方に1回、ミールブレイクがある。参加期間中、アルコール、煙草などは禁じられている。また、医師の処方以外の薬物服用も同様である。また、参加中は腕時計を外しておかなければならない。

ところで、エストには、4つの原理的トピックスがある。①ビリーフ、②体験、③リアリティ、④セルフである。そしてこれらのトピックスを吟味するために、3つの方法が用いられる。すなわち、①トレーナーによるレクチャー、②「プロセス」、③シェア、である。「プロセス」とは、主に目を閉じて行う瞑想的実習である。シェアは、トレーナーとの1対1のコミュニケーションである。全体としてはレクチャーは少なくシェアの割合が多い。

エスト1日目。グランドルールの説明の後、登場したトレーナーは、「あんたがたの人生は働いていない（ドント・ワーク）、アシユホール（糞袋）！」と禪僧のように権威的に言い放つ。トレーナーは、エストの中で自分が語る言葉を一切信じるな（ドント・ビリーヴ）と約束させた上で、次のような内容を、参加者との対話それ自体によって明らかにしていく。人間は自己の見解という概念的「理

解」が正しいと信じ込んで（ビリーフ）いる。そして「体験」というものの本質については無知である。人間は実は自分自身の諸問題の原因なのであり、人生で演じているさまざまな「アクト（御芝居）」を断念することで問題を解消してしまう必要がある。1日目の終りに「ボディー・プロセス」というセッションがある。参加者は、頭痛、肩こりなど自分を悩ませているものをその場で観察する。それらに抵抗せず、そのままにしておくことで、それらが消え去る事実をトレーナーは指摘する。このデモンストレーションにより、参加者は個人のアクトが自分自身の体験世界の原因であることを確認する。トレーナーは参加者にいう、「あなたがたはパーソナリティだ。けれどもバリアがあなたがたを体験からブロックしている。あなたがたは、何かを変えよう、コントロールしようと試みるが、それを果たすことが出来ない。抵抗することでそれ自体を継続させてしまっているからだ。あなたがたが体験を再創作（リクリエイト）しさえすればそれは消えるのだ」と。

エスト2日目。「体験の分析」というセッションで、参加者は、自分独自の問題を何か選ぶよう指示される。その問題は、特定の状況的行動と結びついた心理的動搖（アプセント）といったものである。参加者は、そうした問題を探し出し、問題の「アイテム」をその場で「（再）体験」する。子供時代のトラウマ的な出来事に対する恐怖や怒りがアイテムである場合も少なくない。それらの「アイテム」のエレメント（例えば、悲しみの感情は、胸を押さえ付けられたり、喉元を締め付けられるような感覚というエレメントから構成されている）は全て呼び起こされ、「再体験」され、そして解消する。「もしもあなたがその体験を再創作（リクリエイト）し、消し去れなければ、それはあなたを機械のように動かし続ける。」とトレーナーは警告する。「けれども、あなた自身がそれを解消できたならば、それは誰の責任ということになるのか？」。参加者

は、「しかし」という言葉を用いて、日常的に、共存する事実を対立化し、問題を創作してしまっていることに気がつく。「私はビーチに行きたい。そして、私には時間がない。」「しかし」で2文を繋がなければ、これはもはや「問題」たりえない。次に、黙ってグループの前に立つセッションがある。各人特有の「アクト（御芝居）」（社会的ペルソナのようなもの）がそこで露わになる。「あほらしいアクトを捨てろ」トレーナーは「デインジャー・プロセス」で命ずる。次に「恐怖のプロセス」が行われる。恐怖のために叫び声をあげる。そして今度は他人を恐ろしがらせるために大声をあげるということを大真面目に演じるのだ。「全ての人が恐れている人は誰か」とトレーナーは問う。「それはあなた自身だ」。充分に恐怖の「体験を体験する」ことにより、参加者は恐怖から解放される。

エスト3日目。物質性に基づくニュートン的アリティがしりぞけられ、個人的体験の主觀性に基づく人間的なアリティに転換される。たとえば、同じ室温でも、暑いと感じる人もいれば、暑くないと感じる人もいる。「あなたは、あなたの体験のただ1つのソース（source 源泉）だ。あなたがその体験をクリエイトしたのだ。」とトレーナーは指摘する。我、体験す、ゆえに我と我が世界あり、ということである。次に参加者は、性の役割交換を演じる。それが眞の自己表現とコミュニケーションの障害となっているものの1つであることを自覚するためである。女性はタフな男性を演じ、男性はキュートな少女を演じる。次に参加者は、自分の「インナー・センター」で、両親や自分に重要な人物とコミュニケーションするためのヴィジュアライズを行う。想像の中で、触れ、味わい、嗅ぎ、物理的な存在をありありと見るところまでそれは行われる。

エスト4日目。「マインドの分析」。マインドには生まれて以来の全ての瞬間が連続して記録されている。それは人間存在をアップセ

ット（動搖）させ、強制的に行動（アクト）させる。マインドは、トラウマ的な体験の連鎖により、外部からの刺激に自動的に反応する、いわばマシン（機械）なのである。マインドの機能は何か。それ自身のサヴァイバル（生存）に他ならない。その目的は、エンドレスに自身の正しさを証明し続けようとするところである。「エンライトメント（開悟）は、自分がマシン（機械）だと知ることだ」とトレーナーはいう。あなたの人生はミーニングレスだ。機械には意味はなく、ノーコントロールだからだ。「あなたはあなたの体験のソースでありクリエイターだ。あなたは神（God）だ。しかし、そのクリエイトした宇宙で、全てはあなたのコントロールの外にある。これは全くナンセンスだ。全くのパラドックスだ。あなたができることは、ただ起きることを選択することだけだ。What is,is. What isn't, isn't. 何が起きてもそれを選択するのだ。それで人生の悩みは消えるだろう。立っているときに、自分は立っている。悲しんでいるときに、自分は悲しんでいる。」「あなたはマインドを持っている。それはマシンだ。そして、あなたは全てをクリエイトする完全な存在である。要するに、通常信じられているように、マインドがあなた自身なのではない。」このパラドクシカルな事実を体験することが「ゲッティング・イット」である。ここにおいて、参加者は人生と自分自身とを生き生きとした満足のなかで体験することが可能となる。固定的な意味や判断、目的などなしに。人生は生き生きとした体験のためのゲームであり、自分の正しさを信ずるためのものではない。人間の選択は、合理的（リーズナブル）ではない。最後にチョコレートとバニラアイスクリームの選択のデモンストレーションがある。「あなたがバニラを選択したのは、あなたがバニラを選択したからだ。あなたこそがそれを選んだ原因だ。普通に考えるように、バニラが好きだからといった理由が原因なのではない。」とトレーナーは指摘

する。この論理を敷衍すれば、自分の手中にあるものは、全て自分が選択したものだということになる。自分の仕事、家族、人間関係等々、全て自分が選択したものだ。そうであるならば、それらに責任を取ることができる。バスが遅れた。「そして」遅刻した。バスが遅れたのも自分の責任であれば、他の国も飢餓も紛争も、自分の体験する宇宙の中でおきている出来事であるという意味で、自分の責任である。これは世間一般では受け入れられない理屈だが、このように仮に解釈してみると、自分がもはや環境の犠牲者ではなくなり、むしろ責任者であるという厳肅な自覚が生じることはありえることだ。

### 3. キリスト教伝道師のエスト批判

以上、エストの内容骨子を概念的に見てきた。スティーヴン・ティプトンが指摘するところ、エストはいかなる宗教的信条も倫理的体系も参加者に教えはしない<sup>9)</sup>。エストの目的は、端的にいえば、参加者の生きることへの「力づけ」であり、それ以上のものではない。そしてその方法は、可能性としての対話（ワード・ゲーム）と、ある種の瞑想的実習である。

それでは、キリスト教から見て、エストの何が問題となるのであろうか。

キリスト教伝道師ボブ・ラルソンは、エストにおいては、「人は彼自身の神（God）であり、宇宙の中心である。（法律上ではない宗教上の）罪（Sin）は存在しない。そしてすべての個人的行為はその人自身の完全性によって正しいとされる。」とする<sup>8)</sup>。この理解は正鵠を得ているだろうか。確かにエスト4日目に、「あなたはあなたの体験のソースでありクリエイターだ。あなたは神（God）だ。」という言葉が語られる。けれどもここで「神」という言葉は明らかにレトリックとして用いられている。また、トレーナーはエストの開始時に「エストの中で自分が語る言葉を一切信じるな（ドント・ビリーヴ）」と約束させ

ている。それはエストという「ゲーム」を協同して展開するために必要な言葉にしか過ぎず、真理ではないからである。「罪」の問題が扱われるのは、エストが宗教ではない以上、当然である。このように考えると、ラルソンの批評は当を得ていないといわざるを得ない。

#### 4. エストに参加したキリスト教牧師の証言

エストに参加した2人の牧師の証言がある<sup>10)</sup>。男性牧師は「エストで何が自分に起きたのかはわからない。けれども以前とは自分が違うのを感じる。エストは神学が自分に語っていたことを体験させてくれた。」と述べている。また、女性牧師は「教会で語られる神に関する多くの言説は、私には何の意味も持たなかった。けれども現在の自分は最高にすばらしい神とミッションとを持っている。エストは新しく深い方法で、私に宗教的感情を取り戻してくれた。」と語っている。これらの証言は、実際にエストに参加した聖職者の言葉であるだけに、傾聴に値すると考えられる。2人の信仰は、エストに参加したことにより、明らかに深まっている。

#### 5. キリスト教から見たエストの真の問題点

エストの創始者ワーナー・エアハードは「信じられた真理（truth）は虚偽（lie）である。」と述べ「真理はただ体験されるだけである。」と続ける。そして「真理」の語の代わりに「神」という語を置き換えもある。エストにおいて「ビリーフ」とは体験されない概念的「知」のことといってよい。われわれは概念的「現実」をリアリティと錯覚して生きているとエストのトレーナーはいい、「アシュホール（糞袋）！」と禅の老師のごとく叫ぶ。

「人生はからっぽで意味なし」「人生はから

っぽで意味なし、という言葉はからっぽで意味なし」というエスト4日目に語られる言葉の「体験」には、禅仏教、そしてキリスト教神秘主義に通ずるところがあるようにも感じられる。ミサの最中に深遠な体験したトマス・アクイナスが、以後『神学大全』の執筆を断念し、自分に啓示されたことを思えばこれまで記した言葉は全てわらくずのように見えると語ったという挿話も筆者は想起する。ここにも「信じること」と「体験すること」という主題が横たわっていると思うからである。

とはいって、エストにおける「無」の体験と禅仏教における「無」、そして本質的には対話であるところのキリストとの一致というキリスト教神秘主義との比較には、より詳細な吟味が必要であろう。むしろわれわれは、やはり各自が体験世界のソース（源泉）であるという見解、それをエストのトレーナーは信念（ビリーフ）のステイトメントではなく体験のステイトメントであるとし、真理と主張するわけではないのだが、いずれにせよそれが「人間は神的存在である」というヒューマン・ポテンシャル・ムーヴメント全般に特徴的な見解と結びつく点に注目すべきなのだ。この見解はイエス・キリストによって明らかにされる人間の人格というキリスト教正統信仰と対立する危うさを持っているからである。エストは宗教的には中立性を建前とするセミナーであるが、参加者の関心が個人のマインドから無人称のセルフへと導かれることは事実である。要するに人々の関心はイエス・キリストにおいて啓示された神へは向かわずに人間の内面へと向かうのである。

もちろん、エストは用が済めば片付けられる道具のようなものであるから、その意味ではトレーニングそれ自体に宗教的価値があるわけではない。エストに参加した結果キリスト教信仰が深まった牧師の例はさきに記したとおりだが、キリスト教信仰を持たない人々も、エストに参加した結果、より親密で深い人間関係や、それまでにない自由な自己表現、

あるいは生き生きとした暮らしへの活力、社会的成功等がもたらされたならば、貴重な時間と代価を支払ってエストに参加した価値は充分にあったというべきであろう。

ただし彼らがエストのような商業的教育セミナーでもたらされるトランスフォーメーション（人生の質の転換）という次元で満足してしまうことはありうることだ。統計的調査はないが、キリスト教信仰を持たないエスト修了者がそうした次元に止まり、イエス・キリストから与えられる恵みへ向かわない傾向が増大するとすれば、これこそがキリスト教から見たエストの真の問題点であるといわねばならないだろう。カトリック教会が警戒するような、正統的キリスト教に「対抗」する受容不可能な靈性復興運動という側面をエストが持っていると断定することには、筆者はためらいを覚えるからである。

### 【注】

- 1) Pontifical Council for Culture, Pontifical for Interreligious Dialogue. *Jesus Christ the bearer of the water of life : A Christian reflection on the "New Age"* 2003 邦訳『ニューエイジについてのキリスト教的考察』カトリック中央協議会, 2007
- 2) Mullins, R Mark. "Japan's New Age and Neo-New Religions; Sociological Interpretations." *Perspectives on the New Age* ( State University of New York Press, 1992) p.238.
- 3) エサレン研究所については、Anderson, Walter Truett. *The Upstart Spring: esaren and the human potential movement : the first twenty years* (iUnivers 1983,2004) を参照。
- 4) ワーナーの思想的遍歴については、Bartley, William Warren. *Werner Erhard: the transformation of a man, the founding of est* (Clarson N.Ootter 1978) を参照。
- 5) Rupert, A Glenn. "Employing the New Age:Training Seminars" *Perspectives on the New Age* ( State University of New York Press 1992)p.129.
- 6) Manabu, Haga. "Self-Development Seminars in Japan." *Japanese Journal of Religious Studies* (Nanzan University 1995)22/3-4 pp.283-299.

ただし、この論考では、エストがおそらく日本におけるセミナーのプロトタイプになったと述べられているが、同意できない。ライフダイナミックスの手法、内容とエストのそれは、相當に異なるからである。

- 7) エストの内容については、主に以下の論考及び書物を参照した。  
Werner Erhard and Victor Goscia, Ph.D. "est : Communication in a Context of Compassion" *The Journal of Current Psychiatric Therapies* 1978 (at <http://www.wernererhard.net/communication.html>)  
Tipton, Steven. *Getting Saved from the Sixties* (University of California Press 1984)  
Reinhart, Luke. *The Book of est* (Holt Rinehart Winston 1976)
- 8) Larson, Bob. *Larson's Book of World Religions and Alternative Spirituality* (Tyndale House Publishers 2004)p.179.
- 9) Tipton, Steven. *Getting Saved from the Sixties* (University of California Press 1984)p.180.
- 10) Bry, Adelaide. *est 60 hours that Transformation Your Life* (Harper & Row 1976)pp.28-35.

## 「坂田祐日記」解読（1930年1月～1931年12月）

坂 田 創

The Diary of Dr.Tasuku Sakata (1930～1931)

Hajime Sakata

### キーワード

- ①神の国運動 ②内村鑑三の召天  
③テンニー院長の帰国

### はじめに

1930年は前年ニューヨークに端を発した世界恐慌が日本にも波及し、産業界の操業短縮、生糸価格暴落、株式相場暴落が起こった。またロンドン海軍軍縮条約が批准されたが、不満な分子もあり統帥権問題が起きたりして、内外に不安定要素が積りつつあった。

### 1. 神の国運動

この運動は1930年から数年間行われた全国的伝道運動であって、賀川豊彦の提唱で始まり組織化された。プロテスタント諸教派の総力を結集した伝道運動で多数の改心者を出した。しかし非常時体制の圧力が次第に強くなり数年後終焉する。坂田もこの運動に参加了。

### 2. 内村鑑三の召天

内村鑑三は3月28日70歳で生涯を閉じた。内村は坂田に最も深い影響を与えた信仰的、精神的指導者であった。師の主宰する聖書研究会に参加することにより福音主義信仰が確立した。学院創立の時にも先ず師に相談し激励を受けた。同志の白雨会の交わりは終生続けられた。師の葬儀の記事が詳しく記されている。

### 3. テンニー院長の帰国

Tenny院長は健康を害し療養のため10月28日横浜港を出帆し帰国した。師は1919年中学関東学院設立、1923年の関東大震災後の復興事業、1927年財団法人関東学院の設立を成し遂げた。日夜学院の重責を担って教育と運営に尽力してきたが、健康を害し病を得て帰国の止む無きに至った。師の信任を得て労苦を共にしてきた坂田の心痛は大きかったであろう。院長不在のまま千葉副院長と共に部長として責任を担うことになった。

## 坂田祐日記（1930年1月～12月）

### 主要事項抜粋（\*印は解読文掲載）

月	日	曜日	主 要 事 項
1	1	水	新年奉賀式、横浜市賀詞交換会
	8	水	中学部3学期始業式

	12 *	日	神の国運動宣言大会（開港記念会館）
	13	月	剣道寒稽古視察、英語学校始業式、京浜聯合教役者会
	15 *	水	教導団同期会
	18	土	高等商業部長兼任継続了承
	20 *	月	文部省に至り大震災復興応援費返済延期願い
	27 *	月	創立記念式、私立中等学校長会議
	31 *	金	市内キリスト教学校教師懇談会
2	1	土	中学部4、5年生横須賀軍港見学、国漢科教員学科指導会
	6 *	木	教頭問題教員会議
	8	土	理事会（長崎教頭辞任承認）
	11	火	紀元節奉賀式（中学部、高等学部別）
	12	水	第53回誕生日、横浜ドックにて郵船日枝丸進水式見学
	16 *	日	柏木集会に行く
	17	月	小湊乗馬協会にて乗馬
	20	木	衆議院議員総選挙
3	1	土	小学校、中等学校校長講習会（思想問題）
	2	日	中学部卒業礼拝式（海老名弾正説教）
	5	水	高等商業部商業美術試験（文部省による）
	7	金	中学部卒業式、卒業記念晚餐会（開港記念会館）
	8	土	校長講習会、白雨会（植木宅）
	18	火	デンマーク皇太子を波止場に奉迎
	22	土	英語学校卒業式（Mr.Wynd 説教）
	24	月	Dr.Franklin 来日、来校
	25	火	中学部終業式
	27	木	中学部第二志望者口頭試問、合格者通知状発送
	28 *	金	内村鑑三先生永眠、弔問、教育同盟理事会
	30 *	日	内村鑑三先生葬儀
4	5	土	中学部始業式、入学式、理事会、湘南鉄道開通式
	6 *	日	柏木内村鑑三聖書研究会解散
	11	金	高等部入学試験、英語学校始業式
	13	日	学内にて内村鑑三先生追悼会（40名）
	16	水	高等部始業式、入学式、航空部発会式
	19	土	自宅にて聖書講義集会開始
	20	日	本牧二ノ渓海岸にてバプテスマ式（7名）
	21	月	高松宮殿下渡欧出帆奉送
	25	金	Settlement の労働学校生徒英語学校を訪問（10名）
	29 *	火	天長節奉賀式、内村先生記念講演会（神奈川公会堂400名）
5	10	土	東京帝大宗教学講座開設20年記念会
	14	水	横浜 YMCA 理事長に選出される
	19 *	月	有吉市長招待昼餐会
	20	火	Dr.Eddy 高等学部にて講演、同日出帆

	23	金	市内キリスト教学校教師懇談会（英和女学校）
	25	日	本牧二ノ渓海岸にてバプテスマ式（4名）
6	1	日	元町プール開場式
	2	月	御殿場にてバプテスト年会（～5日）
	11	水	三崎寄宿舎増築を決定、YMCA理事会
	12	木	全国中等学校長会議（～17日）
	16	月	陸軍戸山学校見学
	17	火	横須賀軍港見学
	19	木	Tenny一家を自宅に招待、Ruth 嫁帰米の予定
7	4	金	米国独立記念日講話
	7	月	水泳訓練視察（昭和海水浴場100名）
	10	木	御殿場滝ガ原廠舎にて中学部4、5年野外教練視察
	16	水	藤井武告別式（柏木今井館）
	18	金	三崎寄宿舎開舎準備、英語学校終業式
	19	土	中学部終業式
	21 *	月	三崎寄宿舎開舎
	28	月	三崎寄宿舎前埋立地完成後買入れ書を田中組に提出
8	8	金	金沢文庫及び昭和義塾落成式
	28	木	三崎寄宿舎閉舎
9	4	木	残務整理を終え三崎寄宿舎を去る
	6	土	中学部2学期始業式
	9 *	火	Dr.Franklinを囲み教育懇談会
	11	木	高等部始業、英語学校始業式、バプテスト関東部会
	15 *	月	Dr.Flanklinと会談（16,17日も）
	20	土	Dr.Lerrigsを迎えて全校礼拝、Dr.Mabieの肖像除幕式
	26	金	Tenny院長と文部省に赴く（大震災応急費債務の件）
	27	土	野球ボール隣家に被害をもたらす
10	6	月	Tenny院長病気重態
	17	金	対青山学院運動競技会
	19	日	関東中等学校バレーボール大会で優勝、日曜学校大会
	20	月	Tenny院長病気の為歸米に決まる
	22	水	基督教聯盟総会（銀座会館）
	24	金	高等部第1学期終業式
	25	土	県下中等学校体育大会（本校1,000名）
	26	日	本牧二ノ渓海岸にてバプテスマ式（7名）
	28 *	火	Tenny院長帰米出帆、教育勅語講演会
	30	木	教育勅語発布40周年記念式
11	1	土	高等部第2学期始業式
	2	日	神の国運動教育部集会（100名）
	3	月	明治節奉賀式、全国青年（男女）御親閲陪観
	5 *	水	基督教教育同盟第19回総会（フェリス女学校5～7日）

	7 *	金	セツルメント施設調達を図る
	13	木	修身訓育研究会（記念会館～15日）
	15	土	市内キリスト教主義学校教師親睦会（共立女学校）
	17	月	中学部生徒募集広告を各小学校に送る、国漢科教科研究会
	19	水	Tenny 院長安着の報あり、YMCA 理事会
	20	木	数学科教科研究会（～21日）
	22	土	青年令旨奉戴十年記念式
	24	月	英語科教科研究会、Mrs.Tenny から手紙
	25	火	聯合野外訓練（辻堂）
	28	金	摂真女学校理事会
12	1	月	中学部生徒募集開始
	9 *	火	Tenny 院長の夢を見る
	10	水	中学部学校教練査閲
	17	水	ダンカン寮（寄宿舎）クリスマス集会、横浜 YMCA 理事会
	19	金	英語学校終業式
	24	水	中学部終業式
	25	木	横浜聖書研究会クリスマス集会
	26	金	教会クリスマス祝会
	29	月	Settlement 建築会議

## 解読文

### 1月12日（日）

午後4時半 YMCA 館に着、神の国運動の晩餐会に出席、賀川氏の前に坐せり山鹿旗之進氏植山氏・・・の話しあり、賀川氏の短き奨励あり 写真を撮りて散会 一同記念会館の宣言大会に出席満堂溢るる計り、10時過ぎ閉会、井深氏の感話は一同に深き感動を与えたる賀川氏の講演大いにふるう、余も神の国運動に奉仕する旨の契約カードに署名せり

### 1月15日（水）

教導団同期会の会合に出席、出席者（11名）牛鍋を食しながら10時少し前まで快談、雨本氏の軍隊を退きたる以後今日までの経歴は一同に痛快を感じしめたり、余は竹内氏と長谷川君とは30年目の面会なりき、何れも頭上光輝を発し居れり、散会後余は雨本氏の自動車に送られて品川駅に来たり同氏と分かれて省電にて11時頃帰宅

### 1月20日（月）

県下中等学校代表（文部省より応援費借用せる）約20名と落ち合い 自動車にて文部省に至り加藤\*\*課長（事務官）に面談納入延期5カ年を願い12時退去、当番学校は一つは東京市の同様学校に連絡をとりに一つは大蔵省に同様陳情に向ひたり、余は直ちに帰宅1時半頃着昼食の上学院に至り（略）

### 1月27日（月）

創立記念日

午前8時30分頃登校9時より記念式、下の屋内体操場に於いて全校出席、Tenny 院長司式、余聖書（イザヤ書第11章）朗誦祈祷、千葉副院長感話、石野君奏楽、校旗出場、閉式後山賀式大音楽（レコード）ありて退場

### 1月31日（金）

午後4時半より市内 Christian School Teacher の懇談会、中学部講堂に於いて 5時開会余司会、Dr.Tenny 挨拶大竹清君新帰朝談 平

田平三氏神の国の運動についての挨拶 6時第一部を了わり、それより高等部食堂に於いて会食、了りて余は教育界の現状にかんがみ基督教主義学校の改善を要する点如何と題し諸種の問題を提供したり約40分を要せり、了りて河野保氏、Shafer氏、長崎君、青田氏等の意見発表あり 了りて宮崎小八郎氏神の国の運動について協議あり、午後9時頃散会せり来会者65名

### 2月6日（木）

3時より臨時教員会議、石川、多田の祈祷を以って開会長崎君別席、教頭の問題なり、種々討議の結果教頭必要なり、教頭を互選するは不可なりとの意見投票にて大多数なりき、前者は14対9、結果は15対6棄権1、夕食にそばを食し8時少し前迄かかり八木君の祈祷を以って閉会、散会後多田君及び長崎君と話し 長崎君の教頭辞任を許さざるべからざること、多田君代わりて教務主任となることをすすめたり（教頭にあらず）

### 2月16日（日）

朝食直ちに八木君と共に東京柏木行き（略）10時開会、石原君ルカ伝第1章1～4の研究、大島正健氏オバデヤの話より一つの処世訓をなし大いに教えられたり 特にY君の過般の行動より大いに感じたり 北海道より安部伝七來会、後藤二郎の話し、藤本君内村先生の御容態につき話せり 閉会後植木君及び母上と同道新宿中村屋食堂に於いてロシヤ料理の馳走を受け 同道塚本君の集まりに出席塚本君の「マリヤ聖母」の講義をきく 閉会後塚本君来る2月27日午後余の宅に来訪を約して帰る八木君桜井君と共に5時頃帰宅

### 3月28日（金）

内村先生昇天、午前8時51分

午前10時神田\*\*町10 YMCA同盟に開かれたる教育同盟理事会及び聯盟教育部委員会に出席（略）午後2時頃帰る、内村先生今朝

御永眠の電報到着しあり余の帰宅を待ち居たり、学校に事務を視 夕食を早々にすまし八木君と共に6時半頃柏木着 畔上君に導かれ先生御安臥の室に於いて拝顔 Greatman の感を強く与へられたり 講堂に帰り暫時にして八木君帰り余は他の諸君と再び先生の室にかへり祈祷会に列したり 畔上君司会数名列なりたり、祈祷会終りて大半は帰り通夜に残りたるものは植木、矢内原、名古屋、山耕、西岡、渡辺、鶴田、高木、望月、小林未亡人、植木母堂、江原夫人、その他数名、談は先生の去りし日の御事共、我らの始めて柏木に來たりたる当時の追想、今後柏木の集会は如何にすべきか等、祐之氏は北海道より一家を携えて三四日前帰宅せられたり

### 3月29日（土）

夜明け迄代わる代わる先生のお側に侍し また応接間に於いて種々懇談せり、6時過ぎ一先ず辞去、西岡、名古屋、矢内原、山耕君と大久保から乗車、余は山耕君と渋谷より横浜を経て帰宅山耕君とは駅前にて分かる、（略）余は就寝12時迄休憩せり、昼食後八木君方に至り下山君八木君と会い柏木のこと等相談 今夜御通夜に両君を煩わすことにして余はそれより学校に至り事務工事のことなどを視たり

### 3月30日（日）

内村先生葬儀

7時起床早々支度をなし Coffee りんごにて朝食をすまし柏木に向かふ、9時半頃着、10時より内村先生の葬儀執行せらる、委細はこの日記の余白に記しておく、12時20分式終わり写真の撮影おわりて順次に告別靈柩に対し、会衆は講堂に溢れ外にも立てり、老人のみ腰掛に座し余りは起立せり 余は青木義雄君と前方に着席せり、新渡戸博士、小野塚帝大総長なども見えたり、（略）夕食後今日の内村先生葬儀の模様を星野君、高田君に手紙をかけり また藤井武君に感謝の手紙をかけ

り 夕食時に家族にて先生の手紙など示して語りたり

**補遺**（日記帳の最後のページに記されたもの）

March 30 午前10時内村先生葬儀

（午後1時～3時告別式）

石原君司会、開会の祈祷、先生に下し給ひたる数々の感謝の祈祷断腸の思いあり、畔上君の話し、先生が此世のことより全く独立したる例、米国留学中学資に窮したる時にある米人紳士が医学を勉強して日本に帰り医学を以て立たば学資を与へると申し出でたるに対し これを拒絶し余の使命は日本に於いて伝道するにありと、またある有力なる漁業会社支店の支配人たるべくすすめられたるも之を退け、次に萬朝報に在職中日露戦争の主戦主義に反対して退きたること 即ち先生は飢えを忍んで独立し来りたること、日本に聖書研究なる雑誌を以て伝道をなしたこと凡て独創的なりしこと・・・、藤本武平二君は先生の病状の経過を詳細に語り御遺言のことなど最後の言葉として日本萬歳福音萬歳——宇宙の完成の祈祷までなされたること、御臨終の近きに際し誰れ誰れ、誰れ誰れを赦す 又我に恨みのあるものは主の御名によりて赦されんことを希ふと言はれたりと話されたり、藤井君 “先生は Moses, Amos, Isaiah などと同様に偉大なる預言者なり、日本国、世界人類として宇宙の完成を祈りたる大預言者なり・・・先生は偉大なる大預言者であると同時に大なる疑問の人なり、先生は矛盾だらけであり為に弟子の多くは躊躇したり、私も亦躊躇先生の許を2年離れたることあり、しかし其の矛盾を調和する大なるものを先生は持つて居た 私は先生に呼ばれ再び先生の許に来る様になった 其の時の先生の寛大なること其の調和はしっかりと握り居る十字架に於いてである この十字架を傷つけるものは先生が容赦なく之を叱り又斥けた 余も十字架を汚す様なことを研究誌に発表したる為に先生に叱られたるが 後に真に十字架の大真理を悟ることを得て先生の偉大さをよ

く知り得たり・・・先生の今日の葬儀は日本の即ち新日本の建設の定礎式であって・・・弟子たちのうち特に塚本君のことにつきては最後まで先生の御心を大いに苦しめたりと述べたり、余は藤井君の御話を始めから終わりまで涙で聞きたり、晩一書を認めて藤井君に送り感謝の意を表したり

#### 4月6日（日）

午前8時頃出発柏木内村聖書研究会解散式に出席、石原兵衛君司会しその理由を簡単に述べ数氏の祈祷あり、最後に大島博士（正健氏）の祈祷及び祝祷ありて閉会、藤本武平二君は有志にてこの聖書講堂を借用して来週日曜より集会を開くことを述べたり 解散前に記念写真を撮影せり了わりて過日告別式の写真2葉及び先生の最近の写真1葉合計3葉(4円)注文せり、それより西岡君と歩きながら話して新宿方面に向かふ（略）電車にて大沢に至り乗りかへ雑司が谷墓地に着大賀一郎君夫妻に会う、3時先生の埋葬式 ルツ子さんの所に埋葬せらる、来会者数十名石原君司会し浅野君祈祷、祐之氏挨拶せらる記念の撮影ありたり、宮部博士、藤井、畔上、南原、植木、矢内原、池田、山耕君等數十名（略）7時より横浜聖書研究会幹部会山耕、八木、時田、下山の諸君來会、高谷君も加わりたり 10時過ぎまで協議して分かる、来る日曜午後7時中学部校舎に於いて聖書の研究読者有志の内村先生追悼会開催することにせり

#### 4月29日（火）

内村先生記念講演会

神奈川公会堂に於いて2時開会の内村先生記念講演会に出席、余は開会の辞（時田君司会）塚本、畔上、藤井3君講演せり、来会者約400名、学院より折り畳み式椅子100持ちゆけり5時閉会それより YMCA に至る、晩餐会（略）懇談9時に至る 久しぶりに柏木気分を味わい愉快なりき

5月19日（月）

Eddy 博士昼食会に出席

午前12時有吉市長の招待にて Dr.Tenny と共にタクシーにて Hotel New Grand に至り Dr.Eddy の昼餐会に出席、来会者水崎君、Snyrd君、村上君、森田秘書、市長、Dr.Tenny、Dr.Eddy 及び余の8人、Dr.Eddy の印度ガンジーのところに三日間起居したる話は大いに興味を与えたり 日本の\*\*民思想は漸次に\*和せられ民衆のレベルは高められて\*\*的に進歩すべし\*\*など敬服に値する点少なからず、食後 Dr.Eddy は Mr.Snyrd と共に帰り残りは有吉氏を中心に教育のこと思想のことなど2時頃まで話して分かる

7月21日（月）

三崎寄宿舎開舎

9時半黄金町駅に至り第一回出発(午前10時)職員以下17名を送り出せり、それより亀楽に至りせんべいを購入、帰宅昼食の後黄金町駅に至る、宮田君三崎より来たり呉れて又余と同行、第二回1時出発余以下27名横須賀中央より自動車にて三崎迄至り着、余の自動車は途中故障あり約30分遅れたり、午後4時神田医師来舎(妻を紹介せり)診療数名水泳を禁ず、4時少し過ぎ水泳前に一同に舎則その他を申し渡せり5時頃水泳終了、夕食後西の海岸端に至り夕陽会、余司会一場の奨励をなせり、8時より親睦会宮川5年生司会、賛美祈祷の後茶菓自己紹介、9時散会

9月9日（火）

Franklin 博士中心の教育懇談会

午前5時半頃起床、聖書ルカ伝22章祈祷出勤、Chapel 約300、午前1の1、1の2授業10時頃より Franklin 博士を中心として教育懇談会、余日本に於ける基督教主義学校の現状等に付き話せり、川口君通訳せり、約30名以上出席せり、食堂にてうなぎの弁当食せり、午後一時より学院問題のみに付いての懇談会 之に就いても余話せり、4時頃閉会せ

り、午前は高垣君司会し午後は渡部元氏司会せり

9月15日（月）

Prayer Meeting, Chapel 約300 Dr. Franklin 出席、終りて余の Office に於いて F 氏と多田君と3人にて10時半まで懇談し F 氏の学院に対する態度、軍事教練に対する公平なる批判、教会に対する考え方、博士自身が娘に対しバプテスマを嘗てすすめたることなき態度、学院の各種の Activities に付き委しく話したり、F 博士 Fisher 君に伴われ各教室参観

10月28日（火）

早朝鎌倉師範に至り教育勅語講演会に出席、午前関根博士の講演をききたる後大急ぎで帰校、12時30分帰着直ちに中庭に至り 職員生徒一同に Tenny 院長本日午後出帆帰米せらるる事、過日の体育大会は皆よく活動せることの賞賛の辞を述べたり、昼食後波止場に至り Pres. Grant に Dr.Tenny を送る、Mrs. Tenny に会ひ然る後 Dr.Tenny に別室に於いて会ひ大いに変わられたる姿を観て嘆息に咽びて帰る

11月5日（水）

Chapel 終わり午前10時前 Ferris 女学校に至り基督教教育同盟総会第19回総会に出席、開会式に九鬼学務部長、有吉市長祝辞を述べらる、正午記念会館に於いて有吉市長代議員一同を昼餐に招かる、午後3時フェリス女学校に帰り再開午後9時閉会、懇談会に余も一場の話しをなせり、キリスト教主義学校の欠点として西洋くさいこと、科学教育を軽視して不完全なる事、信者を作るにあせること、米国国旗掲揚の非を話せり

11月7日（金）

教育同盟総会第3日、9時少し過ぎフェリス女学校に着出席、一同写真を撮る（昼食後）

昼食後も引き続き会議4時頃閉会せり　余は理事の一人として予算案の作成(神崎君と)及び説明の役、指名委員長として理事の指名をなせり、Mr.Fisherより電話あり、New Grandの裏門にて落ち合い渡部一高君も同道にて米国領事館に至り　払い下げんとするバラックを見　甚だ老廃せるを以って取り止めたり(Settlementの為に使用せんとしたるもの)，尚絅の川口校長、搜真の高垣校長、日ノ本の山本教頭及び多田君を晚餐に招きバプテスト今後十年計画(教育に関し)のことにつき懇談せり

### 12月9日(火)

9時半頃就寝、今夜12時10分眼さむ、Dr.Tennyの夢を見たり、Dr.TennyのSpirit来訪の夢なり

### キーワード

- ①内村鑑三召天一周年 ②坂田私邸の新築
- ③三崎寄宿舎 ④セツルメント

### はじめに

1931年は日本が15年戦争に突入した年である。9月18日の満鉄爆破事件を契機に満州事変が起こった。これは関東軍が仕組んだものであり、政府は最初不拡大方針を取ったが軍の圧力によりやがて方針は崩れ戦火は広がっていった。また、この年は内閣は二度も交代し国内の情勢は不安定になり、思想教育に対する国の関与が見られるようになってくる。

### 1. 内村鑑三召天一周年

昨年3月28日内村が召天してから一年が経ち、この日を記念して諸集会が行われた。坂田は追憶記念会で「先生の弟子であつて教員たる私の追憶」と題して師に対する心情を語った。この年白雨会としては南原繁夫人の召天記念会があり、12月には会員星野鐵

男を天に送った。坂田はその告別式の司会に金沢市に赴いた。

### 2. 坂田私邸の新築

坂田は関東大震災後、校地内の公舎(元院長宅、部長宅、寄宿舎監宅)に居住していたが、千葉副院長が校地内に移転することになり、坂田は校外に自宅を新築して転居した。新宅は中区南太田町1865(現南区庚台61)にあり学校までは徒歩で10分位であった。これに伴い寄宿舎監の仕事は千葉副院長に移った。テンネー院長宅は主不在のままであった。

### 3. 三崎寄宿舎

寄宿舎は1928年に活動開始以来増築改良を加え、舎前の海岸は造成される予定であった。従来は夏期休暇の間有志生徒が宿泊し生活して來たが、本年は7月に教練の野外訓練場に使用された。学校教練の強化に伴いこれ以後も毎年続けられた。夏の活動は従来通り続けられ坂田は横浜と三崎を行き来しながら管理に当った。

### 4. セツルメント

関東学院セツルメントの施設が神奈川区の浦島町に4月24日開館した。建坪50坪位の平屋と約100坪の庭を持ち、「関東学院セツルメント」「労働学校」の表札が並べて掛けた。活動は既に2年前から神学部、社会事業部、高等商業部の学生が中心になって始められていたが、この施設の開設により活動が更に盛んになった。労働者に対する啓蒙、男子、女子に対する学業、家政、運動の援助、日曜学校の宗教活動が行われた。1935年頃まで続けられた。

**坂田祐日記（1931年1月～12月）**

**主要事項抜粋 (\*印は解説文掲載)**

月	日	曜日	主 要 事 項
1	1	木	新年奉賀式、市内賀詞交換会（開港記念会館）
	3	土	三崎寄宿舎にて休養（～6日）
	8	木	中学部3学期始業式
	12	月	英語学校3学期始業式
	14	水	市内中等学校長会（県立二中）
	16	金	第一志望者入学考查（口頭試問、体格検査）
	17	土	第一志望者 267名中 166名の合格決定、通知状発送
	19	月	教育懇話会（県立二中）
	20	火	Dr.Franklin一家横浜港に寄港送迎、支那より帰米の途次
	27	火	創立記念式
	31	土	公民科指導会（鎌倉師範）、理科教員会議
2	2	月	上海 College の Mr.Polist 来校
	4	水	天然記念物尾長鶲観賞（校内）
	6	金	市内中等学校長会（本牧中）
	10	火	土地家屋委員会（千葉、Holtom、Fisher、坂田）
	11	水	紀元節奉賀式
	13	金	全国中学校長会（府立一中、文部省改正要綱説明）
	14	土	理事会（8名、他に千葉、坂田、澤野書記）
	16	月	工業懇話会（銀行集会所、鉄道問題について）
	17	火	交誼会（中学部教員）晩餐会
	20	金	Mrs.Olds の性教育に関する講演会（中4年以上、高等部、神学部）
	23	月	喜多敏雄生葬儀（高等部講堂）
	25	水	市内中等学校訓育会議（本牧中）
	26	木	高等部階段道路工事開始、学友会送別会
	27	金	社会事業部学生大会（高等商業部より学友会分離問題）
3	1	日	中学部卒業礼拝式 説教者海老沢亮（中3年以上、高等部、神学部）
	3	火	寄宿舎生送別会晩餐会（22名うち卒業生3名）
	4	水	県立一中卒業式、県教育会理事会（県庁）
	5	木	高等商業部謝恩会
	6	金	社会事業部謝恩会、グランドバックネット工事開始
	7*	土	中学部卒業式、橄榄会歓迎会、卒業晩餐会（開港記念会館）
	10	火	浅野中学校卒業式
	12	木	搜真女学校理事会 Mr.Covell 同席
	13*	金	有吉前市長送別会（市内キリスト教団体、横浜 YMCA 会館）
	14	土	横浜高等工業学校卒業式 金子堅太郎子爵講演

	16	月	中学部校舎前に桜樹を移植
	17	火	中学部4年生野外訓練
	19	木	中学部3年生野外訓練、横浜商業学校卒業式 英語学校卒業式 Mr.Gressitt 説教
	20	金	高等部終業式
	23	月	中学部第一志望者合格者召集 167名中 143名入学手続き
	25	水	中学部終業式
	27	金	中学部第二志望者入学考查 82名応募、横浜 YMCA 英語学校 卒業式 理事長として祝辞
	28 *	土	内村先生一周年追憶記念会（柏木今井館）記念講演を行う
	29	日	内村先生記念大講演会（日比谷公会堂）
	30	月	常任理事会
	31	火	雑司ヶ谷墓地に内村鑑三先生の墓参
4	1	水	中学部第二志望者合格者召集、内村先生追憶記念晚餐会（開港記念会館）
	6	月	中学部始業式、一高同窓会（神田）
	7	火	シャム国皇帝皇后陛下奉迎（横浜港）8日奉送
	10	金	高等階段道路完成
	11	土	高等学部入学試験 受験者81名
	13	月	英語学校始業式
	14	火	交誼会 教職員送別歓迎会
	16	木	高等部始業式、入学式、市内中等学校長会（県立一中）
	18 *	土	中学部第2回卒業生晚餐会
	24	金	県教育会理事会
	25	土	セツルメント開館式
	27	月	訓育会議（県立一中 思想問題）
	28	火	コンクリート道路工事完了
	29	水	天長節奉賀式
5	1	金	県立工業学校20年記念式
	3	日	バプテスマ受領日（明治36年）
	4	月	寄宿舍生祈祷会及び新入生歓迎会16名（自宅）
	6	水	自宅新築許可願を代書に依頼作成
	7	木	基督教教育同盟常務理事会5名（東京 YMCA）
	8	金	高等部 YMCA で講演す「余は如何にしてクリスチヤンになりしか」
	10	日	三崎寄宿舎に至り改築改造計画打合せ
	12	火	文部省の学校視察あり、（中学部）絵画部展覧会
	14	木	県体育聯盟常務理事会（県庁）、市内中学校長会議（浅野中）
	16	土	豪雨によりグランドの崖崩壊、臨時理事会（千葉副院長公宅へ移転の件）
	18	月	日本宗教平和会議（神宮外苑）
	19	火	崖修理開始

	20 *	水	自由学園卒業式、10年記念式
	22	金	土地家屋委員会、高等部新任教員歓迎親睦晚餐会
	23	土	全国中学校長会総会（一ツ橋帝国教育会館）、橄榄会主催映画会 約1,000名
	24	日	全国中学校長会（府立一中）、崖工事、自宅基礎工事視察
	25	月	全国中学校長会（教育会館）、校長会北海道視察旅行の為 22:30 上野駅出発50名
	26	水	以降6月8日まで北海道旅行（記事別記）
6	9	火	8:30 北海道旅行より帰宅
	11	木	高松宮殿下妃殿下帰国奉迎（横浜港）
	12	金	中学部臨時教員会議（全国中学校長会議及び北海道視察旅行報告）
	16	火	市内中等学校長会（県立三中）
	17	水	中学部 YMCA 講演会 青山学院今井三郎
	18	木	高等商業部学生会主催バスケットボール大会
	19	金	英語科研究会（県立一中）
	20	土	高等商業部主催市内4専門学校庭球試合（野毛山）、タゴール劇、 音楽、映画（高等部講堂）
	21	日	三崎寄宿舎工事視察
	24	水	工作場建設請負発注
	25	木	高等部 YMCA 海軍中将波多野貞夫の宗教講演
	29	月	寄宿生を招き夏期休暇前の親睦会 経験談を話す
	30	火	自宅新築起工式
7	1	水	三崎寄宿舎視察
	2	木	常任理事会
	4	土	中学部米国独立記念日全員礼拝
	7	火	中学部本牧海岸で水泳訓練（約140名）
	10	金	中学部珠算競技会（有志、商業科4,5年生は全員）、高等部終業式
	11	土	設営の為三崎寄宿舎に赴く
	14 *	火	中学部5年生三崎寄宿舎で野外訓練～18日
	18	土	中学部1学期終業式
	20	月	三崎寄宿舎夏期活動開始 有志生徒約50名到着
8	1 *	土	基督教教育同盟会夏期学校（御殿場東山荘）～4日
	4 *	火	Miss Weidner に車中で奇遇
	5	水	三崎寄宿舎 在舍数約70名
	25	土	三崎寄宿舎活動終了 横浜に帰る
	30 *	日	白雨会 南原夫人記念会
	31	月	橄榄会総会 約100名
9	1	火	関東大震災記念日 午前11時58分黙祷
	7	月	中学部2学期始業式
	8 *	火	学院公舎（従来の自宅）を去り新築の自宅に転居、千葉副院長 入れ替わり入居

	11	金	高等部始業式、英語学校始業式
	12	土	神学部夏期伝道報告会
	13	日	県下中等学校水上競技大会（元町プール）西田三郎優勝
	14	月	教員早天祈祷会再開（塔上）
	15 *	火	千葉副院長と舍監交代、H.Topping 師夫妻謝恩晚餐会
	17	木	市内中学校長会
	23	水	東京キリスト教聯盟教育部委員会 30日も実施
	24	木	県下中等学校体育聯盟体育大会
	26	土	シャム皇帝奉迎（横浜港）生徒90名、国際聯盟協会支部発会式 新渡戸稻造講演
	27 *	日	昨夜来暴風雨 院長宅の崖崩壊、在郷将校会総会に来賓として 招かれる
10	3	土	交誼会（帷子葡萄園、新任教員歓迎）
	4	日	一高同窓会 9名
	7	水	市内中等学校長会（Y校）
	8	木	搜真女学校理事会
	9	金	高等部 Dr.Case, Mr.Schamahorn, Mr.Morgan 公開講座
	10	土	中学部文芸会（英語劇、音楽、映画）約1,200名
	12	月	常任理事会
	13	火	中学部4年生甲府聯隊に於いて野外教練～16日
	15	木	工業懇談会で時局問題講演会
	17	土	県下中等学校体育大会（厚木中学校）35名参加、基督教教育 聯盟教育部委員会
	24	土	高等部体育大会 青山学院より300名、本校の勝利
	26	月	中学部 YMCA 講演会
	27	火	中学部5年商業科朝日新聞、日本銀行等見学
	29	木	ミッション本部より教育調査委員來校
	31	土	国語課教科研究会 井上赳指導
11	1	日	湘南中学校創立10周年祝賀会 約1,000名
	2	月	藤沢商業学校開校式
	3	火	明治節奉賀式、大阪に向け出発
	4	水	基督教教育同盟会総会（ランバス女学院～7日）会計報告を行う
	6	金	同盟会創立20周年感謝会
	7	土	同盟会女学校校長会に出席（関東学院の経営方針並びに実情を 報告）横浜に帰る
	10	火	柏木集会 大賀一郎の帰朝に際して 30名
	11	水	平和記念日礼拝 Mr.Covell 説教、学校衛生視察あり（優秀の講評）
	13	金	5年生修学旅行（箱根方面）～14日
	16	月	工業懇談会 「満蒙の問題と国際聯盟」講演会
	17	火	中学部教員を招き新宅披露
	19	木	宗教科会議 中居京主任他8名

	20	金	思想講演会（県立一中）県下中等学校長、小学校長～21日 高等部専任講師を招き新宅披露
	24	火	県下中等学校野外教練（鶴沼海岸）約2,400名参加
	25	水	中学部1年生父兄会
	26	木	中学部2年生父兄会
	27	金	高等部森永キャラメル翁の講演、高等部一学生に天然痘発症 教室消毒、種痘を実施、高等部親交会晚餐会
	28	土	京浜中等学校 YMCA 集会（高等部講堂）千葉副院長講演75名
	30	月	市内中等学校校長会（県立工業）
12	1*	水	Mr.Covellと談ず
	2	木	教育調査会、高等部会（東京YMCA）
	3	木	中学部、高等部本間俊平講演会、中学部種痘完了、塚本聖書 研究会
	5	土	高等部主催タイプライティング競技会 市内学校及び一般
	7*	月	教練査閲
	9	水	県教育会雑誌に「教育と宗教」と題して投稿
	10	木	基督教教育同盟会理事会 ミッション教育調査委員と晚餐
	11	金	横浜学士会（銀行集会所）20数名
	14	月	県下教役者会 10数名
	15	火	学院YMCA 担当教員謝礼晚餐会
	16	水	工業懇談会 白川大将講演
	17	木	剣道場新築工事に着工（木材高騰）
	20	日	白雨会会友星野鐵男永眠の報を受ける
	21	月	星野氏告別式司会依頼了承、北陸金沢に向け出発
	22	火	同告別式、金沢発帰途に就く
	24	木	中学部クリスマス礼拝、2学期終業式、学院YMCA クリスマス祝会
	26	土	教会クリスマス祝会並びに感話会
	27	日	県学務部長送別会（記念会館）144名
	28	月	新旧知事送迎会（開港記念会館）500名、交誼会忘年会29名
	31	木	甲子園に出場する蹴球部選手15名を横浜駅に送る

## 解読文

3月7日（土）

午前8時少し過ぎ学院に至る、9時半より卒業式11時頃閉会 終わりて茶菓、父兄来席数十名 午後1時かんらん会歓迎会4時頃閉会 午後5時少し前記念会館ゆき、例年の通り大晚餐会、中学部卒業生及び職員千葉副院長以下来会者百数十名、余は最後に話したり、5年間祈祷を以って生徒を指導し訓戒したこと 祈祷なくして大切な人の子を教育すること

を得ざること、就職に就いて18歳の時上京したる余の苦心談 横須賀海堡に人足に売られたことなど 余の今日あるは神の恩寵によること 最後に神を信仰することの極めて必要なるを説きて結べり 9時半頃閉会

3月13日（金）

午後5時半 YMCA に至り 市内キリスト教各団体の有吉前市長送別会に出席 有吉前市

長と応接間に於いて水崎君と共にしばらく会談して食堂に至る、各団体代表の送別の辞あり 千葉副院長学校代表せり、有吉市長挨拶の中に明治35、6年の頃小崎牧師のすすめにて靈南坂教会に入会せんとして信仰試験に落第したことを話したり 之は教会に入りしたる最後なりと（朝鮮にゆくとき神戸教会に一度出席）毎日新旧約聖書を通して一章ずつ必ず読む由、最近は日本歴史、古事記（本居宣長の注解）を読んでユダヤの歴史と日本の歴史とを比較研究し 日本の天津神と天地万物を創造せる唯一神即ちキリスト教の神と同一なりと思うと話したり 9時閉会来会者約80名

#### 3月28日（土）

午前10時簡単に食事をなして不二家に至り内村先生奥様に土産の菓子を調え市電及び省電を経て12時半今井館に着、先生の一周年追憶記念会に出席、矢内原君司会して1時開会、弁士山井、永井、浅野、坂田、斎藤の順序、祈祷は金沢君4時半閉会、茶菓、南原、植木両君と余の3人南原君宅に伴わる、夕食（うなぎ）の馳走になり9時まで快談して帰る

#### 4月18日（土）

午後6時より中学部第2回卒業生の晩さん会に招待さる Imperial Grill にて内海、藤本、永澤、長崎、岡本及び余の6教員卒業生二十数名 田沢君司会、8時閉会、實に嬉しき印象を受けたり、一同立派なる紳士になれり、酒を用いずまた喫煙もせざりき 最後に余は喫煙を遠慮せざる様すすめたり、雨の中を帰宅せり

#### 5月20日（水）

自由学園に至り第9回卒業式並びに10年記念式に出席、羽仁氏ご夫妻の10年苦辛のあと如何に成功しつつあるかを凡ての点に於いて知ることを得 大いに啓発せらるるところありたり、昼食の馳走になり午後の報告会に

残り学校の過去、現在、将来のことなど聞き、徹頭徹尾キリスト教主義を以て一貫しあるを見て大いに愉快に感じたり、会後茶菓の馳走には失礼して帰る6時半頃帰宅、自由学園の感想等の記事は別の手帳に記せり、同校にて池田君夫妻、野村洋三君、河辺良平君、藤本武平二君、Covell君、Mrs.Holtom、藪下君などに会いたり

#### 7月14日（火）

7時少し前学院に至る 天候ぐずつくも中島大尉と相談し生徒の意気盛んなるを以て出発に決し英断 駅に交渉し8時10分前に同駅に至る 部長以下107名（生徒102、部長、中島、桜井、栗沢、伊沢）8時9分発9時少し前浦賀着 細雨蕭条生徒は直ちに行軍三崎に向かう、余は栗沢、井沢両教員と直ちに池谷生と乗合自動車にて出発 途中伊沢君は茶の支度の為下浦小学校にて下車、我等は10時少し前着舎、直ちに諸準備に取りかかる、昼食の後もかかる2時頃一同雨の中に来着直ちに銃架に銃をかけ室に入らしむ、下着など着かえて一旦落ち着きたる後 畳の上に一同を集め諸注意終わりておやつ茶 3時半頃神田医師來診、熊田少しく気持ち悪しなれども手当ての後快復、4時銃の手入れ並びに入浴、5時半夕食、6時旗下し、夕拝は余司会し奨励、栗沢君も一場の感想を話せり 7時20分終わる、8時半点呼9時就床

#### 8月1日（土）

横浜駅に来たり（電車にて）10：51発にて二等車に乗り御殿場に向かう 1時13分御殿場着、小畠君、尾崎君等の出迎えを受く、自動車にて東山荘に向かう 澤野君藤沢より同車せしも御殿場迄知らざりき、東山荘に着、先着の高原君（青山）と共に会計として会費受領の任につく 夕方迄頗る多忙を極む、来会者約90名 夕食後、講堂に至り夕陽会（余は高垣君と同室26号室）夕陽会終わり澤野君司会にて親睦会自己紹介担任学科目の紹介

等して時間になり閉会 10時頃就寝第一夜を  
眠る

#### 8月2日（日）

5時頃起床せり Program は 6 時半起床なり、  
礼拝は田中貞氏（ラムバス院長）朝食、コワイ  
ヤ練習、日曜礼拝等 Program 通り 日曜  
礼拝は松本君司会し田中貞氏説教せり中田羽  
後君コワイ音楽指導一同に多大の感激を与  
えたり、終わりて 10 時半より 12 時まで内務  
省事務官田中重之氏の我が国思想運動の概況  
の講演あり 1 時間半原稿を見ず立て板に水の  
雄弁を以って有益なる講演をなせり、午後は  
有志は長尾峰に遠足、余は多田、澤野、佐々  
木（西南学院の）内海、漆山（東北学院の）諸  
君と二の丘にミスカンバルス及び山田女史を  
訪問せり、雨少しく降る帰りに晴る数十分話  
して帰る、夕陽会は講堂に於いて、終わりて  
講演会、田川氏講演終わりて就眠安眠せり

#### 8月4日（火）

余は中等部会（男子）の報告をなせり、終わ  
りて 11 時半昼食、昼食後 2 階の小室で委員  
の感謝会記念撮影をなせり、1 時半頃自動車  
にて帰途につく 1 時 59 分御殿場発、二等車  
に田川、澤野、多田、内海君等と同車せり、  
田川氏の隣席に座したる米婦人田川氏との  
会話中余はミスワイドナーなることを確かめ  
尋ねたるに果たして然り 田川氏が余を紹介  
したるに坂田さん！ と書いて涙潸然と流し感  
極まれり それは「永遠の生命」に「内村先生を追憶す」の一文にワイドナーさんの為に  
祈れとありたるを読みたる為なりき、横浜まで  
感激をして談ぜり、Weidner 女史の独立伝  
道の模様をきき大いに敬服せり 女史は米國  
に 1 ケ年の休暇にて帰国する由 鈴木なる婦  
人 helper として東京に同行せり 4 時頃帰宅

#### 8月30日（日）

余は東横線にて南原君宅に至る 百合子さん  
7 年の記念会、余司会し讃美、聖書（詩 46）

祈祷讃美の後感話 終わりて植木君感話高谷  
君祈祷——笠原夫人感話——讃美歌閉会  
茶菓終わりて親戚の人々帰り藤本君、高谷君、  
及び余南原君と共に信仰談義、星野鐵男君は  
高田馬場にて一緒に出席したるも発熱の  
為白雨会には出席せざりき、白雨会（藤本博士  
も加わり）信仰談は夕食を馳走後も続き 9  
時まで話して帰る 植木君は南原君に伴われ  
笠原氏方に鐵男君を診察に行く、余は藤本君  
高谷君と共に帰る

#### 9月8日（火）

7 年間住み慣れし学院舎監宅、大震災後余の  
設計になれる住宅次いで舎監宅（始めは中学  
関東学院長宅）兼部長宅に最後の睡眠をと  
れり 残れる寝具等を悉く学院の室に運ぶ、  
余は舎監宅に於いて最後の Coffee を飲みて  
出勤せり 礼拝後波止場に至り Wellard  
Topping 夫妻及び Mrs.Bickel を迎う 春陽丸  
にて帰朝、下船を待たずして帰校、午前 2 時  
間 5 年修身を授業せり、食堂に於いて昼食終  
わりて旧宅に至り千葉先生に会う、午前令嬢  
等来着、荷物は少し遅れて午後 1 時頃着、余  
は坂本氏その他に転居の挨拶をなせり それ  
より萩原歯科医に至り診察を受けて新宅に至  
り夕方まで居り 食事に帰り終わりて帰宅、  
新宅第一夜、長時間眠れず天井板きしる音耳  
につく、清水武君より独逸語の手紙来る

#### 9月15日（火）

昼食後舎生に舎監交代の旨を告げ千葉新舎監  
を紹介し舎生を新舎監に紹介せり、市電にて  
東神奈川に至り省電に乗り田町に下車フレン  
ド女学校に至る（午後 4 時少し前）老タッ  
ピング夫妻、安村夫妻、W.Topping 夫妻、後  
藤マツ子未亡人、石原キク子さんに会い老師  
謝恩の晩餐会、楽しく食事を終わり 8 時半過  
ぎまで歓談、食事中に記念写真をとる 9 時  
W.Topping の自動車にて Mrs.W.T. と同乗帰  
浜 Helen Topping 病気入院に付き安村君  
持参の扇子に寄せ書きして送る 余は次の如

く毛筆にて記せり「老師御夫妻の恩顧三十年、  
満腔の感謝を以って 坂田祐」

9月27日（日）

夜半大暴風雨 10時前学院に至り院長邸宅内の土砂崩壊の箇所及び普門院上の氾濫せる個所を飯田同道視る、帰宅昼食の後1時半頃記念会館に至り在郷将校会総会に来賓として出席 \*中将の満蒙の問題の講演約3時間をきく、結局わが国あると知りて他国あるをしらさん侵略主義的のものなりき、晚餐に招かれたるも欠礼して帰る

12月1日（水）

今朝 Chapell の後 Covell 君手紙を手交せり 3時より教員会議5時頃閉会 終わりて Covell 君余の室に来たり多田君も来たり Covell 君の学校に対する批評、軍事教練のことなど Mission book に書きたることを主題にして談ぜり 6時半まで話して分かる

12月7日（月）

7時学院に至る 本日は教練査閲、例の通り祈祷会 余は査閲官に接するため祈祷会に出席せず 8時少し前査閲官渋谷三郎中佐来着、8時より屋内体操場にて全校礼拝査閲官出席、余司会し Peter 前書 2:13~17 を読み一場の話をなせり讃美歌 373、8時30分列式終わりて査閲官紹介それより9時50分迄書類検閲部長室に於いて、県庁より亀ヶ谷視学來校 10時より1年より順次査閲 昼前に第4年を終わり 12:30 昼食、午後1時20分 第5学年3時40分終わる 3時10分より所見開始 終わりて職員一同を会議室に集め査閲官の所見をきく 4時少し前終わる、茶菓を共にして4時頃査閲官と亀ヶ谷視学とをタクシーにて桜木町駅に送る

## タイ・ビルマ国境山岳地帯におけるキリスト教受容の一事例 —山岳少数民族における水環境を中心に—

勘 田 義 治

A Case Study of the Reception of Christianity in the Mountain Districts along the  
Thai-Burmese Border  
—Water environment in the Akha People Group in Chiang Rai—

Yoshiharu Kanda

### 要 旨

どの様な民族であっても、どの様な環境下にあっても、人は水無くしては生きていけない。それがままならぬ多くの人々が存在する今、安全な水を、安定的に供給することは、世界の多くの地域での大きな課題となっている。

タイ・ビルマ国境山岳地帯では過酷な自然環境のもと、伝統的な生活を送る山岳民族の文化には特異な風習とともに、水環境との関わりや生活において様々な工夫を見ることが出来る。また欧米から派遣された宣教師により伝播された技術と知識はその後の彼らの生活に大きな変化をもたらした。

本稿は山岳少数民族カレン族とアカ族での事例を紹介することによって近代化の最中にある彼らの生活の変化を「水と人との関わり」という視点で考察するものである。

### キーワード

①山岳少数民族 ②アカ族 ③チエンライ  
④水環境 ⑤宣教師

### 目 次

1. はじめに
2. タイ・ビルマ国境山岳地帯の少数民族
3. 山岳少数民族の水環境

### 3.1 村の水環境と生活

- 3.2 外国人宣教師の支援活動
4. おわりに

### 1. はじめに

「水が無くては生きていけない」。2009年7月筆者がアカ族チエンライ（Chiang Rai）県ホイチョンプー（Hui Choompoo）村での研究調査を行った際、通訳のアカ族が私に訴えた言葉である。そこには集落の給水槽として畳2畳ほどの粗末な水槽があり、半年前の雨期に貯水されたと思われる濁った水が貯えられていた。

細菌の繁殖や有害物質の汚染が予想されるこの水を乾期の半年間に使わざるを得ない彼らの生活とは、過酷な自然環境との闘いであり、受け継がれた民族習慣を守るがために向上より伝統を重んじる生活である。その様な生活を送る彼らのタイ社会での境遇は低い識字率と偏見、蔑視から生まれる差別を受け、貧困は彼らをヒエラルキーの底辺へと追い込む。

一方、欧米から派遣された宣教師による宣教活動は、教義をひろめることのみならず、民族の生活や教育の環境整備にも多くの実績を残した。それは初步的な健康管理、家族計

画、識字教室の開催などの教育支援と給水槽の設置、簡易水道の敷設、下水道の整備などの環境支援である。タイ政府の政策指導により定住を余儀なくされた彼らの生活をインフラの整備により支援したのは宣教師たちであった。

本稿は山岳民族が現地の厳しい自然環境の下で、伝統的な生活文化を保守しつつ、知恵を尽くし、工夫を凝らし生活する様を紹介し、彼らの水と生活環境との関係について論じることとする。また1950年代より始まった超教派伝道組織 Overseas Missionary Fellowship (以下OMFという)<sup>1)</sup> 派遣宣教師の布教活動と生活環境の整備に対する働きを現地バプテスト派教会組織に残る資料(史料)から抽出して、宣教師が果たした役割を環境の整備の一事例として紹介し、少数民族におけるキリスト教の布教と受容が民族の生活環境の向上においてどの様な役割を果たしたかを考察する。

## 2. タイ・ビルマ国境山岳地帯の少数民族

タイ北部山岳少数民族はいくつかのグループに分けることが出来、カレン(Karen)族、モン(Hmong)族、ラフ(Lahu)族、アカ(Akah)族、ミエン(Mien)族、リス(Lisu)族などを代表的なものとして挙げることができる。現在およそ68万人<sup>2)</sup>がタイ北部山岳地帯、ミャンマーやラオスとの国境地帯の山岳部に居住する。彼らの多くは中国雲南省をルーツとし、ビルマやラオスを経てタイに移住してきた民族である。彼らは一般的には、焼き畑農業を生活の基盤としているので、5年から10数年ごとの集落移動を繰り返さなければならない。その為に独自の生活スタイルが生まれている。鮮やかな民族衣装を身にまとい、豊富な農耕儀礼を中心とした伝統的な精霊信仰を維持し、山の斜面の焼畑で主食の陸稻を植え、それを餅や赤飯にし、茅葺きの家屋を建

て、生活している。

山岳少数民族の中でも、アカ族は最も保守的で、先祖崇拜と精霊に重きをおいた信仰心を強く持ち、それゆえ信仰にまつわる数多くの奇妙な習慣を持つ。北部チェンマイ県、チェンライ県などのタイ北部山岳地帯の険しい山々の尾根や中腹に、15戸から50戸ほどの集落を築いて暮らす。現在256の村を所有し、約49,903人<sup>3)</sup>が生活している。起源はチベット高原と言われ、道教的な文化とタイ(Tai)族<sup>4)</sup>などの近隣の民族習慣の影響を受けたとされている。村落を単位とした共同体社会をつくり、村長は宗教的指導者と統治者を兼務することが多い。

陸稻を主食とし、トウモロコシや野菜、ライチなどの果物やケシを栽培し、豚、鶏、アヒル、犬などを食する。山岳民族の中でも少数派である彼らは、多数派であるカレン族やラフ族から蔑視され差別されていたせいか警戒心が強く臆病である。男尊女卑の風習によるのか、女性は働き者で、女性が男性を日常的に支える。結婚適齢期は男女とも14~18歳である。女性の民族服は草木染による鮮やかな原色の布を黒地の布に縫いつけ、細かく刺繡が施されている。

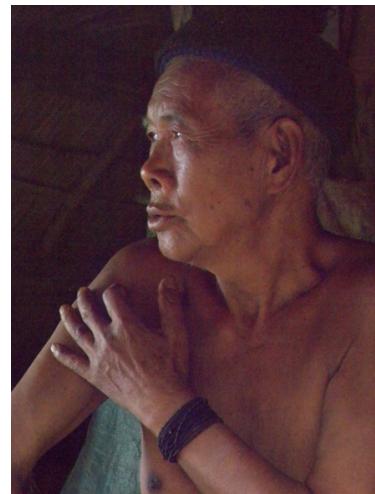


写真1 系譜を暗唱するアカ族デュマ(祈祷師)アバAPa氏 2009年7月 チェンライ県ミーチャンルアンMEA CHAN LUANG村 撮影 勘田義治

彼らは他の少数民族に比べ特に祖靈崇拜を重視し、チベット系の特徴である父子連名制をとっている。父系社会を維持するために自らの系譜を初祖に至るまで暗唱できる者もいる。60代以上もの先祖の名前を暗唱し、自分の祖先がどこからやってきて、どこに住んでいたかを、そして自らの移住経路を伝えることによってお互いの関係を明確にすることを誇りとしていた。祖父の代から始め、曾祖父、曾々祖父と繰り返し、お互いの共通の先祖が現れるまで続けられ、特別な儀式や葬式などでは代々の先祖名を朗唱する(写真1参照)。彼らは本来的には文字文化を有していないが、現在ではアカ語を使う者が多い。しかし彼らの文化伝承は「語り継ぐ」ことであり、そのことによって民族の歴史、それにまつわる伝説を後世に残している。



写真2 盛装のアカ族夫人 2005年12月 チェンライ県ボン村 撮影 勘田義治

現在目にする女性の民族服は黒や濃紺のミニスカート風の下衣に脚半を身につけ、上衣は色糸で鮮やかに刺繡した黒か濃紺の木綿の

ものを着用している。上衣や脚半の細密で多彩な模様は、刺繡を施した布地をパッチワークすることで仕上げている。女性の才能を象徴するかのように彼女たちにとって刺繡は大切なものであり、祭りや農作業のときでも寸暇を惜しんで刺繡に精を出し、歩きながら刺繡をしている姿をよく目にする。一着の民族衣装を完成させるだけでも3ヶ月程かかる。また女性がかぶる伝統的な帽子には銀製の大きな玉や銀貨をはじめ、ビーズ、色鮮やかな色糸や鶏の羽根が施され(写真2参照)、その帽子そのものが彼女たちの財産を誇示したものとなる。それはアカ族の女性は財産を全て身につけるという風習からきている。そのため大切な帽子は農作業時にもかぶり、就寝時でもその帽子を離さずかぶっている人たちもいる。こうした就寝時の帽子の着用は大切な財産を失ってはいけないという危機感の現れと、帽子を脱ぐと悪霊が頭から入ってしまうという信仰のあらわれである。

伝統的な宗教は村落全体にも行きわたり、彼らの村の入り口と出口には木と竹で造られた2メートル前後の高さの日本の鳥居と思われるような門が建てられている(写真3参照)。萩原秀三郎はその様子を次のように述べている。「集落の周囲には柵をめぐらし、村の入口に鳥居に似た門を建て、それにさまざまな呪標をつけて邪霊の侵入を遮断する。門の根方には男女の祖先像を置く。これは村の守護神である。家々の先祖の靈は、入母屋風の屋根の内側の垂木にしばりつけられた竹筒に鎮まっている<sup>5)</sup>と。この門は村に悪霊の侵入や疫病を防ぎ、子孫の繁栄や穀物の豊作を祈願する極めて神聖な意味を持つ。その為こうした意味合いを物語っているようにその門の脇には木製の男根と女性器を持つ男神女神の裸体像が村の神様として祀られている(写真3、4参照)。まさにその門は精霊の住む世界と人間が住む世界を峻別する結界として存在しているものである。<sup>6)</sup>



写真3 村の入り口の門 2009年7月 チェンライ  
県ミーチャンルアン MAE CHAN LUANG 村  
撮影 勘田義治



写真4 門の脇にある男女の裸体像 2009年7月  
チェンライ県ミーチャンルアン MAE CHAN  
LUANG 村 撮影 勘田義治

アカ族は他の部族とは比べると農耕儀礼が大変多い部族である。一年中、実に多数の様々な儀式が祖靈信仰や農耕儀礼として執り行われる。その為、彼らは儀式や儀礼の度に大変な労力と出費が必要になる。畠仕事や出稼ぎを休み、家畜を生贊として供え、家族全員で

儀式に参加しなければならない。儀式の参加を怠ると共同体社会の特質もいえる村中からの精神的制裁が加えられる恐れが生じる。アカ族にみる共同体の特性は、儀礼に基盤を置き、こうした共同体をもとに村社会が構成されている。もともと文字を持たぬ彼らにとっては、儀礼をやりとげることで、自分たちの継承を確認し、こうした継続の中で固有な文化を今まで堅持することになる。こうした共同体社会の構成はアカ族に限らず、山岳少数民族の特徴でもある。山岳少数民族は総じて文字や言葉で伝統を継承するのではなく、祭祀などの儀礼を反復する中で民族特有の世界観を構築してきたのではないだろうか。<sup>7)</sup>

こうした山岳少数民族の一つであるアカ族は現在、タイ社会への同化を余儀なくされている。タイ社会は現在でも王族を頂点としたヒエラルキー的社会構造を有しているので、同化を余儀なくされたアカ族の人たちは当然であるかのように底辺に位置づけられる。1956年タイ政府による「国民登録法」が発布されたが、多くの山岳少数民族は除外されたのが現実であった。半世紀近く経過している今日でもタイ国民としての保障証でもあるIDカードやパスポートが取得が出来ない人が存在する。こうした人たちは健康保険などのタイ政府による行政サービスの授受が出来ず、国内での移動も制限される。難民として扱われてしまう場合も多々ある。

こうした現状は彼らがただ山岳少数民族であるということだけで起こるのではない。彼らは独自の文化や生活スタイルを維持するが為、タイ語が喋れず、読み書きが出来ないというハンディや身分の格差を持つが、それはすぐに差別や蔑視を引き起こす原因となる。国民としての社会的制度から外れ、貧困という現実に呑まれ、少女売春 - H I V - 麻薬というタイ社会の三悪の道を歩まざるを得ない状況と結びつく生活が始まっている。近年、タイでの大きな社会問題は麻薬、H I V、そしてその背後にある少女売春といわれている。このい

すれにも山岳少数民族は貧困がゆえに深く関わっている。

### 3. 山岳少数民族の水環境

#### 3.1 村の水環境と生活

タイは熱帯に位置しており、日本に比べると年間を通じて気温は高いが、南部のマレー半島、北部の山岳地帯、東北部の高原地帯では気候が多少異なる。季節は暑期、雨期、乾期の3つに分けられ、概ね、暑期は3～5月、雨期は6～10月、乾期は11～2月である。最も暑い時期はタイの正月行事である水掛け祭りのソンクラーン（songkran）が行われる4月で、最も気温が低い時期は12月下旬から1月上旬である。

乾期が終わり暑期に入ると気温、湿度がともに増し、4月に入ると日中は「熱風」を感じるような猛暑が続き、気温、湿度の高い「熱帯夜」が続く。比較的降水量が低い東北部では毎年どこかで干ばつが起きる。6月に入ると曇りの日が続き、雨が降りはじめ、雨期が到来する。雨期の終わる10月の前後が最も降雨量が多い。連日の大雨により国内各地で洪水が発生し、干ばつで悩んでいた東北部も洪水の被害を受ける。この時期バンコクでも洪水がよく発生し、市内のどこかで必ず道路が冠水する。11月になると雨が減少し、乾期に入り、気温も下がり始める。12月はバンコクでも「肌寒い」朝夕が増え、北部チェンマイやチェンライなどの山間部では息が白くなることもある。

山岳少数民族が多く住む北部山間部では乾期の寒暖の差は特に激しく、日中は40度を超える、朝晩は5度以下まで下がることもある。雨はほとんど降らない。したがって彼らは雨期に貯めた水を貯め、乾期に使わざるを得ない。（写真5 参照）近年の世界的な異常気象はこの山岳地帯にも起こり、乾期に大雨が降ったり、暑期に積もるほど雹が降ったりして農作物に大きな被害を与えた。この様に変化していく自然環境が彼らの固有な生活形態

をさらに変化させる要因となっている。



写真5 カレン族集落の水槽

1994年 チェンマイ県ティワタ Thiwata村  
撮影 島田正敏

山間部の山岳少数民族集落では例外なく、過酷な水環境のもと村人は生活している。2006年12月チェンマイ県カレン族ティワタ村で行った筆者による調査活動では、次の様な調査結果が得られた。当時同村に居住していたカレン族女性ムセ ポ（Muse Po）はこの時19歳で、14名の兄弟の五女であった。彼女は奥地にあるカレン族集落に育ったが、その村にはガス、水道、電気のインフラは整備されておらず、村人は雨期に貯めた雨水を半年間使い続ける生活であった。兄弟は幼くして感染症で次々と亡くなり、2006年には既に7名が死亡していた。村の子供たちが感染症に罹患する原因は汚染された飲み水にあると推測される。

2008年12月に同村で行われたNPO法人山岳民族子供支援プロジェクトによる調査結果によると、飲料水、河川、土壌には多くの細菌と共に砒素、硝酸性窒素、六価クロム、シアン、亜硝酸が検出された、とある。これらの調査結果からは奥地の集落では未だに不衛生な環境のもと、細菌や有害物質に汚染された水を使いながら生活せざるを得ない山岳民族の事情とその結果、成人せずに死亡してゆく子供たち、子供が死亡することを見越して多くの子供を出産する母親の境遇をみることが出来る。



写真6 タンクに雨水を誘導するアカ族の家庭  
2009年 チェンライ県ルアン LUANG 村 撮影勘田義治

彼らの水源は森林の奥深くに湧き出す水や谷戸を流れる河川であるが、年半分にわたる乾期と暑期はほとんど雨が降らず、こうした水源は涸れことが多い。したがって集落では深刻な水不足に陥り、貴重な水を確保するための様々な工夫が村人によって行われている。

村では各戸の雨樋にパイプやホースを繋ぎ、雨水は全て水槽に導き入れ貯水される（写真6参照）。また使う水を節約するために、乾期の入浴や洗濯を制限したり、生活に使う水を1回で廃棄せず、カスケード使用する工夫がなされる。再利用を繰り返すことによって最後まで無駄なく水を使うなど、水との関わりには生活の知恵が随所にあらわれている。また水源は複数の村で共有することが多いので、水槽の建設などの支援活動を外部から受けるときは水源を共有する複数の村の村長が協議を行い、合意を得たうえで行われる。

また村と町を結ぶ山道は舗装されていない

場合が多いので、雨期には川のように雨水が流れ、ぬかるみ、通行が不能となる。したがって雨期は乾期に比べると外部からの来訪者が制限され、奥地では長雨の中にひっそりと佇む村の様子を見ることが多い。この様な気候状況も人々の生活や考え方を保守的にする要因のひとつと考えられる。

### 3.2 外国人宣教師の支援活動

アカ族の水関環境の支援を行った有名な宣教師としてはフレディ ガッサー（Freddy Gasser）の名を挙げることができる。OMFの宣教師であったフレディはスイスの大きな農場主の長男として生まれ、父親の農場を引き継ぐべく兄弟と一緒に農業学校に学んだ。21歳で専業の農場経営者となり、乳牛を主とする農場を家族とともに経営した。1970年、彼は地元の聖クリショナ教会（Saint Chrischona Church）でOMFの宣教師と出会い、タイ北部の部族の村で宣教活動と、焼き畑農法ではない米作およびケシ栽培に替わる作物の栽培指導の人材育成の必要性を聞いた。そこで彼はタイでの献身を決意した。彼が生まれ育った地域はフランス語が公用語であったので、タイ赴任に先立ち英語を学ぶためにイギリスに行き、オール・ネーションズ・バイブル・カレッジ（All Nations Bible College（現 All Nations Christian College））で宣教師としてタイに赴く準備を整えた。そのカレッジで彼は「使徒行伝」を研究し、イエスが初期の教会を導いた教えについての学習を深めた。

1971年、スイスからシンガポールに向い、北部地方のタイ語を学ぶためにチェンマイに移動した。彼は自分の専門知識を分かち合い、すべての部族教会に農業支援を与えることを宣教の目的とした。OMF宣教師ジーン・ナイチングエール（Jean Nightingale）がアカ族バプテスト派教会組織アカ・チャーチーズ・イン・タイランド（Akha Churches in Thailand以下ACT）に残した *Tribal Christians of the*

*Golden Triangle ; Akah Christians, 1950-2000 ; Where did they all come from ?* によると、1973年4月まで彼はパヤオ県(Phayao)に設立された超部族聖書訓練センターで農業指導者として働き、50名のタイ人と部族の学生に、3ヘクタールの土地で野菜園を作る方法を教えた。その後、彼はスイスから訪れた様々な支援ボランティアグループをアカ族の村に招き入れ、彼らとともに支援活動を行った。前掲書には、彼が数週間にわたり若いイスイ族人たちと一緒にチェンライ県ドイチャン村(ChiangRai DoiChang)でアカ族の村人と共に用水路を引き、丘の上に水田を作る指導をした様子が描かれている(写真7, 8参照)。



写真7 アカ族に灌漑用水の敷設を指導するフレディガッサー 1974年 チェンライ県ドイチャン村  
撮影者 不明 ACT 提供



写真8 アカ族に農業指導するフレディガッサー(左) 1972年 チェンライ県ドイチャン村  
撮影者 不明 ACT 提供

さらに別のスイスのボランティアグループは乾期にも植林を行えるように、用水路を引いた。その結果、前掲書には高台でも耕作することが可能になった、と記されている。

1980年3月、フレディはドイチャン村に水力ポンプを用いた恒久的な上水道をつくる支援事業を始めた。それにはアカ族の村人が参画し、翌年の1981年初頭にこの事業は完成し、アカ族の土地につくられた果樹園に水が供給されるようになった。同年5月アカ族はこの地において焼畑農法に頼らない定住型農業を行うことが出来るようになった。

1950年代から始まったアカ族の村におけるOMF宣教師たちの布教活動には、幾つかの特徴が見られる。宣教師がアカ族の言語を習得し、彼らの村に居住し、彼らと生活を共にした。しかし代々、宣教師たちは彼らとの間にパトロン的関係を作らなかった。そうした彼らの姿勢は彼らの宣教活動の基本であり、その姿勢を通して教義や教会を運営する活動を進めた。とりわけそれは宣教活動の基本的姿勢であるとしても、ここでの彼らの支援活動はアカ族の生活や社会環境の向上に向けて、水環境の整備とそれによる文化生活の向上や焼畑農法に代わる定住型農法の指導と支援活動には特出すべきものがある。その最も大きな功績を残したフレディ宣教師も、先輩宣教師たちの布教活動の姿勢を守りつつ、さらにアカ族の水環境整備に力を注ぎ、アカ族の社会環境の向上を図った宣教師として注目される。

#### 4. おわりに

「水が無くては生きていけない」と通訳が私に話した、少数民族アカ族の村では、水資源に対する生活の知恵や使用に際するルールが重要な意味を持っている。これは伝統的なアニミズム信仰と厳格な慣習法によりアイデンティティーを保持しようという意識の高さがこうした規範を支えていると考えられる。

その一方で、今日の民族の村においては、伝統の保持や継承のために時間や手間をかけたがらない村人も多く、祭祀や儀礼も減少してきている。またそこには宣教師によつてもたらされた教義や思想、技術や知識が少なからず影響し、人々の意識は生活文化の一つの要素である技術や機械の発展、貨幣経済と合理主義の方向に大きく動いているのも現実である。

日本で生活する私たちは大量消費、大量廃棄型の生活文化の中で生きている。私たちは生活が豊かになればなる程、人間も社会も文化もさらなる高度化を求めてきた。近年、環境に配慮し将来に備える新たな手段として、環境への負荷低減を基本とした循環型社会の構築が叫ばれている。それは発生する様々な環境問題への対処として、新たに作り上げるものと考えられることが多いが、古今を問わず環境に配慮した様々な生活文化が存在し、環境の負荷を減らすという考え方は決して目新しいものではない。人類がこれまで経験してきた生活文化、そして地域や民俗、国家において伝統的に伝えられてきた生活文化の中にも、その要素や事例を見つけることができる。

本稿で紹介したアカ族の水環境整備への想い、それを支援したフレディに代表されるOMF宣教師の奉仕と支援、そこには人が人として生きぬくための最小限の自然環境への対応が描かれている。本稿は研究ノートとしてまとめたものであり、今後より詳細な検証を必要とするが、この小稿の中で先人達の環境との係わり方や考え方を学び、環境と社会の密接な関係を垣間見たと同時に、キリスト教の布教のひとつの形態を学ぶことが出来たと考えている。

## 謝 辞

最後に、現地での調査活動に対して、長年に渡り、適切な助言とご支援をいただいたACTのヤ・ジュ・切尔マー(Ya ju

Chermer) 氏、ヨハン・切尔マー(Yohan Chermer) 氏、また、研究ノート執筆をご指導くださった文学研究科の先生方に心から感謝申し上げるとともに、この研究ノートがアカ族研究の一助となることを祈り、末尾の言葉とさせていただく。

## 参 考 文 献

- ・綾部真雄(1998)「国境と少数民族—タイ北部リス族における移住と国境認識」(京都大学東南アジア研究所『東南アジア研究』、第35巻4号、所収)。
- ・萩原秀三郎(1983)『雲南－日本の原郷－』、俊成出版社。
- ・畠聰一・佐藤和裕・清水郁郎共著(1991)「アカ族の集落形態に関する考察」(社団法人日本建築学会『日本建築学会大会学術講演集』所収)。
- ・Jean Nightingale(2001), Tribal Christians of the Golden Triangle ;Akah Christians 1950-2000;Where did they all come from ?, Overseas Missionary Fellowship (OMF) Int.

## 【注】

- 1) 1865年、イギリス人ハドソン・テーラー(Hudson Taylor)によって創設された中国奥地伝道団(China Inland Mission(CIM))が原型である。1994年、Overseas Missionary Fellowship Internationalと改名され、日本における登録名は宗教法人国際福音宣教会である。
- 2) チェンマイ県山岳民族研究所(Tribal Research Institute) 2002年統計発表による。
- 3) チェンマイ県山岳民族研究所(Tribal Research Institute) 2002年統計発表による。
- 4) アカ族同様に中国雲南省シーサンパンナよりタイ国内に移動した少数民族。現タイ国民であるタイ人とは区別される。
- 5) 萩原秀三郎著、『雲南－日本の原郷－』、俊成出版社、1983年、79頁。
- 6) 同書、180頁。
- 7) 同書、213頁。

## タイ北部山岳少数民族の自発的発展に関する一考察 —日本向け加工野菜の原料生産を想定して—

菊地 昌弥・佐藤 敦信・勘田 義治

A Study on the Voluntary Development of Highland Ethnic Minorities in  
Northern Thailand

—Envisioning the Raw Materials Production for Processed Vegetables Targeted  
to Japan—

Masaya Kikuchi · Atsunobu Sato · Yoshiharu Kanda

### 要 旨

研究プロジェクト『国際理解とボランティア』では、タイ北部山岳少数民族の自発的発展に寄与するための具体案をルイスが論じる二重経済論に類似した枠組みを基に考察している。その枠組みというのは、農業に関連する新たな部門が農業部門を牽引する形で両部門が発展し、両部門で余剰労働力を解消するというものである。

この視点に基づき、これまでの研究では、アカ族の住む村々が観光都市であるチェンライ市に比較的近いという地理的条件、また、少数民族であるという希少性、特異性を踏まえ、観光客を顧客対象に、食事と舞踊等の伝統文化を提供する外食企業（仮称：民族レストラン）を新たな部門として想定した。この案では、外食企業が発展し、多店舗展開が可能となれば、スタッフとして雇用する人員も増加するうえ、調達する農産物の量も増加するので、農業部門でも余剰労働力を吸収できるというメリットがある。ところが、上記の案には、新たな部門を創設するための初期費用をどのように工面するのかという問題が存在している。

そうしたことから、我々の研究グループでは、農業を基幹としているアカ族が生産した農産物を高く販売し、少しでも多くの利ざやを得ることによって初期費用を蓄積する方法を検討している。具体的には、世界最大の農産物輸入国である日本向けの加工野菜の原料生産を行い、タイ国内の加工野菜輸出企業に販売する案である。

そこで、本稿では上述の枠組みにおいて位置付けられる新たな部門の創設に不可欠な初期費用を蓄積するための具体案を提示するにあたり、事前に最低限理解しておくべき事項を解説することを目的とした。統計資料の分析、先行研究のレビュー、日本の冷凍野菜開発輸入業者へのヒアリングを通し、アカ族の村々ではどのような加工野菜の原料を生産すべきなのか、その野菜は日本においてどのような動向にあるのか、アカ族の人達はどのような主体と連携すべきなのかを検討・解明した。

## キーワード

- ①アカ族、②余剰労働力、③冷凍野菜、  
④原料生産、⑤日本市場の動向、  
⑥加工野菜輸出企業

## 目 次

1. 本研究の課題
2. 冷凍野菜を中心とした日本向けのタイ産野菜
3. 日本におけるタイ産冷凍野菜の輸入動向と構造
4. タイ北部に集中する大手輸出企業との連携
5. 結論

### 1. 本研究の課題

関東学院大学の建学の精神「人になれ 奉仕せよ」に基づき、飢餓や貧困に喘ぐアジアの隣人が最低限人間らしく生きるための手助けを実践していくことは、社会的に大きな意義があるとともに、本学院における精神の内実化・活性化に寄与すると考えられる。こうした認識の下、本研究プロジェクト『国際理解とボランティア』では、ホイコム村をはじめとするタイ北部のアカ族<sup>1)</sup>の村々を対象に支援・奉仕活動を進めている。

拙稿で述べたように<sup>2)</sup>、タイ北部国境付近に住んでいたアカ族の場合、彼らは長年慣習として行ってきた焼き畑農業や住居の移動をタイ政府から禁止され、従来からの自給自足の生活が不可能となったことから、近隣の村々に定住化を余儀なくされた。しかし、特産物の欠如、事業主が極めて少ないとといった現状にあることから、彼らは雇用機会の創出や地方経済の活性化を目指した経済政策の恩恵を受けることができなかった。したがって、細々と行う農業だけでは村内の余剰労働力を吸収することが困難となっており、村民は現金収入を得るために都市インフォーマルセクターにおける不完全就労や麻薬産業、性産業

へ参入せざるを得なかった。この結果、他方では伝統文化の喪失やHIVの感染等、深刻な問題が発生している。こうしたことから、この状況から脱するための有効な手段の構築およびその支援が早急に求められている。

このようななか、我々の研究グループでは、余剰労働力を吸収しつつ経済的に発展を遂げていくには、ルイスが論じる二重経済論に類似した枠組みが有益と考えている<sup>3)</sup>。ここで類似というのは、この論理を適用する場合、多くの制限要素があるうえ、アカ族の村々ではインフラ設備、人材および資金が皆無であり、現時点において近代部門としての工業部門の創設を想定できない現状にあるため、その論理をそのまま適用できないからである。

それでは、どのような枠組みを描くことができるであろうか。実態調査の結果によると、アカ族の村々には農業以外に基幹となるような産業が存在していない。したがって、農業部門を意識せざるを得ず、それに関連する部門の創設を想定しなくてはならない。換言すれば、農業に関連する新たな部門が農業部門を牽引する形で両部門が発展し、両部門で余剰労働力を解消する姿を想定する必要がある。

上述の視点に基づき、これまでの研究では、アカ族の住む村々が観光都市であるチェンライ市に比較的近いという地理的条件、また、少数民族であるという希少性、特異性を踏まえ、観光客を顧客対象に食事と舞踊等の伝統文化を提供する外食企業(仮称:民族レストラン)を新たな部門として想定した。すなわち、農業部門が生産した農産物を、新たな部門である外食企業が食材として調達し、共に発展していく姿である。この案では、外食企業が発展し、多店舗展開が可能となれば、スタッフとして雇用する人員も増加するうえ、調達する農産物の量も増加するので、農業部門でも余剰労働力を吸収できるというメリットがある<sup>4)</sup>。

ところが、上記の案には、新たな部門を創

設するための初期費用をどのように工面するのかという問題が存在している。そのため、初期費用を得るための対策案を考察する必要がある。

このような意識の下、我々の研究グループでは、農業を基幹としているアカ族が生産した農産物を高く販売し、少しでも多くの利ざやを得ることによって初期費用を蓄積する方法が現実的と考えた。具体的には、世界最大の農産物輸入国である日本向けの加工野菜の原料生産を行い、タイ国内の加工野菜輸出企業に販売する案である<sup>5)</sup>。日本向けの野菜輸出に着目したのは、一般的に高値で取引されるので、農地を所有しないアカ族でもタイ人から借地して経営が成り立つと想定されるからである<sup>6)</sup>。また、生鮮野菜ではなく、加工野菜の原料に注目するのは、未熟な技術によって野菜の形状が若干悪くても、それを加工したうえで商品を生産するので、生鮮野菜に比較して収穫した野菜の歩留が高まるところから、損失を低く抑えることが可能なためである。しかも、日本では2002年に中国産冷凍ほうれんそうを中心とした残留農薬問題が発生し、野菜の最大の輸入先である中国産のニーズが低下し追い風が吹いている。このことに関して、大手居酒屋チェーンのモンテローザでは、同問題発生以降、中国産のえだまめの使用を打ち切り、タイ産や台湾産へ商品を切り替えるといった動きがみられるようになっている。そして、加工野菜そのものではなく、その原料の生産に限定するのは、アカ族の村々には加工用の製造設備がないうえ、日本の商社やメーカーとの接点もないからである。

ただし、この案を検討していくにしても、日本においてニーズが高い野菜加工品を事前に把握しておかなければ、資金を蓄積していくことは困難である。また、仮に加工野菜の原料を生産するにしても資金、生産技術において課題を抱えるアカ族が、一概に加工野菜輸出企業といっても具体的にどのような主体

と連携し、販売するのかも理解しておかなければ、実施に踏み切ることができない。それゆえ、まずは加工野菜のなかでもどの形態の野菜に焦点を当てるべきなのか、そして、その野菜はマーケットとなる日本においてどのような動向にあるのか、さらにアカ族の人達が生産していくにあたり、タイ国内のどのような主体と連携を取っていくべきなのかを理解する必要がある。

そこで、本稿では上述の枠組みにおいて位置付けられる新たな部門の創設に不可欠な初期費用を蓄積するための具体案を提示するにあたり、事前に最低限理解しておくべきこれらの事項を、統計資料の分析、先行研究の成果のレビュー、実際にタイ産加工野菜を取り扱っている日本の商社へのヒアリングを通して解明することを目的とする。

## 2. 冷凍野菜を中心とした日本向けのタイ産野菜

わが国の食料自給率が40%前後で推移していることからもわかるように、食料の約60%を海外に依存している。こうしたなかで、本稿で取り上げるタイからの野菜輸入も一定程度存在している。表1(次頁)は2008年におけるタイからの野菜輸入の状況を形態別に示したものである。野菜は形態別に生鮮野菜と加工野菜に区分されるが、これをみると、総輸入量約9万8,000トンのうち、生鮮野菜の占める割合は7.4%，加工野菜は92.6%となっており、加工野菜の輸入量が大部分を占めていることがわかる。さらに加工野菜の内訳をみると、輸入量全体に占める割合は、冷凍野菜41.3%，その他調整野菜27.1%，塩蔵等野菜21.6%，トマト加工品2.0%，酢調整野菜0.5%，乾燥野菜0.1%となっており、実に冷凍野菜が全体の4割強も占めていることが理解できる。しかも、注目すべきは、冷凍野菜の場合、加工野菜であるため原料となる生鮮野菜を統計上に表記されている数値以上

に使用していることである。農林水産省が発行している『食料需給表』では、加工野菜の輸入量を原料として使用した生鮮野菜の数量に換算して表記しているが、この係数は公表されていない。そのため、冷凍野菜開発輸入業者へヒアリングしたところ、葉茎菜類や根菜類等、品目によって異なるが、歩留率は平均すると40～50%程度とのことである。このことを基に、2008年における原料（生鮮野菜）の使用量を算出すると、同年には約4万トンの冷凍野菜輸入量があったことから、最低でも8万トン以上もの原料野菜を使用していたことになる。ちなみに、この数値は生鮮野菜の輸入量の10倍以上に匹敵することから、加工野菜のなかでも特に冷凍野菜の原料生産に注目すべきといえよう。

### 3. 日本におけるタイ産冷凍野菜の輸入動向と構造

では、タイ産冷凍野菜は日本においてどのような輸入状況にあるのであろうか。ここで考慮すべき点は、単に輸入量が増加しているか否かということだけではなく、日本にとって冷凍野菜の最大の輸入相手国である中国との競合関係を、残留農薬問題が顕在化した2002年を起点に前後で分析する必要があることである。なぜなら、表2（次頁）に示すように、この問題発生以降、わが国において中国産冷凍野菜を購入しようとする意識が低下していることから、その影響を受けてタイ産冷凍野菜の輸入量が増えているとしても、もし、同年以前において中国産にシェアを奪われるかたちで輸入量が減少していたのであれば、中国産の安全性への疑念が解消された

表1 製品形態別にみたタイ産野菜の内訳

(単位:t, %)

	2008年	
	輸入量	比率
生鮮野菜	7,255	7.4
加工野菜	90,417	92.6
冷凍野菜	40,314	41.3
塩蔵等野菜	21,109	21.6
乾燥野菜	100	0.1
酢調整野菜	476	0.5
トマト加工品	1,941	2.0
その他調整野菜	26,477	27.1
合計	97,674	100.0

資料：農畜産業振興機構「ベジ探」(<http://vegetan.vegenet.jp/>) (2009年10月9日閲覧)より作成。  
原資料は財務省「貿易統計」。

表2 残留農薬問題発生以後における輸入冷凍野菜に対する20~60代主婦の意識変化

	n	冷凍食品そのものを使用しなくなった	冷凍野菜は使用しなくなつた	原産国が日本以外の冷凍野菜は使用しなくなつた	原産国が中国の冷凍野菜は使用しなくなつた	特に変わらなく使用している	冷凍野菜をもともと使用していない	その他	(単位:%) 不明
20代	65	4.6	15.4	20.0	20.0	24.6	12.3	3.1	-
30代	164	1.2	12.8	25.6	30.5	11.0	12.8	6.1	-
40代	173	-	8.1	30.6	31.2	11.6	13.9	4.0	0.6
50代	171	3.5	9.9	28.1	24.0	4.7	25.1	4.7	-
60代	114	7.9	8.8	31.6	22.8	5.3	21.1	2.6	-
上記計	687	2.9	10.5	27.9	26.8	9.9	17.5	4.4	0.1

註:上記のアンケートは2003年10月に実施されたものである。

資料:日本冷凍食品協会「冷凍食品に関する消費者調査報告書」より引用。

表3 国別にみた輸入冷凍野菜の動向

	1995年		2001年		2007年	
	実数	シェア	実数	シェア	実数	シェア
輸入国総数	40		39		43	
輸入量合計	578	100.0	809	100.0	850	100.0
上位6カ国合計	553	95.7	778	96.2	805	94.7
①中国	189	34.2	362	46.5	389	48.3
②アメリカ	263	47.6	303	38.9	295	36.6
③カナダ	20	3.6	38	4.9	39	4.8
④タイ	19	3.4	24	3.1	34	4.2
⑤ニュージーランド	28	5.1	27	3.5	27	3.4
⑥台湾	34	6.1	24	3.1	21	2.6

資料:表1と同じ。

場合、その増加というのは一時的なものに終わってしまう可能性があるためである。

### 3.1 懸念材料の存在

表3は国別にみた輸入冷凍野菜の動向であ

る<sup>7)</sup>。これによると、わが国において輸入相手国は40前後あるものの、上位6カ国との取引が約95%となっており、特定の国々に集中していることがわかる。また、輸入冷凍野菜の総輸入量をみると、1995年から2007

年にかけて57.8万tから85万tへと27.2万t増加している。このうち、中国からの輸入量は18.9万tから38.9万tへと20万tも増加しており、増加分の70%以上を占めた。このことからもわかるように、わが国における輸入野菜の急増は、取引が集中している上位6カ国すべての国々からの輸入が一様に増加したためにもたらされているわけではなく、中国からの輸入が突出して増加したためにもたらされている。

タイからの輸入に着目すると、1995年には1.9万t、2001年には2.4万t、そして2007年には34万tと、右肩上がりで推移していることがわかる。ちなみに、同表には記載されていないものの、2008年には4万tを初めて超え、過去最高の輸入量を記録している。この結果、1995年には日本にとって第6番目の輸入相手国であったのが、2007年には第4番目へとその位置を高めている。

なお、残留農薬問題が発生した2002年を意識し、その前後の推移について中国産とタイ産の動向を注視してみると、先に指摘したことがやや懸念される。なぜなら、同表をみると、2002年以前は中国産のシェアが大きく増加する一方で、タイ産のシェアが停滞していること、そして、2002年以降は中国産の増加のペースが明らかに低下しているが、タイ産は堅調に推移していることを指摘できるからである。前者については、中国産のシェアが1995年から2001年にかけて34.2%から46.5%に10ポイント以上増加しているなか、タイ産は同期間にかけて数量こそ0.5万t増加しているものの、シェアは3.4%から3.1%へと減少している。後者に関しては、中国産は1995年から2001年にかけて輸入量が約1.92倍増加しているが、2001年から2007年にかけてはわずか1.07倍にとどまっている一方、タイ産は1995年から2001年にかけて1.26倍、さらに2001年から2007年にかけて1.42倍へと増加のペースを上げている。

### 3.2 競合関係の変容

以上のことから、タイ産冷凍野菜が中国産冷凍野菜と競合関係にあるのか否かを、具体的に分析していく必要がある。そこで、この節では「中国産との価格差がある品目ほど、輸入量の増加のペースは鈍るか」ということを、2002年を起点に前後に分けて分析する。ここで価格を指標に用いるのは、農林水産省や外食産業総合調査研究センターが実施した調査で明らかにされているように、輸入冷凍野菜を実際に使用する外食企業や小売業者といった実需者が価格を重視しているためである。

上記のことを明らかにするには、単相関係数を算出し、判断することが有益である。この手法は2つの数量データ間の関係を明らかにする統計学的なものである。ただし、その係数を算出する前に、相関図を作成し、価格差と輸入量の増減の関係は視覚的にどのような関係にあるのかを捉えておく必要がある。図1、図2（次頁）は残留農薬問題発生前後における中国産とタイ産の冷凍野菜の価格差と、タイ産輸入量の増減率との関係を示したものである。両図で示されている品目は、農畜産業振興機構「ベジ探」(<http://vegetan.vegenet.jp/>)に記載されているタイ産および中国産の項目において共通し、なおかつ総輸入量（タイ産）に占めるシェアが高いものを取り上げている<sup>8)</sup>。これらの図において、両者の関係に直線的な関係性が認められる場合、相関関係にあるといい、ここの程度を示す数値が単相関係数である。ちなみに、単相関係数が±1に近いときは2つの変数の関係はほぼ直線的であって、この値から遠ざかるに従って直線的関係は薄れていき、0になると変数間に関係はまったくないと判断される。具体的には、0.5未満であれば、非常に弱い相関（相関なし）、0.5以上0.7未満であればやや弱い相関、0.7以上0.9未満であれば強い相関、0.9以上であれば非常に強い相関とされる<sup>9)</sup>。

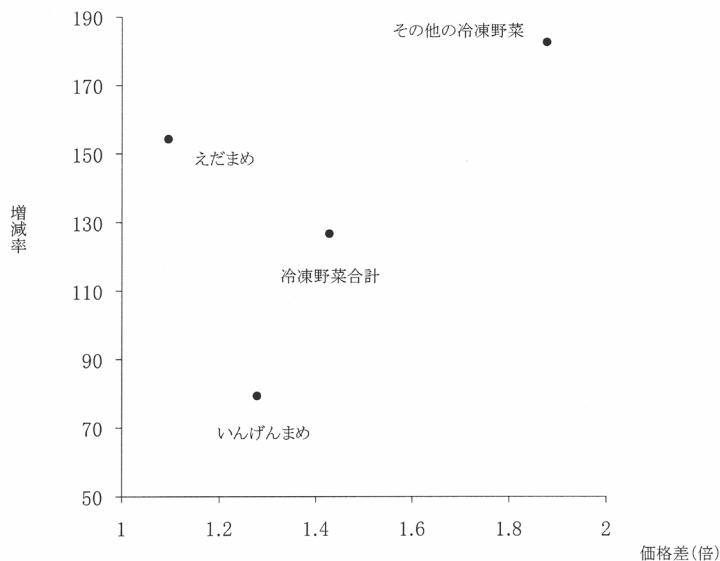


図1 中国産との価格差とタイ産輸入量の増減率(1995/2001)

註：1) 増減率は1995年と2001年の比較である。

2) 価格差は1995年～2001年の中国産とタイ産のそれぞれの平均単価を求め、その差を用いた。

3) えだまめ、いんげんまめ、その他の冷凍野菜の3品目の輸入量を合計すると、輸入量全体の約95%を占めている。

資料：表1と同じ

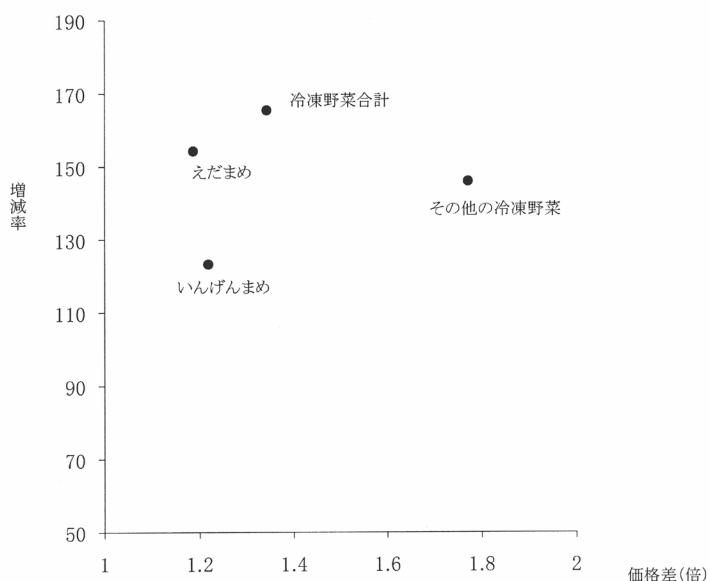


図2 中国産との価格差とタイ産輸入量の増減率(2002/2008)

註：1) 増減率は1995年と2001年の比較である。

2) 価格差は2002年～2008年の中国産とタイ産のそれぞれの平均単価を求め、その差を用いた。

3) えだまめ、いんげんまめ、その他の冷凍野菜の3品目の輸入量を合計すると、輸入量全体の83%を占めている。

資料：表1と同じ

図1に示されたデータを基に、冷凍野菜合計を除いて単相関係数を算出すると、 $r = 0.54$ であり、両者の間にはやや弱い相関がある<sup>10)</sup>。すなわち、1995年から2001年の期間では、タイ産の輸入量が増加傾向にあるものの、中国産とは競合関係にあり、価格差が大きい品目ほどその程度が緩やかであるという傾向が若干はあるものの確認される。この要因は、冷凍野菜の主要なユーザーである大手の外食企業や小売店が1990年代中頃に成熟期を迎え、値下げ競争がより深化したので、これら実需者がコストの安い中国産を主に使用・販売したからである<sup>11)</sup>。

ところが、2002年に中国産冷凍ほうれんそうをはじめとする中国産野菜において残留農薬問題が顕在化すると、表2からも明らかのように、消費者の中国産に対する安全性への疑念が高まりをみせたことから、実需者のニーズが大きく変化することになった。図2は残留農薬問題発生以後における中国産とタイ産の価格差と、タイ産輸入量の増減率との関係を示したものである。これをみると、同問題発生以前とは異なり、これらの間には直線的関係がみられないうえ、実際に単相関係数を算出しても、 $r = 0.21$ となっている。このことから、2002年以降におけるタイ産冷凍野菜の増加は、中国産との価格差の影響をほとんど受けないかたちで発生しているといえ、それゆえ、従来よりも輸入量の増加のペースが上がっているのであろう。

つまり、以上の考察から指摘できることは、2002年以降、タイ産冷凍野菜はいっそう輸入量を増加させているが、中国産の安全性への疑念が解消された場合、今日の状況に影響を及ぼす可能性を完全には否定することができないということである。そのためアカ族の村々において日本向け冷凍野菜の原料生産を行うには、資金、生産技術の課題に加え、こうした懸念材料にも対処していくような、強固な連携相手が必要である。以下では、その主体について検討してみよう。

#### 4. タイ北部に集中する大手輸出企業との連携

タイの対日冷凍野菜輸出に関する先行研究をみると、注目に値する成果として後藤(2006)がある。この成果は、日本向けに冷凍野菜を製造・輸出する大手企業（以下、大手輸出企業とする。）の Chiangmai Frozen Foods Public Company Limited（以下、CF社とする。）、Lanna Agro Industry Company Limited（同、LA社）、Union Frost Company Limited（同、UF社）に対して詳細な実態調査を実施し、同主体大手と農家との契約栽培の実態について明らかにしている。

この成果に記載している事項をベースに、実際にCF社の商品を販売している日本の商社へのヒアリングの結果を加えアカ族の連携相手を考察すると、まさに上記3社を中心とした大手輸出企業に狙いを定めることが現実的かつ有益性も高いと推定される。その理由は次のとおりである。

##### 4.1 連携の現実性

まずは、上記3社の概要について述べよう。後藤(2006)とCF社のホームページによると、同社はいんげん、えだまめ、スイートコーン、ベビーコーン、にんじんなどの冷凍野菜や冷凍果実を生産しており、生産量は約2.1万tである。2004年の販売総額は11億2,000万バーツであり、そのうち冷凍野菜が94%を占めている。そして、直接輸出額約9億9,000万バーツのうち対日輸出額は約9億バーツと総輸出額の90.5%を占めている。このことから、CF社は日本向けの冷凍野菜の製造・輸出に特化した企業といえる。また、LA社やUF社も同様に日本向けの冷凍野菜の製造・輸出を中心に行っている<sup>12)</sup>。総生産量に占める冷凍野菜の比率は、LA社が総生産量1万tのうち65%，UF社が総生産量6,000～6,500tのうち85%となっている。

ここで特筆すべきは、これら3社は日本の

タイ産冷凍野菜の輸入額において大きなシェアを有していること、さらに、3社の所在地がすべてタイ北部に集中しており、契約栽培によって集荷する原料もほぼすべて同地域の農村から調達していることである。前者についてその程度を算出してみると、2004年におけるタイ産冷凍野菜の輸入額は約55.8億円であるが、このうち、CF社が43.3%、LA社が6.4%となっており、わずか2社だけで実に半分を占めている<sup>13)</sup>。また原料の調達状況をみると、CF社は北部タイ8県にわたり約2万人、LA社は同11県にわたり約2,500人、UF社は同7県にわたり500～600人の農家との契約栽培を実施している。つまり、アカ族が生活する北部タイ内において強固な連携相手が存在し、しかも原料の集荷地域も域内となっていることから、本稿で取り上げている新たな部門の具体案は地理的に現実的と判断される。

#### 4.2 連携の有益性

それでは、これらの大手輸出企業とアカ族が連携するにあたり、アカ族側にはどのような有益性があるのであろうか。もちろん、生産した原料を購入してもらえる可能性があることはそのひとつであるが、それ以前に存在している資金、生産技術の課題に加え、先に指摘した懸念材料にも対処していくようなメリットが存在していると考えられる。具体的な内容として、次の5点があげられる。

第1に、指導体制が整備されている点である。アカ族が輸出用の野菜を栽培するにしても現段階では未経験であり、そのノウハウが不足している。そのため、彼らが独自に栽培したとしても、大手輸出企業が定める品質基準に合致した原料を生産することができない可能性が高い。ところが、上記の3社では、良質の原料を安定的に調達すべく、職員が契約農家を現場で直接指導している。このように契約農家を指導する職員数は、CF社35人、LA社17人<sup>14)</sup>、UF社12人となっており、

複数人にわたっている。

なお、当職員の役割はそれだけではない。商品の安定供給にも寄与している。LA社の事例では、加工工場の受入可能量（1日最大約40t）を念頭に置き計画的に原料を収穫・加工することによって、商品を顧客へ安定供給するべく、指導業務を行う職員が契約栽培地域に常駐し、生育状態を把握している<sup>15)</sup>。

また、輸出用の原料生産を指導する場合、大手輸出企業は契約農家に対して一般的な生産技術だけではなく、輸出先国の市場動向または輸出先企業の要望も的確に伝えていく必要がある。そうしなければ、要求される品質水準を維持することができず、競争力を保つことが困難となる。このことに関し、対象企業の概要をみると、関与の仕方は直接的、間接的と様々であるが、3社はすべて輸出先国である日本企業の関与がある。CF社は日本の大手総合商社が参加した合弁会社であり、またUF社についても日本企業が株式を一定数保有している。そして、LA社は85%を親族が所有しているが、15%をタイの商社と銀行が所有しており、このタイの商社には日本の貿易商社が資本参加している。ちなみに、冷凍野菜開発輸入業者にヒアリングしたところ、CF社には日本人スタッフが常駐しており、契約農家に直接指導する職員を介して、日本の市場動向が契約農家に伝達されているとのことである<sup>16)</sup>。いうまでもなく、こうした企業と連携を組むことができれば、日本の需要にも沿った原料の生産が早期に可能となるであろう。

第2に、生産資材を前貸しする対応がとられている点である。拙稿で検討したように、アカ族の所得は低く、日本向け冷凍野菜の原料を生産するにしても、生産資材の購入等初期投資の部分において問題がある。ただし、この問題はアカ族の農家だけではなく、他の農家でも抱えている。そこでLA社では契約農家に対し、種子や肥料、農薬などの生産資材を前貸しする対応を講じている。同社は生

産資材を前貸しした場合、収穫した原料を買いたる際に買取り額から前貸しした分の費用を差し引く方法でその代金を回収している<sup>17)</sup>。

第3に、収入の安定化が期待できる点である。生産者が国内卸売市場に農産物を出荷する場合、市況により価格は大きく左右される。それゆえ、予期せぬ価格で取引されることがあり、場合によっては再生産が困難となるケースもある。当然のことながら、アカ族の村々が発展していくにあたり検討している新たな部門は、継続的に発展し、余剰労働力を吸収していくことが不可欠である。したがって、このようなリスクをなるべく回避していくことが重要である。これらのこと踏まえ、大手輸出企業3社が原料を購入するすべての農家と実施している契約栽培に着目すると、農家との契約時に交わされる契約書には買取り価格および数量が記されており、契約農家はこの文書に基づいて輸出用の原料野菜を生産することとなっている<sup>18)</sup>。しかも、LA社などでは災害（病害虫の発生を含む）により収穫量が減少した場合、減収状況を勘案して補償を行っており<sup>19)</sup>、契約農家が安心して生産できるような環境にも注意を払っている。このため、契約農家は自分がどの程度の収入を得ることができるのかを予め予想できるうえ、その水準もある程度安定する。

第4に、安全性の確保に対する取り組みである。先述したように、急増していた中国産が停滞した一因として、残留農薬問題に代表される食品安全問題があった。テレビや新聞といったマスコミが中国産を大きく取り上げたこともあり、この問題は中国だけが対象となっているように思われがちである。ところが、厚生労働省が発行している『輸入食品監視統計』によると、2007年におけるタイ産の違反件数は113件であり、中国の376件、アメリカの117件に次いで3番目に違反の多い国となっている。しかも、違反率の高さでみると、タイは0.68%と29番目に高い国に

位置し、中国の0.41%、40番目よりも上位にあり、決して安全性が高いとはいえない。安心できる状況ではない。したがって、想定する新たな部門が継続して発展していくためには、食品安全問題に真剣に取り組んでいる企業と連携していく必要性がある。

このようななか、安全性の確保に関し、大手輸出企業では細心の注意を払っている。例えば、LA社の場合、契約内容には、買取り価格の他に、使用する農薬・肥料の名称や使用量・使用時期、買い取る農産物の品質基準なども含まれている<sup>20)</sup>。また、同社では、収穫前と工場搬入後における残留農薬に関するサンプリング検査と、工場搬入前後における合計8回の選別作業があり、残留農薬だけではなく異物の混入も防止している<sup>21)</sup>。さらに、トレーサビリティ・システムも導入しており、仮に日本において安全性に関する問題が発生した場合でも遡及できるようになっている<sup>22)</sup>。こうした厳格な対応は、残留農薬検査機器だけでも数千万円の費用がかかることからも明らかなように、資本に恵まれた大手輸出企業でなければ講じることが困難となっている。

第5に、先に指摘した懸念材料への対応がみられ、継続して取引を行うことが期待できる点である。先の分析結果では、残留農薬問題発生以前は、若干とはいえ廉価な中国産冷凍野菜の影響を受けており、日本の消費者および実需者の中国産野菜の安全性に対する疑念が解消された場合、再度、中国産の影響を受け、タイ産冷凍野菜の輸出量に陰りが発生する可能性があることが確認された。それゆえ、アカ族が継続して発展していくことの必要性を踏まえると、同懸念への対応策を講じることができ、その影響を回避あるいは緩和できる連携相手が望ましい。

では、輸出先国である日本において輸入野菜に対してどのようなニーズがあるのであろうか。表4（次頁）は日本の飲食店が輸入野菜を仕入れる主な理由を示したものである。

表4 飲食店が輸入野菜を仕入れる主な理由（上位5位）

仕入の理由	仕入価格が安定している	年間を通して、必要量が安定的に入手できる	国産物の無い時期(端境期)に利用できる	仕入価格水準が安い	味や香り、形・色沢、歯ざわり等が一定している	サイズ等の規格が一定している	(単位:%)
比率	45.7	45.7	34.8	30.4	8.7	8.7	8.7

註:調査概要は以下のとおりである。

①調査方法 大手外食企業377社を対象に郵送アンケート

②調査時期 平成18年2月

③有効回答 46企業(店舗換算8,420店舗)回収率12.2%

資料:(財)外食産業総合調査研究センター「平成17年度外食産業国産食材利用推進事業報告書」  
(平成18年)より作成。

これによると、輸入野菜を仕入れる理由の上位が、「仕入価格が安定している」45.7%、「年間を通して、必要量が安定的に入手できる」45.7%、「仕入価格水準が安い」30.4%となっており、価格水準よりも価格の安定性と安定供給を重視していることがわかる<sup>23)</sup>。これらのニーズを満たすための対応に注目すると、我々のグループが連携相手として考えている大手輸出企業では、先に述べた契約栽培の導入や指導体制の整備の内容にみたように、価格の安定化や安定供給に関連する行動をすでに起こしている。

以上のことから、アカ族の村々において日本向け冷凍野菜の原料生産を行うには、資金、生産技術の課題に加え、今後の懸念材料にも対処していくような、タイ北部の大手輸出企業との連携が現実的であり、なおかつ有益性も高いと判断される。

## 5. 結 論

本稿の目的は、冒頭で説明した枠組みの下で、日本向けの加工野菜の原料生産を行うにあたり、事前に最低限理解しておく必要があ

る事項を、統計資料の分析、先行研究の成果のレビュー、冷凍野菜開発輸入業者へのヒアリングを通して解明することにあった。この事項とは、加工野菜のなかでもどの形態の野菜に焦点を当てるべきなのか、そしてその野菜はマーケットとなる日本においてどのような動向にあるのか、さらにアカ族の人達が原料を生産していくにあたり、タイ国内のどのような主体と連携を取っていくべきなのかである。要諦は以下の3点である。

第1は、統計資料を基に形態別にタイ産野菜の輸入状況を分析した結果、事業規模の大きさから特に冷凍野菜の原料生産に焦点を当てることが有益である。

第2は、タイ産冷凍野菜の輸入量の推移に加え、日本にとって冷凍野菜の最大の輸入相手国である中国との競合関係を、残留農薬問題が顕在化した2002年を起点に前後で分析した結果、タイ産冷凍野菜は一貫して増加しているものの、同問題発生以前と以後では、関係性が変容している。その変容というのは、同問題以前においてタイ産と中国産は競合関係にあり、価格差が大きい品目ほど増加の程度が緩やかであるという傾向にあった

ものの、以後には競合関係の程度が低くなり、その影響をほとんど受けずに輸入量が増加しているというものである。

第3は、先行研究に記載している事項を主な情報源に、地理的的前提条件、資金、技術指導、解明した懸念への対応といった点を考慮しながらアカ族の連携相手を考察した結果、タイ北部に存在する3社を中心とした大手輸出企業に狙いを定めることが現実的でかつ有益性も高いと判断される。

今後は、現地での実態調査を試みるとともに、以上の解明点を踏まえながら、本稿で取り上げた案の具体的なシステムの設計を行っていきたい。

### 【註】

- 1) 引用・参考文献[1], [3]に詳しい。なお、これらの成果によると、山岳少数民族の中でも最も保守的で信仰心が強く、信仰にまつわる数多くの奇妙な慣習を持つ山の民である。起源はチベット高原だと言われ、中国的、道教的な文化とタイ(Tai)族などの近隣の民族の影響を受けた。村落を最大の単位とした共同体社会を作り、祖先から受け継いだ風習と生活を維持する。タイ北部山岳地帯に256の村があり、約5万人が山中に住む。
- 2) 引用・参考文献[4]を参照。
- 3) ルイスの成果について言及している研究として、引用・参考文献[7], [8]等がある。
- 4) 観光客相手なので提供する食事の価格を割高に設定できる。すると、納品する食材価格も多少高くても問題とならない。
- 5) この案では、アカ族にとって初期費用を得ることができるという点だけではなく、加工野菜輸出企業との契約栽培の経験により民族レストランに供給される食材についても高品質化が達成される点、同主体への販売により増加した利ざやを民族レストランの運営維持にも充てることができる点の2点においてもメリットがあると推察される。つまり、我々の研究グループでは、将来的にアカ族が原料生産を行い同主体へ販売すると同時に、民族レストランへも食材を供給する姿を想定している。
- 6) 引用・参考文献[2]では、ホイコム村に住むアカ族の農地は、すべて農地の所有者であるタイ人からの借地であり、1ライ(約0.16ha)

あたり年間約300バーツの地代を支払っていること、1戸あたりの耕地面積は5~10ライであり、タイの平均耕地面積からみると比較的小規模であることが明らかになっている。

- 7) 表1、図1、図2は2008年の数値を用いているものの、表3の数値が2007年となっているのは、出所のサイトにおいて本論文の作成時に2008年の総輸入量が公表されていないためである。
- 8) 図の註釈にも記載しているが、図1に記載しているえだまめ、いんげんまめ、その他の冷凍野菜の3品目の輸入量を合計すると、総輸入量の95%を占めている。また、図2では83%を占めている。なお、それ以外の品目は輸入量がわずかであり全体への寄与度が少ないため、除外した。
- 9) 引用・参考文献[2]を参照。
- 10) 算出方法は引用・参考文献[2]を参照。なお、冷凍野菜合計を除くのは、個別品目ではないからである。
- 11) 1995年の農林水産省統計情報部「輸入農畜水産物流通調査報告書」や2006年の外食産業総合調査研究センター「平成17年度外食産業国産食材利用推進事業報告書」等で明らかになっている。また、引用・参考文献[5]でも具体的に考察を加えている。
- 12) 両社の輸出先における日本の比率は、LA社が65%, UF社が60%となっている。
- 13) UF社については、販売総額が不明であるため、対日輸出額を算出することはできない。しかし、上述の総生産量と冷凍野菜の比率、及び販売総額のうちの対日輸出の比率が57%であることから、前2社と同様に大きなシェアをもっていることが推測される。なお、通貨換算機能システム(<http://fxtop.com/jp/cnv.htm>)によると、2004年の為替レートは1バーツ=2.689626円であり、これに基づいて換算した。
- 14) 引用・参考文献[6]は、LA社では現地で指導する職員について、地区担当の責任者である指導職員をスーパーバイザー、スーパーバイザーの指揮の下で従事する下級指導職員をフィールドスタッフとして、それぞれ5人と12人配置していると述べている。しかし、他の2社についてはLA社のように区別する記述がないことから、本稿では、便宜上、指導業務にあたる職員として両者を一括する。
- 15) 引用・参考文献[6]を参照。また、引用・参考文献[5]では、冷凍野菜の対日輸出国とし

- て大きなシェアをもつ中国について、輸出企業では植物保護員と呼ばれる現地で指導する職員を配置することが法規によって義務づけられており、植物保護員は農薬使用等に関する知識が求められること、植物保護員に対する賃金は、業務への意識を高めるため出来高払いとなっていることが明らかになっている。本稿で取り上げている企業も日本向けが中心であることを踏まえると、タイの指導職員についても中国とほぼ同様の扱いであると推測される。
- 16) この冷凍野菜開発輸入業者は、首都圏に拠点を置き、水産物と野菜を専門に取り扱っている。年間販売額は約 250 億円、うち冷凍野菜の販売額は約 25 億円、輸入量は約 1 万 t である。同社の冷凍野菜の取り扱いは 20 年以上にわたる。冷凍野菜の輸入先国は中国、アメリカ、タイ、メキシコである。
- 17) 引用・参考文献 [6] は、LA 社と契約しているえだまめ栽培農家を 3 件抽出し、2005 年における各農家の収量や生産資材にかかる費用を整理している。3 件のうち、最も収量の多い農家をみると、収量は 2,739.9kg で買取り額は 3 万 4,238 パーツであった。LA 社がこの農家に対し前貸した生産資材の費用は、種子 2,300 パーツ、肥料 4,053 パーツ、農薬 2,278 パーツの計 8,631 パーツであり、この費用を差し引いた 2 万 5,607 パーツが農家の収入となっている。
- 18) 引用・参考文献 [6] によると、3 社はいずれも個々の農家とは直接契約を結ばず、キー ファーマーと呼ばれる契約農家の代表者と文書で契約を結ぶとしている。そして、キー ファーマーが他の農家に契約内容を伝達しているとのことである。
- 19) 引用・参考文献 [6] を参照。
- 20) 引用・参考文献 [6] を参照。
- 21) 引用・参考文献 [6] を参照。
- 22) 引用・参考文献 [6] を参照。
- 23) (財) 外食産業総合調査研究センター『外食産業統計資料集 2009 年版』を参照。

## 引用・参考文献

- [1] 萩原秀三郎 (1983) 『雲南－日本の原郷－』 校成出版社。
- [2] 菅民郎 (2007) 『Excel で学ぶ多変量解析入門』 オーム社。
- [3] 勘田義治 (2009) 「タイ・ビルマ国境山岳地帯におけるキリスト教受容の一事例－牧師ヤ・

ジュ・チャルマーとチェンライのアカ族－」 キリスト教と文化研究所『キリスト教と文化』、第 7 号。

- [4] 菊地昌弥・新井文月・石崎和之・田所義朗・勘田義治 (2007) 「タイ北部山岳少数民族の自発的発展に関する一考察－アカ族ホイコム村の事例」 関東学院大学キリスト教と文化研究所『キリスト教と文化』 第 5 号。
- [5] 菊地昌弥 (2008) 『冷凍野菜の開発輸入とマーケティング』 農林統計協会。
- [6] 後藤光蔵 (2006) 「北部タイにおける日本向け冷凍野菜生産と枝豆の契約栽培 (1)」 武藏大学経済学会『武藏大学論集』 第 54 卷第 2 号。
- [7] 鳥居泰彦 (1979) 『経済発展理論』 東洋経済新報社。
- [8] 渡辺利夫 (1986) 『開発経済学』 日本評論社。

## 謝 辞

本論文の作成にあたり、査読者の両先生からは大変有益なコメントを頂戴した。また、本誌編集委員の方々にもお世話になった。心より感謝申し上げる。

## 「チベット紀行—青蔵高原の宗教文化に触れて—」

三井 純人

A Travel Sketch In Tibet

—Sightseeing of Religious Culture in Qinghai-Tibet Highland—

Sumito Mii

### 目 次

1. はじめに
2. チベットへの道
  - 2.1 今の北京
  - 2.2 西寧のモスク
  - 2.3 チベット人と進化論
  - 2.4 タール寺の香り
  - 2.5 青蔵高原を走る
3. チベット仏教の心を求めて
  - 3.1 天空のポタラ宮
  - 3.2 日本人ゆかりのセラ寺
  - 3.3 ラサの発祥地ジョカン寺
  - 3.4 デプン寺のショトン祭
  - 3.5 チベットのマンダラ
4. さらなる邂逅
  - 4.1 水葬の河
  - 4.2 ヤムドオク湖のヘブンリーブルー
  - 4.3 大氷河のパノラマ
  - 4.4 チベットの原風景
5. あとがき

### 1. はじめに

日本は仏教国といわれるが、江戸時代の檀家政策以降その本来的な教えはかなり薄められたものになってしまっている。インドから東南アジアに広まった上座部（小乗）仏教とは別に、中国を経て朝鮮半島からわが国に伝

わった大乗仏教の伝統を今でも色濃く残している地域はチベット文化圏である。それは中国政府が制定したチベット自治区だけではなくチベット人が多く住む青海省、雲南省、四川省、甘粛省、そして、チベット仏教を奉じる近隣国ネパール、ブータン、さらに、ダライ・ラマの亡命政府のある北インドのラダック地方を含めた地域である。ヒマラヤ山脈を南境とするその地域一帯はチベット高原、中国語では青蔵高原と呼ばれ、平均高度は約4,500メートル、総面積は日本の国土の6倍以上にもなる。

今年の8月中旬に8日ほどではあったが、北京を経て青海省の首都である西寧から青蔵鉄道に乗ってチベット自治区を訪れることができた。筆者はかつて東洋哲学を学び、現在は臨床心理に携わるものとして日本人のもつ靈性（スピリチュアリティ）というものの探求をライフワークの一つにしているが、靈性とは東洋と西洋の対比というような大まかな固定的、観念的な視点だけでは到底とらえきれないものである。むしろ、分類思考の籠がフッと緩んだ時に浮かんでくる個人レベルのとりとめもない思いの方に大きな手がかりがあるような気がする。日本社会の不透明な雰囲気を離れて他の国に行ってみるのも新たな心の邂逅を得るためにある。他国の文化・風土と接していると何かかえって安心して、自

分という存在にくつろげるときがある。そのような考え方から今回の旅行は一般向けのツアー（日本人の同行者2人）に個人的に参加したものであり、学術調査というようなものではないが、なんらかのかたちで読者各位の思索の一助になれば幸いである。

## 2. チベットへの道

### 2.1 今の北京

成田から四時間弱ほどでお昼前に北京空港の第3ターミナルに着いた。第3ターミナルは昨年の北京オリンピックに合わせて造られたものであり、世界最大規模の圧倒的大さには目を見張るものがある。その割には離着陸する飛行機の数は少ないようにも思えるが、将来を見越してのインフラ整備の一環というわけだろう。

入国審査のボックスの前に立つと、手元に四つのボタンがあるのが目に入った。中国語なのではっきりとは分からぬが、役人の態度に対して満足か不満かということを乗客が査定できるようだ。役人が愛想をふりまいているので、左端の「非常に満足」を意味すると思われるボタンを押してあげた。私は北京は初めてであるが、20年ほど前に上海に行つたことはあり、当時の中国では考えられることであった。

旅行社の車に乗り込むと、まずガイドさんから空港の建物の外観についての説明がある。空港のドーム型の建物はカメの甲羅をかたどったもので、もう一つの横長で上部にギザギザのデザインをした方の建物は竜の鱗のイメージだという。風水思想を取り入れているそうだ。さらに、中国全土のかたちはニワトリのようだという説明を受ける。地図を広げてみるとなるほどトサカのついた頭があつてその下のど元あたりが北京に当たる。これから行く青蔵高原は折りたたんだ尾翼の下部あたりである。北京市は秋田と同じ緯度にあるが、その面積は四国と同じくら

いだそうだ。一つの市とはいっても日本の都市とは広さがまるで違うわけだ。

空港から市街地に向かうあたりはビルの建設ラッシュであり、今の中中国経済の勢いがそのまま現れている。そして、いよいよ毛沢東の写真が見えてくる。天安門広場である。天安門広場は花崗岩が敷き詰められた広大な空間である。一つの敷石に2人が立つと100万人の集会ができるという。ちょうど20年前にテレビの画面で見た天安門事件の騒乱が頭に浮かんだ。車を降りると公安警察からペットボトルの所持検査を受ける。今は平穏であるが、数年前には法輪功の信者が焼身自殺したことがあったという。経済発展を続ける中国は共産主義国家として60周年の節目の年ということで、10月にはこの場所で盛大なセレモニーがあるようだが、同時にこの年はダライ・ラマが北インドのダラムサラに亡命政府を樹立してから50年目の年もある。

天安門からオリンピックスタジアムに向かう途中、昔ながらの平屋が続く一角がある。若者はマンション暮らしに憧れるが、今でも老人は平屋を好むそうだ。

「鳥の巣」という名前で有名になったオリンピックスタジアムを観てから、再び北京空港に戻る。今回の旅行では北京は通過地点ということで半日の観光であったものの、さまざまな問題をはらみつつも超大国に向かって飛躍的な経済成長を続ける中国の首都北京の鼓動を感じるひとときであった。

### 2.2 西寧のモスク

北京から国内線のフライトで一時間半ほどで深夜西寧に着く。西寧は青海省の省都で中國内陸部の要所であり、青蔵高原の東の端にあたり、標高は2200メートル以上の場所である。歴史的にも前漢の時代からさまざまな文化が交じり合う交易地であった。

翌朝はまず市街地にあるイスラムのモスクに向かった。西寧には漢族、チベット族、モンゴル族の他にイスラム教を信仰する回族と

呼ばれる小数民族がいて、彼らは白いつばのない帽子をかぶっている。

車を降りて見上げるとエメラルドカラーの屋根をもつみごとなモスクとミナレット(尖塔)が視界に入る。もっとも、<sup>とうかんせいしんじ</sup>イスラム寺院といつてもその名称は東閣清真寺という漢字名である。

モスクの一階部分を通り過ぎると、鐘楼があり、その奥に本殿が見えてくる。本殿はイスラム的な建物ではなく瓦屋根の仏教若しくは道教の寺院風である。元々回族はアラブ・ペルシア系の民族だったようだが、漢族との結婚を重ね、顔かたちだけでは漢族と見分けるのは難しい。本堂の脇の建物に入ると教室らしき部屋があり、たくさんの机が並び、その上には本が積み重ねられている。よく見るとコーランの中国語訳である。彼らの礼拝の様子を直に見ることはできなかったが、我々日本人とも同じような顔かたちをした人たちが、メッカに向かって一日五回祈っている姿を想像すると少し不思議な感じがする。



東閣清真寺の鐘楼と本殿

回族は少数民族といつても中国では900万人ほどいるという。漢族の文化に融合しつつも、彼ら独自の文化はしっかりと守っているようだ。

近辺にキリスト教会を見つけることはできなかったが、中国は共産党支配体制にあるものの、聞くところによると中国のキリスト教徒の人口は1億3,000万人以上だともいわれる。そして、その大多数は政府非公認の地下

教会の人たちだという。現実主義的といわれる中国人だが結構一神教的な側面も持っているのかもしれない。

## 2.3 チベット人と進化論

車で西寧の市街地を少し離れ、チベット医薬博物館に着く。博物館の入口には大きなマンダラが展示されている。マンダラはサンスクリット語で円を意味し、仏の悟りの世界を視覚的に表現したものである。日本の真言密教でも法具として用いられるが、チベット仏教にはなくてはならないものである。いよいよチベット文化圏の入口に来たということを感じる。

この博物館の見ものは全長618メートルの超横長タンカである。タンカとは仏像など仏教的なモチーフを描いた絵画のことであり、その中にはマンダラの模様も含まれる。このタンカというのは、縦幅は人の背丈ほどの絵であるが、仏像や高僧の姿など一枚一枚の絵を横につなぎ合わせたもので、その展示室は蛇行しつつ、延々と続いている。全体としてはチベットの歴史を絵巻物にしたものである。元々チベット族は、一匹の雄猿が羅刹女(仏教でいう悪魔の女)と結ばれて生まれた6匹の猿から始まり、彼らがチベットの6部族の祖になったとされる。タンカの最初の方には、チベットの黎明期を図示した数枚の絵があり、猿の体毛が次第に薄くなって人間の姿に変わっていく過程が見事に描かれているのである。このような伝承は1,000年ほど前からあるそうで、ダーウィンが進化論を発表するよりはるか以前のことである。古来より今までチベット人は鳥葬を行ってきたことから、人体についての知識はごく自然に培われていったのかもしれない。仏教文化とともにチベット文化圏では独自の医学が発達したそうで、博物館には薬草の処方についての図版や昔の外科手術の道具も展示されていた。

## 2.4 タール寺の香り

お昼はまた西寧の市街地に戻り、水餃子を食べる。水餃子の専門店ということで、見かけはすべて同じ餃子だが、中の具は豚肉以外にも牛肉、マトン、魚介類、数種の野菜を使ってかなりバリエーションがある。そして、お茶ではなく、餃子の皮の煮汁である蕎麦湯ならぬ餃子湯なるものができた。ホテルのバイキングでは味わえない土地の味である。

食事の後に西寧市街地から車で一時間弱ほどかけてタール寺に着く。タール寺はチベット仏教最大の宗派であるゲルク派の寺院である。ダライ・ラマもゲルク派に属しており、現在のダライ・ラマ14世の生家は西寧の郊外にあるそうだ。タール寺の建物は瓦屋根で中国風にも見えるが、チベット僧の僧服と同様にチベットカラーとも言うべき落ち着いた赤が基調だ。かつては4,000人以上の僧侶がいたが、今は500人ほどだそうだ。観光地化されてはいるもののここはもうすでにチベット文化圏なのだ。丘の斜面にたくさんの仏殿、僧院が並び、蠟燭を灯した堂内には濃厚な香りが漂っている。ヤクのバターを油にしていること。寺の南はずれにはバターを素材にした仏像や花などの彫刻が展示している酥油花館という建物もあった。日本の仏教寺院とは異質な香りである。

## 2.5 西藏高原を走る

夕方まで西寧周辺を観光した後に西寧駅に着き、夜9時5分発の青蔵鉄道を待つ。西寧とチベットのラサの間には世界の屋根とも呼ばれる広大な青蔵高原が広がるが、2006年に開通した青蔵鉄道でラサまで丸一日で行くことができるようになり、駅構内は混雑し、大変な熱気だ。大陸らしく30分ほど遅れたものの列車が到着したので、改札を通るため列に並ぶ。空港でもそうだったが、後ろから押してくるのは中国では普通のことらしい。夕暮れの中いよいよ青蔵鉄道に乗り込みラサに向かって出發した。

寝台は三段ベッドの硬座、昔の日本でいえば二等寝台だ。幸いなことに下段のベッドに寝ることができたが、二段目、三段目では頭がつかえてしまう。ベッドの幅も狭い。一等寝台である軟座の車両ものぞいてみたがそれほどは変わらない。西洋人はあまり乗っていないが、これでは彼らには窮屈だろう。彼らは主にカトマンズ経由の飛行機でラサに入るらしい。

慣れない寝台車ということであまり深い眠りにはつけなかったが、翌朝6時半に目が覚める。そして、7時過ぎに青蔵高原の日の出が始まった。少し雲がかかっているものの大陸の広大な地平線から昇る朝日は感慨深い。

その後すぐに乗り換える駅であるゴルムドに着き、紅白の車両からグリーンにイエローラインの車両に乗り換える。西寧からラサまでの約半分のところまで来ており、すでに標高は2,828メートルである。車両には給湯器があるので中国人の多くはカップラーメンを食べてぎやかである。私は同行の2人の日本人とガイドさんとともに食堂車に行き、列車の左右の展望を楽しむ。雪をうっすらとかぶったなだらかな崑崙山脈の山並みが続く。暫くすると雪は消え、シナイ山を連想させるような岩山が見えてくる。そして、河の流れを横切る。長江の源流らしい。青蔵高原は、中国のみならず東南アジア・南アジア・中央アジアの多くの大河川の分水嶺・水源地である。日本では絶対に見れない風景が眼前で次々に様相を変えて現れる。

平原の道を規則正しく等間隔で徐行する十台ほどのトラックが見える。ガイドさんに聞くと軍隊だという。青蔵高原には核燃料の処理施設もあるらしい。チベット自治区が置かれている政治的な背景が頭をよぎる。

この鉄道旅行の一つのお目当ては標高5,072メートルのタングラ峠を通過することだ。そのような高所を通る鉄道というのは世界に類例がない。5,000メートルを越す峠ということで箱根登山鉄道のようにスイッチバック

しながらコトコトと斜面を登っていくものなのだと想像していたが、お昼過ぎに真っ平らな平原にあるタングラ駅（標高 5,068 メートル）をアップという間に通過してしまった。駅を見逃してしまった日本人乗客もいて悔しがっている。いよいよチベット自治区である。チベットの女性歌手の抜けるような高音で青蔵高原の歌が流れる。



タングラ駅付近

夕方、パンダ博士なる高齢の日本人が他の車両からやってきてパンダの折り紙を伝授された。折り方はその人自身が考案したものらしいが、かなり複雑である。折り方を教わった後にまた折り紙を広げてみて、順番を忘れないようにデジカメで何枚か撮影しつつ熱中しているとどうも頭が痛くなってきた。高山病の症状である。標高 5,000 メートル地点の酸素濃度は平地のほぼ 50 パーセントになるらしい。もっとも、鉄道の中は 80 パーセントに調整されている（怪しいという話もあるが）ということなので、大丈夫だと思っていたのだが…、結構辛い。1 時間ほど我慢しているとナクチュ駅（標高 4,513 メートル）に着く。10 分ほど停車するということなので外に出てみる。どんなものかと不安もあったが、体を動かして血行が良くなったのか、かえって楽になった。

夜9時半予定どおりにラサに到着。女性のガイドさんが出迎え、肩にチベット語でカタと呼ばれる白くて長いスカーフをかけてくれた。歓迎のしるしだ。ホテルに行く途中に、

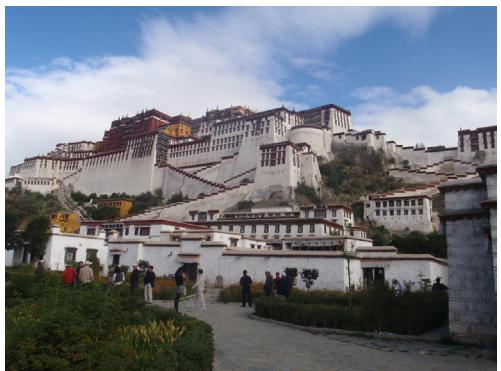
暗闇の中にライトアップされたポタラ宮の前で車を降りて、写真撮影。垂直のベルサイユともいわれるその威容に感動する。本当にラサに来たのだ。チベット文化の中心地に来たのだ。

### 3. チベット仏教の心を求めて

#### 3.1 天空のポタラ宮

翌朝、ホテルから車で改めてポタラ宮に向かう。近年、ラサ市内の交通量は激増し、先の西寧のようなにぎわった中国の町の雰囲気だ。青蔵鉄道が開通してから、漢族の流入が加速し、それとともに欧米の文化も入ってきている。物価はこの 3,4 年で倍になったという。かつての秘境の雰囲気はかなり薄らいでしまったようだ。ラサは大きく変わりつつある。

ラサの標高は 3,600 メートルほどでは富士山の頂上ほどの高さということで、空は青く、雲は低い。その小高い山の上に建てられたポタラ宮の最上階を目指して階段を上る。その横を五体投地でやはり最上階を目指す何人かのチベット人がいる。ジーパンをはいた若者も多い。五体投地は、チベットでは子供の頃に親から教わるものらしい。信仰は体で覚えるものという面もあるだろう。チベット仏教の伝統はまだ生きている。ポタラ宮は巨大な要塞のようにも見えるが、これから伝統文化と近代化のせめぎあいはさらに激しくなるのだろうか。



ポタラ宮

ポタラ宮の外観は紅白の色で、赤宮は宗教的な目的のためのスペースであり、白宮では政治が行われるという。全体的に石と泥で作られているが、ところどころ紅い壁のところには、ペーマーという名前の細い高山植物が使われており、切りそろえた断面が紅く塗られている。通気性がよくなるらしい。日本の萱葺き屋根が連想されてなにかホッとする。

ポタラ宮の最上部では、亡命中のダライ・ラマ14世の使っていた部屋を見学する。また、歴代のダライ・ラマのお墓である靈塔やソンツェン・ガンポが修行したという洞窟も残されている。

ソンツェン・ガンポは、6、7世紀に首都をラサに移し古代チベット王国である吐蕃とほんを建国した人であり、仏教に帰依し、道德律を制定し、冠位十二階を制定するなど、やはり同時期に冠位十二階を作った日本の聖徳太子に比せられる人物である。

そうするとその後のチベットと日本の仏教の変遷を比較するのも意味がありそうだ。

8世紀には密教行者で超能力をもっていたとされるグル・リンポチエがインドから招かれる。密教といえば、日本では真言宗のことであり、その開祖は8、9世紀最澄とともに平安仏教の立役者になった空海である。空海もさまざまな伝説をもつ人である。

14、15世紀には戒律を重んじるゲルク派の開祖であるツォンカバが現れ、チベット仏教の綱紀の肅正をはかる。現在ダライ・ラマを奉じるゲルク派は最大の勢力である。日本では比叡山の伝統仏教に対抗した鎌倉新仏教の開祖たちが13世紀頃に現れ、仏教思想が一般民衆に浸透していく。

17世紀にダライ・ラマ5世によってポタラ宮が作られ、それ以降の歴代ダライ・ラマは元首としてチベット全体に対する政治的な実権も握る。ヨーロッパ人のキリスト教宣教の試みも失敗に終わり、19世紀のはじめには鎖国体制をとる。19世紀後半にイギリス軍の攻撃を受けるまでは磐石の支配体制が続

くのである。わが国では17世紀初頭に徳川家康によって江戸に幕府が作られる。統治体制の一環としてキリスト教に対する禁教令が発布され檀家制度が定められる。幕府による鎖国体制は19世紀にペリーが来航するまで続いた。

仏教思想に基づいた建国、密教の伝統、宗教改革、鎖国…。大雑把な比較ではあるものの、そのように比較すると何か両国の精神風土の共通点が見えてくるようにも思える。

そして、明治時代には河口慧海、かわぐちえかい 多田等觀らが単身で艱難辛苦を乗り越えてまだ鎖国体制であったチベットにたどり着く。それぞれの歴史的変遷を辿った日本仏教とチベット仏教の接点が生じるのである。

ポタラ宮を観た後は、日本人学僧のゆかりの寺であるセラ寺に向かった。

### 3.2 日本人ゆかりのセラ寺

セラ寺(色拉寺)のあるラサ盆地の南側の山に車が近づくとその斜面に白い仏塔らしきものが見えてくる。鳥葬の場所である。ラサ近郊にはもう一箇所鳥葬の場所があり、いずれも写真撮影は厳禁とのこと。チベットでは僧侶は火葬で葬られるが、一般人は今でも鳥葬が普通だという。死体をそのままの姿で放置してハゲワシに食べさせるのかと思っていたが、ガイドさんの説明では、死体はバラバラに切断するという。そして、肉を最初に出してしまうとハゲワシはそれで満腹してしまうので、まず骨を粉にして血液と大麦粉で練り固めたダンゴを食べさせて、それから肉を出すのだという。死体の切断を執り行う人に1,000元、葬儀を行う僧侶には数百元ぐらいの謝礼で済むという。1元が15円だから2万円程度ということになる。都心部では300万かかるといわれる日本の葬儀事情からは考えられない金額である。

車を降りて緩やかな参道を徒歩で上がってくとセラ寺の本堂が見えてくる。法輪のマークの両側に鹿のような動物が描かれてい

るが、これは鹿ではなくスルという名の動物で今はもう絶滅しているとのこと。

いくつかの学堂を見学した後に中庭に出るとこれからここで教理問答が始まると。すでに何人かの僧侶が来ていたが、5分、10分待っていると50名以上になる。若い僧侶が多く和気藹々とした雰囲気である。そして、僧侶たちがパンパンと手を打つ音が響き始めた。2人一組になって答える方は坐り、質問する側は仏教の教理について質問を投げかけると「さあどうだ!」とばかり手を打ち鳴らし足で地面を叩き詰め寄る。観光客が取り巻く中、さらにあちこちでパンパンという音が聞こえてくる。おもしろい風景だ。一日おきに質問者と回答者が代わって、日曜日以外は夕方3時から6時まで休憩なしで続けるという。セラ寺は600年の歴史をもつゲルク派のお寺で厳格な修行をするようだが、学僧たちの顔は理知的で生き生きとしている。



セラ寺の教理問答

明治初期の河口慧海の著作にも日本の仏教にはないこの問答のやり方について詳細に書かれている。慧海は禪宗の一派である黄檗宗の僧侶で自ら寺をもっていたが、漢訳の經典に飽きたらず、サンスクリット語の原典により近いチベット語の經典を求めてチベット行きを決心する。慧海によれば、チベットのあるヒマラヤ山脈周辺は、仏教が興隆する場所ということのみならず、人類の発祥の地でもあり、わが国には「雪山国民」つまりチベット人が応神天皇の御世に移住してきたとい

う。日本において「雪山國チベット」の研究は今後不可欠のものとなるだろうと慧海は考えたのである。そのような話は、当時の東亜共栄圏の思想が影響しているのかもしれないが、確かに私の目の前で仏道に励む学僧たちの姿は、我々日本人の靈性に通底する民族であることが感じられた。

慧海は周囲の猛反対や誹謗を物ともせず自らの寺を投げ打ち、1897年に単身神戸より出航し、パウロのような艱難辛苦を経て、1901年ついにラサに到達する。当時チベットは鎖国していたため慧海は自分が日本人であることを隠していたが、長旅で日焼けし汚れたその顔はそのままチベット人として通つたらしい。そして、結局のところ中国人ということでセラ大学への入学が許可されるのである。僧侶の数は現在では1000人ほどになっているが、慧海がいた頃は1万人もいたようで、問答の様子も今以上の迫力に満ちたものであったろう。慧海は2年ほどラサに滞在し、ダライ・ラマにも謁見している。旅行記を書いた慧海ほど有名ではないが、多田等觀は10年もセラ寺で修行したという。セラ寺はまさに日本人ゆかりの寺である。

### 3.3 ラサの発祥地ジョカン寺

夕方ホテルに戻り少し休憩を取ってから目と鼻の先のジョカン寺(大昭寺)に徒歩で向かう。ジョカン寺はセラ寺、ガムデン寺とともにラサの三大寺院であるが、ラサの中心部にあり最も聖なる寺院とされる。近辺にはバルコル(八廓街)と呼ばれる環状のバザールがあり大賑わいだ。東京でいえば浅草寺界隈といったところだろうか。先に触れたソンツェン・ガンポの妃であり、唐から嫁いできた文成公主の占いによって定められたこの場所にジョカン寺が建てられ、そのことにより盆地全体が神の土地・ラサ(「ラ」は神、「サ」は土地)と呼ばれるようになったらしい。本堂の中は、本尊である釈迦牟尼仏を中心にして周囲に多くの仏像が安置されている。どこの寺

院でもそうであるが、チベットの仏教徒は本尊を中心にして必ず右回りに巡回しながら歩く慣わしがある。堂内には蠟燭の煙が立ち込めているものの、西寧の塔爾寺ほどの強い匂いではない。ヤクではなく植物性のバターだという。それにしても仏像の表情や形状には違和感がある。元々の釈尊の教えは、カースト制の否定、偶像礼拝の否定など従来のヒンズー教の教えと一線を画したものであったが、次第にヒンズー教の要素が加わっていくなかで成立したのが密教である。先にチベットはグル・リンポチエが、日本では空海がほぼ同時期に密教を創始したということを書いたが、その内容はかなり異なっている。日本の真言密教は、7世紀以前のインドの中后期密教を中国系由で取り入れたものであるが、チベットの密教は、さらに時代が進んでかなりエロチックなヒンズー的要素が強まつた8世紀以降のインド後期密教を直接受け継いだものであり、どぎつい仏像が多い。

インドにルーツをもつ仏教は広まった地域ごとにそれぞれ独自の多様な発展を遂げていく。日本の諸宗派だけをとってもそれぞれ違った仏典を使い教義は全くの別物である。仏教とは何かという基本的な問い合わせはない。旧約聖書にルーツをもつキリスト教・ユダヤ教・イスラム教はそれぞれ別個の宗教という位置付けであることはいうまでもない。三者の間には大きな隔たりがあるわけであるが、日本の仏教とチベットの仏教の間にも中東の宗教同士の隔たりと同等のものがあるという見方もできるのではないか。先のセラ寺での印象とはまた相反する思いにもなってくる。

寺院全体を見終わった頃に急に落雷の音をして激しい雨となる。売店のテントの中でしばらく時間を過ごす。ガイドさんの話によると、チベット人はこのような自然現象が起きると、誰かが悪いことをしたからだというふうに結び付けてとらえるという。チベットには仏教以外に土着の宗教であるボン教の寺院

もあり、日本の神道のようにシャーマニズム的な信仰も強く残っているようだ。

### 3.4 デブン寺のショトン祭

ラサでの二日目は、デブン寺(哲蚌寺)のショトン祭の見学である。チベット最大のお祭りであり、縦42メートル、横34メートルの大タンカが開帳され、それを見るために地方からも巡礼者が押しかけ、10万人以上の人がらサに集まるというチベットの一大イベントだ。その前後多くの会社は一週間ほど休みになるという。大変な混雑が予想されるために他の日本人ツアーグループとともに朝6時暗闇の中をバスでホテルを出発し、ひとまずデブン寺の麓の休憩所に着く。そして、薄明の7時半ごろに山の斜面にある大タンカの開帳場所を目指して登る。

すでに岩肌沿いにかなりの人たちが集まっている。9時頃ロール上に丸められていたタンカが下の方から広げられていき、仏の顔が現れると歓声が沸きあがる。そして、人々はやはりそのタンカを右回り、つまり、タンカの左側の結構急な斜面を最上部を目指して上っていく。老人や赤ん坊を背負った母親もいる。手すりも何もなくかなり危険な感じがする。毎年の行事ではあるが、チベット人にとっては事故死をも辞さない一つの通過儀礼のようなものなのであろうか。輪廻転生を信じる彼らにとって、死に対する感覚は我々とはまた違うものなのかもしれない。



ショトン祭の大タンカ

開帳されている大タンカは1990年に作られたものだそうでまだ新しい。文化大革命の時に以前のタンカは処分されてしまったそうだ。文化大革命、そしてそれに先駆けた対中独立運動であるチベット動乱により、多くのチベット人の血が流され、大半の仏教寺院が破壊されたという。しかしながら、彼らの生活に深く根ざした信仰心は絶やされることはなかった。大タンカを中心にして右回りする巡礼者たち、それ自体がダイナミックで巨大なマンダラである。

### 3.5 チベットのマンダラ

先にも触れたが、マンダラはサンスクリット語で円を意味し、仮の悟りの世界を視覚的に表現したものである。精神科医のカール・グスタフ・ユングはこのマンダラに着目した西洋人である。ユングは師匠のフロイトとの決別の後に、心を病み、円形の図形を描くことで心の癒しを体験した。そして、自らが描くその図形が思いがけず東洋のマンダラに酷似していることに気が付き驚く。そして、個人の心の深層に時代や民族を超えた人類普遍の世界があるのではないかと考え、それを集合的無意識と名づけて彼独自の臨床理論を発展させていく。チベット仏教では、儀式のために砂を使って複数の僧侶が何日間もかかって一枚のマンダラを作成する。ユングは東洋各地のマンダラの中でも特にそのチベットの砂曼陀羅を最も美しいものと評価した。ユング派から生まれた箱庭療法は、わが国でもポピュラーな心理療法であり、クライアントが砂箱の中に人形や動植物のミニチュアなどを使って自由に小世界を作るものであるが、その中に円形のマンダラ模様ができることがある。わが国のユング派の臨床心理家の草分けである河合隼雄氏はそれがクライアントの回復の指標であるととらえ、重視している。

また、以前NHKでチベットの「死者の書」というものが紹介され、チベット人がもつ輪廻転生の死生觀が日本でも話題を呼んだが、

1927年に「死者の書」が英訳された時にはユング自身がその前書きを書いている。ユングにとってチベット仏教は死後の世界についても大きな示唆を与えてくれるものだったのである。

ショトン祭を見た夕方、昨日は急な雷雨で行くことができなかつたジョカン寺近辺のバルコルに行きお土産を買う。是非一つ手書きのマンダラがほしいと思い、ガイドさんに専門店に連れて行ってもらう。儀式で使う仏教のマンダラは多数の仏が描かれたもので経典に基づき詳細な描き方の規定があるわけだが、広い意味では丸や四角をモチーフにして描かれた円形のデザインはすべてマンダラである。私はクリスチャンなので仮の姿の入らないもので、著名なマンダラ画家の印のあるマンダラを購入した。



マンダラ

## 4. さらなる邂逅

### 4.1 水葬の河

四泊したラサを後にして車で南西の古都ギャンツェに向かう。ラサ近郊には拉萨河という河が流れている。その拉萨河に沿って大麦の収穫が終わった畑とチベット様式の民家が続く。ほとんどすべてが左右対称の二階建ての作りで、白地に赤、黒、黄の色合いで、わゆるチベタン様式の建物である。白はやさしさ、赤は智慧、黒は守りや堅固さ、黄は高貴さを表す。最近は政府から援助金が出るようで少し新しい造りのものもあるが基本的な

形はみな同じであり、日本の家のようにまちまちではない。民族衣装は色鮮やかなものであるもののチベット人の普段着は質素で黒っぽい感じである。あまり個性を出さない文化のようである。

ラサ河にかかった大きな橋を渡り対岸の道に出たところで車が止まる。降りて川岸を見ると木の枝にタルチョと呼ばれる五色の旗やカタがかかっている。ラサ河はヤルルン河の支流とはいえかなり大きな河であり、水が渦を巻いている。この場所は水葬を行う場所だという。



水葬の場所

鳥葬については先に触れたとおりでチベットでもっとも一般的な葬儀であるが、水葬はさらにお金がない人々が行うという。深夜3時過ぎに遺族が川べりに来て遺体を切断そのまま河に流す。経文を読んでもらう僧侶への謝礼は100元程度でいいという。遺体は河の中の魚の餌になるわけで、水葬は魚葬ともいう。このあたりには魚はほとんど一種類しかいないそうで、それは「ラサの魚」と呼ばれている。じかに見ることはできなかつたが、4、50センチになるらしい。「ラサの魚」は人肉を食す魚であり、さらにまた「ラサの魚」の前世は人間だったかもしれないと考えるチベット人はこの「ラサの魚」を食べない。もちろん釣りなどしている人もいない。私は釣りが好きなので、旅行前に地図を見てラサ近くに河があるので釣竿を持ってこようかとも考えたが、全く不謹慎な考えだった。

ラサ付近の山々は低木が部分的に生える程度で地肌がそのまま見え、森林と呼べるものはない。森林に囲まれた日本とは明らかな風土の違いというものがある。そのような火葬が難しい現実的な理由もあるのだろうが、チベット仏教では、人間は死んだら魂はある世の上ってしまい、残された肉体は単なる抜け殻であると考える。どうせ要らないものなら他の生き物に役立てようということになるらしい。だから、遺体の処理は鳥葬や水葬といったやり方でいいということなのだろう。

#### 4.2 ヤムドオク湖のヘブンリーブルー

ラサ河を離れ、車はカンパラ峠（標高4,750メートル）を目指して山道を上がっていく。山の斜面にはヤクがいて草を食んでいる。峠に達するとはるか眼下に細長いヤムドオク湖が現れる。そして、峠を越えて坂を降下し湖に次第に近づくにつれて、その湖水の色がすばらしいブルーであることに気がついた。ヤムドオク湖とはトルコ石の湖という意味である。その名のとおり緑がかった色だらうと想像していたが…。確かに光の関係でそう見えるところもあるものの、全体的には青である。日本のダム湖は大抵白っぽい緑色をしている。このような透明感のある見事なブルーの湖は今まで見たことがない。ヤムドオク湖はガイドブックにもそれほどは取り上げられておらず、道の途中について見る程度だらうということであまり期待していなかった。ただその付近にもしかしたらブルーポピーの花が咲いているかもしれないとは思っていたが…。あいにくブルーポピーの花は7月ぐらいでもうすでに終わっているとのこと。予想外の湖の美しさに同行したTさんも少し興奮気味にカメラのシャッターを押している。Tさんは世界中の風景を求めて旅行している人で、「ニュージーランドのクイーンズタウンのように開発されてほしくない」と言う。この湖の色は4,000メートルの高地にあるためなのだろうか。今は雨季で雲が多少かかる

ているが、かえってその白い雲が水面に映えて神秘的である。私にとってその色は天国の青、ヘブンリーブルーとまでいえるものであった。ガイドさんに聞くとチベットにはナムツォン湖というさらに美しい湖があるという。ただ、今回はあまり期待していなかったからこそ大きな感動があったのだと思う。



ヤムドオク湖

細長いヤムドオク湖の岸辺の風景を堪能しつつ対岸の方までぐるりと回る。写真を撮るために湖畔で車を降りると牛の乳搾りをしている老婆が笑顔で迎えてくれる。日本とは違うゆるやかな時間が流れているような気がした。

#### 4.3 大氷河のパノラマ

ヤムドオク湖を過ぎてナンカルツェという小さな町でヤクの肉の入ったチベタンカレーを食べる。ヤクの肉はチベットでは最高のご馳走だ。ご飯は正直なところパサパサしてあまりおいしいとはいえない。高地では気圧の関係で日本人好みのように炊けないのだろう。ヤクの肉のほかはジャガイモが入っているだけである。チベットはもともと食生活は質素であり、ガイドさんが子供だった20年ほど前は、野菜といえば白菜と大根とジャガイモぐらいだったという。漢族が入ってきてビニールハウス栽培を始めてから食生活は豊かになったようだ。元々チベット族は米よりもむしろ大麦が主食だ。彼らは大麦粉に少し砂糖を混ぜ、バター茶でこねて団子状にした

ものを美味しそうに食べている。

昼食をすませて車に乗るとかなり高い雪山がいくつか見えてきた。そして、カロラ峰（標高5,045メートル）を少し過ぎたところには7,000メートル級のノジン・カンツアンという雪山から水が流れ落ちてできた大氷河を見ることができた。ヤムドオク湖に続いてこれもまたサプライズだった。外に出て写真を撮るが、広大な絶景は私のデジカメには納まりきらない。ラサだけのツアーでもいいかなと思っていたがここまで来て本当に良かった。思いがけずヤムドオク湖のヘブンリーブルー、そして大氷河のパノラマに出会うことができたのだから。



大氷河

宗教的な体験というのは、自分でそれを選ぶとか掴み取るとかというものではなく、向こうの世界からやって来るもの、与えられるものだと思う。そして、それは必ずしも不可思議な神秘体験ということばかりではなく、日々の生活体験の中でも見つけられるものではないだろうか。今回の旅行では思いがけなくやってきた祝福のイメージを潜在意識の中に植えつけることができたような気がした。

#### 4.4 チベットの原風景

古都ギャンツェのホテルでは漢族の役人を歓迎する祝会が開かれており、チベットの民族舞踊を観ることができた。このあたりにも中国の文化は入ってきているようだが、ラサ以上にチベットの匂いがする。チューデ寺(白

居寺)には八層の仏塔(チヨルテン)があり、最上階は宇宙の中心を表す。上から見ると円と正方形をモチーフにした建物であり、それ自体が巨大な立体マンダラというわけだ。また、本堂には歴代のパンчен・ラマの遺影が飾られている。パンчен・ラマはダライ・ラマに次ぐ存在とされるが、このあたりではダライ・ラマ以上に崇拜されているらしい。ラサとは宗教文化も多少違うようだ。

さらに、車での移動の時間、道の途中でふと止まり、大麦畑の横にある水車を使った小さな製粉所に入る。花が咲き、蝶が舞う小川のどかな風景を見ながら、御主人が振舞ってくれた大麦のどぶろくを少し飲んだ。

チベット第二の都市シガツェでも一泊する。タシルンボ寺(扎什倫布寺)は大変美しい寺院であった。現在のパンчен・ラマは北京にいるが、年に2週間ほどこの寺に滞在するという。街中のマーケットには羊が丸ごとつるされ、ヤクの内臓が干して売られているのが印象に残った。あちこちで羊や山羊が放牧されているが、半農半牧という点ではイスラエルとも似ているわけだ。

いよいよシガツェからラサ空港に向かう。ラサ空港までの3時間ほどの間にもさまざまなチベットの原風景に出会った。

道の両側のあちこちにピンクの絨毯のように見える花畠がある。そばの花だという。黄色の菜の花とのコントラストが美しい。

道路沿いにスイカ売りのビーチパラソルが出ていたのでスイカを一つ買う。ビーチパラソルの下の老夫婦の穏やかな笑顔が印象に残った。

また、思いがけず普通の民家の前で停車する。運転手さんの親戚の家だという。家の前で家族総出で大麦を洗っている。純真な目をした二人の娘さんが家の中も案内してくれた。

さらに車で行くと、ヤクの革で作った四角い渡し舟が横切る大河があった。このような素朴な風景があったのか。何か懐かしさを感じる。

じる。



ヤク革の渡し舟

それから、土砂崩れがあったらしくテント暮らしをしている村。これは大変だ…。

最後までガイドブックには取り上げられていないチベット人の日々の営みに触ることができた。そして、ラサ空港から帰途についた。

## 5. あとがき

ラサ、そして、ギャンツェ、シガツェのホテルでは、朝食の前に必ず脈拍と体内の酸素濃度を測ってもらったが、その数値が少しずつ安定するようになり、現地の環境に体が順応していくのが分かった。

私たちの肉体のみならず心もまた固定的なものではなく周囲の環境に応じて変容していくものである。青蔵鉄道の中で聞いた「青蔵高原」の歌がすばらしかったのであるが、幸運にもラサなどを案内してくれた運転手さんからそのCDが頂くことができた。帰国後そのCDを聴いたり、チベット関連の映画をDVDで鑑賞したりして、しばらくはチベット文化に浸りきった生活であった。

そのようなほとぼりはひとまず冷めたものの、チベットで観た様々な光景を思い出し、また、その写真を觀つつ、何か不思議な安堵感が増しているのを感じている。その安堵感はどこから来るものなのであろうか。

ユングは人類共通の心ということで集合的

無意識の概念を提起しているが、私の心の安堵感は、何か私の心の深層に本来的に内在しているものに基づいているような気がする。本稿ではチベット仏教の文化に対する親しみの感情ということだけではなく違和感といったことにも触れた。しかしながら、いずれにしてもそれらはまだまだ表面的な心情のゆらぎのようなものに思える。民族性や文化の共通点と相違点といった二律背反の世界の背後にそれらすべてを包括する一元的な世界が垣間見える。セラ寺の学僧の生き生きとした姿、マンダラのイメージ、ヤムドオク湖の湖水の色が、私の内面の深いところに元々在ったものだというように思えてくる。

#### 主要参考文献・DVD

- ・旅行人編集部「チベット」旅行人 2006
- ・河口慧海「チベット旅行記抄」中央公論新社 2004
- ・フランソワーズ・ポマレ「チベット」創元社 2003
- ・ヤッフェ編河合隼雄・藤繩昭・出井淑子訳「ユング自伝—思い出・夢・思想—」(1)  
(2)みすず書房 1972
- ・河合隼雄編「箱庭療法入門」誠信書房 1995
- ・川崎信定訳「原典訳チベットの死者の書」筑摩書房 1989
- ・DVD「NHKスペシャル・チベット死者の書」(1993年9月放映)ジブリ学術ライブ
- ラリー

## 第11回アジア・バプテスト女性連合大会参加報告

原 真由美

Report of the 11th Assembly of the Asian Baptist Women's Union

Mayumi Hara

### はじめに

2008年末のインドは、ムンバイで同時多発テロ事件やオリッサ州での教会襲撃事件でクリスチャンが殺傷されるという不穏な空気の中にあった。この情勢のなか、コルカタで第11回アジア・バプテスト女性連合大会が行われた。筆者が所属するバプテスト同盟女性会でもこの大会への参加をめぐって議論を重ね参加か不参加か大いにもめていた。インドの大会本部は、開催を決行するとしていたが、慎重を期して外務省へ情報を問い合わせると、大会が開催されるコルカタもムンバイと同様に問題のある地域ではあるが渡航禁止の処置をとっていないという事であった。こういう状況から参加人数は減少して同盟からは6名が参加する事になった。なお、インド地名の呼び方は、英國からの独立後、土地の発音に近い呼び方をするようになり、ボンベイはムンバイ、カルカッタはコルカタと呼んでいる。

### 大会の概要

アジア・バプテスト女性連合（以下「ABWU」と称する。）結成の経緯については拙論<sup>1)</sup>で述べているが、第1回のABWU会長には、日本のバプテストの女性リーダーである日野綾子が選ばれており関係深い国際的な組織の大会であった。今回の大会は結成50年記念大会であり、当初加盟のアジア9カ国とアメリ

カの他、アジア諸国から3カ国、南アフリカ共和国と英國が加わり、参加国は15カ国であった。この大会は5年に一度開かれ、記念のジュビリー大会を第1回の開催地であるコルカタで開催するというものであった。なお、筆者はインドネシア、沖縄大会に次いで3回目の参加であった。

### インドへの渡航

インドへの渡航のためにビザをとり予防注射を受け、成田空港から日本のバプテスト女性連合（日本バプテスト連盟内）の方々とタイ航空バンコク経由で飛び立ち、夕刻インド・ダムダム空港に到着した。日本の3バプテストのひとつ沖縄バプスト連盟女性会の方々とは現地で合流した。

石灰でほこりっぽいダムダム空港をでると夕闇の高い壁の向こうに椰子の木々の影が揺れ、闇夜に目だけが白く光る出迎えの人々が私達を見つめていた。中学生くらいに見える男の子が重いスーツケースをバスに運んでいく。筆者の頭の中では「家に帰らなくていいのだろうか？体を壊さないのだろうか？」と様々な疑問が駆け巡ったが、彼は働いていたのだ。そして交通ルールがあつてないような

### 【註】

1) 拙論「太平洋戦争後の復興期におけるバプテストの婦人達」関東学院大学「キリスト教と文化」第7号 2009年3月

コルカタのほこりっぽい道をバスに揺られホテル到着するとそれだけでヘトヘトになった。私達一行の数名が荷物運びをしていた少年にバスに横取りされないようにとそっとチップを渡したことが忘れられない。

インドは、過去10年間経済的発展を遂げていると言われるが、世界最大の食糧不足の問題も抱えている。人口は、中国に次いで第二位となっており、また、人口制限の政策などをとっていないので中国を上回るのはそう遠くないだろう。カースト制度が根深く残っていることから、教育を受けられる子供はそれだけでも恵まれている。

コルカタは、筆者の義理の祖父が調査で何回か訪れており、その聞いている話からも社会的な構造の変化はあまり大きくはないようと思われた。

コルカタは、インド東部、西ベンガル州の州都で英国が東インド会社の拠点を置いた地であり、インド独立までは英國インド領の首都であった。英國バプテスト伝道団体がウィリアム・ケアリをインドへ宣教師として送ったが、アメリカ・バプテストの宣教師ジャドソンは、インドへの宣教がかなわずミヤンマーへ宣教地を変えざるを得なかった。こういう事からも、バプテストにとってインドは、思い入れの深い地であるとともに悲願の宣教の地と言える。

英國からの独立以降は首都がデリーに移り、マザー・テレサのスラム街奉仕などで知られるようにコルカタはさびれた町という思いを持って訪れたのであるが、歴史のある町でありながら、雑多なエネルギーに満ち溢れているようにも思われた。

### ABWU 大会

ABWU 大会は1月7-9日の3日間，“Receive, Rejoice, Reach-out” のテーマでコルカタ・サイエンス・センターで行われた。大会プログラムは次に掲げるようなものであった。



写真1 大会に向かう参加者一行（左端：筆者）

### <大会プログラム>

Jan. 7

- 9:00 Registration
- 12:30 Lunch
- 16:00 Theme Presentation
- 16:30 Group Photo Session
- 18:30 Dinner
- 19:30 Cultural Night I

Jan. 8

- 9:00 Praise & Worship
- 9:30 Bible Study I
- 10:30 Tea Break
- 11:00 Work shop I
- 12:30 Lunch
- 14:30 Theme Interpretation II
- 15:30 Tea Break
- 16:00 JUBILEEERATION
- 18:30 Dinner
- 19:30 Cultural Night II

Jan. 9

- 9:00 Praise & Workshop
- 9:30 Bible Study II
- 10:30 Tea Break
- 11:00 Work shop II
- 12:30 Lunch
- 14:00 Business Session
- 15:00 Tea Break

15:30 CLOSINGPROGRAM

18:00 INDIAN NIGHT

### 本大会で発表された主な内容。

#### 大会メッセージI

ドロシーセレバノ BWA（世界バプテス  
ト女性連合）会長。

#### 大会メッセージII マーシー・ラオ元 ABWU 会長

聖書研究 I 原 真由美（筆者）

II タナロラ・オー インド

バプテスト副会長、ナガランド  
分科会①働く女性への宣教 ②平和への招き

③HIV, AID 被害者への宣教

④礼拝音楽

⑤子どもと女性への虐待について

⑥工芸

⑦日本のアート



写真2 大会状況



写真3 分科会状況



写真4 迫力の讃美の歌声 (インド)



写真5 大学生の讃美

本大会では、おもに女性へのエンパワーメント、女性や子どもへの虐待への取り組み、ストリートチルドレンへの支援活動、薬物依存からの緊急避難施設への援助活動、食料や貧困の問題の発表があった。マイナスの諸要因の多い中、多くの困難に打ち負かされそうになりながらも女性達が互いに協力し合い取り残される人々がいないよう問題を乗り越えようとしているパワーを感じた。

ほかにも大会中に結成50年のお祝いが行われた。襲撃を受けたオリッサ州からの参加者がろうそくを両手にして踊る古典舞踊、インドの女性連合が支援しているストリート・チルドレンのダンス、インドのジプシーといわれるバンジャラ族はサリーの縁にコインを縫いつけた独特のファッショングでダンスを披露した。ご一緒したアメリカ・バプテストのステイーブンス宣教師によると、このバンジャ

ラ族への宣教はアメリカ・バプテストが力をいれており成果が出ていると話されていた。

この他にも最近インドが併合した高知に住むミゾラム族の鶏をまねた踊りは迫力があり圧倒された。この部族は昔、首狩り族であったという。

### グループ活動

大会終了後、日本バプテスト同盟から参加した私達は、2つのグループに分かれ行動する事にした。現在、日本に帰国し杉並中通教会牧師として働いておられるが、日本バプテスト同盟が初めて医療宣教師としてインドのネクリシニ病院に派遣した長谷川温雄師の夫人絢子さんとステイーブンス宣教師、石塚多美子牧師の3人は、ベンガル・オリッサ・ビハールバプテスト連合のネクリシニ病院を訪問した。現在、ネクリシニ病院は洪水の被害を受け医療機械、発電機、ベッドなどが水につかり閉院寸前であったが、最近では2名のドクターが与えられ一日6名ほどの患者を診るにとどまっている。

もう一つのグループは筆者と国際委員会委員長の河崎さん、元関東学院大学教員の志賀さんの3人で、大会本部が用意したオプショナル・ツアーに参加し、コルカタ市内のマザーハウス、ウィリアム・ケアリ教会及びビクトリア記念館を見学した。

コルカタ市内でもスラム街にあるマザー・テレサが開設したマザーハウスは騒がしい道から一歩路地に入った所で静謐な空気が流れていた。入り口の扉をくぐるとあのマザーの像が中庭で出迎えてくれた。マザーハウスの1階は礼拝堂と展示室があり、南国の花々がたむけられたマザーの大大理石の棺が安置されている。そこへ、ろうそくを手にした人々が静かに祈りを捧げに来ていた。2階はシスター達の居室になっており立ち入り禁止だった。

次に訪れたのはウィリアム・ケアリ教会で現在カナダから来た中国系のチャン・ヤン牧師が赴任している。（写真7）



写真6 マザーハウス



写真7 チャン・ヤン牧師と筆者



写真8 教会入り口に掲げられたメッセージ



写真9 ジャドソンの記念碑



写真10 サーキュラー・ロード・バプテスト教会



写真11 BMS ゲストハウス

写真8でもわかるようにウイリアム・ケアリが英国のバプテストの会合でイザヤ書5章2、3節から引用し「神に大いなる事を期待せよ。神のために大いなる事を企てよ。」と海外宣教について熱く訴えた言葉がインドの地でこの教会の入り口に刻印されている。

また、礼拝堂の壁にアメリカ・バプテスト

宣教師アドニラム・ジャドソンの記念碑が掲げられている。(写真9)

ツアーフinallyに回ったビクトリア記念館は壮大な大理石の建造物で、その門前でインド猿の人よせや、両足首のない若い男性が自転車を改造した車で懸命に物乞いをしていた。その彼にも一行の数名がそっと何かを渡していた。

翌日11日朝、サーキュラー・ロード・バプテスト教会の礼拝に参加した。ウイリアム・ケアリが活動していたサンランポールからバプテスト大学の神学部教授（アメリカの改革派の宣教師）が学生を連れ礼拝に参加していた。筆者も時間があればサンランポールまで足をのばしたかったが、その日の夜に帰国する予定になっていたため実現できなかった。ちなみにサーキュラー・ロード・バプテスト教会（写真10）の裏にはミッション・プレスがあった場所で、教会の右側はBMS（イギリス・バプテスト伝道会）のゲスト・ハウスがあり同盟女性会からの3名はここに滞在していた。（ゲスト・ハウス提供写真11）

### 終わりに

バプテストゆかりの地での50周年の記念大会では、日本においては知らないアジアの女性をめぐる数々の問題提示があった。しかし、力強く発展する社会のかたわらで取り残されそうな人々に対して女性達自身が立ち上がって、自主独立の宣教活動が多く語られたことも確かであった。そこに希望の光があり、また、ABWU立ち上げの時の神の思いと行いが続いている、流れていることを思われた。

次回大会は5年後2014年に韓国ソウルで開催される。11日の夕刻、私達はタイ・バンコク経由で日本へと帰国の途についた。おつかなびっくりの旅であったが帰りの飛行機から見えたベンガル湾に浮かぶ船の明かりがとても美しかった。

## 「バプテスト」研究プロジェクト 2009 年度活動報告

村 椿 真 理

Report of the Baptist Reserch Project , 2009

Makoto Muratsubaki

### 1. はじめに

本プロジェクトは 2004 年度より取り組まれた「バプテスト派の歴史的貢献」研究プロジェクトの継続研究プロジェクトであった。2006 年度、本会はその研究成果を「研究所・叢書」第 1 号として刊行し、第一期の活動を無事終了した。その後同主題の下「バプテストの宣教活動と社会貢献」なる副題を設け、バプテスト派の近代市民社会に果たした特筆すべき役割を掘り起こすというテーマを念頭に、第二期活動を継続して今日に至った。

2007 度より 2 年間の研究期間を設定し、研究スタッフの中間発表会を中心に活動を行ない、4 回の例会を開催、当初 8 本の論文執筆申請があったが、諸事情により執筆完成をみたのは内 4 本であった。2008 年度は出版計画そのものが実現不可能な状況に直面し打開策を模索したが、2009 年度の 5 月以降道が開かれ、関東学院創立 125 周年記念、学術・講演行事専門部会の協賛企画として承認を受け、研究所枠の予算配分を受けることが可能となり、急遽出版編集作業に当った。この企画論文集『バプテストの宣教と社会的貢献』は、本研究所の研究叢書第 2 号として、10 月 10 日、関東学院大学出版会から刊行された。

出版助成を、学術・講演行事専門部会及び研究所から受けての出版であった。本書は

2009 年 10 月 10 日パシフィコ横浜会議センター・メインホールで挙行された創立 125 周年記念式典会場において、出席者 100 名に無料配布もされた。

今年度の編集諸会議は以下に報告するが、3 年を経てこうして最も理想的な形で論文集を刊行できたことは感謝に堪えない。関係各位に対して研究プロジェクトを代表し心から謝意を表するものである。

他方、本プロジェクトは 2007 年度に、もう一つのプロジェクトを立ち上げ活動を継続してきた。即ち「バプテスト教科書刊行プロジェクト」である。バプテスト史またバプテスト神学教育のための日本語による適切な教科書は近年まったく存在しなかったが、この永年の願いに応えるべく本会は「バプテスト史教科書制作準備会」なる会を設置し、2008 年度具体的にリスタートしたものであった。こちらのプロジェクトには現「キリスト教史学会」理事長、出村 彰氏を監修者に迎え、当所の予定通りの 2 年目の活動を順調に行なうことができた。こちらは当初、2010 年 4 月の刊行を予定してきたが、緻密な編集作業の故に出版をあえて延期し、2010 年度末(2011 年 3 月)刊行と予定を変更している。

こちらも関東学院大学出版会からの出版予定であるが、出版会をはじめ関係各位のご理解とお支えを頂いてのことであり、担当執筆者全員奮起して目下編集作業を進めている。

なお2009年度は、計画されてきた関東学院創立125周年の記念事業「バプテスト創設400年祭記念シンポジウム」を10月17日（土）、学内外より32名の参加者を集め有意義に開催した。こちらは本研究所の創立記念行事として正式に承認されたものであり、先の論文集同様に、関東学院創立125周年記念、学術・講演行事専門部会の協賛企画として資金を得ての開催となった。このシンポジウムの詳細報告は所報第8号「特別報告」項に掲載されている。これも特筆すべき今年度の活動報告のひとつであった。そこで以下に両活プロジェクト報告に合わせてそれも報告する。

## 2. 活動報告

### 1) 「バプテスト派の歴史的貢献」その2

#### ◆構成員と研究テーマ

先ず、研究プロジェクトの構成メンバーは以下の11名であった。

代表：所員、村椿真理、所員：影山礼子、  
木村浩二、研究員：佐藤光重、  
客員研究員：松岡正樹、大島良雄、  
川島第二郎、佐々木敏郎、原真由美、  
伊藤 哲、古谷圭一、  
上記メンバーの内より、以下の4人の論文  
が論集に掲載された（以下は刊行された目次順）。

1. アンドリュー・フラーとバプテスト伝道会 —フラー神学の紹介 村椿 真理
2. 寛容なる原理主義者 —ロジャー・ウィリアムズの政教分離思想 佐藤 光重
3. アニー・S・ブザルの教育 影山 礼子
4. 第二次世界大戦後の四谷教会 古谷 圭一

#### ◆今年度、定例会報告

##### 第1回定例会

期日：2009年 4月30日（木）午後5時より

場所：関東学院大学 六浦 キリスト教と文化研究所にて

議事：2009年度活動方針、及び出版計画の件

##### 第2回定例会（研究発表は流会）

期日：2009年6月11日（水）午後5時より

場所：関東学院大学 六浦 キリスト教と文化研究所にて

編集会議、タイトル、表紙デザイン、目次、前書き等について

入稿と校正に関して

##### 第3回例例会

期日：2009年9月11日（木）午後2時より

場所：関東学院大学 六浦 新キリスト教と文化研究所にて

編集会議、表記の統一、緒言読み合わせ、他。

##### 第4回、出版感謝会

期日：2009年11月20日（木）午後6時より5名参加

場所：横浜ホテルキャメロットジャパン  
2F 桃花苑にて

#### ◆2010年度の活動予定

2010年度の活動予定は、年度末の例会を開催し活動基本方針を再度検討する。共同研究を模索し、次の研究書出版に向けてプロジェクト形態のまま次期論文集発信の検討に入る。本バプテスト研究プロジェクトそのものは「バプテスト史教科書」刊行活動中であるからである。次年度は今後の更なる本格的研究について構想し、学外の日本のバプテスト研究者を招いての研究会など、新たな展望を築く年度としたい。

## 2) 「バプテスト教科書制作準備研究会」

過去3年間の準備段階を経て、原稿がようやく出そろうこととなったが、監修者「キリスト教史学会」理事長：出村 彰氏のご指導に基づき、全体の統一をはかる編集作業がさらに必要であることが指摘され、あえて時間をかけて細かい修正につとめることとした。バプテスト派創設400年を迎える2010年4月の刊行を目指して今年度の活動が行なわれたが、最終的な計画協議の末、刊行を2011年3月とし、本年11月に完全原稿入稿と決定した。編集作業は2009年3月より、執筆者による本文読み合わせが開始される。索引などの編集も同時に行なわれる。

### ◆構成員

本学所員、法学部教授：村椿真理、

学外客員研究員、西南女学院大学准教授：

金丸 英子、

同、日本バプテスト神学校：松岡正樹、

同、日本バプテスト連盟：枝光 泉、

同、福岡女学院大学名誉教授：斎藤剛毅、

### ◆「教科書」（目次予定と執筆予定者）

監修言 （出村 彰、筆）

序 歴史を学ぶ、バプテスト史を学ぶ

第1章 前 史

①宗教改革

②宗教改革急進派（アナバプテスト）

◆トピック （1章・松岡正樹、筆）

第2章 バプテスト教会の誕生

①英國国教会とピューリタン分離派

②最初のバプテスト教会（スマイスとヘルウィス）

③ジェネラル・バプテストとパティキュラー・バプテストの発展

◆トピック （2章・斎藤剛毅、筆）

第3章 18世紀のバプテスト教会

①18世紀のバプテスト教会

②停滞と発展・海外伝道の先鞭

③バプテスト同盟の設立

◆トピック （3章・村椿真理、筆）

## 第4章 アメリカのバプテスト教会

①植民地時代から独立戦争

②信仰大覚醒から西部開拓期、教派主義の台頭

◆トピック （4章・金丸英子、筆）

## 第5章 日本のバプテスト教会

①日本伝道のはじまり

②伝道の進展と教派団体の確立

③15年戦争とバプテスト、日本基督教団加盟と敗戦からの出発

◆トピック （5章・枝光 泉、筆）

バプテスト史年表

資料・世界のバプテスト教会

索引

### ◆研究会開催報告

第1回、バプテスト史教科書執筆者会議

日時：2009年8月24日（月）午後1時より

4時まで 出席5名

場所：西南学院大学 神学部

執筆者編集会議：教科書目次、表記統一に関する件（これ迄の協議案の確認）、今後のタイム・テーブル

第2回、バプテスト史教科書執筆者会議

日時：2008年11月25日（水）午後1時より

4時まで 出席6名

場所：関東学院大学 キリスト教と文化研究所 フォーサイト21 7F

議事：1) 教科書編集に関する件、

2) 出版に関する件、3) その他。

監修者をお招きして行なわれた。

### ◆2010年度の活動予定

2010年1月に各執筆者よりの原稿を出村氏に送り、加筆修正などの統一作業に入る。3月初旬に福岡西南学院大学にて、第1回執筆者読み合わせ会を一泊二日で行なう。その後、7月に編集者会議を行ない、本文の完全原稿完成を目指す。3月時点で、索引とりまとめも行なう。11月の入稿に向け、最終準備に入る。発行部数の検討にも入る。7月以

降は必要に応じ、会議を招集し、次年度末の刊行に備える。

### 3) 125周年記念事業企画「シンポジウム」報告

10月17日（土）午後1時半～3時半 32名参加。

公開シンポジウム「バプテストの伝統を持つ教育機関の現代的教育使命

—バプテスト400年と関東学院建学の精神」

#### ◆発題者主旨とシンポジウム概要

パネリスト

本学、法学部教授：村椿真理

西南学院大学准教授：金丸英子

本学、名誉教授：高野 進

司会、本学教授：松田和憲

#### ◆企画責任者 村椿真理 法学部教授

企画のテーマについて

2009年、バプテスト派教会はバプテスト創設400年を迎えるが、欧米諸教会、諸団体において記念式典および学術的記念行事が種々行なわれようとしている。そこで関東学院大学「キリスト教と文化研究所」においても、折しも学院創立125周年にちなみ、この期に本学の伝統であるバプテスト400年を記念する公開シンポジウムを企画し実施したいと考えた。

#### ◆準備委員会開催記録

第1回 2009年3月2日（月）午後2時から4時迄

場所：関東学院大学キリスト教と文化研究所

フォーサイト21、7階

協議 パネラーの初会合。主旨と発題分担。

第2回 2009年9月10日 午後13時から15時迄

場所：関東学院大学キリスト教と文化研究所  
協議 パネラーの発題内容、相互交換とシン

ポジウムの進め方。司会者との協議。

シンポジウム報告は所報特別報告項目に掲載。参照されたい。

### 3. プロジェクト活動全体の総括と展望

今年度も、本プロジェクトは二つの研究会を行ない、活発にバプテスト研究を推進することが出来た。共同研究態勢も少しづつ形成されつつあると評価できよう。こうした活動を継続するなかで、将来、さらに理想的な取り組みも可能になると考えるからである。

日本のバプテスト研究者そのものが少ない中で、本学においてこうした学術的研究の拠点が築かれつつある事に是非注目していただきたい。研究叢書の発行は、刊行に必要な助成金のめどがつかず、今回も難航したが、最終的に道が開かれたことは幸いであった。今後は再度、外部研究資金獲得の挑戦を試みたい。

バプテスト史の刊行にあたっては、日本バプテスト神学校からの助成を予定しているが、教科書として本学「自校史」の学びにおいても有効活用されることが期待されている。また目下、本学のこの研究グループなどが中心となり企画する、日本バプテスト同盟の神学校、日本バプテスト連盟の神学部等との「神学セミナー」などの開催の可能生を探り、さらなる活動の展開計画を検討している。

## 「坂田祐」研究プロジェクト 2009 年度活動報告

代表 帆 荘 猛

Report of the Reserch Project of the Dr.Tasuku SAKATA, 2009

Takeshi HOGARI

本年、2009 年 10 月 6 日で関東学院は創立 125 周年を迎える。学校法人関東学院および学院各校でさまざまなプログラムや行事が開催された。

「坂田祐研究」プロジェクトとしても、坂田祐の日記を中心に学院の歴史について研究し、資料を収集しているので、この 125 周年に合わせて、学院の校訓および建学の精神を検証するため、一連の特別な講演会・研究会を企画・開催した。

まず、第一回として、7 月 25 日（土）、大島良雄氏（元関東学院大学文学部長・宗教主任）を迎えて、「坂田祐と関東学院の教育－校訓〈人になれ奉仕せよ〉を中心に－」とのテーマで、坂田の定めた学院の校訓を中心とし、学んだ。

第二回目は、創立記念日を間近に控えた 9 月 26 日（土）、内村鑑三研究の第一人者である鈴木範久氏を招いて、内村の弟子たちのグループの一つである白雨会での坂田の活動を中心に学んだ。坂田はこの白雨会で、のちに東京大学総長となる南原繁とともに幹事を務め、南原とは終生深い親交を結ぶ。

第三回目は、研究プロジェクトのメンバーでもある小玉敏子氏（搜真学院理事長、元関東学院女子短期大学学長）にお願いして「搜真女学校と坂田祐」というテーマで、搜真女学校（現在は「搜真学院」という名称になっている）の歴史をたどりながら、搜真女学校と坂田祐

の関係について話していただいた。これは創立記念と同じ月、10 月 24 日（土）に開催した。

いずれも恵まれた研究会となった。講演内容の概略については、12 月 1 日発行のキリスト教と文化研究所「ニュースレター No.23」で紹介した。なお、小玉敏子氏の「搜真女学校と坂田祐」の詳細については、本所報の中の特別報告として掲載した。そのほか、大島良雄氏の坂田祐の校訓を中心とした講演は、大学『告知板』10 月号に掲載された。それぞれ参照していただきたい。

上記の特別企画のほかに、定例の研究会で例年のように、坂田創氏の報告を通して、坂田日記の解読・研究を行った。今年度は、1931 年の日記について解読・研究を行った。この年は、3 月に市内キリスト教団体による有吉横浜前市長の送別会が開催され、感謝記念の聖書が贈呈される。4 月には関東学院セツルメントが開館される。9 月には坂田は学院内の舎監宅を出て、庚台の新築自宅に移転する。日記の詳細については、本所報の坂田創氏の研究報告を参照していただきたい。

なお、上記の有吉市長に贈られた記念の聖書は、ご遺族より開港資料館に寄贈されたとのことで、松本洋幸氏（開港資料館研究員）が紹介・報告して下さった。

今年度最後の研究会は 1 月 30 日（土）に開催する予定である。内容は、岸政邦氏による「坂田祐と内村鑑三」、坂田創氏の「坂田

日記研究」である。

このほか、坂田祐関係の資料として、日記と合わせて重要な一連の手帳類が坂田記念館から研究所に移管されたことも、今後研究をすすめる上で大きな一歩となるものと思われる。

# 「国際理解とボランティア」研究プロジェクト 2009 年度活動報告

森 島 牧 人

Report of the International Volunteer Research Project, 2009

Makito Morishima

## 1. 研究会活動

### (1) 2009 年度第 1 回研究会

日時：3 月 30 日（火）18：00～20：00

場所：宣教師館 C 号室

参加者：18 名

[内容]

(a) 研究費援助スポンサーの開拓。

- ・ロータリー・クラブの組織の説明（資料参照）

- ・横須賀北ロータリー・クラブに依頼する件。

(b) 今年度募集大学 125SSA 申請について。

- ・応募学生に山岳少数民族の資料およびこれまでの活動を説明する。

(c) 本プロジェクト研究活動紹介 DVD 制作について

- ・他の研究機関や NPO, NGO など外部にアピールするための DVD 制作。

(d) 本プロジェクトに関するネットワークの構築

- ・PC 用メーリングリストを作成し、連絡や資料の共有を図る

(e) 第 1 回、第 2 回現地研究調査活動計画について。

- ・例年通り開催する。日程は現地との協議を経て決定する。

- ・ボランティアで参加する学部生を募集する。

・支援活動の準備と現地教会組織の調査を主な内容とする。

### (2) 2009 年度第 2 回研究会

日時：5 月 12 日（火）18：30～19：10

場所：宣教師館 C 号室

参加者：19 名

[内容]

(a) 本プロジェクトメンバーおよび協力者のメーリングリスト作成について。

(b) 本プロジェクトのスポンサー（国際ソロプチミスト）への報告活動について。

- ・6 月 18 日（木）横浜ベイシェラトンにて開催される国際ソロプチミスト横浜西例会での 08 年度活動報告への準備について。

(c) 日本 YMCA 開催の「日本、タイ、パートナーシップキャンプ」報告について。

- ・日程：4 月 25 日～26 日、5 月 2 日～5 日。

- ・今回は横浜とタイのパートナーシップ 15 周年記念事業として行われた。

- ・「幸せについて」、「どんな時が平和か」、「パートナーの意味」についての討議。

### (3) 2009 年度第 3 回研究会

日時：6 月 2 日（火）18：30～19：10

場所：宣教師館 C 号室

参加者：22 名

[内容]

(a) メーリングリスト機能の完備報告。

(b) スポンサーへのプレゼンテーションの準備について。

- ・横須賀北ロータリーでのプレゼンテーション。

日程：6月23日（火）11:20～

場所：追浜エルシャンテ。

(c) 第1回現地研究調査活動について。

・サービスラーニング実施の準備だけではなく、研究調査活動にウェイトをおく。

・アニミズム集落構成員から見た改宗者（クリスチャン）についての調査を行う。

・コーディネーションとガイドは従来通り現地教会組織（ACT）に依頼する。

・首都圏大学綾部氏（文化人類学）との共同調査とする。

・現地OMF宣教師のインタビューを行う。

—OMFシンガポール本部での調査活動の準備として、タイ在住日本人OMF宣教師に依頼する。

—この件に関しては日本バプテスト同盟派遣宣教師大里英二氏に依頼する。

#### （4）2009年度第4回研究会

日時：7月7日（火）18:30～21:00

場所：宣教師館C号室

参加者：19名

[内容]

(a) リングプロジェクトについて

・関東学院大学シグマソサエティが日本側オーガナイザーと協議した。

(b) 第1回現地研究調査活動について

・タイ・アカ族における国際サービスラーニングの準備については現地との連絡が順調に行われ、予定通り実施される。

・研究調査に関しては、今回も生活環境

(水)と教育環境（識字教育）に重点を置き、現地バプテスト派教会組織の働きを調査する

・アニミズム集落構成員から見た改宗者（クリスチャン）についての調査は、ミャンマーとの国境近くの奥地集落を選定し、

現在村長ならびに祈祷師に交渉している。

・現地OMF宣教師へのインタビューについては、日本バプテスト同盟派遣宣教師大里英二・エミ夫妻より有澤達郎・たまみ夫妻を紹介され、アポイントの調整を行っている。

(c) タイ・アカ族へのサービスラーニングに関する学生シンポジウムについて

・大学SSAに認証されたグループによる学生シンポジウムを開催する。

・既に関東学院大学シグマソサエティでは「貧困」をメインのテーマとした準備を始めている。

・シンポジウム開催前に、講師を招いた研究会を開催する。

#### （5）2009年度第5回研究会

日時：9月1日（火）13:00～17:00

場所：宣教師館C号室

参加者：8名

[内容]

(a) 関東学院大学シグマソサエティによるタイ調査活動報告について。

・日程：8月5日～26日

・参加者：6名

詳細は、9月29日の研究会にて報告する。

(c) 第1回現地研究調査活動について。

・日程：7月15日～26日

詳細については、9月29日の研究会にて報告する。

(d) 学生シンポジウムについて

・大学125SSA委員会からは、今回はシンポジウムでなく、発表会とすることで連絡があった。

・プレゼンターを任命し、準備する。

(e) 関東学院大学シグマソサエティ写真展について

・日程：9月27日、横浜国際フェスタ。11月2日、平潟祭。11月3日、文学部ホームカミングデイ。

(6) 2009年度第6回研究会

日時：2009年9月29日（火）18:00～19:20

場所：金沢八景キャンパス2号館2階第4会議室

参加者：20名

[内容]

(a) 関東学院大学国際サービスラーニング活動報告

(b) 第1回現地研究調査報告

・バンコク幼児教育の現場に見るタイ格差社会の一側面。

・チェンライ近郊集落における山岳少数民族アカ族の実態と支援活動。

・チェンマイに見る都市部に移住した山岳民族の生活と救済活動。

(7) 2009年度第7回研究会

日時：2009年11月10日（火）18:00～19:20

場所：宣教師館C号室

参加者：18名

[内容]

(a) 平潟祭における研究調査報告写真展について。

(b) 2009年度第2回調査活動計画について

・日程：2009年12月29日～2010年1月3日。  
・チェンライ近郊集落における山岳少数民族アカ族の実態と支援活動について調査する。

・次期シェルター建設予定地であるルアン村での下見、打ち合わせ。

## 2. 研究調査活動

(1) 2009年度タイ北部山岳少数民族アカ族第1回調査活動報告

期間：2009年7月15日～26日

調査員：勘田義治客員研究員

現地対応者：ACT総主事ヤトウ・チャルマー  
氏他 ACT幹部役員

[内容]

(a) 次期シェルター建設予定地ルアン村の視察。現地牧師・教員との打ち合わせ。

(b) シェルター建設資材の一部購入。

(c) ACT総主事との来年度以降の活動について協議。

(d) 過去に建設されたシェルターの活用状況（5集落5棟）の調査。

(e) 集落の生活および教育環境の調査。

(f) 現地バプテスト派教会組織によるアカ族アカ新文字を用いた聖書編纂の調査。

(g) 現地OMF宣教師へのインタビュー。

関東学院大学キリスト教と文化研究所「國際理解とボランティア」研究プロジェクトでは、2004年より関東学院大学国際サービスラーニングを実施してきた。国際ソロプロジェクトのスポンサーで建設された5村5棟のシェルター（ボン村2004年度、ホイコム村2005年度、ドイチャン・カセ村2006年度、ドイチャン村2007年度、ホイチョンプー村2008年度）は、子どもたちの識字教育や村人のコミュニティセンターとして、現地バプテスト派教会組織ACTにより現在も盛んに活用されていた。

ACTの予算が貧弱な為、牧会活動やプログラムは思うように実行出来ないが、子どもたちや青少年の育成と自己実現を考え、村の教会教師やACT伝道師たちは、関東学院大学国際サービスラーニングプログラムにより建築されたシェルター兼礼拝堂を用い、キリスト教教育機関として継続的に子供たちへの識字教育（主にタイ語）を推し進めている。特に奥地の集落では無牧教会も多く、教師（牧師、伝道師）の派遣が急務である、とACT総主事ヤトウ・チャルマー氏は訴える。

村での識字教育には公用語のタイ語のみならずアカ語の時間も設け、徐々に薄れてゆく民族独自の言葉「アカ語」の伝承・保存にも力を入れていた。2月にはACTとABC（ビルマにおけるバプテスト派教会組織）幹部によるアカ新文字を用いた聖書の再編纂が行われた。

仏教徒やアニミズム信者とのコミュニケーションを目的とした再編纂である。

アニミズム集落構成員から見た改宗者（クリスチャン）についての意識調査では、精霊信仰の祭祀や伝統は、もはや受け継ぐ世代もなく、実生活においても負担が大きいことが分かった。改宗してキリスト教をアカ族にとっての新しいモラル、価値観としたいと考える層が増えつつあることも理解出来た。

#### （2）タイ北部山岳少数民族アカ族 2009 年度 第2回調査活動報告

日程：2009年12月29日～2010年1月3日

調査員：勘田義治客員研究員

現地対応者：ACT 総主事ヤトウ・チュルマー  
氏他 ACT 幹部役員

##### [ 内容 ]

- (a) 次期シェルター建設予定地ルアン村の状況を視察し、現地牧師・教会員と打ち合わせた。
- (b) シェルター建設資材費の残部を ACT 財務委員長に渡す。
- (c) 総主事との来年度以降の活動について協議

次期シェルター建設予定地チェンライ県ルアン村では資材が運び込まれ、基礎工事の準備が教会員と村人によって肅々と進められていた。3月に予定されている支援活動時までには床、屋根、壁が作られる予定である。クリスチャンではない一般の村人もこの工事にボランティアで参加している様子をみると、竣工後は村のコミュニティセンターとしての役割が村人から期待されている様子が窺い知れる。

### 3. 公開セミナー

#### （1）2009年度公開セミナー 「水と人との関係」—多様な水環境と人間との関わり—

日時：10月24日（土）15:00～17:00

場所：関東学院大学八景キャンパス

フォーサイト203教室

参加者：20名

パネラー：3名

・木村茂氏 NPO 法人「Link～森と水と人をつなぐ会～」を主宰。

タイのチェンマイを拠点に、集落での開発教育や支援活動について、村民共有の森の再生という観点から紹介。

・谷口尚弘氏 前東京都庁職員、(社)日本下水道協会理事、NPO 法人「日本下水文化研究会」評議員。上下水道の歴史や現状を踏まえ、水環境における人の生活のあり方を提案。

・勘田義治客員研究員 タイ北部山岳少数民族集落での水環境を紹介。村人が直面する問題を写真などで提示。

コーディネーター：小林照夫研究員

##### [ 内容 ]

「水環境の豊かさ」や「水の循環－私たちの生活を支える水のサイクル」など、近代化・都市化で失われた（失われつつある）「人と水との関係」の回復と新たな展開をめざし、現場・実務・理論の切り口で発題、討議した。過去からの歴史を振り返り、現在の生活の様式や習慣を見直していくことの必要性を考え、環境という分野で、次の世代へ残す水環境のために私たちは今何をしなければならないのか、実例に基づきながら基本的な考え方を学んだ。タイ山岳部の高地民集落での水環境は、訪れる私たちに様々なことを投げかけるが、多様な水環境（生物・環境的要件）と、それらを基盤として生活してきた人間との関わり（歴史・文化的要件）を、水にまつわるエピソードを絡め、タイの事例と日本での事例を用い発表した。参加者全員で考える場を作ることができた。

## 「依存症とキリスト教」研究プロジェクト 2009 年度報告

所員・プロジェクトリーダー 安田 八十五

Report of the Research Project on the Dependency and Christianity , 2009

Dr. Yasoi Yasuda,Marco

### 1. 研究の背景と目的：

最近、芸能人の大麻や覚醒剤による薬物依存症事件が多発し、マスコミをにぎわしている。また、本学では、約 2 年前の 2007 年秋にラグビー大学日本一を何度も達成したラグビー部員が大麻吸引事件を起こし、大きな社会的問題になったことがある。

現代日本社会のみではなく、欧米等の先進諸国における最大の社会的問題の 1 つは、「依存症社会」の末期症状を呈していることである。「依存症」と「依存症社会」に伴う障害や問題が多数発生しており、社会全体が極めて危機的な状況に陥っている。「依存症」( Dependency ) ( または「嗜癖」( Addiction ) とも言う ) とは、元々、精神医学やカウンセリング分野の概念であり、用語である。「アルコール依存症」は、比較的よく知られており、麻酔性・依存性のある薬物（化学物質）であるアルコールの入っているお酒を習慣的に大量に取り込み続けて陥る身体と精神の両方の病気である。

アルコールという化学物質をとり続けたために、お酒を止めることができなくなり、脳が麻痺してしまうために、家庭内で妻や子供などに物理的暴力や暴言（言葉による暴力）を行使し、家庭を「機能不全家族」( Dysfunctional Family ) にしてしまう。

「依存症人間」( Dependent Person ) とは、

いわば、「依存症を持病として抱えている人間のことであり、ことに自覚症状の無い、自分が依存症なのに、依存症であることを認識していないか、または、認めようとしない人間」と、筆者は定義している。多くの依存症人間から形成され、「依存的人間関係」( Dependent Human Relationship ) を人間関係の基調とする社会を「依存症社会」( Dependent Society ) と呼ぶことにする。現代日本社会は、まさに、この依存症社会そのものになってしまっている。

2007 年秋、関東学院大学では、在学生による大麻の栽培・吸引という事件が、ラグビー部で発生した。大学日本一を数回も達成した、名門ラグビー部の学生が引き起こした大麻騒動が学内外に大きな衝撃を与えた。これは、基本的には、大麻による「麻薬・薬物依存症」( Drug Dependency ) に起因している。筆者が、安田八十五 (2007) 「依存と自立：依存症社会論序説 (1)」で分析した「薬物依存症」が本学で発生してしまい誠に残念である。

さらに最近は、京大・早慶・同志社等のいわゆる一流大学でも、大麻事件が多発しており、若者の依存症問題は深刻な社会的問題となっている。この底流には、不登校・引きこもり等の最近の大学生等に起こっている学生依存症問題が深層に根深く存在しているのである。

依存症は、ある意味で誰にでもなり得るもの

のであり、適切な治療や自助グループ活動によって回復可能なものである。早期かつ根源的な回復を祈りたい。

本研究プロジェクトの主たる目的は、この「依存症」及び「依存症社会」の構造と特質をキリスト教の視点から分析し、解決のための方法と手段を探ることにある。ことに、依存症からの回復のために安田・三井・田代等が実践しているキリスト教に基づく12ステップ方式による自助グループの活動(Christ Living Group (CLG) 12ステップグループ)を外部展開し、その有効性を検証し、普及をめざすとともにその学問的裏付けを強化する。本研究プロジェクトは、2007年度から設置された。関東学院大学キリスト教と文化研究所2006年度所報「キリスト教と文化」第5号（2007年3月発行）に、同メンバーの安田・三井・田代の3名が「依存症とキリスト教」に関する研究論文3編を寄稿しており、それがキッカケで「依存症とキリスト教」研究プロジェクトが計画され、発足することになった。

2009年度は、第3年度目であり、着実に研究を進めることができた。ことに2008年度は、関東学院大学葉山セミナーハウスで秋と冬の2回、リトリートセミナーを実施し、多くの成果を得、また研究プロジェクトメンバー同士のコミュニケーションも深められた。しかしながら、代表・安田の骨折入院(2008年11月)のため、当初計画していく出来なかつたことも少なくない。2009年度は、冬のリトリートセミナーを2010年2月に再度予定している。

## 2. 研究計画と研究課題：

本研究プロジェクトは、当面、2007年度—2009年度の3カ年計画で進める予定であるが、主な研究課題としては、下記のテーマを計画している。

①依存症に関する総合的調査研究—人文社会

科学的研究及びキリスト教との関係の調査研究

②依存症社会に関する総合的調査研究—人文社会科学的研究・社会システム論的アプローチ及びキリスト教との関係の調査研究

③依存症と依存症社会に関するキリスト教との関係の基礎的調査研究

④依存症からの回復のための12ステップ方式自助グループの実践と実践的研究

⑤大麻・不登校・引きこもり等の最近の大学生等に起こっている学生依存症問題に関する研究

研究計画と研究日程は、下記のように予定している。

### 第1年度目・2007年度：

調査研究フレームワークの策定と確立・基礎的調査研究の実施・定例研究会の開催・公開セミナーの開催・12ステップ方式自助グループの実践

### 第2年度目・2008年度：

合宿リトリートセミナーの開催・定例研究会の開催・12ステップ方式自助グループの実践と評価

### 第3年度目・2009年度：

最終シンポジウムの開催・定例研究会の開催・合宿リトリートセミナーの開催・12ステップ方式自助グループの実践と発展・出版計画の準備

## 3. 2007年度（平成19年度）—2009年度（平成20年度）の研究会活動の実績

2007年度（平成19年度）の研究会活動：

第1回研究会

日時：2007年7月21日（土）午前10:30-12:00

内容：今後の研究計画について

## 第2回研究会

日時：2007年10月11日（木）午後18:30～  
内容：①渡邊一成（関東学院顧問弁護士）：「境界性人格障害について」  
②田代泰成（客員研究員・横浜女学院教諭）  
「ラインホールト・ニーバー（米国の神学者）の祈りについて」

## 第3回研究会

日時：2007年11月8日（木）午後18:30～  
内容：小林弥生（客員研究員・関東学院大学カウンセリングセンター・臨床心理士）  
「大学生の引きこもりと依存性」

## 第4回研究会

日時：2007年12月13日（木）午後18:30～  
内容：三井純人（客員研究員・カウンセラー）  
「現代人の癒しと靈性—フロイト以降の心理療法の宗教的背景と今後の展望」

## 第5回研究会（公開研究会）

日時：2008年2月8日（金）午後18:00～20:00（開場は、17:30）  
会場：関東学院大学KGU関内メディアセンター  
講師：安田八十五（関東学院大学経済学部教授・工学博士・所員）  
講演題目：『五木寛之「自力と他力」と安田八十五「依存と自立」との関係の比較研究』—「依存と自立」と「他力と自力」：依存症社会論序説（2）—

## 第6回研究会（公開セミナー）

日時：2008年3月22日（土）10:30～12:30  
会場：関東学院大学金沢八景キャンパス・フォーサイト21棟2階F201教室  
講師：斎藤学（さとる）（医学博士・家族機能研究所代表）  
講演題目：『精神科医から見た依存症の本質と対策』

内容の詳細は、三井純人・安田八十五（2009），「日本における依存症研究の出発と到達点—斎藤学「精神科医から見た依存症の本質と対策」講演記録の概要—」を参照されたい。

## 2008年度（平成20年度）の研究会活動：

第1回研究会（通算 第7回研究会）  
日時：2008年6月21日（土）午前10:00～  
場所：関東学院大学金沢八景キャンパス・フォーサイト21棟6階F608教室  
内容：①葛西賢太（客員研究員・宗教情報センター研究員・文学博士）  
「自助の共同体という資源—日本におけるAlcoholics Anonymous の位置—」  
②今後の研究計画

## 第2回研究会（第1回合宿研究会（リトリートセミナー）・通算 第8回研究会）

日時：2008年10月17日（金）～10月18日（土）（1泊2日）  
場所：関東学院大学葉山セミナーハウス  
内容：

- ①田代泰成の発表、テーマ＝「ラインホールト・ニーバーの人間観—近代主義の批判—」
- ②安田八十五の発表、テーマ＝「神と人間の存在と関係に関する数学的証明—依存症社会システム論序説（3）—」
- ③その他、黙想会など：

## 第3回研究会（通算 第9回研究会）

日時：2008年10月23日（木）午後18:30～  
内容：田代泰成（客員研究員・横浜女学院宗教科教諭）：  
「ラインホールト・ニーバー（米国の神学者）の人間観②—近代主義の批判—」

## 第4回研究会（第2回合宿研究会（リトリートセミナー）・通算 第10回研究会）

日時：2009年2月16日（月）～2月17日（火）（1泊2日）

会場：関東学院大学葉山セミナーハウス

内容：静けさのリトリートセミナー

講師：太田和 功一（おおたわ・こういち）先生

（キリスト者学生会主事を経て、国際福音主義学生連盟（IFES）副総主事。現在クリスチャンライフ成長研究会主事）

2009年度（平成21年度）の研究会活動：

第1回研究会（通算 第11回研究会）

日時：2009年7月11日（土）午前10：30－

場所：関東学院大学キリスト教と文化研究所

内容：「ラインホールト・ニーバーの『変革の神学』と依存症」

講師：田代 泰成（客員研究員・横浜女学院 宗教科教諭）

第2回研究会（通算 第12回研究会）

日時：2009年9月25日（金）午後19：00－

内容：小林 弥生（客員研究員・関東学院大学カウンセリングセンター・臨床心理士）

「大学生の引きこもりと依存性（2）」

第3回研究会（通算 第13回研究会）

日時：2009年11月10日（火）午後18：30－

場所：関東学院大学キリスト教と文化研究所

内容：「依存症回復のための12ステップ・プログラムの普遍性」

講師：三井 純人（客員研究員・カウンセラー）

第4回研究会（通算 第14回研究会）

日時：2010年1月23日（土）午後14：00

－16：00

場所：関東学院大学KGU 関内メディアセンター

内容：「神、宇宙と人類の存在及び関係に関する科学的分析序論（1）—神の存在と三位一体説の数学的証明—」（仮題）

講師：安田 八十五（関東学院大学経済学部教授・工学博士・所員）

第5回研究会（第3回合宿研究会（リトリートセミナー）・通算 第15回研究会）（予定）

日時：2010年2月15日（月）－2月16日（火）  
（1泊2日）

会場：関東学院大学葉山セミナーハウス

内容：第2回・静けさのリトリートセミナー

講師：太田和 功一（おおたわ・こういち）先生  
（キリスト者学生会主事を経て、国際福音主義学生連盟（IFES）副総主事。現在クリスチャンライフ成長研究会主事）

#### 4. 研究論文の公表（予定も含む）：

4-1.『キリスト教と文化』、第5号、関東学院大学キリスト教と文化研究所・2006年度所報、

平成19年3月 発行：

①安田八十五（2007）、「依存と自立：依存症社会論序説（1）—依存症からの回復のための12ステップ方式自助グループの有効性—」、『キリスト教と文化』、第5号、pp. 3－PP. 21、関東学院大学キリスト教と文化研究所2006年度所報、平成19年3月発行

②三井純人（2007）、「12ステップの自助グループと新約聖書—最後の晚餐を中心にして」、『キリスト教と文化』、第5号、pp. 23－pp. 34、関東学院大学キリスト教と文化研究所2006年度所報、平成19年3月発行

③田代泰成（2007）、「ニーチェのキリスト教批判の真相—日本人キリスト者はニーチェのキリスト教批判にどう答えるか—」、『キリスト教と文化』、第5号、pp. 35－pp. 51、関東学院大学キリスト教と文化研究所2006年度所報、平成19年3月発行

4-2.『キリスト教と文化』、第6号、関東学院大学キリスト教と文化研究所・2007年度所報、平成20年3月：

④安田八十五（2008）、「五木寛之「自力と他力」と安田八十五「依存と自立」との関係の比較研究

- 「依存と自立」と「他力と自力」：依存症社会論序説(2)—』,『キリスト教と文化』, 第6号, pp. 5- pp. 24, 関東学院大学キリスト教と文化研究所 2007年度所報, 平成20年3月発行
- ⑤田代泰成 (2008), 「ラインホールト・ニーバーの信仰と成長の12ステップ・プログラム」,『キリスト教と文化』, 第6号, pp. 25- pp. 48, 関東学院大学キリスト教と文化研究所 2007年度所報, 平成20年3月発行
- ⑥三井純人 (2007), 「新約聖書における靈性についての比較宗教的考察」,『キリスト教と文化』, 第6号, pp. 49 - pp. 60, 関東学院大学キリスト教と文化研究所 2007年度所報, 平成20年3月発行
- ⑦渡邊一成 (2008), 「境界性人格障害について」,『キリスト教と文化』, 第6号, pp. 147 - pp. 151, 関東学院大学キリスト教と文化研究所 2007年度所報, 平成20年3月発行
- 4.3.『キリスト教と文化』, 第7号, 関東学院大学キリスト教と文化研究所・2008年度所報, 平成21年3月 :
- ⑧三井純人・安田八十五 (2009), 「日本における依存症研究の出発と到達点—斎藤学「精神科医から見た依存症の本質と対策」講演記録の概要—」
- ⑨安田八十五 (2009), 「地球環境問題をごみ問題から考え方直す—環境問題の考え方と基本的文献の展望—」
- ⑩田代泰成 (2009), 「ラインホールト・ニーバーの「人間の本性」における狙いとコンテキスト」
- ⑪三井純人 (2009), 「ユング心理学における自己のイメージについての分析的考察—依存症研究の視点から—」
- ⑫葛西賢太 (2009), 「文化資源としての語り—相互扶助を越える Alcoholics Anonymous の意義—」
- 4.4.『キリスト教と文化』, 第8号, 関東学院大学キリスト教と文化研究所・2009年度所報, 平成22年3月 (予定) :
- ⑬安田八十五 (2010), 「神の存在及び三位一体説の数学的証明神 一神, 宇宙と人類の存在及び関係に関する科学的分析序論(1)—」
- ⑭田代泰成 (2010), 「精神的落ち込みの解釈学的分析 : 精神的病理の理解—現象学的心理学を手がかりに—」(仮題)
- ⑮小林弥生 (2010), 「大学生の引きこもりと依存性」(仮題)
- ⑯三井純人 (2010), 「チベット紀行」(仮題)
- ⑰安田八十五 (2010), 「横浜・内からの文明開化をめざして : 依存症社会からの離陸—横浜開港150周年記念と関東学院創立125周年記念の社会的意義と課題—」

## 「キリスト教と日本の精神風土」研究グループ 2009 年度活動報告

富岡 幸一郎

Report of the Study Group on the Christianity and Japanese Culture, 2009

Koichiro TOMIOKA

2009 年度の「キリスト教と日本の精神風土」グループは、7 月 25 日(土)に本学文学部専任講師郷原佳以氏による「西洋思想によるイサク奉獻の解釈－カントからデリダまで－」の研究発表を行った。

旧約聖書の 22 章にある、アブラハムが神の声を聞いて息子イサクを「献げ物」として火の中に入れようとするくだりであるが、この解釈をめぐって、カント、ヘーゲル、キルケゴール、レヴィナス、作家のカフカ、詩人のツェラン、哲学者のデリダらの各説を紹介した内容であった。カントやヘーゲルらの哲学者が 18 世紀、19 世紀の啓蒙思想主義の流れのなかで、人間の理性の次元で受け止めているのに対して、キルケゴールは、カント、ヘーゲルに抗して、この聖書のくだりを「信仰」の背理の視点から説明している。つまり、父が子を殺害してはならないという「普遍的な倫理的格律よりも高い所」において、「アブラハムと神との関係」という「単独的なもの」が現実化するというのである。「信仰とはそのような、倫理的次元では狂気とみなされざるをえないような、純粋に単独的な次元のことである」。このキルケゴールの解釈に対して、カフカやレヴィナスなどの（いずれもユダヤ人）批判的解釈も説明された。

郷原氏は、フランス文学を専攻し、聖書の専門家ではないと語られたが、「イサク奉獻」についての西洋思想の解釈を短い時間の中で的確にまとめられ、発表の後も様々な角度

から討議することが出来た。このテーマを、「日本の精神風土」でどのように受容し、解釈するかは大変興味深いと思われるが、本年は十分に展開できなかった。今後の課題したい。

## 研究グループ報告

# 「いのちを考える」研究グループ 2009 年度活動報告

松 田 和 憲

Report of the Study Group of Considerations of Life (INOCHI), 2009

Kazunori Matsuda

### 第1回研究会

4月15日（水） 18：20～19：40

テーマ いのちを大切に思う気持ちの諸要因  
の分析

昨年度行った大学生のいのちに関する意識と実態のアンケート調査の分析を継続して行った。結果から、「自分のいのちを大切に思う心」と「一緒にいると安心できる人がいる」、あるいは「他者のいのちを大切に思う心」との関連が密接であることが明らかになった。また、男子では「殺人などのゲーム」を好むと回答した学生が「人のいのちを大切に思う心」を妨げる傾向が見えてきた。その他の結果を通して、検討を行った。

発題者 大豆生田啓友 研究員

### 第2回研究会

5月27日（水） 18：00～19：30

テーマ アンケート結果をどう生かすか

大学生のいのちに関する意識と実態のアンケート結果をどう分析し、今後どのように生かしていくかの検討を行った。検討のプロセスでは、さらにアンケート結果の分析を引き続き行うほか、今後の方向性について検討を行った。その結果、アンケート結果については、論文としてまとめていくこと、また今後の研究としては、さらに大学生を対象に深めていくことで話し合いを行った。

発題者 大豆生田啓友 研究員

### 第3回研究会

6月24日（水） 18：00～19：40

テーマ ナラティブ研究による「いのち」探  
求の可能性

大学生のいのちの意識と実態をさらに深める研究を行うために、質的研究の方法の可能性について検討を行った。質的研究の中でも「語り」を基盤とした「ナラティブ」研究のあり方について、鈴木先生の発題を通して議論した。ここでは、やまだようこ氏の阪神大震災で友人を亡くした方へのインタビューを通して、内的変化を探る研究が題材として使用された。

参考文献としては以下のものがあげられた。

- ・やまだようこ（編） 質的心理学の方法—語りをきく 新曜社 2007年
- ・やまだようこ 喪失の語り—生成のライフヒストリー 新曜社 2007年

発題者 鈴木公基 研究員

### 第4回研究会

9月30日（水） 18：00～20：00

テーマ ナラティブによる「いのち」研究の  
可能性

前回のナラティブ研究の学習を踏まえ、大学生への「いのち」の意識と実態に迫る質的研究の可能性を前回に引き続き、検討を行った。具体的には、鈴木氏が実際に大学生数名を対象にして、インタビューを試み、その結

果について報告を行つてもらった。

そこから、家族の死などについて内的処理が十分にできていないことなどがわかり、具体的な質問項目の検討がなされた。

### 今年度のまとめ

今年度は、昨年度に行った「大学生のいのちに関する意識と実態」のアンケート調査の結果を通して、数的処理を行つたほか、その結果の分析（重回帰分析）を行つた。そこから考察された内容は以下の通りである。

自分のいのちおよび他者のいのちを大切にする上で、共通の要素は「一緒にいて安心する人」の存在であることが明らかとなつた。統計的分析により、この要素と関連が示されたということは、このような安心する人が多いほど、自分や他者のいのちを大切であると思つてゐることを示してゐる。親密な関係、安定した関係が多く形成されている人ほど、いのちそのものを大切にできていると考えられる。

自分のいのちに影響を与えた項目から考えられることとしては、以下のようなことをあげることができるだろう。「一緒にいると安心できる人がいる」「生まれたときの話を聞いたことがある」という項目との関連が相対的に強く見られたことから、自分のいのちを大切であると認識できるためには、単なる自己肯定感というよりは自分の生活や人生に対する肯定的な関心を考えることができるのでないかと考えられる。自分自身の時間軸をもって肯定的に捉えることができることが重要かもしれない。

他者のいのちに影響を与えた項目からは、安心できる人の存在や感謝することができるような相互作用が効果を持っていることが示された。他者のいのちを大切に思ふためには、実際の他者とのかかわりにおいて肯定的な相互作用が営まれていることが重要だと考えられる。

興味深い点としては、男子においてはゲー

ムの影響が示唆された点である。人を殺すゲームがいのちを軽んじることに影響を与えると考えられる結果である。

さらに、以上のアンケート調査結果を踏まえ、大学生のいのちに関する意識と実態をさらに深めるべく、質的調査の可能性をはかってきた。具体的に大学生を対象にインタビューを試みた。現段階としてはまだ十分な結果は得られていないため、今後の課題としたい。

## 研究グループ報告

# 「奉仕・ボランティア教育」研究グループ 2009 年度活動報告

所 澤 保 孝

Report of the Study Group on the Community Service and Volunteer

Activities Education, 2009

Yasutaka Tokorozawa

### 第1回研究会,

日時：2009年6月3日（木）16:30～18:00

まで

場所：宗教教育センター

出席：影山礼子、細谷早里、所澤保孝

討議内容：

今年の研究会開催日と研究活動の内容について検討した。

研究会は小田原キャンパス勤務の教員や退職した客員研究員などがいてなかなか全員が集まることが難しい。集まる回数は少なくなる可能性があるが、各プロジェクトを中心に少しづつ活動を展開してゆくことになった。

今年は次の3つのテーマにそって研究活動を展開することになった。

(1) 奉仕・ボランティアの視点から見た関東学院の教育の源流をたずねる。

関東学院の教育の歴史に詳しい人たちを呼んで研究会を持つ、最終的に人物を中心とした関東学院の自校史のテキスト作成を目指す。

(2) 奉仕・ボランティア活動に関する意識調査。

学生を対象としたアンケート調査、「奉仕・ボランティア意識の形成に関する調査」を実施する。奉仕・ボランティア意識（観）がい

つ、どこで、誰の影響で形成されはじめたのか、キリスト教系の学校で教育を受けた者と公立学校で教育を受けた者との間に違いはあるのか、等を明らかにすることを狙いとしている。

(3) 短大・大学における奉仕・ボランティア教育に対する取り組みの調査。

奉仕・ボランティア教育を短大や大学がどのように取り組んでいるか。カリキュラム上にどのように位置付けているか等をインター ビュー調査などの手法を用いて調べ、今後の研究の手掛かりをつくる。

次回研究会：

日時：7月17日（金）

場所：宗教教育センター

### 第2回研究会,

日時：2009年7月17日（金）10:00～12:30

まで

場所：宗教教育センター

出席：細谷早里、渡辺光一、高野進、所澤保孝

討議内容：

今後の研究会開催予定と研究活動の内容について検討した。

本研究会は小田原キャンパス勤務の教員や退職した客員研究員などがいてなかなか全員が集まることが難しい。集まる回数は少なくなる可能性があるが、各プロジェクトを中心に少しづつ活動を展開してゆくことにした。

今回は次の3点について検討した。

(1) 奉仕・ボランティアの視点から見た関東学院の教育の源流をたずねる。

10月の125周年を記念して発行が予定されている「関東学院の源流を探る」をテキストにして研究会を持ち、検討してゆく。関東学院の教育の歴史に詳しい人たちを呼んで研究会を持つ。最終的に人物を中心とした関東学院の自校史のテキスト作成を目指す。

(2) 奉仕・ボランティアの理論的研究のための文献研究を進めることを検討した。

次のテキストを取り上げて研究会を持つことにした。

ロバート K. グリーンリーフ著  
「サーバント リーダーシップ」  
英治出版、2009年

(3) 奉仕・ボランティア活動に関する意識調査。

学生を対象としたアンケート調査、「奉仕・ボランティア意識の形成に関する調査」を実施するための質問項目の検討を行った。今回は奉仕・ボランティア意識（観）がいつ、どこで、誰の影響で形成されはじめたのか、キリスト教系の学校で教育を受けた者と公立学校で教育を受けた者との間に違いはあるのか、等を明らかにすることを狙いとすることにした。

次回研究会：

日時：12月11日（金）

場所：宗教教育センター

**第3回研究会、**

日時：2009年12月11日（金）13:30～15:35  
まで

場所：宗教教育センター

出席：影山礼子、細谷早里、高野進、所澤保孝

テーマ：「関東学院の源流を探る」の分析と  
今後の課題

報告者：高野進

(1) 源流を探る意義：その人の原点を調べ、原点が何なのか共通理解がなされれば共同体意識が生まれる。関東学院にもあったが指導者たちの努力が足りなかった。今後一層の研究と共同体意識形成の努力が必要である。

(2) キリスト教宣教の歴史、宗教改革とカトリックの海外伝道

- ・ プチャーチン、ヘボン、ブラウンらの来日と宣教活動
- ・ パプテスト派の特色—外国伝道
- ・ ウィリアム・ケアリーのインド宣教と教育セランポールにおける教育の特徴、一人一人を大切にする教育、研究と教育が人類の課題解決のため、個別主義、個人主義
- ・ 文書によるウィリアム・ケアリーのアメリカへの影響
- ・ ジャドソン、ブラウン、ベンネットの流れ
- ・ N. ブラウンの来日

(3) 源流—横浜バプテスト神学校の設立

- ・ 築地における東京中学院
- ・ クレメントと渡瀬虎次郎、
- ・ 市ヶ谷における東京学院

(4) 横浜に中学関東学院を設立

- ・ C.B. テンナーと坂田裕

(5) テキスト「関東学院の源流を探る」の構成

(6) 今後の課題

先人たちは皆人間教育、すなわち人間形成の教育をめざしてきた。人類に貢献できる人物の教育が目標である。教師は何のため

に雇われ、われわれはどう貢献できるか、伝統をどう発展させ継続させるのかを問う必要がある。教育の継続は人の継続である。

(7) ディスカッション

報告を受けて、ビルマにおけるブラウンの働き、関東学院に不足していたもの、自校史テキストへの準備などの点が話し合われた。

次回研究会：

日時：2010年1月22日（金）

場所：宗教教育センター

**第4回研究会、**

日時：2010年1月22日（金）11:00～13:30

まで

場所：宗教教育センター

出席：細谷早里、高野進、所澤保孝

I. テーマ：「東京学院 1895 年～1899 年」

報告者：高野進

配布資料に基づき標記テーマについて報告とディスカッションが行われた。

(1) 築地における東京中学院

・ 築地はキリスト教の学校と教会の町として発展・新栄女学校跡地入手するための渡瀬虎次郎夫妻の協力。

(2) クレメントと渡瀬虎次郎

・ クレメント学院長、渡瀬虎次郎は副学院長。渡瀬虎次郎は理事会構成員に名を連ねていない。

(3) 東京中学院の特徴と卒業生

・ 授業に「有益な差違」を備えた非尋常中学。渡辺元と鈴木房吉。

(4) クレメントの教師像

・ 少人数教育主義、「片手に傘、片手にランターン」。

(5) 市ヶ谷への移転—東京学院の設立と訓令 12 号

・ 中等科、高等科、上級学校受験資格と微兵猶予の特典。

(6) 中学関東学院

・ 横浜への移転。訓令 12 号の規制緩和。

(7) ディスカッション

報告を受けて、渡瀬虎次郎の働き、訓令 12 号の持つ意味、根室におけるカーペンター夫妻の働き、神奈川県上溝におけるベンネットの働き、クレメントの交替等についてディスカッションが行われた。

**II. 奉仕・ボランティア活動に関する意識調査**

質問紙を用いて約 180 名の学生に対する調査が行われた。対象は各学部を含む 2 年生以上の学生。現在データ入力中との報告があった。

**III. 次年度の計画**

次年度のプロジェクト構成員、リーダー、研究テーマ等について協議が行われた。

次回研究会：

日時：2010 年 2 月 15 日（月）

場所：宗教教育センター

テーマ：「1900 年～1927 年 奉仕教育—関東学院教育との関係で」

報告者：高野進

## 資料委員会 2009 年度活動報告

村 椿 真 理

Report of Resource and Reference Committee, 2009

Makoto Muratsubaki

### 1. 今年度の活動概要

資料委員会では、2007 年度より本学図書館におけるブラウン翻訳聖書の所蔵調査を継続してきた。これまで記録が不備であった貴重書の記録整理は本委員会の活動もあってか、図書館が誠意をもって対応協力して下さり、2008 年度には図書館調査による貴重書庫内の整理、記録データ化が本格的に進められた。2009 年度、本委員会はブラウン関係貴重古書の確認を終え、次に委員会訳旧約聖書分冊の調査に入った。

なお懸案とされてきた 1879（明治 12）年の「きみ えす きりすとの しんやくしょ」二巻本の第一巻（関東学院関係本）行方不明本の所在は未だ調査が進んでおらず難航している。今年度は以下の 4 回の例会を開催したに過ぎず、委員会活動の今後のあり方について協議する課題をもっている。

### 2. 定例委員会及び調査会

第1回、6月 25 日（木）4 時より 6 時

於：キリスト教と文化研究所

議事：行方不明ブラウン聖書の件

収集古書の整理と保管の件

今年度の古書収集計画

第2回、7月 23 日（木）5 時より 7 時

於：六浦キャンパス図書館本館

貴重書庫調査

第3回、9月 17 日（木）5 時より 7 時

於：キリスト教と文化研究所

貴重古書調査

第4回、2月 4 日（木）予定

今年度の報告と次年度活動計画

### 3. 今年度貴重書の購入

本年度も調査を継続し古書を探した結果、以下の委員会訳旧約聖書を発見し購入した。委員会は今年も通常の研究会のような活動は行なっていないが、古書調査と恒常に取り組んでいる。今後の課題は、入手した資料の保管及び研究への提供の道についても検討していくなければならない。また今年度は研究所に資料保管室が与えられたが、予算の半分を用いて除湿器 2 機を購入した。

今期購入した委員会訳旧約聖書分冊：

- |         |         |       |         |
|---------|---------|-------|---------|
| 1. 創世記  | 明治 20 年 | 182 頁 | 大英國聖書会社 |
| 2. 出埃及記 | 明治 17 年 | 154 頁 | 米国聖書会社  |
| 3. 利未記  | 明治 17 年 | 114 頁 | 米国聖書会社  |
| 4. 民数記略 | 明治 18 年 | 164 頁 | 米国聖書会社  |
| 5. 申命記  | 明治 18 年 | 140 頁 | 米国聖書会社  |

どれも初版本ではないが、本学図書館も所蔵していない歴史的貴重書であり、本研究所の今期の目指した委員会訳分冊聖書である。状態は良く、委員会ではほぼこの他に残る全冊を発掘済みであり、次期収集に資金を整え、備えている。

## 広報委員会 2009 年度活動報告

武 田 俊 哉  
簗 弘 幸

Report of the P.R. Committee, 2009

Toshiya Takeda  
Hiroyuki Mino

広報委員会は、本研究所の活動を、関心を寄せて頂いた全ての方へ知って頂けるように、様々なメディアを通して広報活動を行っている。

本年度もこれまでに引き続き、(1) ニュースレターの編集・発行、及び (2) ホームページのコンテンツ充実に努めた。

### 【ニュースレター】

編集体制を見直し、(1) 年次計画を立案、(2) 編集を勘田義治客員研究員に依頼することに変更、(3) 体裁を 4 ページとした。記事については年次計画に沿った形にはならなかったが、隨時、編集委員および事務局（牛坊千寿枝）で調整のうえ以下の 3 号を発行した。

ニュースレター第 22 号（2009 年 8 月）：  
所員紹介等

ニュースレター第 23 号（2009 年 12 月）：  
「坂田祐」研究プロジェクト活動報告等  
ニュースレター第 24 号（2010 年 3 月）：  
「国際理解とボランティア」研究プロジェクト活動報告等

今後も、読まれやすく有益な紙面づくりに向けて改善を進めて行きたい。

### 【ホームページ】

「What's new」等のページを恒常にアップデートした。また研究会、講演会の映像記

録も、インターネット経由で閲覧できるようになっている。

各研究グループ、プロジェクトのページについても、日本語版、英語版とも継続的に更新を行っている。

### 【ビデオライブラリー】

研究会、講演会の映像記録を DVD のメディアに焼き付けて保存している。

## 所報編集委員会 2009 年度活動報告

安田 八十五

Report of the Bulletin Editorial Committee , 2009

Yasoi Yasuda

### 1. 序：

2005 年度から所報編集委員会の編集委員長に安田八十五が就任した。2009 年度で 5 年目になる。2009 年度は、下記のように編集委員会を所員 4 名と研究員 1 名及び客員研究員 4 名の計 9 名で構成した。また、編集プロセスをマニュアル化し、編集業務のスムーズな進行管理を実行した。

委員会は計 7 回開催し、編集業務ことに原稿整理・査読・校正等を担当した。編集作業は、編集委員長が、事務局の支援を受け、印刷所と密接に連絡し進めた。原稿は、すべて電子化し電子メールの添付ファイルで送受信を行った。

なお、2007 年度第 6 号から所報の体裁の大幅な変更を行った。ことに、表紙に六浦キャンパスチャペルの写真を入れ、紙質も変えた。そのため、目次は、中の方に入れた。読みやすさ、手にとって関心を持っていただく努力をしたつもりである。ただし、論文の研究水準は高く保っているはずである。

### 2. 2009 年度所報編集委員会の体制と構成：

所報編集委員長：

安田 八十五（所員・経済学部教授）  
(2005 年度—2009 年度)

所報編集委員（順不同）：

帆苅 猛（所員・人間環境学部教授）  
前委員長（2002 年度—2004 年度）  
富岡 幸一郎（所員・文学部教授）

細谷 早里（所員・経済学部准教授）  
矢嶋 道文（研究員・文学部教授）  
三井 純人（客員研究員・カウンセラー）  
田代 泰成（客員研究員・哲学者・横浜女学院中学高等学校宗教科教諭）  
三浦 一郎（客員研究員・関東学院大学工学部・経済学部非常勤講師）  
原 真由美（客員研究員・Luther Rice University 牧会学博士）

### 3. 委員会開催報告：

2009 年度の所報編集委員会は、下記に示すように計 7 回開催した。括弧内は出席委員数。

第1回委員会 2009 年 11 月 10 日（火）18：00～18：40 2009 年度の編集方針と編集体制（3 名）出席者：安田八十五, 三井純人, 原真由美

第2回委員会 2009 年 12 月 9 日（水）18：00～19：30 提出原稿の整理作業（8 名）出席者：安田, 帆苅, 矢嶋, 原, 三井, 田代, 野村, 三浦

第3回委員会 2009 年 12 月 22 日（火）18：00～20：00 査読原稿の整理作業（7 名）出席者：安田, 帆苅, 矢嶋, 原, 三井, 田代, 野村

第4回委員会 2010 年 1 月 6 日（水）査読原稿の整理作業（9 名）出席者：安田, 矢嶋, 三浦, 三井, 田代, 野村, 原, 細谷

第5回委員会 2010 年 1 月 20 日（水）

初校の校正作業（7名）出席者：安田、帆  
苅、細谷、原、三井、田代、野村  
第6回編集委員会 2010年2月3日（水）

18:00～20:30 再校の校正作業（4名）  
出席者：安田、帆苅、三井、野村  
第7回編集委員会 2010年2月17日（水）

18:00～20:30 三校の校正作業（8名）  
出席者：安田、帆苅、細谷、矢嶋、原、田  
代、三井、野村

以上の編集委員会で出来なかったことは、  
編集委員長が事務局の助けを借り、編集作業  
を進めた。

#### 4. 5年間（2005年度～2009年度）の編集 委員会の活動の反省と課題

安田八十五が編集委員長に就任してからの  
この5年間（2005年度～2009年度）の編集  
委員会の活動を振り返り、課題について述べ  
たい。今後の更なる発展のための参考にして  
頂けることを期待したい。なお、以降の文章  
は、「自己点検評価」に提出した原稿に加筆  
修正を行ったものである。

##### 4. 1. 現状の説明：

関東学院大学「キリスト教と文化研究所」  
の活動の中心の1つとして所報『キリスト教  
と文化』を2003年3月に第1号（2002年度版）  
を発刊し、以後毎年度末3月に発行しつづけ、  
現在までに8号（2009年度版）に至っている。  
所報『キリスト教と文化』は、研究所の中に「  
所報編集委員会」が設置され、所報編集業務  
が担当されている。

所報は、本研究所で行われている様々な研  
究活動の成果を活字で外部に公表する印刷媒  
体である。研究所の活動は、複数の研究グル  
ープおよび研究プロジェクトを中心として行わ  
れているので、その成果報告である所報は、  
それらの研究活動の成果を中心に構成されて  
いる。

所報は、ほぼ毎号、次のような構成で編集  
されている。『卷頭言・編集前記・研究論文・

研究ノート・調査報告・研究プロジェクト報  
告・研究グループ報告・公開シンポジウムの  
記録・公開研究会の記録・書評・委員会等の  
活動報告・編集後記』、などである。

所報『キリスト教と文化』の編集に関して  
は、「所報『キリスト教と文化』に関する内規」  
および「所報『キリスト教と文化』編集につ  
いての申し合わせ（編集委員会規定）」に基づ  
いて編集が行われている。本誌で特筆すべき  
ことは、研究論文および研究ノートに関しては、  
レフリー制が採用されていることである。匿名の複数による査読審査制度の導入によつて質の高い研究論文が採択されている。また、  
公開研究会および公開シンポジウムは、キリ  
スト教にとって重要かつ今日的なテーマが選  
ばれ開催されているので、その記録も極めて  
興味深い内容となっているといつても言い過  
ぎではない。第1号（2002年度版）の公開研  
究会のテーマは、「幕末維新期におけるプロ  
テstantとカトリック」、第2号（2003年度版）  
の公開シンポジウムのテーマは、「坂田  
祐と関東学院」、第3号（2004年度版）の公  
開シンポジウムのテーマは、「関東学院の奉  
仕教育」、などであった。また、第1号には、  
関東学院大学「キリスト教と文化研究所」開  
設記念特別講演として、故隅谷三喜男氏（元  
東京女子大学長・東京大学名誉教授）による「  
日本社会とキリスト教」の講演記録も掲載さ  
れている。第7号（2008年度版）には、依存症  
研究の第1人者である齊藤学博士による公開  
セミナーの講演記録が掲載されている。第8  
号（2009年度）には、バプテスト400年祭を  
記念する公開シンポジウム報告が掲載されて  
いる。

ただし、現在、教員が研究を進め、研究論  
文を執筆していく上でその時間を確保するこ  
とが様々な理由によって困難になっている  
し、また財政的にも厳しい状況の中で所報の  
編集が行われているという現実が存在してい  
る。

#### 4. 2. 点検・評価：

所報『キリスト教と文化』は、通常約1000部印刷し、関東学院内部に約400部、外部に約600部を送付している。外部は、全国の大学・図書館のみではなく、プロテスタント系の代表的教会も含み、さらに近隣の神奈川県内および東京都内等のキリスト教系の教会には、ほとんど配布されている。

第3号（2004年度版）には、カトリックの森一弘司教の講演記録が掲載されていたので、周辺のカトリック教会に配布したところ、大変評判が良く、コピーされ多くの信徒の間で回し読みされているとの連絡があったほどである。

ただし、印刷費および郵送料金の高騰により、財政的負担がかなり多いため、原稿をすべてPDFにして、ホームページに掲載している。全文がダウンロード可能なようにしている。また、印刷物ではなくCD等で配布することも計画している。

#### 4. 3. 長所と問題点：

##### ①長所：

所報『キリスト教と文化』の長所は、約125年前の西暦1884年（明治17年）、横浜山手の丘に開校された「横浜バプテスト神学校」を前身校とし、キリスト教主義を特徴とする関東学院大学の本質を表現している印刷媒体の代表的なものの1つであるということである。所報『キリスト教と文化』は、本学の建学の精神や理念を明らかにしていく上でも重要なものになると思われる。また、この所報は関東学院だけの問題だけではなく、日本のキリスト教の歴史や他のキリスト教学校にも関係するところが大きいと考えられる。

##### ②問題点：

活字印刷媒体としての所報『キリスト教と文化』は、マルチメディア時代の今日にあっては、多くの問題点と限界も有している。印刷媒体では、一部の人しか読まれないという限界がある。そこで、ホームページに掲載

している。しかし、さらにCDやメーリングリストで配布するなどの新しいメディアを用いた伝達手段を開発する必要もある。

##### ③将来の改善・改革に向けた方策：

現在、所報『キリスト教と文化』は、関東学院大学「キリスト教と文化研究所」の所員、研究員および客員研究員等が主として執筆を担当している。その他の関東学院大学の教員、さらには、学外にも執筆者を広げ、今後、学内外の他の研究機関などとの連携も行い、開かれた所報『キリスト教と文化』に発展させる必要がある。

また関東学院と同じように、キリスト教の精神によって建てられた学校との共同で、建学の理念や精神についての研究活動も行い、その成果を所報『キリスト教と文化』に掲載して行くことも考えていく必要がある。

多くの人に読んでもらうためには、既に述べたように、マルチメディア時代に対応し、ホームページに掲載するだけではなく、CDやメーリングリストで配布するなどの新しい伝達手段を開発し、情報の受発信が容易になるシステムを開発する必要がある。また、本誌のような専門書だけではなく、一般書の普及も不可欠と言える。

##### ④最後に

日本におけるキリスト教の信者の割合は、1%に満たないと言われている。お隣の韓国では、キリスト教の信者の割合は約30%を超えていているという。なぜ、日本では、キリスト教は普及しないのであろうか？他方、日本は仏教国と言われるが、仏教は葬式仏教と皮肉されるように、日本人の日常生活には入り込んでいない。というよりも、日本人は、「無宗教」と答える人が多く、日本には宗教そのものが溶け込んでいないと言える。人類の発生・存在そのものが神に根本的に依存していることが社会的に認識されていないことが最大の問題点である。今後の課題は大きくかつ困難と言える。

**関東学院大学キリスト教と文化研究所  
『所報』（『キリスト教と文化』）に関する内規  
(趣旨)**

第1条 この内規は、関東学院大学キリスト教と文化研究所『所報』（以下『所報』という。）の執筆および発行に関し、必要な事項を定める。『所報』の表題は、『キリスト教と文化』とする。

**(発行)**

第2条 『所報』の発行は、年1回を原則とする。

**(編集)**

第3条 『所報』の編集は、所員等から選ばれた編集委員会が行う。

**(執筆)**

第4条 執筆者は原則として本研究所の研究員、研究員および客員研究員とする。

**(原稿)**

第5条 原稿は、未発表のものに限り、内容は、論文、研究ノート、翻訳、資（史）料および書評とする。

この他に、研究所主催の講演会、シンポジウムまたは研究会などの原稿も掲載することができる。

2. 本誌はレフェリー制を採用する。

**(原稿)**

第6条 原稿は研究所が別途定める編集委員会規定にもとづいて作成する。

**(配布・保管)**

第7条 『所報』は、研究所員、専任教員、学生ならびに本学と研究誌を交換する大学（特例）および学術機関に配布し、図書館と研究所に累加保管する。

第8条 この内規によらない事由が生じたときは、所員会議の議を経て、所長が決定する。

**(内規の改廃)**

第9条 この内規の改廃は、所員会議の議を経て行う。

附則1 この内規は、2002年11月14日から施行する。

附則2 この内規は、2005年9月29日から改正施行する。

（キリスト教と文化研究所所員会議02年11月14日承認）

（キリスト教と文化研究所運営委員会05年9月29日承認）

**関東学院大学キリスト教と文化研究所  
『所報』（『キリスト教と文化』）編集について  
の申し合わせ**

1. 原稿の執筆を希望する場合は、所定の期日（原稿締め切り日の約1ヶ月前）までに、原稿のタイトルと種類、予定枚数を所定の用紙に記入して、編集委員会に申し込む。

2. 原稿の字数は、原則として横書き16,000字（400字原稿用紙換算で40枚）を基準とし、20,000字（400字原稿用紙50枚）以内とする。ただし、書評については、4,000字（400字原稿用紙10枚）を基準とする。いずれの原稿も、図表、注なども換算して字数に含める。

原稿は、完全原稿で提出するものとする。

原稿は、原則としてフロッピーディスクなどの電子媒体およびプリントアウトしたものを提出する。

3. 本誌は、レフェリー制を採用する。論文と研究ノートについては、編集委員会で審査を行ったうえで、「掲載」「書き直し」あるいは「返却」を決定する。

4. 執筆者には、抜刷50部を無料で贈呈する。

追加分については、50部単位として執筆者の実費負担とする。

5. 本誌は、毎年3月に発行する。

原稿の締め切りは12月末とする。

6. 執筆者には、原則として初校と再校を見せていただく。校正段階での大幅な変更や書き加えはお断りする。

（キリスト教と文化研究所所員会議02年11月14日承認）

## 2009年度キリスト教と文化研究所 主な活動経過（2009/4/1～2009/12/31）

日付	時間	開催内容	備考
1/6（火）	17：00～20：00	第2回所報編集委員会 所報第7号査読済み及び著者校正チェック	出席者：6名 八景キャンパス2号館3階 キリスト教と文化研究所
1/19（月）	15：00～17：00	奉仕・ボランティア教育研究グループ 関東学院の奉仕教育の原流：弁ネットの資料と生涯の分析（高野進客員研究員）	出席者：4名 宗教教育センター会議室
1/22（木）	19：00～21：00	2008年度第5回運営委員会	出席者：8名 キリスト教と文化研究所
2/26（木）	10：00～12：00	2008年度第2回所員会議	出席者：2名 キリスト教と文化研究所
3/21（土）	13：00～15：00	公開講演会（キリスト教と日本の精神風土研究グループ主催） キリスト教はなぜ日本に根づかないのか？（富岡所員・杉原志啓氏）	参加者：24名 八景キャンパス フォーサイト21 201教室
3/30（火）	18：00～20：00	国際理解とボランティア研究プロジェクト 2008年度最終ミーティング議事録確認	出席者：18名 宣教師館C号室
4/15（水）	18：15～20：00	いのちを考える研究グループ アンケート集約に関するまとめ	出席者：7名 キリスト教と文化研究所
4/16（木）	16：30～18：30	2009年度第1回所員会議	出席者：11名 八景キャンパス1号館4階 第2会議室
4/30（木）	17：00～18：00	バプテスト研究プロジェクト 叢書刊行に関する件	出席者：7名 キリスト教と文化研究所
5/12（火）	18：30～19：10	国際理解とボランティア研究プロジェクト アカ族リングプロジェクト	出席者：19名 宣教師館C号室
5/27（水）	18：15～19：30	いのちを考える研究グループ アンケート集約を紀要に掲載。今後の計画	出席者：7名 キリスト教と文化研究所
5/28（木）	19：00～20：40	2009年度第1回運営委員会	出席者：7名 キリスト教と文化研究所
6/2（火）	18：30～19：10	国際理解とボランティア研究プロジェクト 2009年度第1回現地調査活動について	出席者：22名 宣教師館C号室
6/11（木）	17：00～18：00	バプテスト研究プロジェクト 叢書刊行に関する件	出席者：4名 キリスト教と文化研究所
6/24（水）	18：00～19：40	いのちを考える研究グループ ナラティブ研究による「いのち」探求の可能性	出席者：7名 キリスト教と文化研究所
6/25（木）	17：30～19：00	資料委員会 図書館調査の日程決め	出席者：2名 キリスト教と文化研究所
6/27（土）	10：30～12：30	坂田祐研究プロジェクト 坂田日記研究・白雨会誌研究	出席者：8名 キリスト教と文化研究所
7/2（木）	19：00～20：40	2009年度第2回運営委員会	出席者：6名 キリスト教と文化研究所
7/7（火）	18：30～21：00	国際理解とボランティア研究プロジェクト 第3回研究会の内容確認	出席者：19名 宣教師館C号室
7月15日～7月26日		タイ北部山岳少数民族アカ族2009年度 第1回調査活動	出席者：3名
7/17（金）	10：00～12：30	奉仕・ボランティア教育研究グループ 今後の研究活動検討	宗教センター

2009年度キリスト教と文化研究所 主な活動計画（2009/4/1～2009/12/31）

7/23 (木)	17:30～19:00	大学図書館調査	出席者：2名 大学図書館本館
7/25 (土)	10:30～12:45	坂田祐研究プロジェクト主催 公開研究会「関東学院の教育と坂田祐」講師：大島良雄氏	参加者：29名 八景キャンパス2号館2階
8/24 (月)	13:00～19:00	バプテスト研究プロジェクト 教科書作成会議	出席者：4名 西南学院大学内
9/1 (火)	13:00～17:00	国際理解とボランティア研究プロジェクト 対調査活動報告	出席者：8名 宣教師館C号室
9/10 (木)	12:00～14:00	バプテスト研究プロジェクト 公開シンポジウムの打合せ	出席者：4名 八景キャンパス フォーサイト21 7階 キリスト教と文化研究所
9/11 (金)	10:00～13:00	バプテスト研究プロジェクト 叢書刊行に関する件（原稿チェック）	出席者：4名 キリスト教と文化研究所
9/17 (木)	17:30～19:00	資料委員会 大学図書館調査	出席者：2名 大学図書館本館
9/25 (金)	17:30～19:00	依存症とキリスト教研究プロジェクト 大学生のひきこもりと依存症	出席者：8名 キリスト教と文化研究所
9/26 (土)	13:00～16:00	坂田祐研究プロジェクト主催 公開講演会「坂田祐の教育理念と白雨会」 講師：鈴木範久氏	参加者：32名 八景キャンパス フォーサイト21 201教室 キリスト教と文化研究所
9/29 (火)	18:00～19:20	国際理解とボランティア研究プロジェクト 対調査活動報告	出席者：20名 八景キャンパス2号館2階
9/30 (水)	18:20～20:00	いのちえお考える研究グループ いのちを研究する上で	出席者：7名 キリスト教と文化研究所
10/17 (土)	12:00～14:00	バプテスト研究プロジェクト主催 関東学院創立125周年記念 バプテスト400年祭記念シンポジウム 「バプテストの伝統を持つ教育機関の 現在的教育使命」	参加者：32名 八景キャンパス フォーサイト21 201教室
10/24 (土)	10:30～12:30	坂田祐研究プロジェクト 「検真女学校と坂田祐」 講師：小玉敏子氏	参加者：9名 キリスト教と文化研究所
10/24 (土)	15:00～17:30	国際理解とボランティア研究プロジェクト 主催 公開セミナー「水と人との関係」 —多様な水環境と人間の関わり— パネラー：木村茂氏、谷口尚弘氏、 小林照夫氏、勘田義治氏	参加者：32名 八景キャンパス フォーサイト21 203教室
11/10 (火)	18:00～20:00	依存症とキリスト教研究プロジェクト 依存症回避の為の12ステップのプログラム 普遍性について	参加者：8名 キリスト教と文化研究所
11/10 (火)	18:00～18:40	所報編集委員会（第1回） 所報第8号の概要	参加者：3名 キリスト教と文化研究所
11/12 (木)	19:00～21:00	2009年度第3回運営委員会	参加者：8名 キリスト教と文化研究所
11/21 (土)	10:30～12:30	坂田祐研究プロジェクト 坂田日記解説	参加者：3名 キリスト教と文化研究所
12/9 (水)	18:00～19:30	所報編集委員会（第2回） 原稿の査読者依頼作業	参加者：8名 キリスト教と文化研究所
12/22 (火)	18:00～20:00	所報編集委員会（第3回） 査読戻りを著者校正に出す作業	参加者：7名 キリスト教と文化研究所

2009年度キリスト教と文化研究所構成員（順不同）

所長	村椿真理	(法学部教授)
所員	森島牧人	(文学部教授)
	松田和憲	(工学部教授)
	富岡幸一郎	(文学部教授)
	郷原佳似	(文学部専任講師)
	安田八十五	(経済学部教授)
	渡邊光一	(経済学部教授)
	細谷早里	(経済学部准教授)
	簗弘幸	(工学部准教授)
	武田俊哉	(工学部准教授)
	影山礼子	(法学部教授)
	帆苅猛	(人間環境学部教授)
	所澤保孝	(人間環境学部教授)
	牧野ひろ子	(人間環境学部准教授)
研究員	精木紀男	(工学部特約教授)
	小林照夫	(文学部特約教授)
	矢嶋道文	(文学部教授)
	大豆生田啓友	(人間環境学部准教授)
	佐藤光重	(法学部教授)
	Dwight P. Davidson	(文学部特約教員)
	鈴木公基	(人間環境学部専任講師)
客員研究員	中島昭子	(搜真学院教諭)
	花島光男	(元関東学院中・高等学校教諭)
	松岡正樹	(日本バプテスト神学校教務主任)
	石谷美智子	(元本学経済学部非常勤講師)
	吹抜悠子	(キリスト教メンタル・ケア・センター相談員)
	佐々木敏郎	(元法学部教授)
	長井英子	(本学経済学部非常勤講師)
	川島第二郎	(聖書和訳研究家・日本バプテスト同盟横浜教会員)
	坂田創	(元関東学院中・高等学校教諭)
	佐々木晃	(元関東学院中・高等学校教諭)
	安達昇	(公立小学校教諭)
	藤原久仁子	(法政大学非常勤講師・京都大学人文科学研究所講師)
	三浦一郎	(本学工学部・経済学部非常勤講師)
	田中喜芳	(ニューポート国際大学大学院客員教授)
	勘田義治	(文学部非常勤講師)
	島田正敏	(関東学院六浦小学校長)
	山本直美	(専修大学非常勤講師)
	三井純人	(カウンセラー)

- 客員研究員 田代泰成（横浜女学院中学校高等学校聖書科教師）  
佐々木和之（ワンドリーチNGO現地職員・日本バプテスト連盟国際ミッショナーランティア）  
加藤壽宏（中央学院大学商学部非常勤講師）  
菊地昌弥（東京農業大学国際食料情報学部准教授）  
森島 豊（長崎平和記念教会牧師）  
原真由美（バプテスト同盟全国女生会副委員長）  
安井 聖（文学部非常勤講師・日本ホーリネス教団西落合教会牧師）  
吉川成美（永田農業研究所研究員）  
古谷圭一（恵泉女子大学名誉教授）  
金丸英子（西南女学院大学 学術研究所気付）  
小林弥生（カウンセラー・経済学部、人間環境学部非常勤講師）  
小高千恵（関東学院野庭幼稚園教諭）  
枝光泉（教会牧師）  
伊藤哲（文学部非常勤講師）  
大西純（弘前大学国際交流センター副所長・教授）  
高野進（本学名誉教授）  
神谷光信（神奈川県立横浜旭陵高等学校教諭）  
斎藤剛毅（福岡女学院大学名誉教授）  
葛西賢太（宗教情報センター研究員）  
岡西愛濃（フェリス女学院大学 大学院）  
小玉敏子（搜真学院 理事長）  
加賀谷真梨（法政大学非常勤講師）  
松本洋幸（横浜開港資料館 調査研究員）

## 2009年度キリスト教と文化研究所 研究プロジェクト等のメンバーリスト（＊は代表者）

グループ	所員	研究員	客員研究員
バプテスト研究プロジェクト	*村椿 真理 森島 牧人 安田八十五 影山 礼子	高野 進 佐藤 重光	川島第二郎 佐々木敏朗 松岡 正樹 原 真由美 古谷 圭一 伊藤 哲 枝光 泉 斎藤 剛毅 金丸 英子
坂田祐研究プロジェクト	*帆苅 猛 安田八十五 森島 牧人	矢嶋 道文	坂田 創 佐々木 晃 花島 光男 小玉 敏子 松本 洋幸
国際理解とボランティア研究プロジェクト	*森島 牧人	小林 照夫 細谷 早里 Dwight P.Davidson	勘田 義治 島田 正敏 山本 直美 加藤 壽宏 菊地 昌弥 森島 豊 佐々木和之 大西 純 吉川 成美
依存症とキリスト教研究プロジェクト	*安田八十五 帆苅 猛 細谷 早里 松田 和憲	精木 紀男	三井 純人 田代 泰成 小林 弥生 山本 直美 藤原久仁子 葛西 賢太
キリスト教と日本の精神風土研究グループ	*富岡幸一郎 安田八十五 帆苅 猛 武田 俊哉 牧野ひろ子	精木 紀男 矢嶋 道文	花島 光男 神谷 光信 岡西 愛濃 中島 昭子 藤原久仁子 田中 喜芳 田代 泰成 三井 純人 山本 直美

2009年度キリスト教と文化研究所 研究プロジェクト等のメンバーリスト（＊は代表）

キリスト教と日本の精神風土研究グループ			加藤 壽宏 伊藤 哲
いのちを考える研究グループ	*松田 和憲	大豆生田啓友 Dwight P.Davidson 鈴木 公基	三浦 一郎 安達 昇 吹抜 悠子 石谷美智子 長井 英子 小高 千恵 加賀谷真梨
奉仕・ボランティア教育研究グループ	*影山 祢子 所澤 保孝 細谷 早里 渡邊 光一	高野 進	
資料委員会	*村椿 真理		松岡 正樹 佐々木敏朗 中島 昭子 川島第二郎 花島 光男
広報委員会（HP）	*武田 俊哉 簗 弘幸		
所報編集委員会	*安田八十五 富岡幸一郎 帆苅 猛 細谷 早里	矢嶋 道文	三井 純人 田代 泰成 三浦 一郎 原 真由美

## 『所報』のさらなる発展を願って

編集委員（前編集長）帆 莢 猛

2009年度も本研究所所報『キリスト教と文化 第8号』を発行することができた。これはひとえに安田八十五編集委員長のリーダーシップとスタッフ、牛坊千寿枝氏の労苦に負うところが大きい。まずは感謝申し上げたい。

所報全体の内容については、もうすでに紹介されているので、手前味噌になるかもしれないが、ここでは私が多少とも関係した坂田祐の東京帝国大学卒業論文『エレミヤ書』について述べたい。昨年度は最初の1章と第2章を掲載していただいた。今年度はちょうど中間部に当たる第3章と第4章を掲載した。来年度は最後の部分の第5章と第6章を掲載する予定である。

昨年度も簡単には紹介したが、坂田祐は軍人時代にキリスト教に出会い、その後、除隊して関東学院の前身である東京学院で学び、第一高等学校を経て東京帝国大学に入学し、1915年に卒業して母校東京学院の教師となる。このとき坂田はすでに37歳であった。

坂田にとっては、軍隊にはいり昇進して、できれば大将になることが小さいときからの夢であった。実際、坂田は軍隊では成績優秀で認められ、順調に昇進してもらいた。その軍隊を辞し、もう一度学びなおすことを決意したということは、彼の人生の一大転機であった。これは坂田の小さいときからの夢であった軍人として昇進することを捨て、教育者として歩みだす新たな第一歩であった。この教育者になるための学びの総決算が東京帝大卒業論文『エレミヤ書』であったといつても過言ではない。したがって、ここには教育者としてこれから歩んでいく坂田の思いが凝縮されている。

できるだけ坂田の力強い文章表現を損なわないようにそのまま掲載することを基本とした。したがって、文語調で読みにくいところ、難しい漢字表記も多いかもしれない。とくに難しい漢字についてはルビを付した。できるだけ多くの方に読んでいただき、『エレミヤ書』に込めた坂田の熱意に触れていただければと願っている。

最後に、編集委員長として敏腕をふるってくださった安田八十五経済学部教授にあらためて感謝申し上げたい。本所報第3号の発行が迫ったころ、当時編集委員長を引き受けている私が急遽入院してしまい、後始末を安田先生にお願いした。それ以来、引き続いて編集委員長を引き受けてくださっている。ご自身の研究活動、社会活動でお忙しいにもかかわらず、本研究所のさまざまな研究会にも参加され、ご自分でも研究グループを立ち上げて、その上さらに所報の編集委員長をも引き受けてくださった。

安田先生が編集委員長として責任を担ってくださっている間、複数の査読者による査読制度を導入するなど、学術の面においても、内容的にも格段に充実したものとなってきた。ただ残念なことに、安田先生は年齢の点で今年度をもって専任の枠からはずれ、次年度は編集委員長の任を務めることができないとのことである。これまでの編集委員長としてのお働きに感謝とともに、今後とも本研究所の研究活動には積極的に参加してご協力くださるように切にお願い申し上げたい。

執筆者紹介 \*執筆順

1. 松田 和憲 所長：関東学院大学工学部教授・神学博士
2. 安田 八十五 所員：関東学院大学経済学部教授・工学博士
3. 加納 政弘 関東学院教会名誉牧師
4. 帆苅 猛 所員：関東学院大学人間環境学部教授
5. 坂田 祐 故人：元関東学院大学長・元関東学院学院長
6. 三井 純人 客員研究員：カウンセラー
7. 田代 泰成 客員研究員：横浜女学院中学・高等学校聖書科教諭
8. 葛西 賢太 客員研究員：宗教情報センター研究員・文学博士
9. 岡西 愛濃 客員研究員：フェリス女学院大学・大学院博士後期課程
10. 古谷 圭一 客員研究員：恵泉女子学園大学名誉教授・工学博士
11. 原 真由美 客員研究員：Luther Rice University 牧会学博士
12. 安井 聖 客員研究員：関東学院大学文学部非常勤講師
13. 神谷 光信 客員研究員：神奈川県立横浜旭陵高等学校教諭
14. 坂田 創 客員研究員：元関東学院中学・高等学校教諭
15. 勘田 義治 客員研究員：関東学院大学文学部非常勤講師
16. 伊藤 哲 客員研究員：関東学院大学文学部非常勤講師
17. 村椿 真理 所員：関東学院大学法學部教授
18. 森島 牧人 所員：関東学院大学文学部教授・関東学院学院長
19. 富岡 幸一郎 所員：関東学院大学文学部教授
20. 所澤 保孝 所員：関東学院大学人間環境学部教授
21. 武田 俊哉 所員：関東学院大学工学部准教授・工学博士

**Christianity and Culture**  
**No. 8**  
**Bulletin of the Institute for the Study of Christianity and Culture 2009**  
**Kanto Gakuin University**  
**Contents**

<b>FOREWORD</b> .....	Makoto Muratsubaki	iii
<b>EDITOR'S FOREWORD</b> .....	Yasoi Yasuda	iv

Special Issue: In Commemoration of the 150th Anniversary of the Opening of the Port of Yokohama  
and the 125th Anniversary of the Founding of Kanto Gakuin

**Four Major Special Features:**

- \* : In Commemoration of the 150th Anniversary of the Opening of the Port of Yokohama  
and the 125th Anniversary of the Founding of Kanto Gakuin
- A : "Mind Climate of Dependency and Japan" Special Feature Manuscript
- B : "Baptists and Tasuku Sakata" Special Feature Manuscript
- C : "Life and Service" Special Feature Manuscript

**Special Reports**

A1 A Look at Westernization from the inside in Yokohama: Taking off from a Dependence Society .....	Yasoi Yasuda	1
—Considerations of the Social Significance of the 150th Anniversary of the Opening of Yokohama Port and the 125th Anniversary of Kanto Gakuin's Founding—		
B1 Concerning Dr. Sakata's Graduation Thesis .....	Masahiro Kano • Takeshi Hogari	32
B2 Graduation Thesis: "Prophet Jeremiah," Chapters 3-4 .....	Tasuku Sakata	33
B3 The Modern Educational Mission of Baptist Institutions: .....	Makoto Muratsubaki	53
The 400th Anniversary of the Baptist Movement and Kanto Gakuin's Founding Spirit		
Report on the Symposium Commemorating the 400th Anniversary of the Baptist Movement		
B4 Soshin Girl's School and Tasuku Sakata .....	Satoko Kodama	61
B5 Kanto Gakuin and Chuichi Ariyoshi: .....	Hiroyuki Matsumoto	65
The Young Ariyoshi as a Protestant		

**ACADEMIC PAPERS**

A2 A Mathematical Verification on the Existence of the God and the Holy Trinity .....	Yasoi Yasuda	67
—An Introduction of Scientific Analysis on the Existence and the Relationship of the God. the Universe and Human Beings (1)—		
A3 A Study of Wakamatsu Shizuko's "Wasuregatami": .....	Okanishi Ano	89
The Discovery of the Role of Children		
B6 Yotsuya Church During the Pacific War : From the Inauguration of Rev. Abe to the Bombardment of the Church Building .....	Keiichi Furuya	99

**RESEARCH NOTES**

A4 A Study on Social Withdrawal from the Viewpoint of the Dependency: A Case Study from the Student Counseling Center .....	Yayoi Kobayashi	111
A5 The Problems of est from a Christian Perspective .....	Mitsunobu Kamiya	117
B7 The Diary of Dr. Tasuku Sakata (1930~1931) .....	Hajime Sakata	123
C1 A Case Study of the Reception of Christianity in the Mountain Districts along the Thai-Burmese Border: Focusing on Water Issues and Ethnic Minority Hilltribes .....	Yoshiharu Kanda	139
C2 Considerations on Voluntary Development of Highland Ethnic Minorities in Northern Thailand: Envisioning Raw Materials Production for Processed Vegetables Targeted to Japan .....	Masaya Kikuchi	147

**Research Findings**

A6 Travel Sketch In Tibet: On the Religious Culture in Qinghai-Tibet Highland .....	Sumito Mii	161
--	------------	-----

B8 Report of the 11th Assembly of the Asian Baptist Women's Union ... Mayumi Hara	175
---	-----

**REPORTS OF RESEARCH PROJECTS**

Report of the Baptist Study Project .....	Makoto Muratsubaki	181
Report of Dr. Tasuku Sakata Study Project .....	Takeshi Hogari	185
Report of the International Understanding Volunteer Study Project ... Makito Morishima	187	
Report of the Dependency and Christianity Study Project .....	Yasoi Yasuda	191

**REPORTS OF STUDY GROUPS**

Study Group on Christianity and Japanese Spiritual Features .....	Koichiro Tomioka	196
Study Group on "Consideration of Life ( INOCHI)" .....	Kazunori Matsuda	197
Study Group on the Problem of Service Education and Its Practice ... Yasutaka Tokorozawa	199	

**REPORTS OF COMMITTEES**

Report of the Resource and Reference Committee .....	Makoto Muratsubaki	202
Report of the Public Relations Committee .....	Toshiya Takeda	203
Report of the Bulletin Editorial Committee .....	Yasoi Yasuda	204

**REPORTS OF RESEARCH SECTIONS**

Report on Research Activities for the 2009 Academic Year .....	208
Constitution of the Institute of Christianity and Culture .....	210
Member List of Research Projects and Committees .....	212

<b>EDITOR'S NOTE</b> .....	Takeshi Hogari	214
Introduction of Authors .....	215	

**Institute for the Study of Christianity and Culture, Kanto Gakuin University**  
**1-50-1, Mutsuura-Higashi, Kanazawa-ku, Yokohama-shi, Kanagawa, Japan 236-8501**

TEL.045-786-7873, FAX.045-786-7806

E-Mail kgujesus@kanto-gakuin.ac.jp

URL <http://kgujesus.kanto-gakuin.ac.jp/>

関東学院大学キリスト教と文化研究所 2009 年度所報

**キリスト教と文化**

第 8 号（通号 8 号）

2010 年（平成 22 年）3 月 発行

発行人 村椿真理

編集人 安田八十五

発行所 関東学院大学キリスト教と文化研究所

〒 236-8501 横浜市金沢区六浦東 1-50-1

TEL. 045(786)7873 FAX.045(786)7806

(URL) <http://univ.kanto-gakuin.ac.jp/>

(E-Mail) [kgujesus@kanto-gakuin.ac.jp](mailto:kgujesus@kanto-gakuin.ac.jp)

版下制作 株式会社 関学サービス

〒 236-8501 横浜市金沢区六浦東 1-50-1

TEL.045(786)7164 FAX.045(786)9898

印刷製本 藤原印刷株式会社

〒 101-0052 東京都千代田区神田小川町 1-6-1

TEL.03-5298-3232 FAX.03-5298-3230

## キリスト教と文化 第8号（2009年度所報）正誤表

### 【お詫びと訂正】

一部に誤りを生じました。深くお詫びし、下記のとおり訂正させて頂きます。

頁数 訂正の場所：

- ii 頁 上から 6 行目 (誤) 2009 年度キリスト教と文化研究所活動報  
(正) 2009 年度キリスト教と文化研究所活動報告
- vi 頁 左上から 12 行目 (誤) 「国際理解とボランティア」  
(正) 「国際理解とボランティア研
- 12 頁 上から 16 行目 (誤) 表 2 : 13 大都市の「人工・  
(正) 表 2 : 13 大都市の「人口・  
(誤) 表 3 : 13 大都市の「人工・  
(正) 表 3 : 13 大都市の「人口・
- 19 頁 右下から 7 行目 (誤) 論文集の予告事 → (正) 論文集の予告記事
- 33 頁 上から 4 行目 (誤) Jeremiah → (正) jeremiah
- 35 頁 右(第5節) 下から 5 行目  
(誤) われは引かれてと屠られに行く羊のごとく。  
(正) われは引かれて屠られに行く羊のごとく
- 36 頁 第六節 一行目 (誤) ヨヤキン → (正) ヨヤキム
- 41 頁 左上から 6 行目 (誤) 永遠より永遠にいたるまでしむべし  
(正) 永遠より永遠にいたるまで住ましむべし
- 41 頁 左上から 13 行目 (誤) わが名をもって称えられるこのは汝ら  
(正) わが名をもって称えられるこの家は汝ら
- 44 頁 左上から 11 行目 (誤) ヨヤキン → (正) ヨヤキム
- 101 頁 左上から 1 行目 (誤) 同質 → (正) 同室
- 106 頁 右上から 22 行目 (誤) 消失 → (正) 焼失
- 107 頁 左上から 12 行目 (誤) つづいた → (正) つづいた
- 107 頁 右上から 11 行目 (誤) 結城建太マ郎 → (正) 結城建太<sup>マ</sup>郎
- 108 頁 右上から 16 行目 (誤) 「千葉勇五郎先生追憶集 自由への憧れ」,  
(正) 『千葉勇五郎先生追憶集 自由への憧れ』,
- 113 頁 左上から 24 行目～28 行目 (3.2 新しいタイプのうつ)  
(誤) 従来型のうつとは異なった「新しいタイプのうつ」が比較的若い年齢層を中心に見られるようになった。「軽症うつ」「抑うつ状態」「非定型うつ」称される場合もあり、  
(正) うつの状態が多様化し、これに伴いうつの概念も拡大したと言われている。「従来型のうつ」は、几帳面で責任感が強く仕事熱心な中高年層に比較的多く見られる。抑うつ気分、興味や喜びの減退、自責の念による希死念慮などが症状の特徴だが、通院と投薬などの適切な対応により快放に向かう事例が多い。一方、「新しいタイプのうつ」は 20～40 歳代の若い年齢層に多く、症状にも従来型のうつとは異なった傾向が見られる。従来型のうつの軽症化と捉えられることもあれば、環境要因や性格要因が強く影響していると考えられることから

113 頁左上から 29 行目

(誤) 識別が困難な例も多い。「逃避型うつ病」

(正) 識別が困難な例も多い。新しいタイプのうつについては、近年、日本の研究者たちから多様な病型の報告がなされている。

113 頁右上から 22 行目後に以下の原稿が入る

(正) このように、几帳面で責任感の強い従来型のうつとは対照的に、新しいタイプのうつは自己中心的でわがままな傾向が強い。学生相談の現場においても対応に困る例が多く、背景に依存の問題を抱えている事例も少なくないと考えられる。

115 頁右上から 29 行目 (誤) 「DSM-,TR」 → (正) 「DSM-TV-TR」

177 頁右下から 2 行目 (誤) 同行 → (正) ご一緒した

179 頁右上から 13 行目 (誤) 学生を連れて → (正) 学生を連れ

181 頁 1 行目 (誤) 「バプテスト」 研究プロジェクト 2008 年度活動報告

(正) 「バプテスト」 研究プロジェクト 2009 年度活動報告

182 頁左上から 5 行目 (誤) 開催された → (正) 開催した。

左上から 21 行目 (誤) 佐藤重光 → (正) 佐藤光重

184 頁右下から 3 行目 (誤) 神学部 → (正) 神学校

(誤) 日本バプテスト連盟の神学校等

(正) 日本バプテスト連盟の神学部

194 頁右上から 1 行目 (誤) 第 5 回研究会 (第 2 回合宿研究会

(正) 第 5 回研究会 (第 3 回合宿研究会

195 頁右上から 5 行目 (誤) 体説の数学的証明神—

(正) 体説の数学的証明—

212 頁 国際理解とボランティア研究プロジェクト客員研究員

(誤) 大西 む純 → (正) 大西 純

216 頁 下から 4 行目 (誤) Okanichi → (正) Okanishi